

古今和歌六帖全注釈 第二帖

目次

凡例	2
諸本について	4
注釈 第二帖	7
あとがき	340

凡例

- 一 底本は永青文庫叢刊『古今和歌六帖(上)』(汲古書院 昭和五八年)とする。漢字、仮名遣いなど底本どおりに翻刻する。ただし、読みやすさを考慮し、濁点を付し、異体字は通常の文字に改めた。またミセケチは「リ」のように文字の左側に傍線を付して表した。校合した本は以下の三本である。
- 一 (ア) 宮内庁書陵部蔵『古今和歌六帖』(五〇六・一三三) 御所本
- 一 (イ) 宮内庁書陵部蔵『古今和歌六帖』(五一〇・三四) 桂宮本
- 一 (ウ) 榊原家旧蔵大久保正氏所蔵『古今六帖』 大久保本
- 一 【異同】の項に(ア)を「御」、(イ)を「桂」、(ウ)を「大」と略称して本文の相違を記した。ただし、これらの傍記などは略した。また、漢字、仮名遣いの差は原則として記さない。これらの書誌については別に記した。
- 一 歌には通し番号を付した。和歌の【現代語訳】はわかりやすいように適宜言葉を補うなど配慮した。【語句】には意味とその用例をなるべく挙げた。
- 一 和歌は題のもとに分類されているが、各題については初出の箇所◎印を付し、簡潔な説明を加えた。
- 一 【所載】にはその歌が、他の書物に掲載されていることを示す。
 - 一 例 古今集・春上・一一／忠岑集Ⅰ・三二／忠岑集Ⅱ・五／……これは古今和歌集の春上の部の一番にあり、また、『私家集大成』において忠岑Ⅰと略称される家集の三二番に、同じく忠岑Ⅱと略称される家集の五番に、その歌があることを示す。原則として、『新編国歌大観』の巻一、二、三、四、五までと、『新編私家集大成』の中古Ⅰ、Ⅱの範囲で集名と歌番号とを記した。ただし歌合の判詞等は除いた。
- 一 特に万葉集はその訓読の様相が『古今和歌六帖』と深い関係があるので、以下のようにした。
 - 一 例 万葉集・一四二二(旧一四一八) 石激 垂見之上乃 左和良妣乃 毛要出春尔 成来鴨
 - 一 イハソクタルミノウヘノサワラビノモエイヅルハルニナリニケルカモ いはぼしるたるみのうへのさわらびのもえいづるはるになりけるかも

これは、『新編国歌大観』の万葉集に基づく。すなわち、漢字本文は西本願寺本の表記、カタカナはその訓読部分を示し、ひらがなは新しく付した訓読である。(旧一四一八)は旧番号である。【参考】には類似しているが同一とは言えない歌、注記として付された作者名などについて述べた。

一 散文学作品の引用は特に断らない場合、『新編日本古典文学全集』(小学館)によった。
一 五首ずつごとに担当した者の名を後に記した。

諸本について

数葉の鎌倉期古筆切を除くと、中世極末期を遡る善本はなく、現存の諸本間に大きな異同はない。大きく版本系と写本系に二分する。

版本系とは寛文九年刊本、および、それを底本とし、写本四本で校合した山本明清『古今和歌六帖標注』、『旧国歌大観』、『校註国歌大系』（第九巻）など。

また、写本については、十二本の書誌が図書寮叢刊『古今和歌六帖 下巻』（養徳社 一九六九年①とする）にあり、現存最古の写本が永青文庫叢刊『古今和歌六帖』（解題 荒木尚、汲古書院 一九八三年②とする）に影印本として刊行された。

本書は、永青文庫本を底本とし、桂宮本、御所本、大久保本（榊原家旧蔵）の三本によって校合した。それらの書誌を簡単に記す。

一、永青文庫本（②の底本）

縦二五・七センチ、横二〇・三センチの袋綴、六冊。縹色楮紙の表紙。左肩に朱地に金泥で竜紋を画いた題簽があり、「古今和歌六帖 第一」と記して貼付する。墨付一一〇丁。遊紙、前後各一丁。奥書がある（一帖の他、三・四・六の各帖にも奥書がある）。

この本は、文禄四（一五九五）年、細川幽齋が富小路秀直（一五六四—一六二一）をもって借り出した世尊寺行能筆の禁裏本を忠実に書写したものだ。ただし、第三帖幽齋筆のほか、四五人の寄合書という（②による）。

一、御所本

縦二八・〇センチ、横二〇・五センチの袋綴、六冊。黄蘗染の鳥の子紙の表紙。題簽は藍色内曇り、鳥の子紙の小短冊。一面十行、歌二行書。奥書は次の桂宮本と同様、一帖のほか、三・四帖にある（①による）。

一、桂宮本

縦二六・六センチ、横二〇・六センチの袋綴、六冊。鼠茶地の鳥の子紙の表紙。題簽は後補。一面十二行、歌一行書。奥書は一帖のほか、三・四帖にある（①による。①の底本）。

一、大久保本（榊原家旧蔵）

縦二八・〇センチ、横二〇・六センチの袋綴、六冊。灰色がかった紺色の表紙。左肩に白地の題
簽があり「古今六帖第一」と記して貼付する。一面十行、歌一行書。印記「楽山亭文庫」「吏部大
卿 忠次」「文庫」。奥書は桂宮本と同様、一帖のほか、三・四帖にあり、さらに別の奥書が一・二・
五帖にもある（①による）。榊原家旧蔵。ついで大久保正氏蔵。現在は福留温子氏蔵。

古今和歌六帖 第

古今和歌六帖 第二

山 やま やまどり さる しか トラ くま むさび やまがは 山だ
山ざと 山の井 やまびこ いはほ みね たに そま をのゝえ すみが
ま せき はら をか もり やしろ みち つかひ むまや

【異同】ナシ

田 はるのた 夏のた あきのた ふゆのた かりほ いなおほせどり そぼづ

【異同】ナシ

野 はるのゝ なつのゝ 秋のゝ 冬のゝ ぎうのゝ かり ともし わし お
ほたか こたか きじ はと うづら 大たかづり こたかづり みゆき

【異同】ナシ

都 みやこ みやこどり もゝしき

【異同】ナシ

田舎 くに こほり さと ふるさと やど やどり かきほ

【異同】ナシ

宅 いゑ となり 井 まがき には にはとり かど と すだれ とこ

むしろ

【異同】 ナシ

人

をきな

をんな

をや

うなゐ

わかいこ

くるま

うし

むま

【異同】 ナシ

仏事

てら

かね

ほうし

あま

【異同】 ナシ

山

八二九

おほなむちすくなびこなをつくりたるいもせのやまを見るはしもよし

【異同】 ナシ

【現代語訳】 大己貴の神と少彦名命とが力を合わせて作った妹背の山を見るのは、いいなあ。

【語句】 ◎山 陸地の中で、盛り上がってまわりより高くなっているところ。野や里に対して言われる。古今六帖では、第二帖の大項目として「山」があり、その中の最初の歌題がこの「山」である。歌題「山」の下には、具体的な固有名詞で呼ばれる山を詠んだ歌が、九十四首収められている。○おほなむち 大己貴。出雲神話の主神大國主命のこと。少彦名命と協力して国造りをしたと、記紀神話に見える。○すくなびこな 神話に出てくる少彦名命。○いもせのやま 妹背の山。万葉集における妹背の山の所在は紀伊国。現在の和歌山県伊都郡かつらぎ町。紀川をはさんで北岸にあるのが勢能山(背山)。これに対する形で南岸にある丘が、妹山だと言われている。(山下道代『歌枕新考』(青簡舎)。○見るはしもよし 見るのはよい。「見るは」が主語、「し」は強意の副助詞、「も」は係助詞、「よし」は形容詞。

【所載】 拾遺集・神楽歌・六一九／万葉集・一二五一(旧一二四七) 大穴道 少御神 作 妹勢能山 見吉 才ホナムチスクナミカミノツクリタルイモセノヤマヲミルハシヨシモ おほなむちすくなみかみのつくらししいも

せのやまをみらくしよしも／人麿集Ⅰ・二三八／人麿集Ⅱ・二〇九／人麿集Ⅲ・六〇〇／和歌童蒙抄・一六七／
興儀抄・三八九／袖中抄・六三四／和歌色葉・一五四

【参考】 大國主命と少彦名命が「妹背の山」を作ったという伝承は、この歌以外のところには見出せない。

八三〇 みむろのやその山なかにこなからをまきもく山につぎてよろしも

【異同】 ナシ

【現代語訳】 「第三句に意味不明の語があるため、完全な訳が示せない。」三輪山の、その山の中に「こなからを」、巻向山につづいているのがよろしいなあ。

【語句】 ○みむろのや 「みむろ」は、神の降臨するところ、の意。ここは、奈良県桜井市三輪にある三輪山のこと。「や」は詠嘆を表す終助詞。○その山なかに 所載欄にあげたとおり、万葉集では「そのやまなみに」である。○こなからを 意味不明。万葉集では「こらがてを」であり、それに従うならば「子らが手を」であり、「手を纏く」から「まきもく山」を言うための枕詞となる。○まきもく山 巻向山。桜井市穴師前のもので直後に接して在ることをいう。

【所載】 万葉集・一〇九七（旧一〇九三）三毛侶之 其山奈美尔 兎等手乎 巻向山者 繼之宜霜 ミモロノヤソノヤマナミニコラガテヲマキモクヤマハツギテシヨシモ みもろのそのやまなみにこらがてをまきむくやまはつぎしよろしも

【参考】 この一首は、所載欄にあげた万葉集の歌の異伝歌と思われる。二・三句を万葉集の形にもどせば、三輪山から巻向山へとつづく山並のよさをほめた歌となる。

〔以上二首担当 犬養悦子・山下道代〕

ひとまる

八三一 いはがねのこりしく山にいりそめて山なつかしみいでかてぬかも

【異同】 ナシ

【現代語訳】 大岩が凝り固まっている山に入りはじめてみると、山がなつかしくて、出ることができないなあ。

【語句】○いはがね 岩が根。大地にしっかりと根を張った岩の、大地に接する部分。○こりしく 凝り固まっている。「いはがねのこりしく」は、万葉集に見られる「いはがねのごしき」が変形したもので、平安末期から中世の和歌には、この「いはがねのこりしく」の形が用いられる。○山なつかしみ 山にこころひかれて。山がなつかしくて。「み」は、形容詞および形容詞型活用の助動詞の語幹（シク活用の場合には語幹相当の終止形）に付く接尾語。原因・理由を表わす。○いでかてぬかも 出ることができないなあ。「かてぬ」は、……することが不可能である、……しきれない、の意。「かも」は詠嘆。

【所載】万葉集・一三三六（旧一三三三）石金之 凝木敷山尔 入始而 山名付染 出不勝鴨 イハガネノコゴシキヤマニイリソメテヤマナツカシミイデカテヌカモ いはがねのごしきやまにいりそめてやまなつかしみいでかてぬかも／和歌童蒙抄・一七四／袖中抄・三七九

【参考】万葉集では巻七比喻歌の中の「寄山」歌。作者名「ひとまる」は根拠不明。万葉集では特に柿本人麿歌集との関係も言われていない。

八三二 かね山のしたひがしたになくかはづこゑだにきかばなにななげかん
人まる

【異同】ナシ

【現代語訳】かね山の紅葉の下でないでいる河鹿よ。その声のように、せめてあの人の声だけでも聞くことができるならば、なにをこんなに嘆こうか。

【語句】○かね山 所在不明。所載欄万葉集の歌の初句「金山（アキヤマ）」（五行説において秋は「金」にあたる）を「かねやま」と訓み、それが六帖で本文化しているのであろう。夫木抄に「金山」の所在を「山城又陸奥」としているのは、付会である。○したひ 色づいた木の葉のこと。「したふ」（木の葉が色づくの意）という四段動詞の連用形の体言的用法。○かはづ 河鹿のこと。谷川などの清流に棲息する小さな蛙。晩春から夏のころ澄んだ美しい声でなく。○なにななげかん 「か」は反語の意を含む疑問。なにを嘆こうか。なにも嘆きはしない。

【所載】万葉集・二二四三（旧二二三九）金山 舌日下 鳴鳥 音谷聞 何嘆 アキ（カナ）ヤマノシタヒガシタニナクトリノコエダニキカバナニカナゲカム あきやまのしたひがしたになくとのこゑだにきかばなにななげかむ／夫木抄・八三二八／綺語抄・六一九／袖中抄・三八三／六百番陳状・八二

【参考】作者名「人まる」は根拠不明。万葉集では特に柿本人麿歌集との関係も言われていない。

八三三 さほやまをよそに見しかどけふみればやまなつかしみかぜなふきそも

【異同】ナシ

【現代語訳】佐保山を、これまでは自分にかかわりのないものと思つて見てきたが、今日見るとなつかしくてならない。風よ、吹くなよ。

【語句】○さほやま 佐保山。大和国の歌枕。現在の奈良市街の北方郊外にある丘陵。ここでは恋人の暗喩として言われている。○よそに見しかど 自分には無縁のものとして見てきたが。○やまなつかしみ 八三一番歌参照。○かぜなふきそも 風よ、吹くな。「な……そ」は禁止、「も」は詠嘆。「かぜ」はこの恋を妨げるものの暗喩か。

【所載】万葉集・一三三七(旧一三三三) 佐保山乎 於凡尔見之鹿跡 今見者 山夏香思母 風吹莫勤 サホヤマヲオホニミシカドイマミレバヤマナツカシモカゼフクナユメ さほやまをおほにみしかどいまみればやまなつかしもかぜふくなゆめ

八三四 なぐさ山 ことにもあらじわがこひはちへにひとつもなぐさまなくに
ふゆのことぬし

【異同】ナシ

【現代語訳】(慰めるという名の)名草山だなんて、なんのこともありはしまい。わたしの恋の切なさは、千のうち一つも慰みはしないのに。

【語句】○なぐさ山 名草山。紀伊国の歌枕。現和歌山市の南部にある山。山腹に紀三井寺がある。「なぐさ」の音に「慰め」の意を通わせた。○ことにもあらじ 格別なほどのことでもあるまい。たいしたことでもあるまい。失望の表明。○ちへにひとつ 通常は「ちへのひとへ」という。千重のうちの「一重。あまたの中のごくわずか。○なぐさまなくに 心が慰みはしないのに。「なぐさま」は自動詞「なぐさむ」の未然形、「なく」は打消の助動詞「ず」のク語法、「に」は助詞。

【所載】万葉集・一二〇三(旧一二二三) 名草山 事西在来 吾恋 千重一重 名草目名国 ナグサヤマコトニシアリケリワガコヒノチヘノヒトヘモナグサメナクニ なぐさやまことにしありけりあがこふるちへのひとへも

なぐさめなくに／袋草紙・八四九／袖中抄・四

【参考】作者名「ふゆのことぬし」は根拠不明。またその人の伝不詳。万葉集では作者名のない歌。

八三五 まきのはのしなふせ山のしのたすきわがこえくればこのはしげるも
をだのことぬし

【異同】しなふせ山のしなふせ山の(大)

【現代語訳】「第三句に意味不明の語があるため、完全な訳が示せない。」真木の葉がしなやかにたわんでいる背山の「しのたすき」。わたしが山を越えてくると、木の葉が茂っているなあ。

【語句】○まき 真木。木的美称。桧・杉・榎など良材となる木。○しなふ しなやかにたわむこと。ここは、真木の葉がやわらかに茂っているさまを言ったか。○せ山 背山。兄山とも。万葉集では「勢能山」と表記される。現和歌山県伊都郡かつらぎ町、紀ノ川北岸にある山。日本書紀大化二年正月一日の詔において畿内四至の南限とされた山である。八二九番歌参照。○しのたすき 所載欄万葉集の歌の第三句「しのはずて」が変形したものと思われるが、このままでは意をとり難い。

【所載】万葉集・二九四(旧二九一) 真木葉乃 之奈布勢能山 之努波受而 吾超去者 木葉知家武 マキノハノシナフセノヤマシノハズテワガコエユケバコノハシリケム まきのはのしなふせのやましのはずてわがこえゆけばこのはしりけむ／夫木抄・八二三七

【参考】作者名「をだのことぬし」は、万葉集二九四(旧二九二)の題詞に、「小田事勢能山歌一首」とあるに拠ったものである。「小田事」は万葉集に当該歌一首あるのみの作者、伝不詳。

(以上五首担当 山下)

八三六 わがせこがいるさのやまのやまあららきてなとりふれそかもまさるがに
大伴良女 おなじ

【異同】ナシ

【現代語訳】いとしい夫が分け入るさの山に生えている山あららき、それを手にとって触れないでね、いやな匂いがつよく付くでしょうから。

【語句】○せこ 兄弟、夫、恋人などの男性を親しんで言う語。○いるさのやま 八雲御抄に但馬の歌枕とあるが所在不明。「いるさ」に「入る」を掛ける。○やまあららき ノビルの古名。○てなとりふれそ 手で触れないでください。「な……そ」で、どうか……してくれらるゝと懇願する意。○まさるがに まさるだらうから。「……がに」は和歌の第五句に用いられる時は、終助詞として前句の理由を述べるはたらきをする。

【所載】ナシ

【参考】作者名「大伴良女 おなじ」とあり、古今六帖では前歌の作者名と同じ場合「おなじ」とする。しかし前歌（八三五）の作者名は「をだのことぬし」である。

八三七 わがせこをまぬこさせのやまと人はいへどきみもきませぬ山いしかはのらう女のなゝらし

【異同】こさせのやまと—こませの山と（桂・大）

【現代語訳】いとしい夫のことを、こさせの山と人は言うけれど、あなたはちっともおいでにならない。こさせの山とは山の名だけらしいなあ。

【語句】○わがせこを 「せこ」は恋人・夫を女が親しんで呼ぶ語。初句は下の「来させ」を導く働きをする。○こさせのやま 不明。所載欄の拾遺集・人麿集では「きませのやま」。○きませぬ 来ませぬ。おいでにならない。○山のなゝらし 山の名であるらしい。「山のなるらし」のつまったもの。

【所載】拾遺集・恋三・八八／人麿集Ⅰ・二二／人麿集Ⅱ・三三六

【参考】作者名「いしかはのらう女」とあるが所載欄の文献では「人麿」である。

八三八 するがなるうつのを山のうつゝにもゆめにも見ぬに人のこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】現実にも夢にもあの人に逢えないので、恋しいことだなあ。

【語句】○するがなるうつのを山 駿河国にある宇津山。歌枕。静岡市と西隣の岡部町との間の峠。「するがなるうつのを山の」までは同音の「うつつ」を言い出すための序詞。「駿河なるうつの山べのうつつにも夢にも人に逢はぬなりけり」（伊勢物語・一一）。○見ぬに 見ないので。「に」はあとで述べる事柄の原因・理由を表す

助詞。

【所載】伊勢物語・一一

八三九 かしまなるつくまのやまのつくぐくとわが身ひとつにこひをつむかな

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人のことを思って、つくぐくと自分ひとりで恋の悩みを深めていることだなあ。

【語句】○かしまなるつくまのやま 常陸国の鹿島にある筑波山。歌枕。つくば市真壁町と八郷町の境にある山。つくばね、ともいう。「かしまなるつくまのやまの」までは同音の「つくぐくと」を導くための序詞。○わが身ひとつに 自分ひとりだけで。○こひをつむ 恋心を一層ふかめる。

【所載】拾遺集・恋五・九九九／新撰万葉集・二〇三／寛平御時后宮歌合・一七一

八四〇 おほはらやをしほのやまの小松原はやこだかゝれちよのかげ見む

【異同】ナシ

【現代語訳】大原の小塩の山の小松原は、はやく小高くおなりなさい。千年も経た大樹のように長寿の姿を見たいので。

【語句】○おほはらやをしほのやま 山城国の歌枕。京都市西京区。市の南西端の丘陵。藤原氏の氏神、大原神社がある。○小松原 小塩山に生えている松原。子供を喻えている。所載欄の後撰集詞書に「左大臣の家のをのこゝ、をんなご、冠し、裳着侍りけるに」とあり、左大臣藤原実頼の男君、女君が、冠し、裳着した時に貫之が詠んだ歌。○ちよのかげ見む 長寿を祈る言葉。松は常緑なので長寿を象徴する木とされた。

【所載】古今六帖・第六帖「松」四一〇七／後撰集・慶賀・一三七三／金玉集・七七（群書類従本・卷末）／新撰朗詠集・四〇〇／貫之集Ⅰ・六九八／貫之集Ⅱ・五五／奥儀抄・三四〇／袖中抄・二八七／六百番陳状・一四五／古来風体抄・三三八／和歌色葉・三四九／東野州聞書・一三二

〔以上五首担当 林マリヤ〕

人まる

八四一 たきのうへのみふねの山にのある雲のつねならぬよをたれかたのまむ

【異同】ナシ

【現代語訳】(吉野川の)激流の上方にそびえる三船の山にかかっている雲は常にあるわけではない、そのように定めないこの世を、いったい誰が頼みにしましょうか(当てにはできませんよ)。

【語句】○たきのうへの 吉野町宮滝付近。「滝」は水が激しく流れる所。五一八番歌参照。○みふねの山 三船の山。大和国の歌枕。吉野町宮滝の南にある山。「みよしのの」「たきのうへの」を冠して詠まれることが多い。○ある雲の 五一八番歌参照。三句目までは「つねならぬ」を導く序。

【所載】ナシ

【参考】作者名「人まろ」とあるが、他文献には見えない。上句が同じ歌として古今六帖「くも」五一八番歌に下句「つねなるべくもあらぬ我が身を」という類歌があり、その作者名は「人まろ或本」となっている。また、万葉集・二四三(旧二四二)番歌に下句「常にあらむとわが思はなくに」という類歌があるが、その作者名は「弓削皇子」となっている。

忠峯

八四二 君が代にあふさかやまのいはしみづこがくれたりとおもひけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】我が君の御代に生まれ合わせた私は、今まで、逢坂山の岩清水が木陰に隠れて見えないように、人目に付かず埋もれていると思っていたことですよ。

【語句】○あふさかやま 逢坂山。近江国の歌枕。山城国と近江国の境にある山で、麓に逢坂の関があった。「あふ」は、「君が代にあふ」の「あふ」と「逢坂山」の「逢」とを掛ける。「我妹子に逢坂山を越えて来て泣きつつ居れど逢ふよしもなし」(万葉集・三七八四(旧三七六二))。○いはしみづ 岩(石)清水。岩間からわき出る清水。逢坂の岩清水は歌によく詠まれた。「相坂の関に流るいはし水いはで心に思ひこそすれ」(古今集・五三七)。○こがくれたり 「木隠る」は、木の陰に隠れて人目に付かない意。「葦引の山下水の木隠れてたぎつ心をせきぞかねつる」(古今集・四九一)。

【所載】古今六帖・第三帖「水」一四六五／古今集・雑体・一〇〇四／忠峯集Ⅰ・二／忠峯集Ⅱ・八一／忠峯

集Ⅲ・一四六／忠岑集Ⅳ・八二／古来風体抄・二九五

【参考】作者名「忠岑」は、所載欄の文献によっても「忠岑」の作で一致する。古今集・忠岑集によると、当該歌は、忠岑が撰集の材料として古歌を醍醐天皇に献上する際に添えた歌。

八四三 みよしのゝよしのゝ山はもゝとせのゆきのみつもるところなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】み吉野の吉野の山は、百年も、雪がどんどん積もるばかりの所だったんだなあ。

【語句】○みよしの 「吉野」に美称の接頭語「み」を付けた語。○よしのゝ山 吉野の山。大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡の山々。雪が景物として知られ、後には桜の名所として有名になった。「春霞たてるやいづこみ吉野の吉野の山に雪はふりつつ」（古今集・三、古今六帖・六〇三）。

【所載】貫之集Ⅰ・一七二

【参考】貫之集によると、作者は貫之で、延長二（九二四）年、左大臣藤原忠平室源順子の賀の屏風歌。なお、貫之集Ⅰ・一六一詞書に「延喜」と見えるのは「延長」、「十首」とあるのは「十二首」の誤り。

八四四 すがはらのふしみのくれに見わたせばかすみにまがふをはつせのやま

【異同】すかはらの―すかはらや（桂）

【現代語訳】菅原の伏見の里の夕暮れに見渡すと、霞に見紛う小初瀬の山よ。

【語句】○すがはらのふしみ 菅原の伏見。大和国生駒郡伏見、現在の奈良市菅原町の辺り。菅原氏の本貫の地として知られ、「菅原や伏見の里」と歌に詠まれることが多かった。「いざここにわが世はへなむ菅原や伏見の里の荒れまくもをし」（古今集・九八一）。所載欄の文献には「すがはらやふしみ」と見える。○をはつせのやま 小初瀬の山。大和国の歌枕である「初瀬の山」（現在の奈良県桜井市初瀬一帯の山）に接頭語「を」が付いた呼称。

【所載】後撰集・雑三・一二四二／奥儀抄・五七二／和歌初学抄・一七八／袖中抄・四九六／井蛙抄・三二九

八四五 しらやまにゆきふりぬればあとたえていまはこしぢに人もかよはず

【異同】ナシ

【現代語訳】白山に雪が降ったので人の足跡もなくなって、今はもう、かつては人がやって来た越路に人も通いません。

【語句】○しらやま 越前国の歌枕。現在の石川・富山・福井・岐阜の各県にまたがる白山。雪深い地として歌に詠まれた。「君がゆく越のしら山しらねども雪のまにまにあとはたづねむ」（古今集・三九一）。○こしぢ越路。北陸道。現在の福井・石川・富山・新潟県。「来し路」を掛けるか。「君をのみ思ひこしぢのしら山はいつかは雪の消ゆる時ある」（古今集・九七九）。

【所載】後撰集・冬・四七〇／大和物語・九十五段・一四三

【参考】大和物語によると、醍醐天皇没後、右大臣定方の娘で醍醐天皇の女御であった能子に、天皇の同母弟敦実親王が通うようになったものの、その訪れが途絶えた頃に、能子が詠んだ歌。

〔以上五首担当 長戸千恵子〕

八四六 つまかくすやのゝはぎはら露じもにほひそむらしちらまくもしみ

カミヤイ

【異同】ちらまくもしみ—ちらまくほしみ(大)

【現代語訳】矢野の萩原が露や霜に色づき始めたようだ。(ここの紅葉の)散るのも惜しいことよ。

【語句】○つまかくす 所載欄の万葉集「つまごもる」の転。人麿集Ⅲ、夫木抄とともに「つまかくす」とある。万葉集を参考に、「やの」にかかる枕詞とする。○やのゝはぎはら 「やの」は所在未詳。○ちらまくもしみ 「まく」は推量「む」のク語法。「もしみ」は万葉集での形を参考に「惜しみ」の意と解する。

【所載】玉葉集・秋下・七九三／万葉集・二二八二(旧二二七八)妻隠 矢野神山 露霜尔 尔宝比始 散卷惜 ツマゴモルヤノノカミヤマツユシモノニホヒソメタリチラマクラシモ つまごもるやののかむやまつゆし

もにほひそめたりちらまくをしも／夫木抄・八五八〇／人麿集Ⅲ・一五九

【参考】古今六帖の本文からは「山」の歌であるとはうかがえないが、所載欄の諸文献では二句目が「矢野の神山」とある。

八四七 あづまぢのさやのなか山さやかに見ぬ人ゆへにこひやわたらむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】東路のさやの中山のさやかではないが、あの人のことをさやかに、はつきりと姿を見ないがゆえに恋しつづけるのだろうか。

【語句】○さやの中山 遠江国の歌枕。現在の静岡県掛川市佐夜鹿にある峠。箱根峠、鈴鹿峠と並ぶ難所。初二句は「さやか」を導く序詞。「あづまぢのさやの中山さやかにも見えぬくもぬによをやつくさん」（忠岑集・四七）。○見ぬ人ゆへに 見ぬ人ゆゑに。見ていない人であるがゆゑに。

【所載】 ナシ

八四八 みまさかやくめのさら山さら／＼にわがなはたてじよろづよまでに

【異同】 ナシ

【現代語訳】あの美作の久米の佐良山ではないが、さらさら私の恋のうわさは立てますまい、万代までも。

【語句】○みまさかやくめのさらやま 「くめのさらやま」は美作国の歌枕。現在の岡山県津山市にある山。ここでは「さら／＼に」を導く序詞。「美作や久米のさら山さらさらむかしの今もこひしきやなぞ」（伊勢集・三九八）。○さら／＼に 打消を伴っているので「決して」の意で解す。

【所載】古今集・大歌所御歌・一〇八三／袖中抄・二六六

【参考】催馬楽・美作に「美作や 久米の 久米の佐良山 さらさらに なよや さらさらに なよや さらさらに 我が名 我が名は立てじ 万代までにや 万代までにや」とある。

八四九 くものうへにかりぞなくなるうねび山みかきのはらにもみぢすらしも
たちまのわう女

【異同】みかきのはらに—みかきかはらに（桂）

【現代語訳】雲の上では雁が鳴いているようだ。畝傍山のふもとの御垣が原では紅葉しているに違いなことだ。

【語句】○くものうへに 所載欄の夫木抄と家持集はいずれも「おほぞらに」とする。○うねび山 大和国の

歌枕。現在の奈良県橿原市にある山。天の香具山、耳成山とともに大和三山の一。「うねび山ほのかに霞たつからに春めきにける心ちかもする」（好忠集・四八六）。平安以降の用例は少ない。○みかきのほら 大和国の地名。吉野離宮に属する「みかきがほら」と同一か。「ふるさと春めきにけりみ吉野のみかきがほらをかすみこめたり」（詞花集・三二）。

【所載】夫木抄・六二六七／家持集Ⅰ・二〇〇／家持集Ⅱ・二四八

【参考】作者名「たちまのわう女」とあるが、所載欄の文献からは確認できない。

八五〇 しながどりみなのをゆけばありま山ゆきふりしきてあけぬこのよは
ひとまろ

【異同】ナシ

【現代語訳】猪名野を過ぎて行けば、有馬山では雪が降りしきついているうちに明けてしまったよ、今夜は。

【語句】○しながどり 「猪名野」に掛かる枕詞。○あなの 摂津国の地名。現在の兵庫県伊丹市の猪名川流域の平野。「猪名」とも。○ありま山 摂津国の地名。現在の兵庫県神戸市北区のあたり。○ゆきふりしきて雪が降りしきるので旅程がはかどらない。○あけぬこのよは 意のままに進まなかったことを嘆じる。

【所載】新古今集・羈旅・九一〇／万葉集・一一四四（旧一一四〇） 志長鳥 居名野乎来者 有間山 夕霧立宿者無而 シナガトリキナノラクレバアリマヤマユフギリタチヌヤドハナクシテ しながとりみなのをくれ
脳・二五九／綺語抄・一七三／奥儀抄・三七三／和歌初学抄・一五一／袖中抄・二八二

【参考】作者名「ひとまろ」とあるが、所載欄の万葉集では作者未詳歌、新古今集でも「よみ人知らず」とあり、人麿集諸本にもない。また元永本古今集・羈旅・四〇八の次に作者を「よみ人知らず」として載る。

〔以上五首担当 青木太朗〕

八五一 やたのゝのあさぢいろづくあらちやまみねのあはゆきさむくぞあるらし

【異同】ナシ

【現代語訳】矢田の野の浅茅が色づいていることだ。有乳山の峰の沫雪は寒々としているらしい。

【語句】○やた 奈良県大和郡山市矢田。石川県小松市矢田とする説もある。○あさぢ まばらに生えた茅萱。○あらちやま 越前国の歌枕。今の滋賀県高島市から福井県敦賀市に至る、いわば越路の途中にある山。有乳山。愛発山とも。万葉時代、不破、鈴鹿とともに三関と呼ばれた。「人心あらちの山になるときぞ契りこしちの道はくやしき」（古今六帖・九〇五）。○さむくぞあるらし 「らし」は明確な根拠に基づく推量。ここは浅茅が色づきはじめていることを根拠にしている。

【所載】新古今集・冬・六五七／万葉集・二二三三五（旧二二三三）八田乃野之 浅茅色付 有乳山 峰之沫雪 寒零良之 ヤタノノアサヂイロヅクアラチヤマミネノアワユキサムクフルラシ やたののあさぢいろづくあらちやまみねのあわゆきさむくふるらし／夫木抄・七一四四／人麿集Ⅰ・一六三／人麿集Ⅱ・一七一／人麿集Ⅲ・二〇五／家持集Ⅰ・二三〇／家持集Ⅱ・一四三／秀歌大体・八九／和歌初学抄・一九四／詠歌大概・六〇

八五二 あすかぢはもみぢばながるかづらきの山にはいまぞしぐれふるらし

【異同】ナシ

【現代語訳】飛鳥川にもみじ葉が流れていることだ。葛城の山には今まさに時雨が降っているらしい。

【語句】○あすかぢは 大和の飛鳥川とする説と河内の飛鳥川とする説とがある。大和の飛鳥川は飛鳥山中に発して稲渚を経、細川を合わせて藤原宮址を斜めに横切り、寺川と曾我川の間を北流して大和川に合流する。一方、河内の飛鳥川は二上山の西麓に発して羽曳野市の飛鳥・駒ヶ谷を経、北西流して石川に合流する。二上山は葛城連山の一だから、河内の飛鳥川に流れるもみじ葉を見て推量したと考えるほうが理に合っている。○かづらきの山 大阪府と奈良県の境に連なる葛城連山の総称。○しぐれふるらし 「らし」については八五二番歌参照。もみじ葉が流れていることをこの場合は根拠にしている。

【所載】新古今集・秋下・五四一／万葉集・二二二四（旧二二二〇）明日香河 黄葉流 葛木 山之木葉者 今之散疑 アスカガハモミチバナガルカヅラキノヤマノコノハイマシチルラシ あすかぢはもみぢばながるかづらきのやまのこのははいましちるらし／和漢朗詠集・三二四／夫木抄・六二八一／家持集Ⅰ・一三六／家持集Ⅱ・一二七／三十六人撰・五／秀歌大体・七八

【参考】発想や表現の類似した歌に、「たつた河もみぢば流る神なびのみむろの山に時雨ふるらし」（古今集・秋下・二八四）や、「この河にもみぢば流るおく山の雪げの水ぞ今まさるらし」（古今集・冬・三二〇）などが

ある。

八五三 なるかみのをとにのみきくまきもくのひばらのやまをけふ見つるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】評判が高く、噂に聞けばかりであった巻向の松原の山を、まさしく今日この目で見たことであつた。

【語句】○なるかみの 「音」の枕詞。「なるかみ」は雷の意。○まきもくのひばらのやま 「まきもく」は巻向。大和国の歌枕。現在の奈良県桜井市穴師一帯。「ひばら」は松原で、「三輪の松原」「初瀬の松原」など、このあたり一帯には松の木立が多かつた。

【所載】拾遺集・雑上・四九〇／万葉集・一〇九六（旧一〇九二）動神之 音耳聞 巻向之 檜原山乎 今日見鶴鴨 ナルカミノオトニノミキクマキモクノヒハラノヤマヲケフミツルカモ なるかみのおとのみききまきむくのひばらのやまをけふみつるかも／夫木抄・八五八六／人麿集Ⅰ・二一一／人麿集Ⅱ・一九二／人麿集Ⅲ・六八三／人麿集Ⅳ・一

八五四 いちしろくしぐれのふればつくしなるおほの山もうつるひにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】はつきりと時雨が降つたので、筑紫にある大野の山も色づきはじめてことだ。

【語句】○いちしろく 明白に。目立って。○つくしなるおほの山 福岡県の太宰府北部にある山。大野山。また大城山ともいう。そのあたり一帯の総称として四王寺山とも。

【所載】万葉集・二二〇一（旧二一九七）灼然 四具礼乃雨者 零勿国 大城山者 色付尔家里 イチシロクシグレノアメハフラナクニオホキノヤマハイロヅキニケリ いちしろくしぐれのあめはふらなくにおほきのやまはいろづきにけり

【参考】所載欄の万葉集では「しぐれのあめはふらなくに」とあり、当該歌の「しぐれのふれば」と逆の形になっている。また「大野の山」は「大城の山」とあり、万葉集には注があつて、「大城の山と謂へるは、筑前国御笠郡の大野山の頂に在り、号して大城と曰へる者也」とする。

八五五 よをうしといとひし人は神なびのみむろのやまにいりにけるかな^も

【異同】ナシ

【現代語訳】世の中をつらい、厭わしいと言っていたあの人は、神無備の三室の山に入って行ってしまったことだ。

【語句】○よをうしと 「う(憂)し」は物事が思うとおりにならないことを嘆き、厭わしく思う心情を表す。つらい。わずらわしい。不快だ。○神なびのみむろのやま 「神なび」とは本来神のいらつしやる所の意で、神聖な森や山を示す普通名詞。「みむろ」あるいは「みもろ」も神の鎮座する御室の意で、ある特定の地を示す語ではなかったが、古今集の「竜田川もみぢ葉流る神なびのみむろのやまに時雨降るらし」(秋下・二八四)あたりが有名になったことから、次第に奈良県生駒郡斑鳩町にある三室山のことと考えられ、紅葉の名所として詠まれるようになった。しかしここは必ずしも特定の地と結びつけて解する必要はないかもしれない。

【所載】夫木抄・八八四四

〔以上五首担当 犬養廉・久保木哲夫〕

八五六 ものゝふのたつといふなるすゞかやまならむかたこそきかまほしけれ

【異同】すゞかやま―すしかやま(御)

【現代語訳】武士が立っていると聞く鈴鹿山よ。その「鈴」が鳴るではないが、私がこの先どうなるのか、聞きたいものです。

【語句】○ものゝふ 上代は、朝廷に仕える全ての人、文武百官の意。平安時代以降、武士、つわもの。「ものゝふのたつといふなるませきにもとまらではるのこよひすぎぬる」(夫木抄・九五二二)。「養老令」軍防令には、関には武士を配置したと記されている。○すゞかやま 三重県と滋賀県との境にある鈴鹿峠付近の山々の称。東海道の難所の一つとされ、三関の一つである鈴鹿の関が置かれていた。「鈴」の連想で、「音」「鳴る」「ふる」などと共に詠まれることが多い。「すずか山うき世をよそにふりすていかになり行く我が身なるらむ」(新古今集・一六一三)。○ならむかた 自分の行く末がどうなるのか。「成る」に「鳴る」を掛ける。「鳴る」は鈴の縁語。参考欄の歌枕名寄では第四句「ならんさかこそ」。

【所載】ナシ

【参考】歌枕名寄・四六三二に載る。

八五七 かぜふけばをきつしらなみたつたやまよはにや君がひとりゆくらむ
かごのやまのはな子

【異同】ナシ

【現代語訳】古今六帖・第一帖「ぎふのかぜ」四三六番既出（作者名 かぐやまのはなのこ）。

【所載】古今六帖・第一帖「ぎふのかぜ」四三六番既出

八五八 いにしへのことはしらぬをわれみてもひさしくなりぬあまのかご山

【異同】ナシ

【現代語訳】昔のことは知らないけれども、私が見始めてからでも長い間、変わることもなくありますよ、あの天の香具山は。

【語句】○いにしへのこと 古代の神話時代のこと。香具山についての神話や伝説。所載欄の和歌童蒙抄では上二句は「いにしへのひとをばしらず」。○われみてもひさしくなりぬ 私が親しく見始めてからでも長い年月がたっている。「我見てもひさしく成りぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ」（古今集・九〇五）。○あまのかご山 天の香具山（あまのかぐやま）。大和三山の一つ。所載欄の他文献では「あまのかぐ山」「あめのかぐやま」。

【所載】続古今集・雑下・一七四六／万葉集・一一〇〇（旧一〇九六）昔者之 事波不知乎 我見而毛 久成奴 天之香具山 イニシヘノコトハシラヌヲワレミテモヒサシクナリヌアマノカグヤマ いにしへのことはしらぬをわれみてもひさしくなりぬあめのかぐやま／人麿集Ⅱ・一九三／人麿集Ⅳ・二／和歌童蒙抄・一六六／古来風体抄・七七

八五九 わぎもこがゐなのは見せてなつぎやまつのゝ松原いつしかゆかむ
たけちのくろ人 カシメサン

【異同】ナシ

【現代語訳】愛しい人に猪名野を見せて、名次山や角の松原へいつ行こうか、早く行きたいものです。

【語句】○わぎもこが 所載欄の万葉集では「わぎもこに」。その方が意が通るので万葉集に従う。○あなの兵庫伊丹市を中心に広がる猪名川流域の平野。○なつぎやま 兵庫県西宮市名次町の丘陵。万葉集では「なすきやま」とも読む。○つのゝ松原 兵庫県西宮市松原町津門の海岸。○いつしかゆかむ 一つになったら行こうか、早く行きたいものです。「いつしか」は副詞。待ち望む気持ちをこめて使う。所載欄の文献では「いつかしまさむ」（いつ見せようか、早く見せたいものです）となっている。

【所載】万葉集・二八二（旧二七九）吾妹兒二 猪名野者令見都 名次山 角松原 何時可將示 ワギモコニナノハミセツナツギヤマトツノマツバライツカシメサム わぎもこにゐなのはみせつなすきやまつののまつばらいつかしまさむ／和歌童蒙抄・七〇一

【参考】作者名「たけちのくろ人」は所載欄の万葉集に一致する。和歌童蒙抄には作者表記なし。万葉集によると、高市黒人が妻を伴い、従者を連れて、摂津国を旅した時の詠。

八六〇 あふことをとをたふみなるたかし山たかしやむねにもゆる思は

【異同】とをたふみなる―とを遠江なる（大）

【現代語訳】「なかなか逢うことができない」という名の遠江国にある、高師山よ。その「たかし」ではないけれど、私の胸の思いの火は高く燃えているのです。

【語句】○あふことを 所載欄の夫木抄では「あふことは」。「あふこと」の雲井とほくてわがこひはいのちにかよふほどぞかなしき」（保憲女集I・一四九）。○とをたふみ 正しくは「とほたふみ」。「とほつあふみ」の転。現在の静岡県西半部。（逢うことが）遠い意を掛ける。○たかし山 高師山。三河国渥美郡（愛知県豊橋市）と遠江国浜名郡（静岡県湖西市）の境にある山。上三句は「たかし」を導く序詞。○たかしやむねにもゆる思は 高いのですよ、胸に燃える思いの火は。「思（おもひ）」の「ひ」に「火」を掛ける。「火」「燃ゆ」は縁語。

【所載】夫木抄・八四三五

〔以上五首担当 三浦狭依〕

八六一 かくらくの^{ハッ}とませのやまの山ぎはにいさよふくもはいもにかもあらむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】とませの山の山際にただよう雲はいとしいあの人なのだろうか。

【語句】○かくらくの「かくらく」は「隠る」のク語法。隠れる場所の意。ここでは「とませ」にかかる枕詞的に用いられたもの。古今六帖・三四八四では「かくらくのとませの山をすそへらとよすめ神のまきしくれなる」。所載欄の夫木抄など、「はつせ」にかかる例もみえる。「はつせ」の枕詞「こもりく」の「隠りく」は山に囲まれた所の意。「隠口」。所載欄の和歌一字抄・袖中抄では「かくれぬの」。所載欄の万葉集歌「隠口能泊瀬山之」から発生した誤読か。○とませのやま 所載欄の文献では全て「はつせの山」。「泊瀬」の読みによるか。『平安和歌歌枕地名索引』は「はつせと同名歟」とする。「はつせ」は泊瀬・初瀬・長谷とも書く。初瀬川の峡谷に開けた、奈良県桜井市の一地区。泊瀬は墓所でもあった。万葉集の「隠口能泊瀬」は、今は「こもりくのはつせ」と読むのが一般的である。○山ぎは 空の、山に接する境目のあたり。○いさよふ雲 ぐずぐずして進みかねている雲。「いさよふ」は動かずに停滞している意。

【所載】万葉集・四三一（旧四二八）隠口能 泊瀬山之 山際尔 伊佐夜歴雲者 妹鴨有牟 コモリクノハツセノヤマノヤマノハニイサヨフクモハイモニカモアラム こもりくのはつせのやまのやまのまにいさよふくもはいもにかもあらむ／夫木抄・七八七〇／人麿集Ⅲ・六三三／和歌一字抄・一〇五八／奥儀抄・五二八／袖中抄・九六〇

【参考】万葉歌の詞書によると、土形娘子（伝未詳）を火葬した煙を白雲に見立てて人麻呂が詠んだ歌。「ヤマギハ」の語は奈良時代にはなかった（西宮一民『万葉集全注』有斐閣、一九八四年）ので、万葉集の上句の現代語訳は、「（こもりく）泊瀬の山の山と山との間に」となる。また、類歌に万葉集・一四一一（旧一四〇七）「こもりくのはつせの山に霞立ちたなびく雲は妹にかもあらむ」がある。

八六二 ますかぢみゝるふち山はけふもかもしらつゆをきてみちふるらし

【異同】みちふるらし—もみちふるらし（御・桂・大）

【現代語訳】（ますかがみ）みるふち山は今日も、白露が置いて紅葉が降っているらしいよ。

【語句】○ますかぢみ きれいに澄み、はつきり映る鏡。まそかがみ。ますみのがみ。まそみかがみ。ます鏡を見る意で「みなふち山（みるふち山）」の枕詞。○ゝ（み）るふち山 未詳。所載欄の他文献では「みなふち

山。「る」は「な」の誤写か。南淵山は多武峰の南方、飛鳥川上流の山。○しらつゆをきて　しらつゆおきて。白露が置いて。白露は木の葉を染めるものと考えられていた。「白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちぢにそむらむ」（古今集・二五七）。○みちふるらし　他本に「もみちふるらし」として解釈する。「ふるらし」は降っているらしい。

【所載】万葉集・二二一〇（旧二二〇六）真十鏡　見名淵山者　今日鴨　白露置而　黄葉将散　マソカガミニナ
ブチャマハケフモカモシラツユオキテモミチチルラム　まそかがみみなぶちやまはけふもかしらつゆおきても
みちちるらむ／夫木抄・八八九五

八六三　むばたまのくろかみやまをあさこえてこのしたつゆにぬれにけるかな

【異同】むはたまの―うは玉の（大）　ぬれにけるかな―ぬれにけるかも（御・桂・大）

【現代語訳】黒髪山を朝越えて、木の枝葉から落ちる露に濡れてしまったことだな。

【語句】○むばたまの　むば玉（ひおうぎの実）が黒いことから、「黒」「髪」「夜」などにかかる枕詞。「ぬばたまの」「うばたまの」とも。○くろかみやま　黒髪山。奈良市北端の佐保山丘陵に続く山地。日光市にある男体山や岡山県新見市の黒髪山とする説もあるが、特定はできない。○このしたつゆ　木の枝葉から落ちる露。既出歌（五九八番）の所載欄に掲げた万葉集では「山下露」。山下露は山の木の枝葉から落ちかかる露、あるいは山の下草に置く露。

【所載】古今六帖・第一帖「しづく」五九八番既出

八六四　夏ごろもうたしのやまのほとゝぎすなくこゑしげくなりまさるなり

【異同】うたしのやまの―うたしめ山の（御・桂・大）

【現代語訳】夏ごろも打つといううたしの山のほととぎすが鳴く声は、ますます絶え間なくなつたことだ。

【語句】○夏ごろも　夏に着る単の薄い着物。「衣打つ」（布につやを出したり、糊をやわらかくするために砧で打つ）意で「うたしのやま」を導く。○うたしのやま　未詳。他本と所載欄の家持集の「うたしめ山」、夫木抄の「うたたね山」も未詳。陸奥国の「うたたねの森」は枕草子にある。○しげくなりまさる　ますます絶え間なくなる。「しげく」は形容詞「しげし」（空間的・時間的にすきまがない意）の連用形。下句は所載欄の家持集で

は「いまはきとときに（ママ）たちかへりなけ」、夫木抄では「いまはきとくに立ちかへりなく」となっている。島田良二『家持集全釈』（風間書房、二〇〇三年）では西本願寺本の本文「いまはきとよみ」をとり、「今は来て、声を響かせて何度も鳴け」と解している。

【所載】 夫木抄・八五—二／家持集Ⅰ・八四／家持集Ⅱ・七六

【参考】 拾遺集一二三番に「夏来れば深草山の郭公なくこゑしげくなりまさるなり」という類歌がある。

八六五 かへる山なにそもありてあるかひはきてもとまらぬなにこそありけれ
いちはらのおほ君

【異同】 ナシ

【現代語訳】 「帰る山」 って何なのだ、存在している価値は。「来ても留まらないで帰る」という名だったのだな。

【語句】 ○かへる山 今の福井県南条郡にある歌枕。鹿蒜山。「帰る」を連想して詠まれることが多い。「かへる山ありとは聞けど春霞立ち別れなば恋しかるべし」（古今集・三七〇）。○なにそもありてあるかひは「ありてあるかひはなにそも」を倒置した形。（かへる山の）存在価値は何なのだ、という意を強めている。値うちの意味の「かひ」には山の縁語「峽」を掛ける。○きてもとまらぬなにこそありけれ 「帰る山」の「帰る」は、「都に」帰るのではなく「来ても留まらずにまた帰る」という名だと今気付いたよ。所載欄の古今集の詞書に「あひしれりける人の越の国にまかりて、年経て京にまうできて又帰りける時によめる」とある。

【所載】 古今集・離別・三八二／躬恒集Ⅰ・二八〇／躬恒集Ⅱ・一五六／躬恒集Ⅲ・三〇四

【参考】 作者名「いちはらのおほ君」とあるが、所載欄の古今集の作者名は凡河内躬恒で、躬恒集にもみえることから、作者は躬恒だと考えられる。「いちはらのおほ君」は市原王。生没年未詳。天智天皇五世の孫で安貴王の子。春日王の孫。

〔以上五首担当 三浦〕

八六六 しのぶやまし**のびにこえむ**みちもがな人の**こゝろのおくもみる**べく
テカヨフ

【異同】 しのひにこえむ—しのひにこえて（大）

【現代語訳】 信夫山をこつそり越える道があればいいのになあ。あなたの心の奥も見られるように。

【語句】○しのぶやま 陸奥の歌枕。今の福島市あたりを「信夫」と言った。百人一首にも収められた源融の「陸奥のしのぶもちずり」（古今集・七二四）の歌で有名な地。○しのびに 「しのぶ」「しのび」と同音反復で用いた。「しのびに」は隠れて、こっそり、の意。○みちもがな 道があるといいなあ。願望の意。○人のこゝろの「人のこゝろ」は古今集だけで十六例、三代集で四十四例を見いだせる。三代集時代に流行した語のひとつ。○おくもみるべく 奥も見る事ができるように。心の奥から山の奥を連想し、そこから信夫山に関係づける。

【所載】新勅撰集・恋五・九四二／伊勢物語・一五段・二三

八六七 みな月のなごしのやまのよぶこどりおほぬさにのみこゑのきこゆる

【異同】ナシ

【現代語訳】水無月の、名越の山の呼子鳥は、（いくら名を呼んでも相手ではなく）大幣にだけ声が聞こえていくことだ。

【語句】○みな月の 「なごし（夏越）」を導く。夏越祓（なごしのはらへ）は六月祓ともいい、六月晦日におこなう大祓の行事。茅（ちがや）で作った輪をくぐり、人形（ひとがた）を作つて罪・穢れをうつし流し清めた。古今六帖には「夏越の祓」が立項されている（一〇九番歌参照）。○なごしのやま 所在不明。万葉集にも「莫越山」（一八二六（旧一八二二））があり、延喜式神名帳の安房国朝夷郡莫越山神社に擬する説もある（『新日本古典文学全集 万葉集』）。また五代集歌枕以降は土佐の歌枕とする。○よぶこどり 呼子鳥は古今伝受三鳥の一つで、カッコウ、ホトトギス、ツツドリのほか、猿という説もある。中ではカッコウとする説が有力か。春に詠まれることが多く、水無月の例は珍しい。○おほぬさにのみ おほぬさ（大幣）は、大祓の際に用いる大きな串につけた幣帛。「なごし」と「ぬさ」は縁語。古今集・七〇六（伊勢物語四七段）の「大幣のひくてあまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」の歌は、業平の好色ぶりを大幣にたとえた歌で、大幣は人々が自らに引き寄せて祈るものとして詠まれる。つまり当該歌でも、幣に祈るように、呼子鳥が名を呼んで祈る声は大幣には聞こえるが肝心の相手には届かない、の意か。

【所載】夫木抄・一八三六

八六八 わがこふるみのゝをやまのひとつまつちぎりしこゝろいまもわきれず^す

【異同】ナシ

【現代語訳】私が恋しく思っている、美濃の御山のひとつ松、結んで約束したあの心は今も忘れてはいないのですよ。

【語句】○みのゝをやま 美濃の御山。岐阜県垂井町の南宮山（なんぐうさん）を指す。南宮神社の神体であることから「御山」と書いた。南宮神社は美濃国一宮であり、古来より信仰を集めていた。○ひとつまつ 一本松。その枝を変わらぬ契りの印として結んだ。馬内侍集に「ひとつ松結びけりともいまぞ知るとくる心はときはならじを」（二三）がある。

【所載】新古今集・恋五・一四〇八／夫木抄・一三六九四／伊勢集Ⅰ・三八一／伊勢集Ⅱ・三八五／伊勢集Ⅲ・四三一

八六九 しらまゆみいるさのやまのときはなるいのちかあやなこひひてやあらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】入佐山の常磐のような命なのか、無意味にも恋い続けているのだろうか。

【語句】○しらまゆみ 「いるさ」にかかる枕詞。射（い）と同音の地名にかかる。万葉集・一九二七（旧一九二三）に「白檀弓今春山に去く雲の逝きや別れむ恋しき物を」がある。○いるさのやまの 入佐山は但馬国の歌枕。「梓弓いるさの山は秋ぎりのあたるごとくや色まさるらむ」（後撰集・三七九）。○ときはなる 万葉集では「常石有」で、大岩のように不滅のものだ、の意となる。なお、「ときは木」の意で用いる例が多いが、檀は落葉樹なのでここでは用いない。○あやな 「あやなし」の語幹。条理に合わないことを意味する。無意味に。わけもなく。○こひひてやあらん 諸本「こひひてやあらん」だが、衍字と解し、本文を「こひひてやあらん」として解釈した。

【所載】万葉集・二四四八（旧二四四四）白檀 石辺山 常石有 命哉 恋乍居 シラマユミイソヘノヤマノトキハナルイノチナラバヤコヒツツヲラム しらまゆみいしへのやまのときはなるいのちなれやもこひつつをらむ／夫木抄・八一二七／家持集Ⅱ・三一六

八七〇 わがこひはみくらのやまにうつしてむほどなき身には^をみて^をどころなし

【異同】ナシ

【現代語訳】私の恋は、御蔵の山に移して、しまつてしまおう。たいした身ではない私は、身の置き所もないのだから。

【語句】○みくらのやま 御蔵山は所在不明であるが八代集抄では山城とする。○うつしてむ うつしてしまおう。「うつし(移し)」「をき(置き)」「は蔵の縁語。我が恋を蔵に移すという面白い表現がこの歌の眼目。○ほどなき身には 「ほど」は、身分や年齢・技量などを指す語。「ほどなき身」で「たいした身では無い」の意となる。○をきどころなし おきどころなし。置き所がない。「秋ごとにかりつるいねはつみつれど老いにける身ぞおき所なき」(拾遺集・一一二四)では稲は積むが我が身は置き所がない、と詠む。そのように保管する場(当該歌では蔵)があるものと、置き所が無いもの、との対比を詠んでいる。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 杉本まゆ子〕

八七一 つのくにのまつかねやまのよぶこどりなくといまくといふ人もなし

【異同】ナシ

【現代語訳】待兼山の呼ぶ子鳥は(その名の通り「待ち兼ねて呼ぶ」のだから)鳴いても「今すぐ行くよ」と言う人もいない。(やはりあの人は来ない)。

【語句】○つのくに 撰津国。○まつかねやま 例がない。ただ、「まちかねやま」と同じとすれば、撰津国の歌枕。能因歌枕に「撰津」とあり、和歌初学抄、八雲御抄も同じ。山の名に「待ち兼ね」をかける。「こぬ人をまちかねやまのよぶこどりおなじころにあはれとぞきく」(堀河百首・二二二)。○よぶこどり 人を「呼ぶ」をかけて使う。「大和には鳴きてか来らむ呼子鳥きさのなかやま呼びぞ越ゆなる」(万葉集・七〇)とあるのが古い例。具体的に何を指すかは、「はこ鳥」「つつ鳥」「郭公の異名」など諸説あつて不明。古今集の秘説三鳥の一つ。「をちこちのたづきも知らぬ山なかにおぼつかなくもよぶこどりかな」(古今集・二九)から春の鳥であることとはわかる。○なくといまくと 鳴くと今来(いまく)と。「鳴くと」の「と」は逆接の仮定条件接続助詞。「とも」に同じ。「あらしのみ吹くめる宿に花すすき穂に出でたりとかひやなからむ」(蜻蛉日記)。「今来」は「すぐに来る」「すぐに行く」の意。所載欄の夫木抄では下句「なといまくとはいふ人のなき」とある。

【所載】夫木抄・一八三七

八七二 春くさをむまくひやまをこえてくるかりのつかひはやどりすぐなり
人まろ

【異同】ナシ

【現代語訳】昨山（くひやま）を越えて春やってくる雁の使は（故郷からのたよりかとなつかしく思っているが、この宿の上を通り過ぎてゆくようだ）。

【語句】○春くさを 「むま」まで「昨山」を導く序。春に「萌え出た草を馬が喰ひ」という続き。○くひやま 昨山。山城国綴喜郡昨岡神社。現在、飯岡。木津川の西。○かりのつかひ 春、北よりやって来る雁。匈奴に捕われた蘇武が南へゆく雁の足を書結び放った。それが天子に得られその生存を知られたという故事（漢書・蘇武伝）による。「ながつきのそのはつかりの使ひにも思ふころは聞こえぬかも」（万葉集・一六一八（旧一六一四））、「あまとぶや雁のつかひにいつしかもならのみやこにことごとてやらん」（拾遺集・三五三）。

【所載】万葉集・一七二（旧一七〇八）春草 馬昨山自 越来奈流 雁使者 宿過奈利 ハルクサヲウマクヒ ヤマヲコエクナルカリノツカヒハヤドリスギヌナリ はるくさをうまくひやまをこえくなるかりのつかひはやどりすぎぬなり／和歌一字抄・一〇九二／奥儀抄・四六四／袋草紙・七五三

【参考】作者名「人まろ」は、万葉集で人麿歌集にあるとする歌と一致する。万葉集巻第九・一七一三（旧一七〇九）のあとの「右柿本朝臣人麻呂之歌集所出」という記述の指す範囲（一六八六―一七一三（旧一六八二―一七〇九））にある。

八七三 よのなかをなげきにくゆるかまど山はれぬおもひをなにしそめけむ

【異同】ナシ

【現代語訳】世の中を嘆き、（したことを）悔い、（うつうつと）晴れない思いをどうしてし始めたのか。

【語句】○なげきにくゆる 嘆きに悔ゆる。これに「投木に燻る」をかけた。「投木」は火にくべる木。「燻る」は「ふすぶる」の意。○かまど山 筑前国筑紫郡に在る宝湯山の別名。かまど神社がある。「筑紫へまかりける時に、竈山のもとに宿りて侍けるに、道つらに侍ける木に古く書き付けて侍ける／春はもえ秋はこがるゝ竈山／元輔／霞も霧も煙とぞ見る」（拾遺集・一一八〇）。○おもひ 「思ひ」に「火」を掛ける。○しそめ 終止形「し

そむ」は、動詞「ず」と始める意の「そむ」の複合語。しはじめる。

【所載】 夫木抄・三六一三

【参考】 「思ひ」にかけた「火」、「投木に燻ゆる」は「かまど」の縁語。所載欄の夫木抄では第三句「けふり山」。

八七四 しほりしてゆかむしものをあひづ山イルヨリマドフミチトシリセバ

【異同】 底本ハ下句ヲ行間ニ小サクカタカナデ補入。桂宮本ハ下句ミセケチ。右傍ニヒラガナデ「いるよりまどふ道としりせは」ト書ク。大久保本ハ全部ヒラガナデ一行ニ書ク。

【現代語訳】 (どこ)を通ってきたのか(目印に) 枝を折って行けばよかったのに。会津山は入るなりわからなくなくってしまいう道と知っていたなら。

【語句】 ○しほり しをり、枝折。木の枝を折って道しるべとすること。○ゆかましものを 「まし」は反実仮想の助動詞。現実には枝折してゆかなかったが、その反対であったならと仮想する。「ものを」は逆接を表す。

○あひづ山 会津山。磐梯山のこと。「会津山すその原にともしすとほぐしに火をもかけあかしつる」(堀河百首・四二三)。

【所載】 夫木抄・八七〇七

八七五 オモヒイデ、ミチキツレトシミカハヤマ君にしあらねば猶ぞ恋しき

【異同】 底本ハ上句カタカナデ前歌下句ノカタカナ書キノ左ニ並ベテ細字書キ入レ。桂宮本ハ一首全体ヲ行間ニカタカナデ補入ノカタチ。大久保本ハ一首ヲヒラガナ書キデ行間ニハサム。

ミチキツレトシ—ミチキツレトモ(桂)、みちきわれとし(大)

【現代語訳】 思出して山道をやってきたが、みかは山は、あなたではないので、いつそう恋しさが募る。

【語句】 ○ミチキツレトシ 意味不明。御所本は底本に同じ。「シ」は「モ」の誤写か。「道来つれども」の意で訳した。○ミカハヤマ みかは山。所在不明。「かなしさはこののみかは山里のかけひの水の流れをもとへ」(林下集・二五四)。

【所載】 ナシ

【参考】 底本と御所本は、この歌と前歌の、二首の書き様は同じ。

〔以上五首担当 平野由紀子〕

八七六 いはで山いはでながらの身のはては思ひしことゝたれかつげまし

【異同】ナシ

【現代語訳】「いはで山」の名のように、言わないままで過ぎた我が身の終わりの時には、私が深く思っていたと誰があの人に告げてくれるだろうか、誰も告げてくれまい。(そう思うと、この思いを口に出さないことが苦しく、悲しい。)

【語句】○いはで山 陸奥国にある山。岩手山。「いはで」にかかる枕詞。「いはでのやま」は「言はで」と掛詞となる例が多い。「思へどもいはでの山に年をへてくちやはやてなん谷の埋木」(千載集・六五二)。○いはでながら 言わないままで。○身のはて 身の行く末。最期。「命さへあらばみつべき身の果てを忍ばむ人のなきぞ悲しき」(新古今集・一七三八)。○たれかつげまし 誰が告げるだろうか、いや誰も告げない。「か」は反語。「まし」は仮定の上にたつて仮想する意を表す。「うぐひすの谷よりいづるこゑなくは春くることをたれか知らまし」(古今集・一四)。

【所載】ナシ

八七七 おぐら山みねふみならしきにしかばけふはなにともおもほえぬかな

【異同】ナシ

【現代語訳】をぐら山の峰を踏みしめて来たのだから、人々が暗いというその道も、今日の私には何とも思われないことだ。(いよいよ恋しい人に会えるという期待で。)

【語句】○おぐら山 をぐら山。小倉山・小椋山。山城国、現在の京都市右京区嵯峨の有名な山だが、その他大和国、現在の桜井市付近にも、また紀伊国(能因歌枕)出雲国(出雲風土記)にもある。ここでは「小暗」の意をこめたか。○ふみならし 平らになるほど同じ所を往来して。または、踏み均らして。ここでは「均す」の意をとったが、恋人と会える喜びを心に秘めて、地を踏む足音も高鳴る意を響かせたともいえる。「相坂の関のいはかどふみならし山たちいづる桐原の駒」(拾遺集・一六九)。○おもほえぬ 思われぬ。「おもほえ」は「おもほゆ」の未然形で、自然に思われるの意。何を「おもほえぬ」のかは明確でないが、この山の名から連

想される暗さへの怖れを指すか。

【所載】ナシ

八七八 みわのやまいかにまぢみむとしふともたづぬる人もあらしと思へば
伊勢

【異同】あらしと思へは—あらしと思ふ(桂)

【現代語訳】私はどのように人を待ちつつ三輪山を眺めていればよいというのだろう。何年たっても訪ねる人などあるまいと思うので。

【語句】○みわのやま 三輪の山。大和国、今の奈良県桜井市にある山。夜毎に来る男の衣につけた糸をたどって男の正体を確かめたという三輪山説話で名高い。「わがいはほはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど」(古今集・九八二)により、山麓の杉立てる門の女が、杉を目印にして訪れる男を待つという恋歌の詠法の一つの型を生ぜしめた。○いかにまぢみむ 私はどのように「たづぬる人」を待ち、「みわのやま」を眺めようか。古今集の注釈書には「まぢみむ」の主語を三輪山の神とし、作者をそれになぞらえているとする説もある。その場合「三輪山はどんなに待つているのだろう。(私はどんなに待つているだろう。)」となる。

【所載】古今六帖・第五帖「わする」二八七〇／古今集・恋五・七八〇／新撰和歌・三五八／金玉集・六三／伊勢集Ⅰ・三／伊勢集Ⅱ・三／伊勢集Ⅲ・三／俊成三十六人歌合・一一／時代不同歌合・五七／三十人撰・四〇／三十六人撰・三七／深窓秘抄・一〇〇／俊頼髓脳・六六／和歌童蒙抄・一八三・八五六／袖中抄・三一、三六〇／西行上人談抄・二二／近代秀歌・九七／井蛙抄・一八〇

【参考】作者名「伊勢」は、所載欄の文献に一致する。古今集の詞書「仲平朝臣あひしりて侍りけるをかれがたになりければ、父が大和守に侍りけるもとへまかるとてよみてつかはしける」や、伊勢集Ⅰの詞書「かく人のむこになりければ、いまはとはじと思ひてかく言ひやりける」により詠歌事情が知られる。

八七九 おとは山おとにきゝつゝあふさかのせきのこなたにとしをふるかな
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたのことを噂にはしばしば聞き、会いたい気持ちをかきたてられながら、逢坂の関を越えて行くのがためらわれて、関のこちら側にとどまって何年も過ぎてしまったことだ。

【語句】○おとは山 山城国と近江国の境、現在の京都市山科区にある音羽山。同音から「音」の枕詞。更に「音」から時鳥の声を連想して時鳥の名所としても詠まれた。また、この山は逢坂関の南に位置し、都から東国へ下るコースにも隣接していたので、当該歌のように逢坂関が詠みこまれることもあった。○おとにきよつゝ 「音に聞く」は噂・風聞を耳にする意。「つづ」は反復・継続の意の接続助詞。○あふさかのせき 近江国滋賀郡にあった関所。大化二(六四六)年設置、延暦十四(七九五)年一時廃止、天安元(八五七)年に再設置。東国との往来で都と鄙を分かち場所として多くの歌が詠まれた。○せきのこなた 関のこちら側。関を越えていない、すなわち恋の場で逢瀬が実現していない状態を示す。○としをふるかな 年を過ごしていることだ。所載欄の定文歌合では「人を待つかな」。

【所載】古今集・恋一・四七三／左兵衛佐定文歌合・二七／時代不同歌合・七五／西行上人談抄・一八／井蛙抄・二〇七、三二四

【参考】古今六帖は作者を「つらゆき」と記すが、貫之集にはこの歌は見えない。所載欄の古今集と定文歌合では作者を在原元方とするが、元方集断簡にもこの歌は見えない。

八八〇 のちせ山のちにあひみむと思へばぞしぬべきものをけふまでもふる

【異同】ナシ

【現代語訳】後瀬山の名のように、後に逢おうと思えばこそ、死ぬはずのところを今日までも生きながらえているのだ。

【語句】○のちせ山 若狭国の歌枕。現在の福井県小浜市南方の後瀬山をさす。同音から「のち」にかかる枕詞。○のちにあひみむと 「あひみる」は男女が関係を結ぶ意。○思へばぞ 思うからこそ。所載欄の新拾遺集では「思ふにぞ」、万葉集では「おもへ(ふ)こそ」。○しぬべきものを 恋の苦しさ故に死ぬはずのところを。○けふまでもふる 今日までも生きながらえているのだ。所載欄の他文献では「けふまでもあれ」「けふまでもいけれ」。

【所載】新拾遺集・恋四・一二三二／万葉集・七四二(旧七三九)後湍山 後毛将相常 念社 可死物乎 至今日毛生有 ノチセヤマノチモアハムトオモフコソシヌベキモノヲケフマデモアレ(イケレ) のちせやまのちも

あはむとおもへこそしぬべきものをけふまでもいけれ

〔以上五首担当 斎藤照子・三浦〕

八八一 かゞみやま山かきくもりしぐるれどもみぢは猶ぞてりまさりける
そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】鏡山は山一面曇つてしぐれているが、紅葉はさらに輝きを増していることだ。

【語句】○かゞみ山 近江国の歌枕。滋賀県南部竜王町と野洲市の間位置するなだらかな山。標高三八五メートル。「鏡」の掛詞となる場合が多い。○かきくもり 空が一面に曇つて暗くなる状態。「くもり」は「鏡」の縁語。○てりまさりける 照り輝いていることだ。紅葉は、「ひさかたの月の桂も秋はなほ紅葉すればや照りまさるらむ」（古今集・一九四）など、月や月光と相俟つて「照りまさる」と詠まれることが多いが、当該歌はかきくもりしぐれているが、逆に紅葉が照りまさるという趣向である。

【所載】古今六帖・第六帖「紅葉」四〇六九／後撰集・秋下・三九三／拾遺抄・冬・一三六／拾遺集・冬・二一五／素性集Ⅰ・二五／素性集Ⅱ・四〇

【参考】作者名「そせい」は、後撰集と一致し、素性集に見える歌である。拾遺集、拾遺抄の作者名は貫之。

八八二 おほえ山かすみたなびきかぜふきてわれふねとめむとまりとめずも

【異同】ナシ

【現代語訳】大江山に霞がたなびき、風が吹いている、私が舟を停める港はわからないよ。

【語句】○おほえ山 大江山。丹波国の歌枕。京都府北西部、丹波・丹後地方の境をなす山。標高八三三メートル。千丈ヶ岳ともいう。山陰道の老ノ坂峠付近の大枝山とは異なる。「山」の縁で「木」「茂み」「雲」「月」などを取り合わせた叙景歌が多く、「舟」「泊」と組合わされるのはこの歌のみ。○とまりとめずも 「とまり」は船の停泊するところ。船着き場。港。「も」は詠嘆の終助詞。「とまりとめずも」は解しにくいいため、所載欄の万葉集歌に拠り「とまりしらずも」として解した。

【所載】古今六帖・第三帖「とまり」一九七一／万葉集・一一二二八（旧一一二二四）大葉山 霞蒙 狭夜深而

吾船將泊 停不知文 オホバヤマカスミタナビキサヨフケテワガフネハテムトマリシラズモ おほばやまかす
 みたなびきさよふけてわがふねはてむとまりしらずも、一七三六(旧一七三二) 母山 霞棚引 左夜深而 吾
 舟將泊 等万里不知母 オモヤマニカスミタナビキサヨフケテワガフネハテムトマリシラズモ おほばやまか
 すみたなびきさよふけてわがふねはてむとまりしらずも／夫木抄・八五四二

八八三 くらはしの山のゆきにもあらなくにまつ人なきに身のふりぬらん

【異同】まつ人なきに―まつ人さきに(御・桂・大)

【現代語訳】倉橋の山の雪でもないが、どうして待つ人もいないのに我が身は年をとってしまったのだろう。

【語句】○くらはしの山 三四二番歌参照。大和国の歌枕。奈良県桜井市倉橋の東南の最も高い音羽山説、西
 方の多武峰説、多武峰北方の崇峻天皇梯岡陵近くの峰とする説などがある。万葉集では白雲が立ち、月の出を
 遮る高峻な山とされたが、平安時代以後「くら」に「暗」を掛け、暗い山とするイメージが定着した。三四二
 番歌では山が高いことと月が歌われるが、当該歌では雪が歌われ、「年をへてむなしくみえしくらはしの山に白
 雪ふりぞつみける」(千穎集・四〇)などにその影響がみられる。○あらなくに 動詞「あり」の未然形+打消
 の助動詞「ず」のク語法「なく」+助詞「に」。……でもないのに。「わがためにくる秋にしもあらなくに虫の
 音きけばまづぞ悲しき」(古今集・一八六)。○まつ人なきに 待つ人もいないのに。恋人もなく、一人で年を
 とってしまった。底本以外は、すべて「まつ人さきに」となっており、雪よりも先にまず人が年をとってしま
 ったという意味になっている。○ふりぬらん 「ふり」は雪の縁語。雪が「降り」、身が「古り」を掛ける。「ら
 ん」は現在の事実についての原因、理由を推量する。八八五番歌参照。

【所載】ナシ

八八四 すみぞめのくらまのやまにいりし人まどふくもかへりきななむ

【異同】くらまのやまに―くらふの山に(大)

【現代語訳】暗いという鞍馬の山に入ってしまった方、迷いながらも帰ってきて下さいな。

【語句】○すみぞめの 墨染の色が暗いことから「鞍馬」にかかる枕詞。相手が墨染の衣を着る僧であること
 を示唆する。○くらまのやま 鞍馬の山。山城国(現在は京都府左京区)の歌枕。都の北東に位置し、平安時

代以後、王城の北方鎮護として信仰を集めた鞍馬寺がある。「昔よりくらまの山といひけるはわがごと人も夜や越えけむ」（後撰集・一一四〇）の如く、「鞍馬」の「鞍」には暗い意の「暗」を掛けることが多い。○まどふ／＼も「まどふ」は道に迷う。さまよう。暗い山で道を求めて迷う。所載欄の後撰集、大和物語の歌では背後に仏道修行的意味合いが込められる。参考欄参照。○きなゝむ 動詞「来」の連用形＋完了助動詞「ぬ」の未然形（強意）＋終助詞「なむ」（願望）。どうか来て下さい。

【所載】後撰集・恋四・八三二／今昔物語集・一五八／大和物語・一五六

【参考】作者名はないが、後撰集では平中興の娘の歌とする。「浄蔵くらまの山へなんいるといへりければ」という詞書があることから、浄蔵が鞍馬に修行にゆく時に中興の娘がよこした歌と考えられるが、大和物語（一〇五段）では、物怪にわずらっていた中興の娘が、験者である浄蔵と恋をし、浄蔵が鞍馬に籠もった時によこした歌とあり、今昔物語集（巻三〇第三）も大和物語とほぼ同じ話を載せる。

八八五 わがやどはみやこのたつみしかぞすむよをうち山と人もいふらん
きせんほうし

【異同】わかやとは―わか庵は（大）

【現代語訳】私の住まいは都の東南、このように（やすらかに）住んでいる。どうして世を憂しとして住む宇治山だと人もいうのだろう。

【語句】○やど 家。すみか。所載欄における全ての歌の初句は、大久保本と同じ「わが庵は」となっている。○たつみ 辰巳（東南の方角）。宇治山は都の東南にある。○しかぞ そのように。このように。「ぞ」は強意。

「しか」は副詞。代名詞「し」に状態を表す接尾語「か」がついてできた語で、叙述される内容を指示する。「しかぞはさぞといふ詞にて、心はかくぞといふに通ず」（古今余材抄）。「鹿」が掛詞になっているとする説もある。

○うち山 宇治山。京都府宇治市の南東部にあり、喜撰山ともいう。標高四一六メートル。「宇治山」の「宇」に「憂」を掛ける。○人もいふらん 「らん」は現在の事実について、言外にその原因、理由を疑う意。どうして……だろう。所載欄における全ての歌の第五句は「人はいふなり」。

【所載】古今集・仮名序、雑下・九八三／秀歌大体・一〇七／百人秀歌・一四／百人一首・八／袋草紙・一三三／悦目抄・一〇七／井蛙抄・三九七／十訓抄・一八

【参考】作者名「きせんほうし」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 中野方子〕

八八六 みちのくにあぶくまがはのあたた^たにや人わすれずの山はさがしき

【異同】ナシ

【現代語訳】阿武隈川を渡ると向こうには忘れず山、その山道は険しいのであろうか。逢って後に人に忘れられないというのは、難しいことなのであろうか。

【語句】○みちのくに 「みちのくに」に同じ。和名抄「陸奥」に「美知乃於久」とある。東海道・東山道の「道の奥」の意で、現在の東北地方をいう。所載欄の夫木抄に、初句「陸奥の」とあるように、和歌では「みちのくに」が多く、「みちのくに」は一般的に散文で用いられる。「みちのくに」のぶることの洩り出でてつきなとり川騒ぐ波かな」（肥後集・一七五）は、「みちのくに」を詠んだ数少ない歌であるが、久保木哲夫『肥後集全注釈』（新典社、二〇〇六年）は、「みちのくに」（助詞）では解しえず、「しのぶ（信夫）」の枕詞的用法と説明する。当該歌も、「あぶくま川」にかかる枕詞的用法と解す。○あぶくまがは 阿武隈川。陸奥国の歌枕。「あぶくま川」に「逢ふ」を掛ける。阿武隈川は、福島県旭岳から流れ出し北流して宮城県に入り太平洋にそそぐ。○人わすれずの山 「人わすれず」と「わすれずの山」の掛詞。枕草子「山は一段に「わすれずの山」が見える。蔵王山の古名。現在の地図にも蔵王連峰に「忘れず山」が確認できる。○さがしき 「さがし」は、山などの険阻なさまを言う。ここは、人事のけわしく、平穏でないことの意を掛ける。

【所載】夫木抄・八二六七／和歌初学抄・一八三

八八七 かたときもみねばこひしきおほえ山なげきこら^すきる人はよきかは【異同】なげきこら^すきる—なげきこえする（御・大）

【現代語訳】ほんの少しの間も逢えないでいると恋しい思いでいっぱいになる。私をこんな嘆きに固まらせるあなたは、善き人でしょうか、いやそうではありますまい。

【語句】○かたときもみねばこひしき この初二句が同じ歌に、「かた時も見ねば恋ひしき君をおきてあやしやいく夜ほかに寝ぬらん」（後撰集・恋二・六七七）がある。○おほえ山 「おほえ山」（大江山）に「多し」を掛ける。「大江山」については八八二番歌参照。○なげきこら^すきる 「なげき」は、薪の意の「投げ木」と「嘆き」

を掛け、「こらする」の「こら」は、木を切る意味の「伐(こ)る」の未然形と「凝(こ)る」の未然形とを掛ける。「する」は使役の意。「大原や炭焼き来たる妹をして小野の山なるなげきこらせじ」(相模集・三七三) 歌が参考になる。○よきかは「よき」は、「善き」に「斧(よき)」を掛ける。「かは」は反語の意。「斧」「伐る」は、「投げ木」の縁語。同様の縁語仕立ての歌に、「はかるめることのよきのみおほかればそらなげきをばこるにやあるらん」(金葉集・四九九)。

【所載】ナシ

【参考】歌枕名寄「丹波国 大江山」七六四五に、「六帖」歌として当該歌を引くが、下句を「なげきしらすな人のこるかは」とする。

八八八 春きぬといまはいぶきのやまべにもまだしかりけりうぐひすのこゑ

【異同】ナシ

【現代語訳】春が来たと今は言っても、伊吹山の辺りにもまだなのでした。春を告げる鶯の声は。

【語句】○いぶきのやまべ 「いぶきの山」(伊吹の山)に「言ふ」を掛ける。伊吹山は、和歌初学抄に近江、八雲御抄に美濃とある。滋賀県と岐阜県の境に位置する山。古来、粟草の艾(もぐさ)の産地として有名。「なほざりにいぶきの山のさしも草さしも思はぬことにやはあらぬ」(古今六帖・三五八八)。○まだしかりけり 「未だし」は、まだその時期ではない、の意。○うぐひすのこゑ 鶯の鳴き声は待望の春の訪れを告げるとされる。

【所載】夫木抄・四六〇

【参考】夫木抄・二〇三二に、古今六帖の二帖にある歌として、「春めきぬ今はいぶきの山べにもまだしかりける山吹の花」と、わずかに表現が異なる歌が見える。

八八九 いづこにぞありときゝしはいはたやまきみがこゝろのなれるなりけり

【異同】きみかこゝろの―君は心の(大)

【現代語訳】どこそこかあると聞いた岩田山、それは他ならぬあなたの頑な心が成った山だったのでね。

【語句】○いづこにぞあり どこそこかにある。そのことの不確かさを言う。「ありしだに憂かりしものを逢はずしていつこにそふるつらさなるらん」(女房三十六人歌合・一五・中務)。○いはたやま 所在不明。「いはた山」

を詠んだ歌は、他には、「いはたやまよにあげがたき冬の夜のあまの関守たれか据ゑけん」（好忠集・二九七）の一首しか見出せなかった。『古今和歌六帖標注』には、「異本にいはき山とあるよろし」と、感情のない「石木」（木石）の意味の「いはき山」として、例歌や漢籍を引用する。参考欄参照。

【所載】ナシ

【参考】歌枕名寄「未勘国上」九二二二に「六帖」歌として当該歌をあげ、上句「いづくにかありとききしやはきやま」として「磐城山」に入れ、国を諸説あげて未決とする。

八九〇 むかしわがたとてにしてしひえの山心よわくはかへるものかは

【異同】たとてにしてし—ことてにしてし（御・大）

【現代語訳】「第二句の意味が判然としないので、正確な訳が示せない」昔、自身から言い出して修行に入った比叡山である。だからその意志が弱くなって古里に帰るなんてあろうか、いやそれはない。

【語句】〇たとてにしてし 意味不通。御所本・大久保本に「ことでにしてし」、所載欄の夫木抄に「かどで（門出）にしてし」とある。「言出にす」（自分の口から言い出して）として現代語訳した。〇ひえの山 比叡山は滋賀県と京都市の境の山。天台宗の大本山延暦寺がある。こゝは山そのものではなく、修行する寺院などを指すか。〇心よわくは 「心弱し」は、意志が弱い、意、〇かへるものかは 帰ったりするものか、いやしない。「かは」は、反語を表す。所載欄の夫木抄「いづるものかは」。

【所載】夫木抄・八九三四

〔以上五首担当 犬養悦・加藤静子〕

八九一 わがためになにのあたごのやまなれやこひしとおもふ人のいるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】わたしに対してなんの仇敵のつもりなのか、あのあたごの山は、どうしてわたしの恋しく思う人が、あの山に入るのだろう。

【語句】〇わがために わたしにとって。わたしに対して。〇あたごのやま 愛宕山。山城国の歌枕。現在は京都市右京区に属す。平安京の西北郊外にそびえて、山城と丹波の境をなす山であった。「なにのあた（仇）」に「愛

岩の山」を掛けている。「仇」は、自分に対して害をなすものこと。○人のいるらん なぜ山に入るのであるうか。この「らん」は、原因・理由を推量する助動詞。上に「なぜ」を補って解するとわかりやすい。人が「山に入る」のはこの世を厭うてのこと、とする通念があった。次歌八九二番参照。

【所載】夫木抄・八七三二

【参考】「わがためになにのあたとか春風の惜しむと知れる花にしも吹く」（古今六帖・三九三、伊勢集・三一〇）と、初・二句が類似している。

八九二 よをうしとおもひいれもあかはだの山はみをこそかくさざりけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】この世をつらいと思つて逃れ入ったけれども、あかはだの山はこの身をかくしてはくれなかつたなあ。

【語句】○よをうしとおもひいれども この世をつらいところだと思つて山に入って見たけれども。世を厭うて山に逃れ入ると詠む歌は多い。「よをうし」といひし人は神なびのみむろの山に入りけるかも」（古今六帖・八五五）。○あかはだの山 「あかはだ」は、なにもまとはぬまるはだか、赤裸の意、ここは草木が生えず地肌の露出した山の形容か。「衣だに二つありせばあかはだの山に一つはかさましものを」（伊勢物語・二四二）ただしこれは定家本にはない歌である。夫木抄は「あかはだ山 大和」として例歌二首をあげているが、所在を大和とする根拠は不明。能因歌枕、八雲御抄にこの山の名は見えない。○みをこそかくさざりけれ 人がそこへ逃れ入つても、「あかはだの山」には草木がないから、人の身をかくさない。「かくさざりけり」の主語は「あかはだの山」。「かくす」は、この場合他動詞。

【所載】ナシ

【参考】第二句「おもひいれども」の「ど」は、「れ」と「も」の間の右傍に、細字傍記の形で書き入れられている。

八九三 うらみてもしるしなけれどしなのなるあさまの山のあさましや君

【異同】ナシ

【現代語訳】恨んでもかいいないことだけれど、ほんとにひどいではありませんか、あなた。

【語句】○うらみてもしるしなけれど 「しるし」は効験、ききめ。恨むことによつてなにか効果があるわけではないが。○あさまの山 浅間山。現長野県北佐久郡から群馬県吾妻郡にまたがる活火山。歌枕としての所在は信濃国とされてきた。「しなのなるあさまのやまの」は同音繰り返しによつて「あさまし」を導き出す序詞。○あさましや あまりにひどい。あんまりだ。「あさまし」は事の善悪にかかわらずその程度の甚だしいことを言うが、ここでは相手の仕打ちに対する強い恨みの念の表明。「や」は強調。

【所載】ナシ

八九四 いつからかしらべのこゑのたえにけんことひきやまのおとのきこえぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】いったい、いつから琴の演奏の音が絶えてしまったのだろう。ことひき山の音が聞こえないよ。

【語句】○いつから 「から」は時間的または空間的に動作の起点を表す格助詞。ここは時間的起点を表している。このような場合、上代では「より」が使われ、「から」が使われることはあまりない。○しらべのこゑ 樂器の演奏の音。○ことひきやま 出雲国風土記に「琴引山」の名が見え、現島根県飯石郡にある琴引山がこれに比定されているが、この山が歌枕としての「ことひきやま」であるかどうかは定かでない。能因歌枕、夫木抄などは「ことひきやま」の所在を「但馬」としているが、その根拠は不明。

【所載】夫木抄・八六六七

【参考】あるいは、恋人からの便りの絶えたことを恨む歌か。

八九五 ころもでの色まさりつゝしなのなるくらゐの山は君がまに〜

【異同】ナシ

【現代語訳】衣の色が次第に濃くなられて、あなたの位階はこれからもお心のままに高くなってゆくことでしよう。

【語句】○ころもでの色 位階を表わす衣(きぬ)の色。礼服の大袖、朝服の袍または襖の表の色は、衣服令により位階相当の色が定められていた。すなわち、一位は深紫、二・三位は浅紫、四位は深緋、五位は浅緋、六位

は深緑、七位は浅緑、八位は深縹、初位は浅縹、とされ、上位の階の方が色が濃かった。従って「ころもでの色まさる」とは、位階の上昇を意味する。○くらみの山 位山。飛驒國の歌枕。飛驒高地のほぼ中央に位置する山。笏の材料となる櫟(いちい)の産地であったといい、歌では「位(位階)」に掛けて詠まれる。この歌は「しなのなるくらみの山」と詠んでいるが、八雲御抄は、「位山」を「飛驒」とし、能因歌枕は「美濃」、五代集歌枕は「飛驒又在信濃」として一定しない。所在の認識は不確かであったらしい。○君がまに〜 あなたの思うがままに。下に「高くなってゆくであろう」の意が省略されている。

【所載】万代集・三一一九

【参考】だれかの位階昇叙を祝った歌であろう。

(以上五首担当 山下)

八九六 雨はふるみちはまど^よひぬやましなのかさと^りやまのいづ^こなるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】雨は降るし、道には迷ってしまった。やましなの笠とり山はどこなのだろう。早く笠を手を執っているという笠とり山へ行つて笠を着けたいものだ。

【語句】○まよひぬ 「まよふ」は思い悩む意。ミセケチの「まどふ」は方向を見失う意。上に「みちは」とあるので「まどふ」の方が適切か。異同はないが所載欄の夫木抄・和歌初学抄は「まどひぬ」である。○やましな 山科。京都市東山区山科町。京都から東国へ通じる門戸にあたる。○かさと^りやま 笠取山。山城國の歌枕。滋賀県と京都府の境界をなす山。同山は「山城國」の歌枕だが、山城國の山科に笠とり山があるので、「山科の笠とり山」といったもの。歌では笠を手を取っている意だが、逆に笠を盗る意にも用いられた。「五月雨にかさと^り山はこえゆかじ花いろごころもかへりもぞする」(続詞花集・一三二)。

【所載】夫木抄・八三三三／和歌初学抄・一八四

八九七 むかしみし人をぞいまはわき^すれゆくやつくろ山のふもとばかりに

【異同】ナシ

【現代語訳】昔親しかった人を、今は忘れてゆくのだなあ、あのはるかに遠いやつくろ山の麓ほどにも思い出

しはしない。

【語句】○みし人 男女の間で親しく交際していた人。恋人。夫。妻。○やつくろ山 不明。所載欄の夫木抄は「あぶくま山」。類歌に「むかしみし人をぞいまはよそにきくあさくら山のくもあはるかに」（夫木抄・八七六六）がある。夫木抄の「あさくら山」の例歌では「よそにきく」「よそに見る」など、自分と縁のない遠い山として詠んでいる。それから類推すると、「やつくろ山」も自分よりはるかに遠い存在の山という意か。○ふもとばかりに 麓ほどに。麓ぐらいに。下に「忘れてしまっている」の意がこめられている。

【所載】夫木抄・八七七三

八九八 しるしなきものならなくにあしがらの山のやますげやまずこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】わたしの熱い思いにあの人は応えてくれないものではないが、どういうわけか、私はたえまなく恋しいことだなあ。

【語句】○しるしなき 効き目がない。効果がない。「しるしなき思ひやなぞと葦鶴のねになくまでに逢はずわびしき」（後撰集・六四五）。○ならなくに ……ではないのに。○あしがらの山 足柄山。相模国の歌枕。箱根外輪山の金時山の北にある山。東海道の相模国と駿河国を往来する時必ず越える所。○やますげ 山菅。野生の菅。「あしがらの山のやますげ」は「やまず」を言いだすための序詞。「あしびきの山の山すげやまずのみ見ねば恋しき君にもあるかな」（拾遺集・七八〇）。

【所載】ナシ

八九九 あはたやまこゆともこゆとおもへども猶あふさかははるけかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】粟田山は越えようとすれば越えられると思うけれど、やはりそのさきの逢坂山は遠くてあの人と逢うのはむずかしいことだなあ。

【語句】○あはたやま 粟田山。京都市東山区華頂山から日の岡に至る山の総称。一説に古代は愛宕・宇治両郡の境界につらなる山地の総称。○こゆともこゆ 越えようとすれば越えられる。○あふさか 逢坂。近江国

の歌枕。近江国と山城国の国境にある山。関所がある。地名としての「逢坂」には男女の「逢ふ」意を掛けている。「人しれぬ身は急げども年をへてなどこえがたき逢坂のせき」（後撰集・七三一）。

【所載】夫木抄・八七二八／和歌初学抄・一八五

九〇〇 いなり山すぎのむらだちおしなべてこのもとごとにくるよしもがな

【異同】ナシ

【現代語訳】稲荷山に群生している杉、そのすべての木のもとごとに、あの人が来るという方法があればよいなあ。

【語句】○いなり山 山城国の歌枕。京都市伏見区。山麓、山腹、頂上に伏見稲荷三座がある。○すぎのむらだち 杉の群生していること。稲荷山の杉は「しるしの杉」と言われ、参詣人がこの枝を折って帰り自邸に植え、根付くと願い事が叶うとされた。「稲荷山おほくの年ぞこえにける祈るしるしの杉をたのみて」（蜻蛉日記・一〇三三）。○おしなべて 一様に。○このもとごとに 木の根元ごとに。来る回数が多いことを祈る。「世をいとひこのもとごとにとちちよりてうつぶしぞめのあさのきぬなり」（古今集・一〇六八）。○くるよしもがな 私の所へ来る方法があればよいなあ。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 林〕

九〇一 みやこよりにしにありてふかまどやまけぶりたえせぬこひもするかな

【異同】ナシ

【現代語訳】都から西にあると言う竈山は煙が絶えない、私も絶えることのない恋をすることだよ。

【語句】○かまどやま 竈山。筑前国の歌枕。現在の福岡県太宰府市宝満山のこと。「煙」などの語とともに歌に詠まれることが多かった。古くから柱に書き付けてあった上句に元輔が下句を付けた「春はもえ秋はこがるかまど山／霞も霧も煙とぞ見る」（拾遺集・一一八〇、重之集・二二）という連歌がある。「けぶり」、「恋」の「ひ」に掛けた「火」は、「かまど」の縁語。○たえせぬ 竈山から立つ煙が絶えない意と、恋の思いが絶えない意の両意を掛け、自分の恋情が尽きないことを、竈山の煙が絶えないことによそえた。「いつとてかわが恋や

まむちはやぶるあさまのたけの煙絶ゆとも」(拾遺集・六五六)。当該歌では、「みやこよりにしにありてふかまどやまけぶり」までが「たえせぬ」を導く序。

【所載】夫木抄・八三六五

九〇二 ちはやぶる神がきやまのさかきばにはしぐれにいろもませらざりけり

【異同】ませらざりけり—まさらざりけり(御・桂・大)

【現代語訳】神垣山の神の葉は、時雨に降られても、色も増さなかつたよ。

【語句】○ちはやぶる 「神」もしくは神に関する語にかかる枕詞。○神がきやま 神のいます山。神がき(垣)は、神域を区別するしるしとなる垣。神楽歌の表記に「加美加幾」と見えるので、「神がき」と濁らなかつたとも思われる。当該歌の「神垣山」を伊勢国の神路山とする説(『日本国語大辞典』第二版、和歌文学大系『躬恒集』)もある。○さかきは 神の葉。神は神事に使う常緑樹。ツバキ科のサカキがその代表。「神がきのみむろの山のさかきは神のみまへにしげりあひにけり」(古今集・一〇七四)。○しぐれ 時雨。秋から冬にかけて降るにわか雨。木の葉を紅葉させるものとされた。「しぐれの雨間なくし降れば真木の葉も争ひかねて色付きにけり」(万葉集・二二〇〇(旧二一九六))。○ませらざりけり 他本に「まさらざりけり」とあるのに拠って解釈した。増さなかつたよ。

【所載】後撰集・冬・四五七／躬恒集IV・二六四

【参考】古今六帖に作者名はなく、後撰集でもよみ人知らずとし、躬恒集にはIVのみに見える。常緑の神でも神域にあるので、木々の葉を色づかせる時雨にあたっても紅葉しないと詠んだ歌。

九〇三 雨ふればみかさのやまのこのしたもぬれぬいほりもなしとこそきけ

【異同】ナシ

【現代語訳】雨が降ったので(笠という名を持ち、濡れないはずの)三笠山の木々の下でも、濡れてしまった。濡れずにすむような庵もないと聞かよ。

【語句】○みかさのやま 三笠山。御蓋山とも。大和国の歌枕。奈良市東郊、春日大社の背後の山。「雨」「月」などの語とともに歌に詠まれることが多かった。「しぐれの雨間なくし降れば三笠山木末あまねく色付きにけり」

(万葉集・一五五七(旧一五五三))。○このした 木の下。「みさぶらひ御笠と申せ宮木野の木の下露は雨にまされり」(古今集・一〇九一)。

【所載】 夫木抄・一四三六五

【参考】 笠という名を持ち、濡れずにすんでもよさそうな三笠山の木の下でも濡れてしまうという発想による歌。「雨」と「かさ」は縁語。「さして来と思ひしものを三笠山かひなく雨のもりにけるかな」(後撰集・一〇二九)。上三句は「ぬれ」を導く序詞。「あられふる交野の御野のかりころも濡れぬ宿かす人しなれば」(詞花集・一五二・藤原長能)という例のように、上句からは「濡れてしまった」の意で続くか。

九〇四 つのくにのいくたのやまのいくたびかわがいたづらにゆきかへるらむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 津の国の生田の山、(その「いく」ではないけれど、)幾たび、私はむなしく行ってはまた帰るのだろうか。

【語句】 ○つのに 津の国。撰津国。現在の大阪府西北部と兵庫県東南部。○いくた 生田。撰津国の歌枕。現在の兵庫県神戸市中央区の辺り。「生田の森」「生田の池」などがよく詠まれた。二句目までは「いくたび」を導く序。「津の国の生田の池のいくたびかつらき心を我に見すらん」(拾遺集・八八四)。

【所載】 ナシ

九〇五 人ごころあちのやまになるときぞちぎりこしちのみちはくやしき

【異同】 ナシ

【現代語訳】 あの人の心が、(有乳の山ではないけれど)私から離れてしまった今こそ、契り続けて通ったこれまでのごころは、悔やまれることだ。

【語句】 ○あちのやま 有乳(愛発)山。越前国の歌枕。現在の福井県敦賀市の南部で滋賀県との境界に近い山。「雪」や「越路」とともに歌に詠まれることが多かった。当該歌では、「離(あ)る」を掛ける。「うち頼む人の心はあち山越路くやしきたびにもあるかな」(金葉集・五九六)。○こしち 越路。北陸道。現在の福井・石川・富山・新潟県。「こし」は、「越」と「来し」とを掛ける。

【所載】 夫木抄・八七二〇

〔以上五首担当 長戸〕

九〇六 つらしとてもろはの山にかくるともわれやまびこになりてたづねむ

【異同】 なりてたづねむ―なりてたつらん（大）

【現代語訳】 私のことを薄情だと言って葉のたくさん繁る「もろ葉の山」に隠れたとしても、私は山彦になってあなたを尋ねるつもりです。

【語句】 ○つらし 情がない、薄情であるの意。ここでは、相手がこちらのことを「つらし」と思っている。○もろはの山 未詳。所載欄の夫木抄では国名を「山城」とし、歌枕名寄では「未勘国」とする。「もろは」は「諸葉」すなわち多くの葉の意。○やまびこになりてたづねむ やまびこになってあなたを尋ねよう。「やまびこ」は、山中などで起こる音の反響を擬人化した言い方。

【所載】 夫木抄・八九五五

九〇七 しもつけやふたごの山のふたごゝろありける人をたのみけるかな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 下野のふたごの山ならぬ、ふたご、浮気な心を持っていた人を頼りにしてしまったことだなあ。

【語句】 ○しもつけやふたごの山の 下野国の「ふたご山」。現在の栃木県日光市足尾町と群馬県みどり市東町沢入の境にある二子山か。「ふたご山」ともにこえねどますかがみそこなる影をたぐへてぞやる」（後撰集・一三〇七）。詞書に「下野にまかりける女に、鏡にそへてつかはしける」とある。初・二句は「ふたごゝろ」を導く序詞。○ふたごゝろ あだし心。浮気心。

【所載】 夫木抄・八六四五

九〇八 われをのみいはせのやまにこるなげきくやしともえぬひぞなかりける

【異同】 ナシ

【現代語訳】私だけがあれこれと言われ、まるで岩瀬の山の木を切った後で投げ木を集めるように嘆いてばかりで、「残念なことだ」と物思いの火に燃えない日のないことであるよ。

【語句】○いはせのやま 大和国、竜田川の東側にあり対岸の三室山に対する岩瀬の森付近の山か。能因歌枕では撰津国とする。「いはせ山谷のした水うちしのび人のみぬまは流れてぞふる」(後撰集・五五七)。ここでは「言は」を掛ける。○こるなげき 木を「伐(こ)る」に、寄り集まる意の「凝る」を、「投げ木」に「嘆き」を掛ける。「なげきこる山としたかくなりぬればつらゆのみぞまつつかれける」(古今集・一〇五六)。○もえぬひぞなかりける 苦しい思いをしない日はない。「ひ」は「日」と「火」を掛ける。「なげき」「もえ」「ひ」は縁語。

【所載】ナシ

九〇九 ふじのねをたかみかしこみあま雲のいさりびばかりたなびくものを あか人

【異同】ナシ

【現代語訳】富士の嶺が高く畏れ多くて、天雲も漁火のようにほのかにたなびいていることよ。

【語句】○いさりびばかり 「いさりび」を、「ほのか」を導く序として用いる用例のあることから、漁火のようにほのかに、の意で解す。「いさり火のよるほのかにかくしつ有りへばこひのしたにけぬべし」(後撰集・六八二)。なお所載欄の万葉集での漢字表記「伊去羽斤」の「去」を「さり」と読んだか。

【所載】万葉集・三二四(旧三二二) 布土能嶺乎 高見恐見 天雲毛 伊去羽斤 田菜引物緒 フジノネヲタカミカシコミアマクモイユキハバカリタナビクモノヲ ふじのねをたかみかしこみあまもいゆきはばかりたなびくものを

【参考】作者名「あか人」とあるが、所載欄の万葉集では高橋虫麻呂と伝える。

九一〇 なつてしもいろかはらねばときはなる山には秋もしられざりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】必ずしもすべての色が変わるわけではないから、この常緑の山では秋の訪れも知られないのだよ。

【語句】○なべてしも 「なべて」は、総じて、すべて、の意。「梅の花それとも見えずひさかたのあまぎる雪

のなべて降れば」(古今集・三三四)。「しも」は、下に打消を伴い部分否定。必ずしもすべての色が変わるわけではない。○いろかはらねば 「ねば」は打消「ず」の已然形「ね」に接続助詞「ば」の付いたもの。「天の川浅瀬しらなみたどりつつ渡りはてねば明けぞしにける」(古今集・一七七)。

【所載】新続古今集・秋下・五六六／貫之集Ⅰ・五三

(以上五首担当 青木)

九一一 かくばかりうつろふ色のこければやにしたつたのやまといふらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】これほどまでに紅葉する色が濃いので、錦に見立てて、錦を裁つ、竜田山というのであろうか。

【語句】○うつろふ色の 「うつろふ」は紅葉する意。○こければや 濃いので……か。○にしたつたの このままでは意不明。後掲の後撰集などには「錦たつたの」とあり、「にしに」は「にしき」の誤写である。現代語訳はこれによって訳した。「錦裁つ」に「竜田の山」を掛ける。

【所載】後撰集・秋下・三八二／友則集・二六

【参考】後撰集には、

たつた山をこゆとて

とものり

かくばかりもみづる色のこければや錦たつたの山といふらんとあり、歌本文は友則集も同じ。

九一二 みてもおもひみずてもおもひおほかたはわが身ひとつやものおもふやま

【異同】ナシ

【現代語訳】逢つてもつらく思い、逢わなくてもつらく思い、おおよそ、わが身ひとつがもの思う山なのかしら。

【語句】○みてもおもひ 逢つた場合でも、やがては別れなくてはならず、そのことがつらい、の意か。○みずても 逢わなくても。○ものおもふやま 途方に暮れている自分自身をたどえているのであろう。夫木抄・八九六〇に「物おもひの山、陸奥」とあり、「見てもおもふ見ぬにも思ふたまはるか心ひとつにものおもひの山」という、よみ人知らずの歌を挙げる。

【所載】万代集・二二六—

九一三 くらぶ山くらしとなにはたてねどもいもがりといはゞよるもこえなん

【異同】いもかりといはゞ—いもかりといはく(御)

【現代語訳】くらぶ山は、その名のように暗いと評判にはなっているけれども、恋人のもとにというのでしたら、夜だつて越えて行つてしまふでしょう。

【語句】○くらぶ山 京都鞍馬山の古名といわれるが、はつきりしない。「秋の夜の月の光しあかければくらぶの山も越えぬべらなり」(古今集・一九五)などのように、「暗し」あるいは「比ぶ」などととも用いられることが多い。○なにはたてれども 名には立っているけれども。評判にはなっているけれども。○いもがり いも(妹)のもとに。「いも」は妻や恋人、あるいは姉妹など、男が女を親しんでいる語。

【所載】ナシ

九一四 しとみ山おろしのかぜのはやければかぜにはつねになきてこそふれ

【異同】ナシ

【現代語訳】山から吹きおろす風が激しいので、風にはいつも泣いて過こしていることです。

【語句】○しとみ山 夫木抄に「しとみ山、紀伊」とあり、当該歌とともに俊頼の「しとみ山風はおろせどほととぎす声はこもらぬ物にぞありける」を挙げる。部は上下に開閉するものなので、「おろす」を導くための、いわば枕詞的用法か。○はやければ 激しいので。参考欄参照。○なきてこそふれ 「ふれ」は下二段活用動詞「経(ふ)」の已然形で、泣いて過こしていることだ。

【所載】夫木抄・八九一—

【参考】相手のつれなき、すげなきを恨んでいる恋の歌か。千載集・恋二・七〇八に見える源俊頼の有名な、うかりける人をはつせの山おろしよはげしかれとは祈らぬものを
などが参考になろう。

九一五 わがこひはおほえのやまのあきかぜはふきてしそらのこゑにぞあ□る

【異同】あきかせは—あきかせの(大)

【現代語訳】私の恋は、大江山の秋風が吹きすぎた、空の声のようなものでした。ただむなしく吹いては消えていくばかりです。

【語句】○おほえのやま 百人一首で有名な「大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立」(金葉集・五五〇)の場合もそうだが、京都市西京区大枝にある「大江山」のことか、福知山市北方にある酒吞童子で有名な「大江山」のことか、いずれとも決しがたい。また、なぜ「わが恋」を詠む歌に「大江の山」が関係するのか、それもわかりにくい。○あきかぜは 初句に「わがこひは」とあり、また三句で「あきかぜは」とあるのは不可解。異同欄に見える「あきかぜの」でも落ち着かないが、一応「ふきてし」の主語と認め、こちらを採用した。「秋風」にあるいは「飽き」をひびかせるか。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

九一六 わかれてはいくらのやまをこえぬればあふことかたくなりもてくらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】お別れして、生倉の山を越えてしまったので、お会いすることも次第に難しくなってくるでしょう。
【語句】○いくらのやま 「いくら」は長門国豊浦郡の生倉。現在の下関市西部の伊倉。数量を表す「幾ら」と掛けて用いられることが多いが、ここでは「いく」に「別れて」行く」を掛ける。○あふことかたたく 逢うことが難しく、「あふことかたの」に今はなりぬれば思ふがりのみゆくにやあるらん(金葉集・五〇二)。○なりもてくらむ 『新編国歌大観』にこの一例のみ。「なりもてく」は、「次第に……となってくる」意。

【所載】ナシ

九一七 おほはらやをしほの山もけふしこそ神世のこともおもひいづらめ
なりひら

【異同】ナシ

【現代語訳】大原の小塩山も今日こそ、神代のことを思い出していることでしょう。

【語句】○おほはらや 「大原の」「大原にある」の意。大原は京都市西京区大原野町。奈良の春日大社を勧請した藤原氏の氏神である大原野神社がある。○をしほの山 小塩山。大原野神社の背後にある山。○けふしこそ きょうという日こそ。「し」は強意。所載欄の他文献では古今集をはじめほとんどが「けふこそは」。○神世のこと 神代のこと。大原野神社の祭神であり、藤原氏の祖神である天兒屋根命（あめのこやねのみこと）が、皇祖瓊々杵命（にぎのみこと）の降臨の先導を務めたことを指す。

【所載】古今集・雑上・八七一／業平集Ⅰ・一／業平集Ⅱ・三五／業平集Ⅲ・一／業平集Ⅳ・二五／和歌初学抄・一七五／六百番陳状・四四、一四四／古来風体抄・二八六／井蛙抄・三八四／世継物語・六四／伊勢物語・一三九／大和物語・二七〇

【参考】作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。古今集などによると、二条后（藤原高子）が大原野神社に参詣した折に詠まれた歌。伊勢物語、大和物語では「神世のこと」に業平と高子の昔の恋愛関係もこめていることになっている。

九一八 秋のよの月のひかりしきよければはこねの山のうちさへぞてる

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の夜の月の光が清らかで美しいので、箱の名の付く箱根の山の内側まで照り映え、輝いています。

【語句】○はこねの山 神奈川県と静岡県のある山。「箱」を掛ける。○うち 内側。箱の内側。○てる 美しく輝く。照り映える。「あめふればかさとり山のもみちばはゆきかふ人のそでさへぞてる」（古今集・二六三）。

【所載】ナシ

九一九 もみぢせぬときはの山はふくかぜのおとにや秋をきゝわたるらん
きのよしもち

【異同】ナシ

【現代語訳】古今六帖・第一帖「あきの風」四一九番既出。

九二〇 あづさゆみいるさの山を秋ぎりのあたるごとくや色まさるらん
むねゆきのあそん

【異同】 いるさの山を―いるさの山は（大）

【現代語訳】 入佐の山を秋霧が当たる度に、紅葉の色が濃くなるのでしようか。

【語句】 ○あづさゆみ 弓の縁で「射る」と同音の「入る」にかかる枕詞。○いるさの山を 「入佐山」は但馬国の歌枕。「いる」に「射る」を掛ける。所載欄の後撰集では「いるさの山は」、宗于集では「いるさの山の」。

○あたる ここでは「霧が」かかる「意」。「あたる」「射る」は「弓」の縁語。○色まさる 色が濃くなる。「春深くなりぬる時の野べみれば草の緑も色まさりけり」（古今六帖・一一三六）。

【所載】 後撰集・秋下・三七九／宗于集・二三

【参考】 作者名「むねゆきのあそん」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 三浦〕

九二一 しらつゆはうつしなりけりみづとりのあをばのやまの色づくみれば
みはらのおほきみ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 白露は、移し染めの染料だったのだな。青葉の山が色付くのを見ると。

【語句】 ○しらつゆ 白露。○うつし 「うつし」は、草木の花の汁などを含ませた紙を生地の上に置いて染める「移し染め」の染料。「移し紙」「移し花」ともいう。○みづとりの 鴨の羽の色が青いところから「青羽」と同音の「青葉」にかかる枕詞。

【所載】 古今六帖・第一帖「八月」一六八番既出

【参考】 古今六帖・一六八番の所載欄に掲げた万葉集・一五四七（旧一五四二）と作者名が一致する。

九二二 あめふらばきむとおもひしかさの山人になきせそぬれはぬるとも
いその神のおとまる

【異同】ナシ

【現代語訳】雨が降ったら私が着ようと思っていた笠の山よ、その笠を他人には着せてくれるな。たとえびつより濡れてしまおうとしても。

【語句】○あめふらば 雨が降ったら。「ふら」「ふる」の未然形 + 「ば」は仮定条件を示す。○きむとおもひし 着ようと思っていた。「し」は過去。笠は「きる」ものであった。「あて宮見給ひて、糞虫つける花折らせ給ひて、それが下に笠著せたる物ども立てて」(宇津保物語・梅の花笠)。○かさの山 奈良市の三笠山とする説と、桜井市の笠山とする説がある。いずれにせよ、「笠」の名を持つ山に対して、遊戯的に呼びかけた歌。○ぬれはぬるとも ぬれにぬれたとしても。助詞「とも」は不確定な判断で終止する。

【所載】万葉集・三七七(旧三七四) 雨零者 将蓋跡念有 笠乃山 人尔莫令盖 霑者漬跡裳 アメフレバササムトオモヘルカサノヤマヒトニササスナヌレハヒツトモ あめふらばきむとおもへるかさのやまひとになきせそぬれはひつとも

【参考】作者名「いその神のおとまろ」は所載欄の万葉集に「石上乙磨朝臣」とあり、一致する。

山どり

九二二三 雲のゐるとをやまどりのよそにてもありとしきけばわびつゝぞぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】雲のかかる遠い山の山鳥がそうであるように、あなたがよそにいつも無事していると聞くので、つらく思いながらも独り寝をします。

【語句】◎山どり キジ科の鳥。日本固有種で山地にすむ。オスの尾はとても長い。俊頼髓脳に「山鳥といふ鳥の、雌、雄はあれど、夜になれば、山の尾をへだてて、ひとつ所には臥さぬものなれば、夜の長く、たへがたく思ふらむ」とあるように雌雄が峰を隔てて別々に寝るとされ、独り寝の喩えに用いられた。○雲のゐる 雲のかかる。「とをやまどりの」までが「よそ」を導く序詞。「雲のゐる」という表現は、当該歌と、深窓秘抄で壬生忠見作とする「雲のゐる越のしら山おいにけりおほくの年の雪つもりつ」(六一)が早い例。○とをやまどりとほやまどり。遠山にいる山鳥。○ありとしきけば 無事していると聞くので。○わびつゝぞぬる かえすがえすつらく思いながらも独り寝る。「相坂の嵐のかぜはさむけれど行方しらねば侘びつゝぞ寝る」(古今集・九八八)。

【所載】新古今集・恋五・一三七

九二四 あしひきのやまどりのをのしだりをのながくしよをわがひとりぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】山鳥の尾のしだれた尾のように長い長い夜を、私一人で寝ることだ。

【語句】○あしひきの 「山」にかかる枕詞。○しだりを しだれた尾。上三句は「ながくし」を導く序詞。○ながくしよ 長々し夜。山鳥の尾の「長々し」さに、ひとり寝の夜の「長々し」さをかける。○わがひとりぬる 私一人で寝ることだ。所載欄の諸文献は万葉集同様「ひとりかもねむ」とする。

【所載】拾遺集・恋三・七七八／万葉集・二八一三(旧二八〇二) 足日木乃 山鳥之尾乃 四垂尾乃 長永夜乎 一鴨将宿 アシヒキノヤマドリノヲシダリヲノナガナガシヨヲヒトリカモネム あしひきのやまどりのをのしだりをのながながしよをひとりかもねむ／和漢朗詠集・二三八／人麿集I・二〇七／人麿集II・三三三／俊頼髓脳・二六二／俊成三十六人歌合・二／時代不同歌合・三／三十人撰・八／三十六人撰・八／秀歌大体・九三／百人秀歌・三／百人一首・三／綺語抄・六一〇／和歌童蒙抄・七八三／奥儀抄・三五〇／柿本人麻呂勘文・四六／袖中抄・五一五／和歌色葉・一二〇／近代秀歌・九一／詠歌大概・九七

九二五 秋風のふきよるごとにやまどりのひとりしぬればものぞかなしき

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風の吹き寄る、その夜毎に、山鳥のように独り寝をするとももの悲しくなることだ。

【語句】○ふきよるごとに 秋風の「吹き寄る」に「夜」を掛ける。○ものぞかなしき もの悲しくなる。

【所載】夫木抄・一二七三〇

〔以上五首担当 杉本〕

九二六 ゆふされば君をまつちやまどりのなくくぬるをたちもきかなん

【異同】君をまつちきみをまつちの(御・桂・大)

【現代語訳】夕方になると、あなたを待って待乳山の山鳥のように鳴きながら寝るのを、耳をそばだてて聞いて

ほしい。

【語句】○ゆふされば 夕方になると。「夕去れば君きますやと待ちし夜の名こりぞ今もいねがてにする」(万葉集・二五九三(旧二五八八))。○まつちやまどりの 待乳山(真土山)。御所本以下の「まつちのやまどりの」に拠って解す。「まつちのやま」は、大和国の歌枕。奈良県五條市と和歌山県橋本市の境にある。「いであが駒早くゆきこそまつち山待つらむ妹を去きてはや見む」(万葉集・三一六八(旧三一五四))など、待つと関連して詠まれることが多い。「まつちのやま」の「やまどり」の意。○なくくぬる 泣きながら寝る。「相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆききをなくくも見め」(古今集・七四)。○たちもきかなん 耳をそばだてて聞いてほしい。「なん」(なむ)は詠えの動詞。

【所載】夫木抄・八四五七

九二七 はなのちることやかなしきかすみたつたつたの山のやまどりのこゑ

ふぢはらのち風

【異同】ナシ

【現代語訳】花の散ることが悲しくて鳴いているのだろうか。春霞の立つ、竜田の山の山鳥の声が聞こえてくるのは。

【語句】○たつたの山の 「かすみ」が「た(立)つ」により「竜田山」を導いているが、竜田山は勿論、紅葉の名所なので、霞と関連づけた使用例は少ない。但し、万葉集に、「朝霞止まずたなびく竜田山船出せむ日は吾恋ひめかも」(二一八五(旧二一八一))がある。

【所載】古今集・春下・一〇八／新撰和歌・一〇九／家持集Ⅰ・六六／家持集Ⅱ・三〇六／興風集Ⅰ・七一

【参考】古今集ではこの歌は藤原後蔭の作とする。

九二八 あしひきの山のたえまにつまこふとしかなんきまさるきこゑきこゆなり

猿

【異同】しかなんきまさる—しかなんきまさる(御・桂・大)

【現代語訳】(あしひきの) 山々の途切れているところから、相手を恋うと、鹿がさかんに鳴いている声が聞こ

えてくることだ。

【語句】◎猿 霊長目のサル。歌語では「ましら」。古来身近な動物で、厩の守り神として飼われたり（厩猿信仰）したが、和歌ではもっぱら鳴き声の哀切な響きを詠む。これは「巴東三峽猿鳴悲し 猿鳴三声涙衣を霑（うるお）す」（芸文類聚・巻九五）などの漢詩文が大きく影響している。○あしひきの 山にかかる枕詞。○山のたえま 山の途切れているところ。切れ目。「たえま」（絶え間）との組み合わせとして、雲・霧・糸・花・松などとの組み合わせで詠まれているが、三代集前後に「山の絶え間」の表現は見あたらない。○しかなきまさる そのようにどんどん強く鳴いている。「鹿」と、「そのように」の意の「しか」とが掛けられ、「まさる」に「猿」がこめられており、この歌が猿の項にあるのは、この物名的な位置づけによる。

【所載】和歌童蒙抄・八二一

九二九 わびしらにましらなゝきそあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ みつね

【異同】けふにやはあらぬ―けふにやはあらぬ（大）

【現代語訳】そんなに心細げに猿よ、鳴くな。この峽のある山が、（法皇をお迎えするという）甲斐のある今日ではないか。

【語句】○わびしらに 心細げに。○ましら 猿。九二八番歌「猿」の項参照。○かひ 「峽（かひ）」と「甲斐」とを掛ける。「峽」は山と山とに挟まれた所。所載欄の古今集には「法皇西川におはしましたりける日、猿山のかひに叫ぶといふことを題にて詠ませたまうける」とあり、当該歌は延喜七（九〇七）年九月十一日、宇多法皇の大堰川御幸の際、題を九つ設けたうちの「猿、峽になく」題で詠まれたものである。御幸がある「甲斐」と「峽」を掛けている。○けふにやはあらぬ 今日ではないのか、まさに今日であるよ。「やは」は反語。

【所載】古今集・雑体・一〇六七／和漢朗詠集・四六一／躬恒集Ⅰ・四四／躬恒集Ⅲ・二〇五／躬恒集Ⅳ・二四／躬恒集Ⅴ・六五

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

九三〇 こゝろあらばみたびふたゝびなくこゑをものおもふ人にきかせざるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】心があるのならば、何度も何度も鳴く猿の声を、物思いに耽っている人にどうして聞かせないのだらう。

【語句】○こゝろあらば 物事の風流・雅を解する心を持つているならば。動物や植物に人間と同じく風流を解する心があるなら、と用いる。「ふかくさののべの桜し心あらばことしばかりはすみぞめにさけ」（古今集・八三二）。○みたびふたゝび こゝろでは、何度も何度も、の意。「ひととせにふたたび」など、数を重ねる時は、一・二が多いが、こゝろでは、三度二度とする。○なくこゑを なく猿の声を。○きかせざるらん 所載欄に掲げた躬恒集などから、「きかせざるらん」（きかせないでくれ）の誤写と解した。

【所載】躬恒集Ⅰ・四五／躬恒集Ⅲ・二〇六／躬恒集Ⅳ・二五、四一二／躬恒集Ⅴ・六六

【参考】九二九番歌と同時の詠であることが所載欄の躬恒集によってわかる。

〔以上五首担当 杉本〕

九三二 ゆふさればおぐらのやまになくしかのこよひはなかずいねにけらしも
しか

【異同】ナシ

【現代語訳】夕方になると小倉山に鳴く鹿のいつもの声が今宵は聞こえない、寝てしまったらしい。

【語句】◎しか 鹿。山中で雌鹿を求めて牡鹿の鳴く哀切な声を、上代、平安時代の人々によく聞いていた。萩の花を踏みしだき、萩を鹿の妻とも歌う。主として秋の題材。○ゆふされば 夕方になると。○けらし「けるらし」の約。○おぐらのやま をぐらのやま。奈良県桜井市今井谷のあたり。「倉 村上方峰名小倉」(『大和志』)。「岡本宮に近い多武峰の端山」(『大和志考』)。

【所載】続古今集・秋下・四四四／万葉集・一五一五(旧一五一二) 暮去者 小倉乃 山尔鳴鹿者 今夜波不鳴

寐宿家良思母 ユフサレバヲグラノヤマニナクシカノコヨヒハナカズイネニケラシモ ゆふさればをぐらのや

まになくしかはこよひはなかずいねにけらしも、一六六八(旧一六六四) 暮去者 小椋山尔 臥鹿乃 今夜者不鳴 寐家良霜 ユフサレバヲグラノヤマニフスシカノコヨヒハナカズイネニケラシモ ゆふさればをぐらのやまにふすしかしこよひはなかずいねにけらしも／夫木抄・四五八六／古来風体抄・九一／井蛙抄・三一四

九三二 夏のゆくをじかのつゝつかのまもみねばこひしき君にもあるかな
野 人まろ

【異同】ナシ

【現代語訳】ほんのわずかのまも会えないと恋しくてならないあなたなのだなあ。

【語句】○夏のゆくをじかのつゝ 夏野行く雄鹿の角の。夏の鹿は角が生え代わって、新しい角は短い。初句・二句は「つかのま」を導く序。○つかのま 少しの間。「つか」は束。古代の長さの単位。一握りの幅の長さ。○みねばこひしき君にもあるかな 会えないと恋しいあなたであることよ。所載欄の万葉集では「いもがこころをわすれておもへや」とある。

【所載】古今六帖・第二帖「なつ」一一四一／新古今集・恋五・一三七四／万葉集・五〇五（旧五〇二）夏野去小牡鹿之角乃 束間毛 妹之心乎 忘而念哉 ナツノユクヲシカノツノツカノマモイモガココロヲワスレテオモヘヤ なつのゆくをしかのつゝつかのまもいもがこころをわすれておもへや／人麿集Ⅰ・七／人麿集Ⅱ・三四三／人麿集Ⅲ・四四九／人麿集解題『古筆学大成17』白鶴美術館蔵『手鏡』伝為家筆切／綺語抄・一三七／柿本人麻呂勘文・七三

【参考】作者名「人まろ」は万葉集に一致する。しかし、下句の相違を重視すれば同一歌とはいえないかもしれない。

九三三 なくしかのこゑうらぶれはぬときはいまは秋とやいはむはぎのはなさく

【異同】ナシ

【現代語訳】鳴く鹿の声がさびしげに変わった。時は今秋となったと言おうか。萩の花の咲く。

【語句】○うらぶれぬ 動詞「うらぶる」は心の拠り所をなくして力を落とす意。「雁来れば萩はちりぬとさをしかの鳴くなる声もうらぶれにけり」（古今六帖・九四五）。「ぬ」は完了の助動詞。○はぎのはなさく 秋の時節を萩の花の咲くのを見て知る。「をとめらにゆきあひの早稲を刈るときになりけらしも萩の花咲く」（万葉集・二二二）（旧二二一七）、「垣根なる萩の花咲く秋風の吹くなるなへに雁鳴き渡る」（人麿集・一一〇）。第五句は第四句と倒置の関係ではなく、あえていえば併置、余韻がある。

【所載】ナシ

【参考】上三句が全く等しい歌がある（家持集Ⅱ・二二二）。下句は「あきのなかばになりぬべらなり」。

九三四 いもにわがうらごひをればあし引の山したとよみしかぞなくなる

【異同】ナシ

【現代語訳】いとしい人の恋しくてならない折も折、山を響かせ牡鹿が（雌鹿を求め）鳴いている声が聞こえる。

【語句】○うらごひをれば 「うらごひ」は心に秘めて恋しく思う。心の中で恋しく思う。「わがせこにうらごひをればあまのがはよふねこぐなる梶の音聞こゆ」（万葉集・二〇一九（旧二〇一五））。○とよみ 響き渡って、鳴り響いて。○なくなる 鳴いているのが聞こえる。「なる」は伝聞・推定の助動詞「なり」の連体形。

【所載】ナシ

【参考】「あきはぎにうらごひをればあしびきのやましたとよみしかのなくらむ」という類似した歌が、和歌董蒙抄・八一四、奥儀抄・四六九、和歌色葉・二四五にある。

九三五 たかやまのみねゆくしかのともをおほみそでふりこぬをわするとおもふな

【異同】ナシ

【現代語訳】連れ立つ人が多いので（目立つわけにゆかず）袖を振って来なかったのを、お前を嫌いになったからだと勘違いしないでくれ。

【語句】○たかやまのみねゆくしかの 高山の峰行く鹿の。初句・二句は群れて動く鹿を表し、「ともをおほみ」を導く序。口語訳には入れない。○ともをおほみ 友を多み。「おほみ」は多いので。○そでふりこぬ 袖を振るといふ動作をせずに来てしまったこと。○わする 忘れる。恋人の間では「訪れない、疎遠になったこと」を「忘る」という。

【所載】万葉集・二四九八（旧二四九三） 高山 峰行完 友衆 袖不振来 忘念勿 タカヤマノミネユクシシノ（シカノ）トモヲオホミノデフリコヌヲワスレオモフナ たかやまのみねゆくししのともをおほみそでふらずきぬわするとおもふな／夫木抄・四五九七

〔以上五首担当 平野〕

九三六 さをしかのつまをしのぶとなくこゑのいたらんかぎりなびけはぎ原

【異同】ナシ

【現代語訳】雄鹿が妻を恋い慕うと言つて鳴く声が届く果てまで、一面に靡け、萩原よ。

【語句】○さをしか 雄の鹿。「さ」は接頭語。○つまをしのぶと 妻を恋い慕うとして。「しのぶ」は、ひそかに恋い慕う意。格助詞「と」は、……と思つて、……と言つて、の意。「妻をしのぶ」鹿の声は、「よもすがらしづくの山にうらぶれて妻をしのぶるさをしかの声」（夫木抄・四六〇八・顕季）と悲しみに沈んでいるように歌われている。なお、所載欄の万葉集・綺語抄には「つまととのふと」（妻たちを呼びよせよう）とあり、その表現なら、雄鹿に呼びよせられ複数の雌鹿が並ぶ習性があるので、「靡け萩原」の意がよくとおる。○なびけはぎ原 「はぎ原」は、萩が一面に生いしげる原。このように植物が繁つた「原」に向かつて「靡け」と命ずる歌に、「妹らがりわが通ひぢのしのすすきわれし通はばなびけ篠原」（万葉集・一一二五（旧一一二二））がある。

【所載】万葉集・二二四六（旧二二四二）左男壯鹿之 妻整登 鳴音之 将至極 靡芽子原 サヲシカノツマトトノフトナクコエノイタラムカギリナビケハギハラ さをしかのつまととのふとなくこゑのいたらむきはみなびけはぎはら／隆源口伝・五三／綺語抄・六四二

九三七 あさみちのふるみちわけてなくしかのたちわかれにしつまや恋しき

【異同】ナシ

【現代語訳】朝の道の、通いなれた古い道をかき分けながら鳴いている鹿のように、（私がうつうつとしているのは）別れてきた妻が恋しいのであろうか。

【語句】○あさみちの 朝道の。「うちはへてあな風さむの冬の夜やま白に霜のおける朝道」（人丸集・二三六）。○わけて 押し分けて。道を開いて進む様。「秋萩の咲きたる野辺はさを鹿ぞ露を分けつつ妻とひしける」（万葉集・二二五七（旧二二五三））。○なくしかの 格助詞「の」は、……のように、……のごとく、の意。「恋しき」にかかる。所載欄の夫木抄に「なくしかは」。○つまやこひしき 妻が恋しいのであろうか。鹿が鳴いている声に、わが心を重ねて詠んだ。「さを鹿の朝立つ野辺の秋萩に玉と見るまで置ける白露」（万葉集・一六〇二（旧一五九八））では、「白露」にたった今妻と別れてきた鹿の涙を暗示している。なお 所載欄の夫木抄には、

結句「人や恋しき」とある。

【所載】夫木抄・四八五四

九三八 秋やまにつまなきしかのとしをへてなぞやいきてのかひよとぞなく
伊勢 わがこひの

【異同】ナシ

【現代語訳】秋山で妻のいない鹿が何年もたって、「どうしてこうなのか。生きている甲斐はこんなものか」とカヒヨと鳴いている。

【語句】○なぞやいきてのかひよとぞなく 「なぞや」は、「どうしてこうなのか」と自問する意。「かひよ」は、鹿の鳴き声「カヒヨ」に「甲斐よ」（値打ちがあるよ）を掛ける。所載欄の古今集「誹諧歌」にあり、下句は、「なぞわが恋のかひよとぞ鳴く」とある。

【所載】古今集・雑体・一〇三四

【参考】作者「伊勢」とあるが、伊勢集には見えない。所載欄の古今集では作者名「紀淑人」。

九三九 春のゝのしげきくさばのつまごひになぞわがこひのかひよとぞなく
さだふ

【異同】春のゝの―春の野（大）

【現代語訳】春の野の茂った草葉の中で妻を恋慕って……。……「どうしてこうなのか。生きている甲斐はこんなものか」とカヒヨと鳴いている。

【語句】○さだふ 作者名「さだふ」は、「さだふん（む）」で平定文（「貞文」とも）のこと。古今集の一〇三三番歌に、定文の作として、「春の野のしげき草葉の妻恋ひにとびたつ雉のほろるとぞなく」と、当該歌と上三句がまったく同じ歌がある。○しげきくさばのつまごひに 繁った草葉の中で、妻を恋い求めて。○なぞわがこひのかひよとぞなく 春の季節に妻恋しくて鹿の鳴くのは不審。『古今和歌六帖標注』に、「此うたはきじのうた也。こゝに鹿の歌とせるはわろし。又下の句はまたくまへの歌の下の句をふとうつしあやまれりとみゆ」と指摘するように、古今集の定文詠の一〇三三番歌の上句と、一〇三四番歌「秋の野に妻なき鹿の……」（古今

六帖では九三八番歌)の下旬と、雉と鹿を詠んだ連なる二首が誤って合成されて一首となったものであろう。何らかの理由から、古今六帖ではこれを鹿の歌と見てここに置いたと思われる。

【所載】ナシ

【参考】作者名「平正文」は、語句欄に説明したように、古今集では上三句のみの作者。

九四〇 このころの秋のあさけにきりがくれつまよぶしかのおとのさびしさ

【異同】ナシ

【現代語訳】この頃の秋の明け方時分に、たちこめた霧の中姿を見せずに、妻を呼んで鳴く鹿の声がなんとさびしいことよ。

【語句】○あさけ 「あさあけ」(朝明け)の約。明け方。「水ぐきの岡のやかたに妹とあれと寝てのあさけの霜の降りほも」(古今集・一〇七二)。○きりがくれ 「霧隠る」は、自動詞・下二段活用で、霧に姿が隠れること。○つまよぶしかの 秋の夜明けに鹿が鳴く類歌に、「このころの朝けに聞けばあしひきの山呼びとよめさ雄鹿鳴くも」(万葉集・一六〇七(旧一六〇三))。○おとのさびしさ 鹿の鳴き声を「音」と表現する例歌は少ないが、「秋萩をしがらみふせて鳴く鹿の目には見えずとおとのさやけさ」(古今集・二二七)などがある。

【所載】続古今集・秋下・四四五/万葉集・二二四五(旧二二四) 比日之 秋朝開尔 霧隠 妻呼雄鹿之音之亮左 コノコロノアキノアサケニキリガクレツマヨブシカノオトノハルケサ このころのあきのあさけにきりごもりつまよぶしかのこゑのさやけさ/人麿集Ⅱ・一一四/綺語抄・六四〇

【参考】所載欄の続古今集に作者名「人丸」とあり、人麿集にも見えるが、万葉集には作者名なし。

〔以上五首担当 斎藤・加藤〕

九四一 たれきけとこゑたかさこのさをしかのながしよをなきあかすらむ
とものり

【異同】ナシ

【現代語訳】誰に聞けと行って、声高く、小高い山にいる牡鹿がこの長すぎる夜を鳴き明かしているのか。

【語句】○こゑたかさい。「声が高い」の「たか」と、「高砂」の「高」を掛ける。当該歌の「高砂」は固有名詞ではなく、普通名詞で、小高い丘、山の意。「高砂」と「鹿」の取り合わせは、「秋萩の花咲きにけり高砂の尾上の鹿は今や鳴くらむ」（古今集・二二八）など。「声高砂」の例としては、「さを鹿の声高砂に聞こえしは妻なき時の音（ね）にこそ有りけれ」（後撰集・一〇五七）がある。○ながくしよ 長々し夜。きわめて長い夜。「葦引の山鳥の尾のしだり尾のながながし夜を一人かもねむ」（拾遺集・七七八、万葉集・二八一三（旧二八〇三）の異伝歌）の影響が見られる語か。

【所載】後撰集・秋下・三七三／続古今集・一九一八（異本歌・巻第五、四四九の次、紀友則）／友則集・一九
【参考】作者名は「ともりの」となっているが、後撰集ではよみ人知らず、続古今集（異本歌）では紀友則作となっており、友則集にも見える歌である。

九四二 ぬれぎぬをほすさをしかのこゑきけばいつかひよとぞなきわたりける

【異同】ナシ

【現代語訳】濡れた衣を干す竿、さ牡鹿の声を聞くと、いつか「ひよ（干よ、乾け）」といって鳴き続けていることだ、それはあらぬ疑いがいつか晴れよといって泣き続けているかのようだ。

【語句】○ぬれぎぬをほす 濡れ衣を干す。「さを（竿）」にかかる序詞。「ぬれぎぬ」は、「濡れた衣」と「無実の罪、あらぬ噂、疑い」を掛ける。「天の下のがるる人のなればや着てし濡れ衣干るよしもなき」（拾遺集・二二六・道真）。○さをしか 「さを鹿」の「さ」は接頭語で、雄鹿を指す。「さを」は、濡れ衣を干す「竿（さを）」との掛詞。○いつかひよ 濡れ衣がいつか「干よ」（「乾け」と、疑いが「晴れよ」との両義）と、鹿の音の擬声表現「ひよ」との掛詞。鹿の音は、「ひよ」だけでなく、「秋の野に妻なき鹿の年を経てなぞわが恋のかひよとぞなく」（古今集・一〇三四）などの如く、「かひよ」とする例もある。当該歌も「いつかひよ」に「かひよ」を通底させるか。○なきわたりける なき続けていることだ。「なき」は「鳴き」に「泣き」を響かせる。

【所載】人麿集Ⅱ・五五九

九四三 なくしかはつまぞこふらしくさまくらたびゆく人にこゑなきかせそ
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】鳴く鹿は妻を恋うているらしい。わびしい一人寝の旅を続ける者にどうかその声を聞かせないでくれ。

【語句】○くさまくら 草枕。「旅」にかかる枕詞だが、わびしい旅寝の意味を添える。○なきかせそ 「な…
…そ」は穏やかな禁止。どうか…しないでおくれ。

【所載】貫之集Ⅰ・三八一／貫之集Ⅱ・八五

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集Ⅰには「天慶二年四月、右大将殿御屏風の歌二十首」、「男、旅のやどりに鹿の鳴くを聞く」とある。

九四四 こゝろしもかよはじものをやまちかくしかのねきけばまさるわが恋

【異同】ナシ

【現代語訳】必ずしも心が通い合っているわけではないものの、山近く鹿の鳴く音を聞くといいよつもの私の恋心。

【語句】○こゝろしもかよはじものを 「しも」は下に打消を伴うと部分否定。鹿とは必ずしも心が通じて合っているわけではないのに。妻を恋う鹿の鳴き声に、己の恋心を触発されるのは、「宇陀の野の秋萩しのぎ鳴く鹿の妻に恋ふらく我にはまさじ」（万葉集・一六一三〈旧一六〇九〉・丹比真人）など、万葉集から詠まれている類型である。

【所載】貫之集Ⅰ・四一一

【参考】作者名はないが貫之集に見える。貫之集では「朱雀天皇の御時の屏風歌」、「八月鹿の鳴くを聞く」。

九四五 かりくればはぎはちりぬとさをしかのなくなるこゑもうらぶれにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】雁がやってくると、萩が散ってしまったと牡鹿が鳴く声も力無く沈んでいることだ。

【語句】○かりくれば 雁来れば。雁がやって来ると。所載欄の万葉集歌は「雁来（かりはきぬ）」。「○はぎ 萩。萩が鹿の妻であるとするのは、万葉集以来の類型。一六九番歌参照。○うらぶれにけり 「うらぶれ」はしよん

ぼりと力なく、心のしおれるような状態をいう。妻である萩が散ってしまったので、鹿がわびしく思うということ。「君に恋ひうらぶれ居れば敷の野の秋萩しのぎさを鹿鳴くも」(万葉集・二一四七(旧二一四三))。

【所載】玉葉集・秋上・五五六／万葉集・二一四八(旧二一四四) 雁来 芽子者散跡 左小壮鹿之 鳴成音毛 裏触丹来 カリハキヌハギハチリヌトサヲシカノナクナルコエモウラブレニケリ かりはきぬはぎはちりぬとさをしかのなくなるこゑもうらぶれにけり／夫木抄・四五九四／綺語抄・六四三／和歌童蒙抄・八一三／奥儀抄・四七〇／袖中抄・一〇三〇

(以上五首担当 中野)

九四六 あしひきの山よりきけばさをしかのつまよぶこゑもかつきかましを
人まろ

【異同】ナシ

【現代語訳】山の中から聞いたなら、雄鹿が妻をよぶ声もすぐに聞くことができるだろうに。

【語句】○あしひきの 「山」に掛かる枕詞。○山よりきけば 山にいて山から聞けば。「きけば」は、結句「…ましを」との呼応から未然形でありたいところ。所載欄の万葉集は「やまよりきせば」、人麿集Ⅱは「やまならませば」。○さをしか 雄鹿。「さ」は接頭語。○つまよぶこゑ 雄鹿が雌鹿を求めて鳴く声。もの悲しい鳴き声は秋を感じさせる風物詩の一つ。○かつきかましを すぐに聞くことができるだろうに。「かつ」は副詞。一つの動作が終わるか終わらないかのうちにすぐに。「空蟬の世にもにたるか花ざくらさくと見しまにかつちりにけり」(古今集・七三三)。鹿の声は、山でならばすぐに聞くことができる。

【所載】万葉集・二一五二(旧二一四八) 足日木笑 山従来世波 左小壮鹿之 妻呼音 聞益物乎 アシヒキノ ヤマヨリキセバサヲシカノツマヨブコエヲキカマシモノヲ あしひきのやまよりきせばさをしかのつまよぶこゑをきかましものを／人麿集Ⅱ・一〇一

【参考】作者名「人まろ」とあり、人麿集Ⅱに収められているが、万葉集には作者名なしで載る。

九四七 さをしかのあさふすをのゝ秋はぎをおれぬばかりもおける露かな

【異同】秋はきを―秋萩に(大)

【現代語訳】雄鹿が朝、まだ寝ている野の秋萩であることよ。今にも折れそうなほどに露がおいていることだなあ。

【語句】○をの 野。野原。「を」は接頭語。○秋はぎを 「を」は詠嘆の助詞と解し、訳を試みた。大久保本は「秋萩に」。その他の諸本も「を」のところに「に」の傍記がある。これらに拠って「秋はぎに」と読む方が、下句とのつながりは自然であるか。○おれぬばかりも をれぬばかりも。今にも折れそうなほどに。露がたくさん置いてあるさまの形容。

【所載】ナシ

【参考】類似歌に「さをしかの朝立つ野辺の秋萩に玉とみるまでおける白露」（万葉集・一六〇二（旧一五九八））がある。

九四八 秋はぎにしがらみかけてなくしかのこゑきゝつゝや山田もるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋はぎにからみつくようにして鳴く鹿の声を聞きながら、（田の見張りをする人は）山田を守っているのであらうか。

【語句】○秋はぎにしがらみかけて 秋萩の枝にからみつくようにして。○山田もる 山田守る。山田の番を守る。「山田」は山の中にある田。収穫期の秋の農夫は、稲穂を鳥獣などから守る為に番をするのであるが、人里離れた山の中の粗末な小屋に寝起きする為、怪しい心情を詠む歌が多い。

【所載】ナシ

九四九 おぼつかなをぐらのやまになくしかのこゑたかくともたれかしるべき

【異同】ナシ

【現代語訳】こころもとないことだなあ。薄暗い小倉の山で鳴いている鹿の声は、高く響いても誰がその声を聞きとめるであらうか。

【語句】○おぼつかな 形容詞「おぼつかなし」の語幹。ぼんやりとしてはつきりしない。そのため不安に感じる気持がある。「秋霧の立ちぬる時はくらぶ山おぼつかなくぞ見え渡りける」（後撰集・二七一）。○をぐらの

やま 小倉山。二〇七番歌参照。ここでは「小暗(をぐら)」を掛けている。〇たれかしるべき 「か」は反語。いったい誰が知るであろうか、誰も知らない。

【所載】ナシ

九五〇 とらにのりふるやをこえてあをぶちに水とりとらむつるぎたちかも
とら

【異同】 つるぎたちかも—つるよたちかも(桂)

【現代語訳】「意味のとりにくい言葉があるので完全な訳は示しにくい。」虎に乗り古屋を越えて真つ青な深い淵で水鳥を捕るといふ剣太刀であることだ。

【語句】◎とら 猫科の猛獣。獐猛なけだものとして恐れられていた。説話などでは人を食べる恐ろしい獣として伝えられる。〇ふるや 古屋か。意味不明。〇あをぶち 水が青々として見えるほど深い淵。〇水とり 水鳥か。所載欄の文献では「みつち(蛟竜)」。〇つるぎたちかも 「き(支)」と「よ(与)」の行書体が似ている為、判別が難しいが、「き」と見て「つるぎたち」と解した。桂宮本を底本とする『新編国歌大観』は「つるよたち」とする。

【所載】万葉集・三八五五(旧三八三三) 虎尔乘 古屋乎越而 青淵尔 蛟竜取将来 劔刀毛我 トラニノリフルヤヲコエテアフチニサメ(ミツチ) トリテコムツルギタチモガ とらにのりふるやをこえてあをぶちにみつちとりこむつるぎたちかも/古来風体抄・一七五

【参考】所載欄の万葉集は題詞に「境部王詠数種物歌一首穂積親王之子也」とあり、穂積親王の御子、境部王作とする。「とら」「ふるや」「あをぶち」「水とり」「つるぎ」など、いろいろのものを詠みこんだ歌かと思われる。

(以上五首担当 犬養悦・市東奈々)

九五一 からくにのとらふすといふ山にだにたびにはやどる物とこそきけ

【異同】ナシ

【現代語訳】あのからくにの、虎のひそんでいるという山にだって、旅するときには宿るものだと聞きますよ。

【語句】〇からくに 韓の国。「から」は、もと朝鮮半島南部にあった伽羅国のことであつたが、やがて半島全

体をさすようになり、さらに中国をもさすようになり、また漠然と半島・大陸方面の異国を言うようにもなった。ここはその漠然とした異国のことか。○ふす 伏す。ここではひそみ棲むの意。「とらふす山」とは、おそろしい虎がひそんでいいるような、未開異境の山ということ。「とらふす野」ということもある。

【所載】ナシ

【参考】詠歌事情不明のため具体的なことはわからないが、人事的寓意のある歌と思われる。あるいは、男に対して泊ってゆくことを求めた女の歌か。

九五二 あさぢふのおのゝしのはらいかなればてるひのとらのとらのふしどころなる

【異同】てるひのとらの—てかひのとらの(御・桂・大) ふしどころなる—ふしどころなる(大)

【現代語訳】浅茅の生えまじった篠原よ。いったいどういいうわけで、手飼いの虎の棲息場所になっているのだ。

【語句】○あさぢふ 浅茅の生えているところ。「あさぢ」は丈の低いチガヤ。○おの をの。小野。「を」は接頭語。「の」は野原。○しのはら 篠の生えている原。「し」は幹が細く丈が低くて群生するたぐいの竹の総称。○てるひのとら 底本の本文では意が通じない。諸本の「てがひのとら」に従って解す。人間によって飼育されている虎。「てがひ」は人の手で餌を与えて飼うこと。○みる 底本の本文は不自然。大久保本の「なる」に拠って解した。

【所載】夫木抄・一二九二五

【参考】「あさぢふのおのゝしのはら」「てる(が)ひのとら」は、いずれも比喻と思われる。人事的な事情(おそらく恋)のもとで詠まれた歌であろう。あるいは、親の監視のきびしい娘に近づけないことを恨んだ男の歌か。

九五三 ありとてもいくよかはふるからくにのとらふすのべに身をもなげてん

【異同】身をもなげてん—身をそなげてん(大)

【現代語訳】たとえこのまま在りつづけたとしても、いったい幾世を生き経られるというのだろう。(そんなに幾世をも生きられはしない。)それならいっせ、あのからくにの虎のひそんでいいるという野に、この身を投げてしまおう。

【語句】○ありとても 仮にこのまま生きてこの世に存在したとしても。○いくよかはふる 幾世かは経る。ど

れだけの世を生き経ることができようか。「よ」は、ここでは人の一生のこと。人は、幾世をも生き経ることはできない。「かは」は疑問を伴う反語。○からくにのとらふすのべ 九五一番歌参照。○身をもなげてん この身を投げ出してしまおう。虎のえじきになって死んでしまいたい、の意。「て」は完了の助動詞「つ」の未然形、「ん」は意志を表す助動詞「ん（む）」の未然形。「とらふすのべに身をなげ」という発想は、金光明経捨身品に見える捨身飼虎説話に拠っている。

【所載】拾遺抄・雜上・四五五／拾遺集・雜恋・一二二七／和歌童蒙抄・七九七

【参考】一見自棄ぎみの歌だが、拾遺抄の詞書には「を」とこ侍りける女をせちにけさうし侍りて、あるをとこのつかはしける」とあり、拾遺集にも、ほぼ同様の詞書がある。夫ある女に懸想した男が、強引に迫った歌のようである。

九五二・九五三番歌は、いずれも恋にかかわって詠まれた歌のようだが、第五帖「人づま」の題の下には、「人づまは森かやしろかからくにのとら伏す野辺か寝てこころみん」（二九七八）の歌もあり、このころ「人づま」への恋に関しては「とらふすのべ」というような言い方があったのかもしれない。

くま

九五四 あらくまのすむといふなるしはせ山せめてとふともながなはいはじを

【異同】ナシ

【現代語訳】荒々しい熊が棲むというあのおそろしいしはせ山のように、おそろしい勢いで問い詰められても、あなたの名は言いますまいよ。

【語句】◎くま 食肉目くま科の獣。四足が太く頑丈な体をしていて、木にも登る。冬は穴ごもりする。人におそれられたためか、和歌にはあまり詠まれていない。○あらくま 野生の荒々しい熊。○しはせ山 万葉集では当該歌一例のみの山。所在不明。五代集歌枕は駿河にも筑前にもこの歌をあげ、八雲御抄は駿河としているが、いずれもその根拠は不明。初三句は「せめてとふ」を言うための序詞。○せめてとふ きびしく問いつめる。詰問する。「せめ」は逃れられないまでにきびしく迫って窮地に追いつめること。ここで「せめてとふ」のは、おそらく親であろう。○ながな 汝が名。あなたの名前。「汝」は、親しい相手または目下に対して用いる第二人称。ここでは恋の相手の男性をさす。○いはじを 言いますまいよ。「じ」は意志をもつてする否定、ここは決意の表明。「を」は強調。

【所載】万葉集・二七〇四（旧二六九六）荒熊之 住云山之 師齒迫山 責而雖問 汝名者不告 アラクマノスマトイフヤマノシハセヤマセメテフトモナガナハツゲジ（イハジ） あらくまのすむといふやまのしはせやませめてとふともながなはのらじ／夫木抄・一二九二八／和歌童蒙抄・七九六

九五五 ますらをのたかまど山にせめつればさとおかたるむさゝびのこゑ

【異同】さとおかたる―さとおちたる（大） むさゝひのこゑ―むさゝひのこゑ（大）

【現代語訳】勇ましい男たちが高円山で追いつめたものだから、人里に逃げ落ちてきたむささびですよ、これは。

【語句】◎むさゝび 齧歯目りす科の動物。山林樹上に棲む。体と四肢のあいだに発達した飛膜があり、樹から樹へ滑空飛翔する能力を持つ。○ますらをの 雄々しい男子が。「ますらを」は、ここでは狩の勢子たちのこと。

「の」は主格を表わす助詞。「ますらをの」は「せめたれば」に対する主語。○たかまど山に 高円山は、現奈良市白毫町、春日山の東南方にある山。その西北山麓には聖武天皇の高円離宮があった。「に」は格助詞、「において」の意。「ますらを」が「せめ」た場所を示している。○せめたれば 追いつめたものだから、「せめ」は前歌九五四番参照。○おかたる 底本の本文では意が通じない。大久保本の「おちたる」に拠って解す。追われて逃げ落ちてきた。

【所載】万葉集・一〇三二（旧一〇二八）大夫之 高円山尔 迫有者 里尔下来流 牟射佐毘曾此 マスラヲノタカマトヤマニセメタレバサトニオリクルムザサビゾレ ますらをのたかまどやまにせめたればさとおりにけるむささびぞこれ／夫木抄・一三〇五七

【参考】万葉集当該歌の題詞で見れば、この歌は、天平十一年聖武天皇高円山出獵の折、小獣が都の中へ逃げ込んで捕獲されたので、これを献上しようとして添えるべく詠まれた、大伴坂上郎女の歌である。ただし左注によれば、未だ奏を経ぬうちに小獣は死に、歌を奉ることも停められたという。

〔以上五首担当 山下〕

九五六 むさゝびはこずゑもとむとあし引の山のさとをにあひにけるかな
忠貴皇子

【異同】ナシ

【現代語訳】むささびは、梢を求めて飛び移ろうとして、山の獵師に見つけられてしまったなあ。

【語句】○むさゝび 九五五番歌参照。○こずゑ 木の先。枝の先。○もとむと 餌を求めて飛び移ろうとして。○あし引の 枕詞。山・峰(を)などにかかる。○さとを 諸本に異同はないが、所載欄の万葉集は「佐都雄」と表記され、「さつを」と訓じる。それを「さとを」とよみ違えたか。「さつを」は獵師のこと。「山のへにいゆくさつをはおほくあれど山にも野にもさをしなくも」(万葉集・二二五一(旧二二四七))。○あひにけるかな 偶然に出会い撃たれてしまったことだ。

【所載】万葉集・二六九(旧二六七) 牟佐佐婢波 木末求跡 足日木乃 山能佐都雄尔 相尔来鴨 ムササビハコズエモトムトアシヒキノヤマノサツヲニアヒニケルカモ むささびはこぬれもとむとあしひきのやまのさつをにあひにけるかも／綺語抄・一五二／和歌童蒙抄・八二三

【作者】作者名「忠貴皇子」は、御所本・桂宮本・大久保本の各本異同はないが万葉集は「志貴皇子」である。

山川

九五七 やまがはのたぎつころをせきとめて人のきかくなげきつるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】(あの人を恋い慕って) 激しく湧き上がる心をこらえられず、人が聞きとがめるのに、長いため息をついてしまったなあ。

【語句】◎山川 やまがは。山の中を流れる川。谷川。○やまがはの 枕詞。流れの激しいことから、「あさ」「たぎつ」「音」「はやし」などにかかる。○たぎつころ 激しく湧き返る心。○せきかねて こらえかねて。「かね」は……することができない。○人のきかくに 人が聞きとがめるのに。動詞「聞く」のク語法。「聞くこと」「聞くの」という意味を表す。「それをだに思ふ事とてわが宿を見きとないひそ人の聞かくに」(古今集・八一)。「おなげきつるかな ため息をついてしまったなあ。「なげき」は長い息をする。悲しみを態度や言葉に表す意。

【所載】新千載集・恋一・一一三二

九五八 こひく／＼てあわずなりなば山川の人もわたらぬせとやなりなん

【異同】ナシ

【現代語訳】恋い慕っているのに、逢わないことになるならば、今まで逢うときに渡っていたあの瀬が、人も渡らない荒れた瀬となるのだろうか。

【語句】○こひく／＼て 恋い慕っているのに。「て」はあとに述べる事柄の原因、理由をのべる。○人もわたらぬせ 「瀬」は川の浅い所。多く川を渡るのにここを通るが、逢わないことになると、人も渡らぬ瀬となる。

【所載】ナシ

九五九 わび人のそでをやかれる山がはのなみだのごともおつるたきかな
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】嘆きに沈む人の袖を借りているのだろうか。まるでわび人の涙のようにとめどなく、落ちてくる山川の急流だなあ。

【語句】○わび人 嘆きに沈んでいる人。「ふぢ衣はつるる糸はわび人の涙の玉の緒とぞなりける」(古今集・八四一)。○そで 嘆きの涙に濡れた袖。○かれる 借りている。かれ(動詞「借り」の命令形) 十る(完了の助動詞「り」の連体形)。○たき 傾斜した川瀬の流れの急な所。急流。

【所載】貫之I・六四三

【作者】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

九六〇 さをしかのつめだにひちぬ山がはのあさましきまでとはぬ君かな

【異同】ナシ

【現代語訳】雄鹿の足先の爪さえも濡れないような、山川の浅い流れ。(そのように浅い心で) あきれる程長く訪ねて来ないあなたなのねえ。

【語句】○さをしか 雄鹿。「さ」は接頭語。○ひちぬ 水に浸らない。濡れない。ひち(動詞「ひつ」の未然形) 十ぬ(打消の助動詞「ず」連体形)。○あさましきまで あきれるほどひどく。「あさまし」に山川の縁で

「浅」をかける。「さをしかのつめだにひちぬ山がはの」は「あさ」を言い出す序詞。○とはぬ 訪れない。

【所載】拾遺集・恋四・八八〇／俊賴髓腦・一八二／綺語抄・六三九／奥儀抄・一五七

〔以上五首担当 林〕

九六一 水まさるときはふちなみやまがはのたきならねばやおとのたえせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】「歌意に不整合を感じるが、本文に従い解した。」水かさが増えるときは、浅瀬と淵の区別もなくなるので、音も静かになる。そのような山川のたぎつ瀬ではないので、音が絶えないのだろうか。

【語句】○ふちなみ 重出の古今六帖一七三八番歌では「ふちなみ」。九六一番歌の本文は「ふちなみ」で異同もないので、「淵無み」と取り、波が立ち騒ぐ浅瀬と静かな淵との区別が、水かさが増すとなくなり音が絶える意と解した。「底ひなき淵やは騒ぐ山河の浅き瀬にこそあだ波は立て」（古今集・七二二）。○たき 当該歌では、たぎつ瀬、急流、の意。

【所載】古今六帖・第三帖「ふち」一七三八

【参考】山川のたぎつ瀬ならぬ、恋の思いにたぎつ心ゆえ、絶えずその思いを伝えるという思いを込めるか。あるいは、噂が絶えないことを詠んだか。

九六一 ことはかりよらせよいとやまがはのたてのみだれてたゆたへるきみ

【異同】たゆたへるきみ―たゆたゆるきみ（桂）

【現代語訳】うまく取り計らって私があるたのもとへ行けるようにして下さい、いとしい人よ。山川の流れが乱れて滞るようにためらっているあなた。

【語句】○ことはかり 事計り。事を計らって。工夫して。「うたてけに心いぶせし事計りよくせ我が背子逢へる時だに」（万葉集・二九六一（旧二九四九）、「……石枕苔むすまでに新た夜の幸く通はむ事計り夢に見えこそ……」（万葉集・三三四一（旧三三二七））。○いも 妹。男性が、妻や恋人などの女性を親しんでいる語。「兄（せ）」の対。○たての 「たて（経）」は、織物の縦糸。当該歌では「みだれて」を導く。「しづはた」（倭文機で織った、乱れ模様の布）の「たてぬき」（縦糸と横糸）が乱れることが和歌によく詠まれた。「見ずき聞か

ずあらましときはしづはたのたてぬき乱る思ひせましや」(伊勢集・三六八)。「よる」「たて」「みだれ」「たゆ」は糸に関わる縁語。○たゆたへる 水の流れが直流せず乱れて滞っているように、心を決しかねているさま。「たゆ」に糸に関わる縁語「絶ゆ」を掛ける。

【所載】ナシ

【参考】初・二句は、語句欄の万葉集二九六一(旧二九四九)番歌の「事計りよくせ我が背子」という類似表現を参照すると、「よらせよ」が、もとは「よくせよ」であった可能性もある。

山だ

九六三 あしひきの山田つくるを^ひひでずともしめだにはつよもるとしるべく

【異同】^ひひでずとも―いでずとも(御・桂・大) しめたにはつよ―しめたにはへよ(桂・大)

【現代語訳】山の田を作っている男よ、まだ稲の穂は出ていなくても標縄だけでも張り渡しておきなさい。番をしているとわかるように。

【語句】◎山だ 山田。山の中の田。縄を張り、番をして鳥獣などから守ることや、その侘びしさが詠まれた。接頭語「小(を)」の付いた「小山田」という形でも詠まれている。○あしひきの 「山」にかかる枕詞。○ひでずとも 秀でずとも。(稲の)穂がまだ出ていなくても。○しめ 標。占有や立入禁止の標識。縄を張り巡らしたり、木を立てたりした。また、それに用いた標縄の略。○はつよ 桂宮本などに「はへよ」とあるのによつて「延へよ」と解釈した。延り渡しなさい。「延ふ」は縄や綱などを長く伸ばす、張るという意。○もるとしるべく 守ると知るべく。番をしているとわかるように。

【所載】万葉集・二二二三(旧二二二九) 足曳之 山田佃子 不秀友 縄谷延与 守登知金 アシヒキノヤマダツクルコヒデズトモシメダニハヘヨモルトシルガネ あしひきのやまだつくるこひでずともなはだにはへよもるとしるがね／夫木抄・五〇五〇／人麿集Ⅱ・一五四／家持集Ⅰ・一八九／家持集Ⅱ・二三七

【参考】人麿集と家持集の両方に見え、夫木抄は作者を家持とするが、万葉集には作者名がない。なお、次のように、三句目以下が類似した歌がある。「石上布留の早稲田を秀でずとも縄だに延へよ守りつつ居らむ」(万葉集・一三五七(旧一三五三))、「津の国のむろのはやわせひでずとも綱をばやはく守ると知るべく」(新撰和歌・二二四)、「きの国のむろのはやわせいはずとも標をばはへよ守ると知るがね」(古今六帖「しめ」二六〇八)。

九六四 あしひきの山田にはふるしめなはの秋田かるまでたえじとぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】山田に張り渡した標縄は秋の田を刈るまで切れることはないだろう。そのように、私たちの仲も絶えることはあるまいと思うよ。

【語句】○あしひきの 「山」にかかる枕詞。○はふる 延ふる。九六三番歌参照。○しめなは 標縄。占有や禁忌の目印とし、侵入を禁じるために張る縄。○たえじとぞおもふ 絶えることはあるまいと思う。標縄が切れることはないだろうという意と、自分たちの男女の仲がずっと絶えることはあるまいという意とを掛ける。初句から四句目までが、「たえじ」を導く序詞。

【所載】ナシ

【参考】「春霞たなびく田居に廬つきて秋田刈るまで思はしむらく」（万葉集・二二五四（旧二二五〇））も同様な詠法。

九六五 ことゝてはたれならなくに^を子やま田のなはしろみづのなかよどみ^すなる

【異同】ナシ

【現代語訳】言葉を掛けてきたのは他の誰でもない、あなたの方なのに、（小山田の苗代に引いた水が流れていかに淀んでいみたいいに、）途中で通って来なくなるなんて。

【語句】○ことゝては 用例が見当たらないため、所載欄万葉集の「ことでは」に拠って解釈した。○をやま田 小山田。「を（小）」は接頭語。○なかよどみ 中淀み。水の流れが途中で停滞すること。また、事態の進行が停滞すること。「淵瀬をも分かじと思へど飛鳥川そなたの水や中淀みせむ」（うつほ物語・六六五）。「を山田のなはしろみづの」は、「なかよどみ」を導く序。

【所載】万葉集・七七九（旧七七六） 事出之者 誰言尔有鹿 小山田之 苗代水乃 中与梓尔四手 コトデシハタガコトニアルカラヤマダノナハシロミヅノナカヨドニシテ ことではたがことにあるかをやまだのなはしろみづのなかよどにして

【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の万葉集では「紀女郎報贈家持歌一首」とする。

〔以上五首担当 長戸〕

九六六 かりてほす山田のいねのこきたれてねをこそなかめ人はうらみじ

【異同】ナシ

【現代語訳】刈りとって干した山田の稲の実がこぼれ落ちるように、私も涙をこぼしながら声をたてて泣いていましょう。あの人を恨むようなことはしません。

【語句】○かりてほす山田のいねの 「こきたれて」を導く序詞。○こきたれて しごき落としたようにしきりに落ちるの意。ここでは、稲の実の落ちる様子と涙がこぼれ落ちるさまをいう。「あけぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそほちつつ」（古今集・六三九）。○ねをこそなかめ 声をたてて泣いていよう。

【所載】ナシ

【参考】上句は「かりてほす山田の稲のこきたれてなきこそわたれ秋のうければ」（古今集・九三二）と重なり、下句は「あまのかる藻にすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をばうらみじ」（古今集・八〇七）と酷似する。

九六七 山田さへいまはつくるをちるはなのかごとはかせにおほせつるかなざらなん

【異同】ナシ

【現代語訳】山田までも今は耕す時期になったというのに、散る花への恨み言は風におっしゃらないで下さい。

【語句】○山田さへ 晩春であることを強調する。所載欄の貫之集には詞書に「三月田かへすところ」とある。○つくる 耕す。「いくばくの田を作ればか時鳥死出の田長を朝な朝な呼ぶ」（古今集・一〇二二）。○かごと

恨み言。ぐち。「露をおもみをれふしにける花の枝はかごとをかせにおほせざらなん」（公任集・一〇二）はこの歌を意識したものの。○おほせつるかな 底本「つるかな」をミセケチで「さらなん」と傍記する。ここではそちらを採用し「おほせざらなん」で解釈する。おっしゃらないでください。「なん」は他への願望を表わす終助詞。

【所載】新勅撰集・春下・九〇／貫之集Ⅰ・六／貫之集Ⅱ・四／袖中抄・三三三／和歌色葉・七八

九六八 かりてほすやま田のいねをかぞへつゝおほくのとしをつみてけるかな
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】刈って干して置いた山田の稲を数えて積みながら多くの実りを重ねるように、多くの年を積み重ねてきたことだなあ。

【語句】○とし 年歳の意と収穫するの意を掛ける。「我が欲りし雨は降り来ぬかくしあらば言挙げせずともとしは栄えむ」(万葉集・四一四八(旧四一二四))。○つみてけるかな 「つみ」に、稲を積み重ねるの意と年を重ねるの意を掛ける。「かりてほす山田のいねの数しらずつむべきあきぞひさしかりける」(元輔集・三四)。なお所載欄の躬恒集Ⅰでは「しはず」との詞書があり、述懐の歌とする。

【所載】拾遺抄・雑上・四一七／万代集・一〇六七／躬恒集Ⅰ・一〇五／躬恒集Ⅱ・九／躬恒集Ⅲ・九／躬恒集Ⅳ・三五六／躬恒集Ⅴ・四〇／元輔集Ⅰ・二四五

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。元輔集Ⅰでは、さまざまな歌人の屏風歌を集めた歌群に入る。なお、拾遺集・雑秋・一一二五に躬恒作として「かりてほす山田の稲をほしわびてまもるかりいほにいくよへぬらん」という類歌がある。

九六九 とを山田もるや人めのしげゝればほにこそいでねわすれやはする

【異同】ナシ

【現代語訳】遠くの山田を見張る人の目が多く、他人の目がわずらわしいので表には出ませんが、どうしてあんなのことを忘れることができましょうか。

【語句】○とを山田もるや とほ山田もるや。遠くに見える山田を見張る。「や」は語調をととのえる間投助詞。契沖は重出する第三帖での初句「かどわさだ」と比較し「遠山田は人めしげかるまじきなり」(『和歌拾遺六帖』)と疑義を記している。ここまで「人めのしげければ」を導く序詞。○人め 田を見張る人の目と、自分と関係のない他人の目と両方の意を持つ。○しげゝれば 「しげし」は、見張りの目が多いの意と、周りの人の目がわずらわしいの意を含む。○ほにこそいでね 「ほにいづ」は表に現れる、目立つようになるの意。「とを山田」の縁で用いる。「朝霧のおぼつかなきに秋の田のほに出でて雁ぞ鳴きわたるなる」(貫之集・八一)。○わすれやはする 「やは」は反語。忘れようか、いや忘れない。

【所載】古今六帖・第二帖「門」一三六七／続古今集・恋一・九八六／躬恒集Ⅱ・二五九

九七〇 やまだすき春のたねをばまきしかどあきのときにはなさじとぞ思
たぐみね

【異同】 ナシ

【現代語訳】 山田をたがやして春の種を蒔くように恋を始めたけれど、実りを迎える秋は来ようとも、飽きられる時を迎えるようなことにはしますまいと思えます。

【語句】 ○やまだすき 山田をたがやして。「すく」は田や畑を耕すの意。「あらを田をあらすきかへしかへしても人の心を見てこそやまめ」(古今集・八一七)。○春のたね 春に蒔く種。苗代に蒔いた耨のこと。○まきしかど 種を蒔いたけれども。種を蒔いた時点を恋の始まりとする。○あきのとき 「あき」は「秋」に「飽き」を掛ける。「とき」は収穫にふさわしい時節の意に、(飽きられる) ちょうどその時の意を掛ける。

【所載】 素性集Ⅰ・三二／素性集Ⅱ・四二／素性集Ⅲ・四〇

【参考】 作者名「たぐみね」とあるが、忠岑集には見えない。

〔以上五首担当 青木〕

九七一 山かげにつくるやま田のこがくれてほにいでぬこひはくるしかりけり

【異同】 ナシ

【現代語訳】 山陰に耕す山田が木々に覆われて、稲の穂が出ないように、表面に出ない、そぶりにも見せられない恋は苦しいことだ。

【語句】 ○つくる 耕す。耕作する。「あしひきの 山田をつくり 山高み……」(古事記・七八)。○こがくれて 木々に遮られて。日照が不足して、の意であろう。○ほにいでぬ 「穂に出づ」は、穂となつて出る。転じて、表に現れる。人目につく。「花すすき我こそ下に思ひしか穂に出でて人にむすばれにけり」(古今集・七四八)。こは打消を伴って、穂に出ない。表に現れない、の意。上三句は「ほにいでぬ」の序。

【所載】 貫之集Ⅰ・五五一

【参考】 新勅撰集・恋一・六四八には「山かげにつくる山田のみがくれてほにいでぬこひに身をやつくさむ」という、非常によく似た凡河内躬恒の歌がある。

九七二 しらつゆのおくての山田かりそめにうき世のなかをおもひけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】白露が置く、晩稲の山田は刈り初めているが、このつらい世の中を、私は仮りそめのものとして思うようになってしまったことです。

【語句】○しらつゆのおくて 「白露の」は「置く」を導く枕詞のような働きをしており、「置く」に「晩稲（おくて）」を掛ける。○かりそめに 「刈り初め」に「仮りそめ」を掛ける。

【所載】古今集・哀傷・八四二／貫之集Ⅰ・七四五／貫之集Ⅲ・一三二

【参考】古今集と貫之集Ⅰは、初句を「朝露の」とする。また古今集では「思ひに侍りける年の秋、山寺へまかりける道にてよめる」との詞書を持ち、哀傷の部に属する。

山ざと

九七三 やまざともおなじうきよのなかなればところかへてもすみうかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】世を逃れようと思って山里に来てみたが、その山里も、やはり同じ憂き世の中なので、場所を変えても住みづらいことだ。

【語句】◎山ざと 山の中にある山里。通常は人が住まない、日常生活から隔絶した場所、という意識で用いられることが多い。従って和歌では、「侘びし」「寂し」「住み憂し」などとともに詠まれることが多く、そこにわざわざ入っていく人は、この憂き世に絶望した人、隠遁者、という意味合いが強い。なお、小町谷照彦『古今和歌集と歌ことば表現』（岩波書店、一九九四年）所収の「美的空間としての山里」では、藤原公任あたりから「山里」に独自の美意識が見いだされていくと説かれている。

【所載】ナシ

九七四 山ふかきやどにはあれどもよとよもに春のころろはあさくぞなるらし

つらゆき

【異同】 ナシ

【現代語訳】 山深い宿ではあるけれども、年とともに春の心は浅くなっているらしい。

【語句】 ○山ふかき 「あさくぞ」に対応する。山深い宿ならば、当然春の心も思いやりが深く、花も残っているはずなのに、の意であろう。○よとゝもに 一般には「住の江の浪にはあらねどよととも心に心を君に寄せわたるかな」（後撰集・恋二・六三八）や「一生に男せでやみなむといふことを、世とともにいひけるもしるく」（大和物語・一四二段）などのように、常々、いつも、の意に用いられているが、ここは「なるらし」にかかるので、年とともに、時が経つにつれて、の意か。○春のこゝろ 「春」を擬人化したもの。○あさくぞなるらし 浅くなっているらしい。初句の「ふかき」に呼応する。「らし」は根拠のある推量。すでに散っている花を見て、そこからの推量であろう。

【所載】 貫之集I・二五二

【参考】 作者「つらゆき」については貫之集Iにも見え、確認できる。ただし本文は「山ふかきやどにしあれば年ごとに花の心はあさくぞありける」とし、異同がある。

九七五 春くれどはなもにほしぬ山ぎとはものうかるねにうぐひすぞなく

【異同】 春くれと―春くれは（御）

【現代語訳】 春が来たけれども、花も美しく咲かない山里では、けだるそうな声でうぐいすが鳴いていることだ。

【語句】 ○はなもにほはぬ 花も美しく咲かない。「はな」は必ずしも梅でなくともよいのだろう。春の景物として、春の象徴としての花。○ものうかるねに 「ものうかる」は、けだるそうな、大儀そうな、何となく気の進まないさま。「ね」は、音、声。

【所載】 古今集・春上・一五／新撰万葉集・一九／寛平御時后宮歌合・一七／新時代不同歌合・四九／後六々撰・一三三

【参考】 古今集では当該歌の作者を「在原棟梁」とする。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

九七六 ゆきやどりしらくもだにもかよはずはこの山ぎとはすみうからまし

【異同】 しろくもたにも―しらへもたにも(御・大)

【現代語訳】 雪が泊まって、白雲でさえ(他へ行って泊まって)通わないとしたならば、この山里は住むのがつらいでしょうに。

【語句】 ○ゆきやどり 雪が宿って。「宿る」は宿泊する意。「ゆき」は「雪」と「行き」をかける。「行き」は「通ふ」の縁語。○すみうからまし 住むのがいやになるでしょうに。「まし」は仮定条件句を受け、仮定の上立って推量する意を表す。

【所載】 貫之集Ⅰ・二〇八

【参考】 貫之集では「三条右大臣屏風のうた」のうちの一首。九八〇番歌参照。貫之集には「雪やどる白雲だにも通はずは此山里は住みよからまし(雪が宿っている白雲さえも通わなければ、この山里は住みよいだらうに)」とある。この方が整合性もあり、元はこちらの形か。

九七七 雪のみやふりぬとおもふ山ざとはわれもおほくのとしぞ^へつにける

【異同】 ナシ

【現代語訳】 「ふりぬ」とは山里で降った雪のことばかりだと思いませんか。いいえ、違います。私もそこで多くの年月を経て、老いたことです。

【語句】 ○雪のみやふりぬとおもふ 「や」は反語の係助詞。「ふり」は「降り」に「古り(老いる意)」を掛けらる。「あらたまの年の終はりになること」に雪もわが身もふりまさりつゝ(古今集・三三九)。○としぞへにける 年月を経たことだ。所載欄の新古今集では「としぞつもれる」。

【所載】 新古今集・冬・六七六／貫之集Ⅰ・二四三

【参考】 貫之集では「延喜御時、内裏御屏風の歌 廿六首」のうちに「山里にすむ人の雪のふれるを見る」という題で詠まれている。九八〇番歌参照。

九七八 たちぬとは春をきけども山ざとはまちどをにこそはなはさきけれ

【異同】 ナシ

【現代語訳】春が立ったとは聞きましたが、(人里離れた) 山里では待ち遠しく、なかなか花は咲かないのでした。

【語句】○たちぬとは春をきけども 立春が過ぎ、春になったと聞きましたが。所載欄の貫之集では「春を」ではなく「春は」。○まちどを まちどほ。待ち遠しいさま。「こがくれておそくいづればありあけの月まちどほにみゆる山ざと」(重之子僧集・一六)。

【所載】貫之集I・二九九

【参考】貫之集では「馬車にのりて人おほく野に出でたり、さまざまの花咲きまじりたり」という詞書がある。九八〇番歌参照。

九七九 山ざとにすむかひあるは梅のはなみつゝうぐひすなくにぞざりける

【異同】なくにそざりける―なくにそありける(桂)

【現代語訳】山里に住む甲斐があるのは、梅の花を見ながら鶯が鳴く(のを聞く)時なのですよ。

【語句】○すむかひあるは 住む値打ちがあるのは。「かひ」は「甲斐」に山の縁語「峽」を掛ける。「山里のかひも有るかな郭公今年ぞまたで初音ききつる」(後拾遺集・一二二九)。○なくにぞざりける 「ざり」は「ぞあり」の約。本来は「なくにざりける」か桂宮本のように「なくにぞありける」が正しい。所載欄の貫之集では「きくにそ有ける」で、貫之集の方が整合性がある。

【所載】貫之集I・一四一

【参考】貫之集では、「延喜一年五月中宮の御屏風の和歌廿六首」のうちの第三首。二月むめの花見る所」。穩子四十賀の屏風歌か。穩子は延喜ではなく延長二年に四十歳。九八〇番参照。

九八〇 山ざとはあきこそことかなしけれしかのなくねにめをさましつゝ
つらゆき 忠峯五首

【異同】ナシ

【現代語訳】山里は、秋こそことに悲しく思われるよ。鹿の鳴く音に何度も目を覚ましては。

【語句】○あきこそことかなしけれ 秋はことに悲しいことだ。漢武帝の「秋風辞」・宋玉の「九弁」等に見

える「悲秋」の概念をふまえている。三〇一番歌参照。所載欄の古今集や忠岑集Ⅲでは第三句「わびしけれ」。○しかのなくね 鹿の鳴く音。「奥山に紅葉ふみわけなく鹿の声きく時ぞ秋は悲しき」（古今集・二二五）に代表されるように、鹿の声は秋の悲しみを高めるものであった。○めをさましつゝ 何度も目を覚ましては。目を覚ますのは「一夜のうち」と「夜毎」の両説がある。

【所載】古今集・秋上・二一四／新撰朗詠集・五二五／忠岑集Ⅰ・二九／忠岑集Ⅱ・一九／忠岑集Ⅲ・三一／忠岑集Ⅳ・三一／是貞親王家歌合・二八

【参考】作者名表記の「つらゆき 忠岑五首」は不審。九七六／九七九番は貫之の詠であるが、当該歌は古今集では忠岑作となっている。

〔以上五首担当 三浦〕

九八一 山ざと^はにしる人もがなうぐひすのなきぬときかばわれにつぐべく

【異同】ナシ

【現代語訳】山里に知り合いがほしいものだ。鶯が鳴いたと聞いたなら（すぐ）私に告げてくれるように。

【語句】○山ざと 山あいの人里。人の訪れもまれな世をのがれた所として平安和歌以降詠まれる。「春たてど花もにほはぬ山里はものうかる音に鶯ぞ鳴く」（古今集・一五）、「山里はものわびしきことこそあれ世のうきよりは住みよかりけれ」（古今集・九四四）など。○うぐひすの 所載欄の文献には第三句は「ほととぎす」とあり、季節が異なる。○われにつぐべく 動詞「告ぐ」に、助動詞「べし」の連用形が接続したかたち。告げることが出来るように。所載欄の文献には「つげにくるがに」とある。

【所載】拾遺集・夏・九八／亭子院歌合・四三

【参考】作者について、所載欄の拾遺集では「延喜御時御屏風に つらゆき」とあるが、貫之の家集にはない。また、亭子院歌合には「興風」と記す。

九八二 あられふる^りみ山のさとのかなしきはきてたはやすくとふ人もなき

【異同】ナシ

【現代語訳】霰降る（ここ）山深い里に住む悲しさは、気軽にやってきて（私を）訪ねてくれる人もないことだ。

【語句】○かなしきは 所載欄の後撰集では、第三句「わびしきは」とある。○たはやすく 「たはやすし」の連用形。たやすく。下に打消の語を伴うことが多い。「たはやすく人寄り来まじき家を造りて」（竹取物語）。

【所載】後撰集・冬・四六八

九八三 山ざとは冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬとおもへば

【異同】ナシ

【現代語訳】山里は冬こそさびしさが募るのだった。人も離（か）れ、草も枯れてしまおうと思うと。

【語句】○人めも草もかれぬ 「かれぬ」は、動詞「かる」に、完了の助動詞「ぬ」が接続したかたち。「かる」は掛詞。「人目」が「かる」とは、人の遠のく、離れる、の意。「草」が「かる」とは、枯れる、の意。「秋来れば虫とともにぞなかれける人も草葉もかれぬと思へば」（是貞親王家歌合・三三三）。

【所載】古今六帖・第六帖「ふゆ」三五七〇／古今集・冬・三一五／和漢朗詠集・五六四／宗于集・一五／陽成院一親王姫君達歌合・六／俊成三十六人歌合・六八／新時代不同歌合・五六／三十六人撰・九七／百人秀歌・二一／百人一首・二八／和歌用意条々・三一／桐火桶・一一七

【参考】作者名は、古今六帖には記載がないが、所載欄の文献は「源宗于」で一致する。

九八四 すみわびぬいまはかぎりぞ山ざとにつまきこるべきやどもとめてむ^{なりひら}

【異同】ナシ

【現代語訳】もう生きてゆけない。もう限界だ。（世間を逃れ）山里に爪木を樵（こ）り集めて暮らす住処（すみか）を求めよう。

【語句】○すみわびぬ 動詞「住む」と「わぶ」の複合語、「住みわぶ」に完了の助動詞「ぬ」の接続したかたち。生き難い、生きることがつらい、の意。○つまきこるべきやど 「爪木」は、たきぎにする小枝。「こる」は樵る。木を切ること。俗世を離れ隠遁したい気持ちをも「爪木こるべき宿求む」と言った。所載欄の文献の伊勢物語五九段では二句から四句は「今はかぎりとし里に身をかくすべき」とある。○もとめてむ 動詞「求む」に完了の助動詞「つ」の未然形「て」と、意志の助動詞「む」の接続したかたち。

【所載】後撰集・雜一・一〇八三／業平集Ⅰ・七八／業平集Ⅱ・九／業平集Ⅳ・二七／古来風体抄・三三四／伊勢物語・五九段・一〇七

【参考】作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。

九八五 あさかやまかげさへみゆる山の井のあさくは人をおもふものは
やまの井

【異同】ナシ

【現代語訳】あさか山の影まで映つて見える（湧き水を囲った）山の井は浅く——浅くはあなたを思うものですか（どれほど深く思っていることか）。

【語句】◎やまの井 湧き水の周囲を囲い、清水を溜めたところ。通常の掘った井戸は底が見えないくらい深いのに対し、浅い。この「あさか山の」歌をもとに、相手を思う心の浅さ、深さを人々は表現しあつた。○あさかやま 安積山。浅香山とも。陸奥の歌枕。福島県郡山市。○山の井 初句から第三句までは「浅く」を導く序。○おもふものは 「ものかは」は反語。思うものか、思ひはしない。

【所載】古今集仮名序書き入れ／万葉集・三八二九（旧三八〇七）安積山 影副所見 山井之 浅心乎 吾念莫国 アサカヤマカゲサヘミユルヤマノキノアサキコロワガオモハナクニ あさかやまかげさへみゆるやまのゐのあさきころをわがおもはなくに／夫木抄・八六八〇／小町集Ⅰ・一〇三／俊頼髓脳・三七／綺語抄・二一六／和歌童蒙抄・三八九／古来風体抄・六、一七二、二二四／和歌色葉・一〇七／八雲御抄・一六三／為兼卿和歌抄・六／和歌口伝・二七九／悦目抄・四五／和歌無底抄・二一、三九／井蛙抄・四三七／今昔物語集・一六五／十訓抄・八〇／古今著聞集・一三九／大和物語・一五五段・二六〇

【参考】手習いのはじめに習う歌として著名。「なには津に咲くやこの花冬ごもりいまははるべと咲くやこの花」とともに、「歌の父母」と古今集仮名序では言う。古く万葉集の卷十六・三八二九（旧三八〇七）では長い左注がある。「右歌伝云、葛城王遣于陸奥國之時国司 承緩怠異甚、於時王意不悦色顔面、雖設飲饌不肯宴樂、於是 有前采女、風流娘子、左手捧觴右手持水擊王膝而詠此歌、尔乃王意解悅樂飲終日」というもので、深い心を訴えて相手の不機嫌な態度を和らげた采女（うねめ）の作とする。

〔以上五首担当 平野〕

九八六 むすぶてのしづくにこるたき山の井のあかでも人にわかこらゆきぬるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】手を結んで掬うと、その落ちる雫で濁ってしまう山の井の閼伽水ではないけれど、飽かぬ思いのままであの人と別れてしまったことだよ。

【語句】○むすぶ 手を結んで水を掬うこと。○しづくにこる 手から漏れた水が雫となり、それにより山の井の水が濁る。○山の井 「山」は貫之集その他から「志賀の山」とわかる。志賀の山越えは、京都北白川から如意ヶ峰を経て崇福寺（志賀寺）へと続く道。上三句は次の「あかでも」にかかる序。○あか 「閼伽」と「飽」（か）の掛詞。閼伽とは仏教語で浄水のこと。

【所載】古今集・離別・四〇四／拾遺集・雜恋・一二二八／新撰和歌・一九七／貫之集Ⅰ・七八一／貫之集Ⅱ・八四／時代不同歌合・一〇五／綺語抄・二二七／奥儀抄・一二八／袖中抄・八二八／古来風体抄・二六六／西行上人談抄・一六／詠歌一体・五五

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の古今集等の「紀貫之」と一致する。なお、当該歌は、所載欄に見るとおり、歌学書・注釈書の類に多く引用された。中でも、古来風体抄で「すべてことば、ことの続き、姿心、限りもなき歌なるべし。歌の本体はただこの歌なるべし」と絶賛された。

九八七 くやしくぞくみそめてけるあさければそでのみぬるゝ山のゐのみづ

【異同】ナシ

【現代語訳】悔しいことに汲みそめたことだよ。浅いので袖だけが濡れる、そんな山の井の水を。

【語句】○くやしくぞくみそめてける 悔しいことに汲みはじめたことだよ。山の井の水を汲み始めるのが悔しい、の意。「おとにのみききてはやまじあさくともいぎくみみてん山の井の水」（後撰集・一一六五）のように、山の井の水を汲むのは、男女の仲を始めることを示し、恋しはじめたことを悔いている。「くやしくぞのちにあらはむとちぎりけるけふをかぎりといはましものを」（大和物語・第一〇一段）。○あさければ 「あさか山かげさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものかは」（古今集・仮名序）のように山の井は「浅い」ものであり、相手の思いが「浅い」ことを言い重ねている。

【所載】ナシ

【参考】当該歌を引いたものとして源氏物語・若紫卷「汲みそめてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見るべき」(尼君)が挙げられる。

九八八 いつながらわかるゝときけば山の井のにこりしよりもわびしかりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】家にいてお別れするのは、山の井が濁ったときよりもっと飽き足らなくて、つらいことです。

【語句】○いつながらわかるゝときけば 所載欄の文献では「いへながらわかるゝときけば」。「いへ」の「へ」と「つ」の誤写と考え、「いへながら」で解釈する。「いへながら」とあれば、「家にいながら」と、山の井の「旅」と家の対比が見られるか。○山の井のにこり (零で) 濁る山の井の閑伽水。九八六番歌参照。この歌は、所載欄の拾遺集の詞書に「三条の尚侍方違へに渡りて帰る明日に、零ににこるばかりの歌今はえよまじと侍りければ、車に乗らんとしけるほどに」とあり、貫之自身の作(九八六番歌)を踏まえた詠作。

【所載】拾遺集・雑恋・一二二九／貫之集I・八五三

九八九 あさからむことをだにこそそうらみしかたえやはつべき山の井の水

【異同】ナシ

【現代語訳】二人の仲が浅いことを恨めしく思っていたけれど、だからといって絶えてしまつてよいのかというとそうではないでしょう。この山の井の水は。(想いが浅いことだけを恨みに思っているけれど、だからと言つて、この縁が絶えはててしまつてよいかというところではないでしょう。)

【語句】○あさからむ 浅いであろう。「浅くなるような」ことを婉曲に言う。水が浅いことを男女の仲の浅さと掛けている。「草ふかみ浅せにしみづはぬるくともむすびし袖は今もかわかじ」(元輔集・二四二)。○たえやはつべき 絶えてしまつてよいものではないか。決してそうではありません。「たえはつ」は「絶え果つ」で山の井が湧き出なくなることで男女の仲が離れきつてしまふことを掛けた。「や」は反語。

【所載】続後撰集・恋五・九八九

九九〇 めづらしやむかしながらの山の井はしづめるかげぞくちはてにける
おきかせ

【異同】ナシ

【現代語訳】珍しいことだ。昔ながらの山の井の様子は変わらないけれど、水に映る沈淪の身の私の影だけが、朽ち果ててしまった。

【語句】○むかしながらの山の井 昔のままの山の井（井戸）。「むかしながら」に地名の「長等」を掛ける。長等山は滋賀県大津市三井寺の裏山。○しづめるかげぞくちはてにける 沈淪のわが身の影は朽ち果ててしまった。「かげ」は水に映る自分の像。「しづめる」は水に影が沈むことと、沈淪の意の「しづむ」を掛けている。

【所載】後撰集・雑二・一一三五

【参考】作者名「おきかせ」とあるが所載欄の後撰集ではよみ人知らず。なお後撰集では一首前（一一三四）に興風の歌がある。

〔以上五首担当 杉本〕

九九一 山びこはこゑのいほりのなればやおりひくといへどこたへぬ
やまびこ

【異同】ナシ

【現代語訳】山彦には声の庵が無いから、こちらから、思う思う、といくら言っても、（空しい返事ばかりで）私の気持ちに伝えてくれないのだろうか（あなたは）。

【語句】◎やまびこ 山の神。山の霊。また、山の妖怪。山に向かって呼ぶと同じ声が出て来る現象を、現在に例（こたふ）と呼ぶが、古人はそれを、山に存在する山彦の答えと考えた。「声」「呼ぶ」「こたふ」などの語とともに詠まれる。「山びこ」は声ばかりで実態の伴わぬものとして、恋の嘆きの歌に詠まれる例が多い。広い邸などに音の反響するのも「やまびこ」といった例がある（源氏物語・夕顔巻）。○こゑのいほり 声の庵。用例なく、意味不明。庵は宿る所とみて、山彦の宿る所の意か。○思ひく 思ふ思ふ。「おりひく」をミセケチ。この場合の「思ふ」は好きだ、慕っている、の意。「いなりやまみなみし人をすきずきに思ふ思ふとしらせてしかな」（好忠集・五七九）。○いへどこたへぬ 「山彦」は同じ声で返事をするのだから、この場合の「こ

たへぬ」は、こちらの希望をかなえてくれない、の意であろう。

【所載】ナシ

九九二 つれもなき人をこふとて山びこのこたへするまでなげきつるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】冷淡な人を恋して、答えて下さるまであきらめず呼び続け、（しかし少しも答えて下さらず）嘆き通してきました。

【語句】○山びこの 「こたへ」を導く枕詞と考える。現代語訳に入れない。枕詞ととらず、「山彦でさえこうして答えるほどの高い私の嘆き」と解する説（竹岡正夫『古今和歌集全評釈』）もあるが、少し無理ではないか。○人をこふとて 所載欄の新撰万葉集では「ひとをまつとて」。○こたへするまで 所載欄の新撰万葉集では「おとのするまで」。

【所載】古今集・恋一・五二二／新撰万葉集・二〇五／寛平御時后宮歌合・一六四

九九三 山びこのこゑのまに／たづねいけばむなしき空をゆきやつかれん
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】山彦の声の方へ従い探し求めて行くと、誰もいず、むなしく、ただ歩き回って、足が疲れてしまふのではないだろうか。

【語句】○こゑのまに／ 声にしたがつて。声のする方へ。「まに／」は、「かむなづき時雨にあへるもみぢばの吹かば散りなむ風のまにまに」（万葉集・一五九四（旧一五九二））など、……とともに、……につれて、の意。○たづねいけば 「いけば」は動詞「行く」の已然形に助詞「ば」が接続したかたち。「さをしかのふす草むらはみえねどもいもがあたりをいけばかなしも」（人麿集IV・一五）。所載欄の後撰集では「とひゆかば」、参考欄の貫之集では「尋ねゆかば」。○ゆきやつかれん 行きや疲れん。行き疲れるのではないか。「ゆきつかれ」は行くことよって疲れること。「たまほこの道行き疲れ稻むしろしきても君を見むよしもがな」（万葉集・二六五一（旧二六四三））など。所載欄の後撰集の下旬は「むなしきそらにゆきやかへらん」。

【所載】後撰集・恋五・九七〇

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の後撰集「よみ人知らず」とは一致しない。ただし貫之集・六四六に「やまびこの声のまにまに尋ねゆかばいふ事もなく我やまどはん」という類似した歌がある。

九九四 山びこはきみにぞあるらし心みにわれとひやめばおとづれもなし^{せず}

【異同】ナシ

【現代語訳】山彦はあなたであるらしい。(呼べば答えるけれど、それだけで、自分からは呼んでくださらない)、ためしに私が問うことをやめれば(あなたからは)何の音沙汰もない。

【語句】○心みに 試みに。○われとひやめば 我問ひ止めば。「とふ」は見舞う、訪問するなどの意。○おとづれもせず 「おとづれず」はサ変動詞。訪問する、手紙で安否を問うの意。

【所載】ナシ

【参考】拾遺抄・二九四「山びこは君にもにたるころかな我こゑせねばおとづれもせず」(拾遺集・六四四にもある)は同じ内容の歌。答えはするがそれ以上の働きかけのない憂(うれ)いを歌う。

九九五 よも山のやまの山びこなければやわがよぶこゑにこたへだにせぬ

【異同】やまの山びこーやまのひこ(桂)

【現代語訳】四方の山という山に、山びこがないから、わたしの呼ぶ声に(あなたからの)返事さえないのか。

【語句】○よも山 四方の山。まわり全部の山。○やまの山びこ 用例は多い。「嘆き樵る斧のひびきの聞こえぬは山のやまびこいつちいにしぞ」(興風集・四二二)。○こたへだにせぬ 「こたへず」という動詞。「ぬ」は打ち消しの助動詞「ず」の連体形。「なければや」の係助詞「や」に呼応して、返事さえもしないのか、の意となる。

【所載】ナシ

(以上五首担当 平野)

九九六 あふことのやまびこにしてそらならば人めもわれはよきぞあらまし
つらゆき

【異同】よきすそあらまし―よきすそ有らし(桂)

【現代語訳】お会いすることが、まるで山彦のようなもので実際にはないのであるならば、他人の目も私は避けずにいられますものを。

【語句】○あふことの 格助詞「の」は主格を表す。○やまびこにして 「にして」は、「に」が断定の助動詞「なり」の連用形で、……であつての意。○そらならば 「そら」は、実に対する虚の意味で、実際にはない状態を意味する。「山彦」がそら(空中)にあつて実在しないのと、「あふこと」が存在しない意とを掛ける。所載欄の貫之集には「よそならば」とある。○よきすそあらまし 「よく」(他動詞・上二段)は、よける、避けるの意。「まし」は、反実仮想の意で、「こは、実際にその事実がないならば人目を避けなくて済むものなのに、現実には人目を気にして憚らねばならない、の意。

【所載】貫之集I・五五八

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

九九七 うちわびてよば^はむこゑにやまびこのこたへぬそらはあらじとぞ思

【異同】よば^はむこゑに―よばむこゑに(御)

【現代語訳】つらい思いで呼び続ける声に、山彦が答えない空はあるまいと思う。恋の苦しい思いを訴えたならば、きつと何かの答えがもどってくるはずと思う。

【語句】○うちわびて 「うちわぶ」の「うち」は接頭語、「わぶ」は、悲観する、嘆く、思いわずらう、意。「葦引」の山田のそほつうちわびてひとりかへる(「帰る」「蛙」の掛詞)のねをぞなきぬる(後撰集・恋四・八〇六)。
○よばはむこゑに 「よばふ」は、「呼ぶ」の未然形「よば」に、反復継続の意の助動詞「ふ」が付いたもので、助動詞「む」は、仮定の意味。ずつと呼び続けるとしたら、その声に。○山びこのこたへぬそらはあらじとぞ思
山彦は音声がこだまして返ってくるもの、相手からの反応がきつとあるはずだと思ふ、の意。「山彦の答へぬそらはよにもあらじ声をさへにも隔てつるかな」(西宮左大臣集・七七)。なお、所載欄の古今集には「こたへぬ山」。

【所載】古今集・恋一・五三九／後撰集・恋五・九六九／西宮左大臣集・四三／貫之集（新編国歌大観・陽明文庫本）・六五五

【参考】所載欄に示したように、貫之集と西宮左大臣集に見える。古今集によみ人知らず、後撰集では贈答歌仕立て三首中の第一首で、やはりよみ人知らずとするが、貫之集に見えるところから、片桐洋一『古今和歌集全評釈』は、古今集のよみ人知らず歌の中に、貫之の歌が混じっている可能性も考えねばならぬと指摘する。なお、古今六帖・九九三番歌は、後撰集では当該歌の返歌である。

九九八 うぐひすのなくねをまねに山びこのことありがほにもとめつるかな
伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】うぐいすが鳴く声をまねして答える山彦を、何か意味ありげな様子で返事を求めていることだよ。

【語句】○うぐひすのなくねをまねに 「まねに」は、例歌なく不審。所載欄の文献「まねぶ」で解す。鶯の鳴く声をまねして。何か特殊な事情がありそうだが、よくわからないので、完璧な解は示しにくい。○ことありがほに 何かわけのありそうな顔つき、様子で。意味ありげな様子で。「ながめつつことありがほに暮らしてもかならず夢に見えばこそあらめ」（後拾遺集・恋一・六七九）。なお、所載欄の文献では「友ありがほに」とある。○もとめつるかな 「山びこを」とあるので、答えを求めて音声を発している主体は、女性に返事を求めていると解した。

【所載】夫木抄・三七八／金葉集初度本・春・四三／伊勢集Ⅱ・三三五／伊勢集Ⅲ・三三八
【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。

九九九 山びこのよそにこたへしこゑなれどことひしこそうれしかりけれ

【異同】こと○ひしこそーことひしこそ（御）

【現代語訳】山彦が関係なしに答えた、あなたが他の人にお答えになった声ですが、ものを言っておられるのを聞きしたのは、嬉しかったことです。

【語句】○よそにこたへし 「よそに」とは、自分とは関係のないところで、の意。他人に。○こととひしこそ

詠歌事情が不明であるが、「こととふ」は、ものを言う、話す、意に解した。○うれしかりけれ 強意「こそ」の結びで「けり」の已然形。女性の声を聞いて、男が恋の思いを言いかけることができた。所載欄の文献には「恋しかりけれ」とある。

【所載】伊勢集Ⅰ・二六九／伊勢集Ⅱ・二六九／伊勢集Ⅲ・二七一

一〇〇〇 山びこのあひとよむまでつまごひにのしかなく山にひとりのみして
やかもち

【異同】つまごひに―妻こひの(大)

【現代語訳】山彦が響きあうほどに妻を恋い慕って牡鹿が鳴く、その山に私はたった独りでいることよ。

【語句】○山びこのあひとよむまで 「あひとよむ」の「あひ」は接頭語、「とよむ」は、あたりに響きわたるほど声をたてること。○つまごひに 妻が恋しくて。

【所載】万葉集・一六〇六(旧一六〇二) 山妣姑乃 相響左右 妻恋尔 鹿鳴山辺尔 独耳為手 ヤマビコノアヒトヨムマデツマガゴヒニシカナクヤマニ(カナクヤマヘニ) ヒトリノミシテ やまびこのあひとよむまでつまごひにのかなくやまへにひとりのみして

【参考】作者名「やかもち」は、所載欄の文献に一致する。万葉集では、家持が、妻の坂上大嬢を奈良京に残して、久邇京にあつた時の詠で、左注に「天平十五年癸未八月十六日作」とある二首の中の一つ、内舍人時代の作である。なお、当該歌の上句は、万葉集左注に古歌集にあるとする長歌「……山彦の あひとよむまで ほととぎす 妻ごひすらし さよなかになく」(一九四一(旧一九三七))の一節に類似する。

〔以上五首担当 斎藤・加藤〕

一〇〇一 いづかたにわれとよめとまじへかやまびこのこたへしかたにおとづれもせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】どちらの方向へ迷い行けと行って、山彦が応えるように返信をくれたところを私は訪ねることもしないのか。

【語句】○いづかた どの方向。どちら。○われまどへとか 「まどへ」は「まどふ(迷う、さまよう)」の命

令形。「山彦の声のまにまに尋ねゆかばいふ事もなく我やまどはん」（貫之集・六四六）。○やまびこ「やまびこ」は銚（こたま）。九九一番歌参照。恋歌では、人の出した声が山に反射して帰って来る銚を、恋人の応答によそえる。「こたへ」「おと」は「やまびこ」の縁語。○おとづれもせぬ「おとづれ」は訪問、音信、たより。たよりもよよこさない。訪れることもない。「やまびこは君にも似たる心かな我声せねばおとづれもせず」（拾遺集・六四四）は、自分が声を出さなければ相手が答えないことを「やまびこ」に喩えているが、当該歌は「やまびこ」が答えたのに「訪れもせぬ」とあり、自らの心の迷いを詠んだものか。

【所載】ナシ

一〇〇二 いかならむいはほのなかにすまへかはよのうきことのたづねこざらむ

【異同】すまへかは―すまへかは（桂）、すまへはか（大）

【現代語訳】いったいどのような深い山の中の岩窟に隠れ住んだならば、世の中のつらいことがやって来ないだろうか（そんなところなどない）。

【語句】◎いはほ 「ほ」は「秀（ほ）」の意。地上に突き出た高く大きな岩。○いかならむ どんな、どのような。形容動詞「いかなり」の未然形＋推量の助動詞「む」の連体形。ここでは「いはほ」にかかる連体修飾語。○いはほのなか 岩窟、洞窟の中。俗世を離れた山奥の住処のたとえ。○すまばかは 「かは」は疑問、反語の係助詞。ここでは反語。○よのうきことのたづねこざらむ 「よのうきこと」を擬人化した表現。この世のつらいことが訪ねて来ないだろうか。来ない場所などない。「すまばかは」の反語に呼応している。「らむ」は現在推量、実際は「世の憂きこと」が聞こえてくる所において、そうでない場所を想定している。「鳥の音も聞えぬ山と思ひしに世のうきことはたづねきにけり」（風葉集・一四〇四）。

【所載】古今集・雑下・九五二／奥儀抄・五六五／和歌色葉・二八七

【参考】顕昭から古今余材抄までの古今集の注釈書は、法句譬喩経・無常品の「梵志（バラモンの僧侶）の四人兄弟が、七日後に命が尽きると知り、神通力でそれぞれ大海、須彌山、虚空、市に隠れるが、無常殺鬼から逃れることはできなかつた」という話が本説であるとすると、新日本古典文学大系『古今和歌集』では、文選・遊仙詩七首の道士鬼谷子などを想像したものとす。

一〇〇三 みよしのゝいはきりとをしゆく水のおとにはたてじこひはしぬとも

【異同】ナシ

【現代語訳】吉野の、岩間をぬって激しく流れる水の音、そのようにはつきりと心中の思いを声に出しては言
うまい、たとえ恋死するとしても。

【語句】○みよしの 「み」は美称。吉野。○いはきりとをしゆく水 岩切り通（とほ）し行く水。岩間をぬ
って行く水。「岩間を貫き通して流れる」とする説もあるが、「石にさはりて横切り流れる水」とする古今余材
抄の説をとる。「みよしの……ゆく水の」までが「音」にかかる序詞。○おと 「音」は、水の音と、言葉、声
の両義。○こひはしぬとも たとえ恋い焦がれて死んだとしても。恋死は万葉集からみられる類型だが、水に
囚んだ例歌として「山高み下行く水の下にのみ流れて恋ひむ恋は死ぬとも」（古今集・四九四）がある。

【所載】古今集・恋一・四九二／家持集Ⅰ・二八三／家持集Ⅱ・二九七／奥儀抄・一八九、四九六

【参考】「高山の岩もとたぎち行く水の音には立てじ恋ひて死ぬとも」（万葉集・二七二七（旧二七一八））の類
想歌と考えられる。

一〇〇四 あまごろもなづるちとせのいはほをもひさしきものとわがおもはななくに

【異同】なづるちとせの―なづはちとせの（桂・大）

【現代語訳】天人の衣が撫でる千歳の岩さえも、私には久しいものとは思われませんのに。

【語句】○あまごろも 「あまごろも」は、「難波潟潮満ちくらしあま衣田蓑の島にたづ鳴き渡る」（古今集・
九一三）のごとく、通常は海人の衣の意で、「尼」「雨」と掛詞になる場合もあるが、当該歌は天人の衣の意。

天人の衣は、「これやこのあまの羽衣うべしこそ君がみけしと奉りけれ」（伊勢物語・十六段・二六）のごとく
「あまの羽衣」とされることが多いから、そこから連想された語か。所載欄の平中物語では「天つ袖」となっ
ている。○なづるちとせのいはほ 天人の羽衣が撫でる千歳の岩。「いはほ」は一〇〇二番歌参照。いわゆる
「盤石劫」といわれる伝説の故事で、奥儀抄によれば、天人が三年に一度地上に降りてきて、「三銖（さんしゆ）」
しかない軽い衣で方四十里の石を撫で尽くすまでの時間を一劫とする、というもの。「君が代は天人の羽衣まれ
に来て撫づとも尽きぬいはほならなん」（拾遺集・二九九、是則集・二五）。○わがおもはななくに 私には思え
ないのに。私は思わないものを。「ななくに」は打消の助動詞「ず」のク語法に助詞の「に」がついたもので、詠

嘆的打消。「朝霜の消やすき命誰がために千年もがもと我が思はなくに」(万葉集・一三七九(旧一三七五))、「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに」(万葉集・三八二九(旧三八〇七))など、文末の用法は上代に多い。

【所載】平中物語・一一四

【参考】平中物語(二九段)では、「いはほにも身をなしてしか年経てもをとめが撫でむ袖をだに見ん」という男の贈歌に対し、琴弾く女の返歌として載る。

一〇〇五 いかばかりひさしくもあらずあまごろもおとめがなづるいはゞかりなり

【異同】ナシ

【現代語訳】そんなに長い時間でもありません。天人の衣で、天女が撫でるといふ岩(が無くなる)くらいです。

【語句】○いかばかり 平叙文においては程度のはなはだしさをいう副詞。どんなに。たいそう。非常に。○あまごろも 一〇〇四番歌参照。○おとめがなづるいは 「なづるいは」は一〇〇四番歌参照。「お(を)とめ」は天女。盤石劫の故事と乙女(天女)が結びつけられた早い例としては、「八乙女の袖かと思ゆる女郎花君を祝ひて撫ではじめけり」(亭子院女郎花合・四九、夫木抄・四二二八)があり、その後も「動きなきいはほのはても君ぞ見む乙女の袖の撫で尽くすまで」(拾遺集・三〇〇/元輔集・五七)、「いつしかも袖うちかけむ乙女子が世をへて撫づる岩の生ひ先」(源氏物語・濔標・二五〇)、「君が世に天つ乙女の行き通ひ撫づるいはほの動きなきかな」(続後拾遺集・六〇二、六条齋院歌合・二二)などがある。

【所載】ナシ

【参考】詠作事情は不明であるが、大和物語四十三段に、恵秀という僧が横川に籠もり、場所を聞かれた時、女に贈った「なにばかり深くもあらず世の常の比叡を外山とみるばかりなり」と似た構造を持つ。本当は大変なことなのに、いやたいしたことないと言つてみせた歌。

(以上五首担当 中野)

伊勢

一〇〇六 いはのうへをすみかにしたるあしたづはよをのどかにも思べきかな

【異同】ナシ

【現代語訳】盤石の岩の上を棲家している鶴は、世の中をきつと穏やかで変わらぬものと思っっているだろうよ。

【語句】○あしたづ 葦の生えている水辺にいる鶴、の意から次第に、鶴の意を表す歌語となる。○のどかにも

「のどかなり」は穏やかで静かなさま。岩は不変のもの、その上に住む鶴は、千年の齢をさらにゆつたりとのどかに過ごすに違いないと歌う。所載欄の伊勢集ⅠⅡによると、八条大将藤原保忠の四十賀の折の屏風歌であり、伊勢集Ⅰの詞書に「岩の上に鶴立てるところ」とある。

【所載】伊勢集Ⅰ・一八六／伊勢集Ⅱ・一九〇／伊勢集Ⅲ・一八八

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。

一〇〇七 こけながら□けるいはほはひさしくて君にくらぶるところあるかな
を
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】苔の生えたまま置いてある大きな岩は久しくあって、あなた様の齢に並んでいるという気持があるのだなあ。

【語句】○こけながら 苔の生えたままで。岩に苔が生じるには長い時がかかる。所載欄の貫之集ⅠⅡに「苔ながく」。○をけるいはほは お（置）けるいはほは。「いはほ」は、一〇〇二番歌参照。所載欄の貫之集ⅠⅡに「生ふるいはほの」。○君にくらぶるところあるかな 苔むした岩は君の齢とつりあうという気持があるのだなあ。

「君」は祝われる人。「比ぶ」は、比較できる、つりあうものとする、の意。君の幾久しさを祝う。所載欄の貫之集Ⅰに「……心やあるらん」、貫之集Ⅱに「……心あるらん」。

【所載】貫之集Ⅰ・一九四／貫之集Ⅱ・八三

【参考】作者名「貫之」は所載欄の文献に一致する。なお、所載欄の貫之集Ⅰによれば、宇多法皇四十賀の折の屏風歌の一首。

岑

みつね

一〇〇八 しがらきのみねたちかくす春がすみはれずもゝのおもふころかな

【異同】ナシ

【現代語訳】信楽山の頂をおおうように立ちこめた春霞はいつまでも晴れない、私も心晴れやらすものを思い続ける今日この頃であるよ。

【語句】◎岑 峰。山の頂上。「山尖高也」（十卷本和名抄）、「峰とは山の高き所也」（顕注密勘抄）。万葉集から詠まれる。山の名が付される時もあるが、付されない歌が多い。霞・雲・霧・雪、日・月、桜・紅葉・松・杉、鹿・鳥など、さまざまな景物と取り合わせて詠まれる。○しがらきのみねたちかくす 既出六〇八番歌参照、第二句「たちこゆる」とある他は当該歌に同じ。「たちかくす」は春霞が信楽山頂をおおいかくす、の意。

【所載】古今六帖・第一帖「かすみ」六〇八番既出

【参考】作者名「みつね」とあるが、他文献で確認できなかった。

一〇〇九 しらくものたえずたなびみにだにすめばすみぬるよにこそありけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】白雲が絶えずたなびいているこのような高い峰にでさえも、住めるものであったよ。人の世とはそんなものであったよ。

【語句】○みねにだに 人里から隔絶したこんな山の頂にすら、の意。○すめばすみぬる 住めば住みぬる。住んでみれば住むことのできた。「住みぬる」の、完了の助動詞「ぬ」には、こうして暮らしてこられたという気持がある。所載欄の貫之集には「住めば住まるる」。○よにこそありけれ 人の世というものであったなあ。上の句で様々な情況を示して、末の句でこのフレーズで歌いおさめる歌は多い。「手に結ぶ水にやどれる月影のあかなきかの世にこそありけれ」（拾遺集・一三三二・紀貫之）。

【所載】古今集・雑下・九四五／小町集Ⅰ・九八／貫之集（新編国歌大観・陽明文庫本）・五五七／新時代不同歌合・二一／万葉集時代難事・六三

【参考】古今集には、作者名を惟喬親王とする。ただし、所載欄の貫之集にも、また小町集にも見える。

一〇一〇 秋かぜのふきにし日よりおとはやまみねの木ずえも色づきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風が吹き出したその日からずっと、音羽山は峰の梢もすっかり色付いてきたことだなあ。

【語句】○秋かぜのふきにし日より 秋風が吹きはじめたその日以来。秋の到来は風の音により知るところから、三句の「音羽山」を導く。○おとはやま 「音羽山」は山城の歌枕。京都市山科区と大津市の境の山で、逢坂の関とは峰続き。

【所載】古今六帖・第六帖「紅葉」四〇七五／古今集・秋下・二五六／貫之集Ⅱ・八六／秀歌大体・七五

【参考】作者名「貫之」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

一〇一一 　　たに
　　とりのねもきこえぬたにのむもれ木はわが人しれぬなげきなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】鳥の鳴く音も聞こえぬほど深い谷にある埋もれ木は、わたしの、人知れずもの思う嘆きの「木」であつたのだなあ。

【語句】◎たに 谷。台地や山地にはさまれて、低い地形が細長くつづくところ。和歌では、満たされぬ思いや疎外感の比喩として詠まれる場合がある。○むもれ木 埋もれ木。樹木が長い年月にわたつて地中や水底に埋もれて硬くなったもの。「色好みの家に埋もれ木の人知れぬこととなりて」（古今集仮名序）のように、世に知られず人に顧みられないものの比喩として言われることが多い。○人しれぬなげき 他人に知られることなく、ひとり心の中にこめた悲嘆。「なげき」は長息（ながいき）の約。思いにたえかねてもらす溜息のこと。転じてもの思い、悲嘆。「嘆き」に「木」を掛け、深い谷にある「埋もれ木」は人に知られぬ「嘆き」の「木」であつた、としたもの。

【所載】貫之集Ⅰ・六四五

【参考】貫之集Ⅰでは、恋の部にある歌。

一〇二二 ひかりまつたにゝは春もよそなればさきてとくちるもの思もなし
ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】光のさし入るのを待っているこの谷では、華やかな春も無縁のことだから、花が咲いてすぐ散るのを悲しむという、世の常のもの思いさえすることがないのだ。

【語句】○ひかりまつたに 光のさし入るのを待っている谷。不遇沈淪の状態にあるわが身の比喻。平地と違って谷では、陽の光のさしこむことが少なく、それだけに光を待つ気持ち強い。○春 花の咲く季節。ここでは時勢に恵まれた境遇の意。○よそ 自分とはかかわりのないこと。○さきてとくちるもの思もなし 花が咲いたかと思えばすぐ散ってしまう、というはかなさに心を痛めることすらない。うち捨てられた者の疎外感。

【所載】古今集・雑下・九六七／新撰和歌・二九一／深養父集Ⅰ・三一／時代不同歌合・一四一
【参考】作者名「ふかやぶ」は、所載欄の文献に一致する。

一〇二三 あさか山かすみのたにしふかければわがものおもひはるゝよもなし

【異同】ナシ

【現代語訳】あさか山の、かすみのこめた谷が深いから、その谷底にいるようなわたしのもの思いは、深くとざされて晴れるときもない。

【語句】○あさか山 安積山。陸奥の歌枕。現福島県郡山市安積山公園のあたりという。○かすみのたにし 霞のこめた谷が。「し」は強意。○ものおもひ 霞の谷にこめられた身、というところから見て、おそらく不遇沈淪のもの思いであろう。○はるゝよ もの思いの晴れるとき。「よ」は、時期・時節の意。

【所載】夫木抄・九一二三／和歌童蒙抄・一八八

【参考】夫木抄では、当該歌は「よみ人知らず」だが、これと並んで、「あさ日山かすみの谷に冬ごもりわがもの思ひのはるるよもなし」（九一二四）が、深養父の作としておさめられている。

一〇二四 宮木ひくあづ^{そま}さのそまにたつなみのやむときもなく恋わたるかな
イツミ

【異同】 イツミ あつさのそまに―あつさのそまに（御・桂）、いつみのそまに（大） たつなみの―たつたみの（大）
【現代語訳】 宮木を引き出すあずまの柚に立つ波はやむときがない。おなじようにわたしもまた、やむときなくあの人を恋いつづけている。

【語句】 ◎そま 柚。木材を得るために植林してある山。○宮木 宮殿を造るための用材。○ひく 伐り出した木材を曳いて運び出すこと。○あづまのそま 東国の柚。万葉集では「いづみのそま」となっている。○たつなみの 柚に波の立つことは不審だが、次歌のように、木材を「そま山がは」に流して運び出すこともあり得るので、仮に、その意と見ておく。万葉集では「たつたみの」。上三句は「やむときもなく」を言うための序詞。○恋わたる 長い期間にわたって恋い続ける。

【所載】 新勅撰集・恋二・七二二／万葉集・二六五三（旧二六四五） 宮材引 泉之追馬喚犬二 立民之 息時無
態度可聞 ミヤギヒクイツミノソマニタツタミノヤムトキモナクコヒワタルカモ みやぎひくいつみのそまに
たつたみのやむときもなくこひわたるかも／夫木抄・九〇一六／人麿集Ⅱ・三二二／人麿集Ⅲ・三二一／綺語抄
・三四九／古来風体抄・一三一

【参考】 第二・第三句に異伝のある歌である。大久保本は万葉集の本文と一致し、その方がわかりやすいが、ここでは底本の本文に従って解した。なお、古今六帖で同じ「そま」題の下にある一〇一八番歌には、当該歌との類似性が認められる。

一〇一五 いかだおろすそま山がはのみなれざほさしてくれどもあはぬ君かな

【異同】 ナシ

【現代語訳】 木材を筏にして流しおろす柚山川では、みなれ棹で棹さして下る。わたしもこうして、あなたをめぐらしてやってくるのだけれども、逢ってくれないあなただよなあ。

【語句】 ○いかだおろす 木材を筏に組み、川の流れを利用して運びおろすこと。○そま山がは 柚山を流れ下る川。「そま」は一〇一四番歌参照。○みなれざほ みなれざを。舟を操って水になじみ馴れた棹。○さして棹さすの意の「さして」に、めぐらすの意の「指して」をかける。上三句は「さして」を言うための序詞。

【所載】 新勅撰集・恋二・七二二

〔以上五首担当 山下〕

一〇一六 そま山にたつすぎくれのおもてく人ひかるゝ君はたのまじ

【異同】ナシ

【現代語訳】そま山に立つ杉の木がそれぞれの方向に向くように、会う人ごとにその人の方に向くあなたはもうあてにしません。

【語句】○そま山 植林した山。○すぎくれ 「くれ」は山から切り出したままの材木。ここでは杉の立ち木。

「そま山にたつすぎくれの」までが「おもてく」にかかる序詞。○おもてく それぞれ。各人それぞれ。「かくおもておもてに、とさまかくさまにいひなさるれど」（蜻蛉日記・中）。○ひかるゝ 心を惹かれる。木材を引き出す。「ひかるる」は心を惹かれるに木を引かれるを掛ける。○たのまじ あてにしません。信用しません。

【所載】ナシ

一〇一七 まきばしらつくるそま人いさくめのかりほのためとおもひけんやは

【異同】いさくめのーいさらめの（大）

【現代語訳】真木柱を植えて育てているそま人は、ほんのかりそめの小屋を建てるためと思つて樹を育てただろうか。いや思いもしなかつただろう。

【語句】○まきばしら 檜や杉の立派な柱。宮殿や屋敷などに用いる。○つくる 木を育てる。植林する。○そま人 木を植えたり、伐り出したりする人。○いさくめ 万葉集では「伊左佐目」とあり、「いさくめ」のおどり字が「く」と誤写されたもの。「いささめ」のこと。「いささめ」はほんのすこし。かりそめということ。「いささめ」にときまつまにぞ日はへぬる心ばせをば人に見えつつ」（古今集・四五四）。○かりほ かりいほ（仮庵）の略。仮に作つた旅宿用の小屋。○おもひけんやは 思つただろうか。いや思いもしなかつただろう。「やは」は反語。

【所載】万葉集・一三五九（旧一三五五）真木柱 作蘇麻人 伊左佐目丹 借盧之為跡 造計米八方 マキバシラツクルソマビトイササメニカリホノタメトツクリケメヤモ まきばしらつくるそまびといささめにかりほのためとつくりけめやも／和歌童蒙抄・一九一

一〇一八 みやぎひくいづみのそまにたつ雲のやむときもなくわがこふくは

【異同】ナシ

【現代語訳】宮木を引き出す泉のあるそま山に、立ちのぼる雲が絶え間ないように、やむ時もないのだ、わたしの恋する心は。

【語句】○みやぎ 宮殿を造営するための材木。「みやぎひく」はその材木を山から引き出すこと。○そま さま山の略。植林した山。○たつ雲の たちのぼる雲が。「みやぎひくいづみのそまにたつ雲の」までは「やむときもなし」にかかる序詞。○こふらくは 恋うことは。「恋ふ」のク語法。

【所載】ナシ

【参考】類歌として「みやぎひくいづみのそまにたつたみのやむときもなくこひわたるかも」（万葉集・二六五三（旧二六四五）・「みやぎひくあづさのそまにたつなみのやむときもなくこひわたるかな」（古今六帖「そま」一〇一四）があげられる。

一〇一九 おのゝえはくちなば又もすげかくむえうきよのなかにかへらずもがな

【異同】すげかくむえすへかへん（桂）

【現代語訳】山中で囲碁の見物に夢中になって斧の柄が朽ちたのなら、またすげかえればよいのだ。山を降りてつらいこの世に帰らずにいたいものだなあ。

【語句】◎おのゝえ 晋の王質が山へ木を伐りに行き山中で、仙童の囲碁を見ていたが、一局終わらないうち、手にした斧の柄が腐ってしまい、村に帰るともとの人は既に亡くなっていた、という述異記にみえる故事から、ほんのしばらくと思っている間に久しい年月を過ごすことをいう。○うきよのなか つらい世の中。○もがな 願望し、期待する意を表す。……であつたらいいなあ。

【所載】俊頼髓脳・三五六／和歌童蒙抄・五一—

一〇二〇 ふるさとはみしともあらずおのゝえのくちしところぞこひしかりける
とものり

【異同】みしともあらず―みしこともあらず（御・大）

【現代語訳】昔住んでいた所は、私が知っていた頃とは違ってしまった。斧の柄が朽ちるほど夢中になって暮らした所が恋しいことだなあ。

【語句】○ふるさと 昔住んでいた所。○みしとも 御所本・大久保本は「みしことも」なので、底本は「こ」が脱落したものであろう。「みしごとあらず」は以前知っていた所の様子でもない。○おのゝえのくちしところ 所載欄の古今集の詞書に「つくしに侍りける時にまかり通ひつつ暮うちける人のもとに京にかへりまうできてつかはしける」とあり、筑紫国で碁を打っていた友人の所。晋の王質が仙童の碁を見ていて、一局終わらないうちに斧の柄が朽ちてしまったという故事による。

【所載】古今集・雑下・九九一／新撰和歌・二九五／新撰朗詠集・五〇六／友則集・五八／奥儀抄・五七三／和歌色葉・二八八

【参考】作者名「どものり」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 林〕

一〇二一 よしの山なげきこるてふおのゝえのほとくしくもありしほどかな

【異同】よしの山―ふしの山（御・大）

【現代語訳】吉野山で投げ木を伐り出すという斧の柄がほとほとと音をたてる、私は嘆きが凝り固まってほとほと死にそうになっていたことですよ。

【語句】○よしの山 吉野山。大和国の歌枕。現在の奈良県吉野郡の山々。異同欄に示したように、「ふしの山」とする伝本もある。○なげきこる 「投げ木（薪として火に投げ入れる木）樵る」に「嘆き凝る」を掛ける。「なげきこる山とし高くなりぬればつらづゑのみぞまつつかれける」（古今集・一〇五六）。○おのゝえ をのえ。斧の柄。一〇一九番歌参照。○ほとくしく 「ほとほとし」は、死にそうだという意。「人のもとより、久しう心地わづらひてほとほとしくなんありつると言ひて侍りければ」（後撰集・一二四八）。斧の音の擬音語「ほとほと」を掛け、三句目までは「ほとほとし」を導く序。「なげ木こる人入る山の斧の柄のほとほとしくもなりにけるかな」（拾遺集・九二二）、「宮つくる飛彈の匠の手斧音ほとほとしかる目をも見しかな」（拾遺集・一二二六・国用）。「投げ木」「樵る」「ほとほと」は、「斧」の縁語。

【所載】ナシ

【参考】木を伐るために斧を持って山に入ることに ついては、晋の王質が木を伐りに山に行き、仙童の碁を見らうちに斧の柄が朽ちていたという故事（述異記による）がある。一〇一九番歌・一〇二〇番歌参照。また、この故事を踏まえた道綱母の「薪（たきぎ）こることは昨日に尽きにしをいざ斧の柄はここに朽たさむ」（道綱母集・三六）が、拾遺集・枕草子などに採られて有名。

すみがま

一〇二二 たにふかくやくすみがまのけぶりだにみねはくもとはならぬものかは

【異同】ナシ

【現代語訳】谷の奥深くで炭を焼く炭竈の煙でさえ、山の峰まで立ち上れば雲とならないことがありまじょうか。必ず雲となりますよ。

【語句】◎すみがま 木材を蒸し焼きにして炭を作る竈。歌題として見えるのは古今六帖が早い例。人が訪れることもない山奥で煙を立てている炭竈の侘びしさ、もの寂しさが詠まれたり、「炭」に「住み」を掛けたりして詠まれた。○みねはくもとは 峰は雲とは。所載欄の文献では「峰の雲とは」。「杣山に立つ煙こそ神無月時雨を下す雲となりけれ」（拾遺集・一一三八・能宣）のように、煙が高く立ち上れば雲になるとされた。

【所載】続詞花集・四九五／万代集・一五二二／夫木抄・七五五四／兼盛集Ⅰ・八三／兼盛集Ⅲ・九二一
【参考】恋の思いの火の煙が雲となるという発想により、自分の思いの強さを訴えるか。「限なき思ひの空に満ちぬればいくその煙雲となるらん」（拾遺集・九七一・円融天皇。所載欄の兼盛集Ⅰには「女の、いとおもひのほかになどいひけり」、兼盛集Ⅲには、「女の、などおもひのほかにといひければ」という詞書がある。

一〇二三 ときは木を猶すみがまにこりくべてたえじけぶりのそらにたつなは

【異同】ナシ

【現代語訳】常磐木を相変わらず伐つて炭竈にくべて、それでは煙が空に立つのは絶えないでしょう。あらぬ噂が立つのは絶えることがないでしょうよ。

【語句】○ときは木 常磐木。常緑樹。不変のものという語感を持つ。火にくべるとくすぶる。○こりくべて

樵り焼(く)べて。伐つてくべて。○たえじ 絶えじ。絶えないだろう。「けぶりのそらにたつなはたえじ」を倒置して強調した。○けぶり 思いの火の煙が詠まれることも多かった。一〇二二番歌参照。「木」「樵り焼(く)べ」「煙」は、「炭竈」の縁語。○そらに 煙が空に立つ意の「空に」と、「虚に」とを掛ける。「世の人のあだに立つ名と秋霧の空に立つ名といずれまされり」(忠岑集・一〇六)、「まことかと見れども見えぬ七夕は空になき名を立てるなるべし」(貫之集・二二二)。「空」「立つ」は、「煙」の縁語。○な 名。噂。評判。

【所載】元良親王集・九

【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の元良親王集では、次のように、親王の詠に対する女(一条藏人)の返歌として見える。

うかれめたきぎに住みたまふことを、世の人言ひ騒ぐを聞きたまで、
くらむどに言ひつかはしける

ひとりのみ世にすみがまにくぶる木の絶えぬ思を知る人のなき(七)
また

いとへどもうき世の中にすみがまのくゆる煙を消つよしもがな(八)
御返し、女

ははきぎをまたすみがまにこりくべて絶えじ煙の空に立つ名は(九)

一〇二四 ながめつゝよにすみがまのわ^れ人もしたにもゆともたれかしるべき

【異同】ナシ

【現代語訳】ずつと物思いに耽りながら暮らしている私のことを、他人は、(炭竈の火がくすぶるように)秘かに恋の思いに燃えているとも、誰が知るはずがあるうか。誰も知らないだろうよ。

【語句】○よにすみがま 「よに」の「世」は、世の中、世間。特に男女の仲の意を込める。「花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」(古今集・一一三・小野小町)。「すみ」は、「世に住み」の「住み」と、「炭竈」の「炭」とを掛ける。「くゆりつつ世にすみがまの煙たきを吹きつつ燃やせ冬の山風」(好忠集・三六〇)、「うちはへてくゆるも苦しいかだなほ世にすみがまの煙たえなん」(後拾遺集・八一九・藤原範永女)。○われ人も 底本「ひ」にミセケチがあるので、「我、人も」と解釈した。○したにもゆ 下に燃ゆ。秘かに恋の思いに燃える。炭竈の火がくすぶる意と、心の中で秘かに恋い焦がれる意を掛ける。「蚊遣火は物思

ふ人の心かも夏の夜すがら下に燃ゆるん」（拾遺集・七六九・能宣）。「燃ゆる」は、「炭竈」の縁語。

【所載】ナシ

一〇二五 ひとめだにみえぬ山べにたつそらくもをたれすみがまのけぶりといふらむ
まとの左大臣

【異同】ナシ

【現代語訳】人が（住むことはおろか）訪れることさえもない山辺に立つ雲を、いったい誰が住んで焼いている炭竈の煙だと言うのだろう。

【語句】○ひとめだにみえぬ 人目だに見えぬ。人が訪れることさえもない。「人目」は、人の訪れ。「山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草もかれぬと思へば」（古今集・三一五・源宗子）。○すみがま 炭竈。「すみ」は、「住み」に「炭」を掛ける。

【所載】後撰集・雜四・一二五七

【参考】作者名「まとの左大臣」は、所載欄の後撰集によると、「北辺左大臣」すなわち源信（まこと）のこと。恋の暗喩のある歌か。一〇二四番歌参照。

〔以上五首担当 長戸〕

せき

一〇二六 やくもたついつもくのくにのてまのせきのなづけしよしもしられず
せき

【異同】てまのせきの―てまのせき（御・大） なつけしよしも―てまとなつけしよしも（大）

【現代語訳】出雲の国の「てまの関」の名づけられた事情も知りません。

【語句】◎せき 関所。歌題としては堀河百首に採用されるのが早い例。○やくもたつ 「出雲」にかかる枕詞。「八雲立つ出雲八重垣妻ごみに八重垣作るその八重垣を」（古事記・一）。○てまのせき 手間の関。出雲国意宇郡に置かれた関。現在の島根県安来市伯太町安田関（旧能義郡伯太町）にあったと比定される。「國の東の境なる手間の剗（せき）に通るは、卅一里一百八十歩」（出雲国風土記）。「さりとともと思ひしかども八雲たつてまの

関にも秋はとまらず」（堀河百首・八六八）。○なづけしよしもしられず 本文不審。寛文九年版本では本文を「なづけしかしもしられず」とし、「本いかなるてまに君さはるらんイ」という傍記を付す。大久保本「てまとなづけしよしもしられず」によって解す。

【所載】ナシ

【参考】作者名「せき」とあるのは不審。作者名に人物を比定し得ない例としては一三六五番歌「みわの御」（三輪明神）がある。これと同様に関所を擬人化したものと解すべきか。また、他文献には、「八雲たついづものくにのてまのせきてまとなづけそよしまじられず」（夫木抄・九五六一）や「やくもたついづものくにのてまのせきいかなるてまに人さはるらむ」（奥儀抄・三五八、和歌色葉・一二九）など、よく似た歌が見える。

一〇二七 まてゝはゞ人もみむやわがせこをとゞめかねてぞてまとなづけし

【異同】まてゝはゞ―まてくはゞ（御）、まてしはし（大）

【現代語訳】「待て」と言えば気付いてくれるのでしょうか。あの人を引き留めることができなかつたからこそ「てま」と名づけたのです。

【語句】○まてゝはゞ 「まてといはば」の約。「待て」と言えば。「まてといはば寝てもゆかなむしひて行く駒の足をれ前の柵橋」（古今集・七三九）。○てまとなづけし 「待て」と言っても戻ってこなかつたので、ひっくり返して「てま」と言えば戻ってくるという趣向か。

【所載】古今六帖・第五帖「とどまらず」三〇五三

【参考】歌枕名寄では「まてといはば人しるらむやわがせこをとゞめかねてぞ手まよひの関」（九六八三）という歌を「未勘国」の巻に載せる。また『校證古今歌六帖』は一〇二六番歌とこの歌を「此二首問答なるべし」と注記する。

一〇二八 あふことをなはしろ水にまかせてはこさむこざらばをやまだのせき

【異同】こさむこさらは―こさんこさしは（桂）

【現代語訳】逢瀬を苗代水に任せるとなると、越すも越さないというのも（逢坂の関ならぬ）「小山田の関」次第なのですね。

【語句】○なはしろ水 苗代に引いた水。○まかせては 「まかせ」は任せるの意と、水を引くの意の「引(まかせ)」を掛ける。「山田」の縁語。「はるくれば山田の水打ちとけて人の心にまかすべらなり」(拾遺集・四六)。○こさむこざらば この本文では「越さむ来ざらば」となる。底本「ら」を「し」の誤写と見て、桂宮本「こさむこさじは」の本文で解す。○をやまたのせき 小山田の堰。「を」は接頭語。「堰」に「関」を掛ける。この「関」は恋の道の関。「なはしろの水こさせずとうらむるは君が心やをやまたのせき」(大斎院前御集・一三六)。

【所載】 夫木抄・九五三三／六百番陳状・一七八

一〇二九 かはぐちのせきのあらがきまもれどもいらでわれぬしのびくに

【異同】 ナシ

【現代語訳】 河口の関の荒垣はしっかりと見張っているけれども、そこを入らずに私は夜を過ごしましたよ、ひそかに。

【語句】 ○かはぐちのせき 伊勢国一志郡に置かれたとされる関所。現在の三重県津市白山町川口(旧一志郡川口村)あたりに比定される。「岫田(くきた)の関」ともいい、枕草子に「関は 逢坂。須磨の関。鈴鹿の関。くきたの関。白河の関。衣の関。……」とある。○あらがき 荒垣。目の粗い垣根。○まもれども 見張りをしているけれども。「まもる」は、見張りをする。「衣手に水洪付くまで植ゑし田を引板我が延へまもれる苦し」(万葉集一六三八(旧一六三四))。○いらで 見張りのいる「荒垣」に入らずに。周囲の監視の目をくぐり逢うことができたという設定。参考欄にあげた催馬楽や、古今六帖の版本では「出でて」とあり、女性が厳しい監視の目を盗んで抜けだしたことになる。○しのびくに ひそかに。たいそう人目を避けて。「みちのくのあだちのまゆみわがひかばすゑさへよりこしのびしのびに」(古今集・一〇七四)。

【所載】 ナシ

【参考】 催馬楽・河口に「河口の 関の荒垣や 関の荒垣や まもれども はれ まもれども 出でて我寝ぬや 出でて我寝ぬや 関の荒垣」とある。

一〇三〇 かはぐちのせきのあらがきいかなればよるのかよひをゆるさざるらむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】河口の関の荒垣はどういうわけで、夜の通いを許さないのでしょうか。

【語句】○かはぐちのせきのあらがき 前歌参照。○いかなれば どういうわけで。 どうして。

【所載】新千載集・恋三・一二九五／万代集・一九八〇／夫木抄・九五四一

〔以上五首担当 青木〕

一〇三二 たちよらばかげふむばかりちかきまにあひみむせきをたれかすへけむ

【異同】あひみむせきを―あひ見ぬせきを（御・桂・大）

【現代語訳】立つて寄つたら、影を踏むほど近い距離なのに、お目にかかれぬ関を誰が設けたのでしょうか。

【語句】○かげふむばかり 影法師を踏むぐらい。○あひみぬせきを 逢うことができない関、すなわち二人を遮る関を。○たれかすへけむ 誰か据えけむ。誰が据えたのだろうか。「か」は疑問の係助詞。

【所載】後撰集・恋二・六八二

【参考】後撰集には、

寛平のみかど御ぐしおろさせたまうてのころ、御帳の
めぐりにのみ、人はさぶらはせたまうて、ちかうよせ

られざりければ、かきて御帳にむすびつけける 小八条御息所

たちよらば影ふむばかりちかけれど誰かなこそその関をすゑけん

とあり、語句にかなりの異同があるが、同じ歌と認めてよいであろう。「寛平のみかど」は宇多天皇、「小八条御息所」は大納言源昇女で、宇多天皇の更衣。

一〇三二 たちよらばこしまのせきのかためてはいもがこころはうたがひもなし

【異同】ナシ

【現代語訳】「あからまのこしまの関」が関を固めているように、しっかりと見守っている以上、彼女の心は疑う余地がありません。

【語句】○あからまの 「あからまの」は意味不明。万葉集や夫木抄では「あかごまの」とある。「こ」と「ら」は誤りやすい。○こしまのせきの 「こしまのせき」は所在不明。夫木抄でも「こしまのせき」とあるが、万

葉集の「越馬柵」を「こしまのせき」と読んだか。上二句は「かためては」の序であろう。

【所載】万葉集・五三三(旧五三〇) 赤駒之 越馬柵乃 緘結師 妹情者 疑毛奈思 アカゴマノコユルウマ
ヲリノシメユヒシイモガココロハウタガヒモナシ あかごまのこゆるうませのしめゆひしいもがこころはうた
がひもなし/夫木抄・九五六〇

【参考】万葉集の題詞には、「天皇賜海上女王御歌一首」とあり、「天皇」に注して「寧楽宮即位天皇也」とある。聖武天皇のことである。

一〇三三 かみつけやいちしのはらのいちしろくわれとしみえ人にしらすな
はら

【異同】われとしみえ―われとし見えぬ(大)

【現代語訳】はつきりと、私と逢ったとは人に知らせないでください。

【語句】◎はら 広く平らなところ。歌ではたとえば「いちしのはら」のように、しばしば固有名詞の一部として用いられる。○かみつけや 「かみつけ」は上野国。現在の群馬県。○いちしのはらの 「いちしのはら」は所在不明。上二句は「いちしるく」の序。○いちしるく 明白に。はつきりと。「人にしらすな」にかかるか。○われとしみえ 音数不足。大久保本に「われとし見えぬ」とあるが、平安期における副助詞「し」の一般的な用法は、たとえば「きつつなれにしつましあれば」(古今集・四一〇)や「まつとし聞かばいま帰り来む」(古今集・三六五)のように条件句の中で用いられる。こゝも「われとし見えば」とでもありたいところ。現代語訳は大意を述べるにとどめた。

【所載】ナシ

【参考】万葉集・六九一(旧六八八)に、

青山を横ぎる雲のいちしろくわれと笑まして人に知らゆな
とか、歌経標式・五に、

みちのべのいちしのはらの白妙のいちしろくしもあれ恋ひめやも
などという、表現のよく似た歌がある。

一〇三四 きみがゝるこぎゝのはらにゐる雲のたえてわかるゝこひもするかな

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたが刈る小笹の原にかかっている雲が、やがて離れて行くように、もう二度と逢えない恋をするこすね。

【語句】○きみがゝるこざゝのはらにゐる雲の 「こざゝのはら」は小笹の生えている原を言うのであるうが、「雲」を導く語としては奇異な感じを免れない。上三句は「たえて」の序であろう。「風ふけば峰にわかるる白雲のたえてつれなき君が心か」（古今集・六〇一）。

【所載】ナシ

【参考】類歌として、古今六帖・第五帖「かさ」三四六三に、

君が着る御笠の山にゐる雲のたえてはつがる恋もするかな

があり、同様の歌は、新千載・恋三・一四二一、万葉集・二六八三（旧二六七五）にも見える。

一〇三五 あさ日さすあちが原のしもよりもきえてこひしきふるきことのは

【異同】あちか原の—あさちか原の（御・桂・大）

【現代語訳】朝日が射す、浅茅の原の霜は消えやすいが、それ以上に消え入らなばかりに恋しく思われる、あの人の、昔の言葉です。

【語句】○あちが原 他本文の「あさちが原」に従った。丈の低い茅が一面に生えている原。普通名詞である。○きえてこひしき 消え入らなばかりに恋しい。無性に恋しい。「けさはしもおきけむ方もしらざりつ思ひいづるぞきえてかなしき」（古今集・六四三）。○ふるきことのは かつての恋人の愛の言葉でもあろうか。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一〇三六 なにしをへばいづれもかなしあさな／＼なで／＼おほし／＼うなひこがはら
山のうへのをくら

【異同】ナシ

【現代語訳】毎朝撫でて養育した「うなみこ（小児）」という名がついているので、どこもかしこも愛しくてたまりません、うなみこがはらはら。

【語句】○なにしをへば 名にし負へば。名がついているので。「名にしおはばいざ言とはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」（古今集・四一一）。○あさな／＼ 毎朝。朝ごと。「あさなあさな立つ河霧のそらにのみうきて思ひのある世なりけり」（古今集・五二二）。○なで／＼おほし／＼ 「おほす」は成長させる、養育する意。「朝夕に撫でておほしし草なればおひてみゆるぞ我がやどの萩」（古今六帖・三七一九）。○うなみこがはら 未詳。「うなみこ」は、うなみ髪（髪を襟首のあたりに垂らして切り揃えた子どもの髪型）にした子どもの意。「うなみこ」の例歌として、拾遺集一六番に「郭公をちかへりなけうなみこがうちたれ髪のみさみだれの空」（貞文が家の歌合に・躬恒）がある。

【所載】ナシ

【参考】歌枕名寄九四七二番には「宇奈比児原」の題でこの歌がみえる。当該歌の作者名には「山のうへのをくら」とあるが、歌枕名寄九四七二番には作者名はない。

一〇三七 こひしくはみかたの原をいでゝみむまたあさがほのはなはさくやと

【異同】ナシ

【現代語訳】恋しく思うのならばみかたの原に出てみましょう。また（あの人の顔を思わせる）朝顔の花がさいているかどうかと。

【語句】○みかたの原を みかたの原に。「を」は動作の対象を示す。「武庫の浦の入り江の渚鳥羽ぐくもる君を離れて恋に死ぬべし」（万葉集・三六〇〇（旧三五七八）。「みかたの原」は、若狭国三方郡の原か。三方の海は風光明媚で知られる。「若狭なる三方の海の浜清みい行き還らひ見れど飽かぬかも」（万葉集・一一八一（旧一七七七））。○あさがほのはな 朝顔の花。「あさがほ」は現在の「むくげ（木槿）」とも言われている。すぐに枯れてしまうところから、はかないものとして詠まれることが多い。ここでは、顔の表象か。「もろともに折れどもなしに打ちとけて見えにけるかなあさがほの花」（あさがほの花前にありける曹司より、男のあけていで侍りけるに／後撰集・七一六）。

【所載】夫木抄・四五七四

一〇三八 秋かぜの日ごとをかにふけば水くきをかこのはも色づきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風が日増しに吹くと、岡の木の葉も色づいてきましたよ。

【語句】◎をか 岡。周圀の土地よりも小高くなっている所。丘陵。古くは万葉集にも岡を詠んだ歌は散見される。固有の岡や歌枕としての岡を詠むことが多い。○日ごとに 日を追うごとに。○水くきをか 「水茎の」は「岡」にかかる枕詞。固有名詞ととる説もある。「水くきの岡のやかたに妹とあれと寝てのあさけの霜の降りはも」(古今集・一〇七二)。

【所載】拾遺集・雑秋・一一一四／万葉集・二一九七(旧二二九三) 秋風之 日異吹者 水茎能 岡之木葉毛 色付尔家里 アキカゼノヒニケニフケバミヅクキノカノコノハモイロヅキニケリ あきかぜのひにけにふけば みづくきのをかこのはもいろづきにけり／夫木抄・五八三〇／人麿集Ⅰ・一二八、二二一／人麿集Ⅱ・一〇五／秀歌大体・七二／和歌童蒙抄・一八七

一〇三九 みこしをかいくそのよびはの左大臣にとしをへてゆキツふのみゆきをまちキツてすぐらん

【異同】ゆふのみゆきを—けふのみゆきを(桂・大) まちてすぐらん—まちてきたらん(大)

【現代語訳】「ゆふ」は「けふ」の誤写として解す」御輿岡はいく十の御世に年月を経て、今日の御幸を待つて過キツごしたのだろう。

【語句】○びはの左大臣 藤原仲平。太政大臣基経の二男。枇杷殿に住んでいたので、枇杷左大臣とよばれた。貞観十七(八七五)年、天慶八(九四五)年、七一歳。○みこしをか 御輿岡。北野の西南、紙屋川の西岸の地にある岡。○ゆふ 桂宮本・大久保本や所載欄の後撰集では「けふ」。「けふ」の誤写と考えられる。○みゆき 天皇などがお出ましになること。○まちてすぐらん 待つて過キツごしたのだろう。

【所載】後撰集・雑二・一一三三／袖中抄・七九五

【参考】作者名「びはの左大臣」は所載欄の文献に一致する。後撰集一一三二番の詞書に「延喜御時賀茂臨時祭の日、御前にてさかづきとりて」、一一三三番の詞書「おなじ御時、北野の行幸に、みこし岡にて」とあり、延

喜の御時の北野行幸に際しての詠であることがわかる。日本紀略の延喜十七（九一七）年十月十九日条に「天皇幸北野為遊覧」とある。

一〇四〇 みちのくのありといふなるかたをかのおかをわが身にそふるころかな

【異同】ナシ

【現代語訳】陸奥にあるとかいう「片岡」、その岡の名に自分の身をなぞらえるころですよ。

【語句】○かたをかのおか 「かたをかの岡」の地名として二つの候補地がある。一つは、和名抄に見える下野国塩屋郡六郷の一つ、片岡郷で、現在の栃木県矢板市。もう一つは、常陸国風土記那賀郡条にみえる茨城県水戸市と笠間市の境にある嘯時臥（くれふし）山である。普通名詞の「片岡」は丘の一方が傾斜して高く、一方がなだらかな平地になっている丘のこと。「片」には「対のもの一方、半分、ひとり」等の意味があり、「かたをかのおか」には、満たされない思いが込められているか。初句から第三句までは「をか（岡）」を導く序詞。○そふる 「そふ」（下二段活用）は、「付け加える」「なぞらえる」意。「たな霧らひ雪も降らぬか梅の花咲かぬが代にそへてだに見む」（万葉集・一六四六（旧一六四二））。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 三浦〕

一〇四一 きみがよもわがよもしらにいはしろのおかのたか^くか^さねをいざむすびてん

【異同】わかよもしらに—わかよもしらす（御・桂・大） おかのたか^くか^さねを—おかのかやねを（大）

【現代語訳】君の命も私の命もどうなるか分からない。今はこの岩代の岡の草根をさあしつかりと結んで、幸せになりましょう。

【語句】○きみがよ 君の命。君の寿命。○しらに 知らない。「に」は打消しの助動詞「ず」の古い連用形。

○いはしろのおか 岩代の岡。紀伊国の歌枕。和歌山県日高郡南部町岩代。「岩代の松」「岩代の浜」などの形で詠まれる。有間皇子の「いはしろの浜松が枝を引き結びまさきくあらばまたかへりみむ」（万葉集・一四一）は有名。○たかね 「たかねをむすぶ」は意が通らない。所載欄の万葉集は「草根」とあるのでそれによって訳した。○いざむすびてん さあ結びましょう。草の葉を結んで愛情、幸福、健康を願う呪術があった。

【所載】古今六帖・第五帖「はじめてあへる」二五八〇／万葉集・一〇 君之齒母 吾代毛所知哉 磐代乃岡之草根乎 去來結手名 キミガヨモワガヨモシレヤイハシロノヲカノクサネライザムスピテナ きみがよもわがよもしるやいはしろのをかのくさねをいざむすびてな／夫木抄・九一三六

一〇四二 みちのくのつゝじのおかのそまつゞらつらしといもをけふぞしりぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】みちのくのつゝじの岡に生えているそまつゞらよ、薄情な人だとあなたを今日はつくづく知ったことだ。

【語句】〇つゝじのおか つつじをか。陸奥の歌枕。宮城県仙台市つつじが岡の丘陵。「ひまもなく咲けるをみれば今日こそはつつじの岡の名にはおひけれ」（教長集・一六九）。〇そまつゞら 未詳。つゞら（葛）は野山に生える蔓草なので、蔓草の類か。所載欄の夫木抄は「くまつゞら」「くまつゞら」は多年草、夏秋頃淡紫色の小花をつける。「みちのくのつゝじのおかのそまつゞら」は、同音のくり返しによって「つらし」を導き出す序詞。〇つらし つれない。薄情だ。〇いも 男が妻や恋人を親しんで言う語。

【所載】夫木抄・九一六四

一〇四三 あしびきの山なしをかにゆくみづのたえずぞ君をこひわたるべき

【異同】ナシ

【現代語訳】山なし岡に流れる水が絶えないように、私はあなたを絶えることなくずっと恋い慕うつもりだ。
【語句】〇山なしをか 山梨県東八代郡春日居町鎮目の岡。「甲斐がねに咲きにけらしなあしひきのやまなしをかの山なしの花」（能因集・四二二）。〇ゆくみづの 流れる水が。流れる水が絶えないように恋い続けるというのは、当時の常套表現。上三句までは「たえず」を言い出すための序詞。〇こひわたるべき 恋しく思い続けるつもりだ。

【所載】続古今集・恋一・一〇四六

一〇四四 ふなをかのともしにたてるしら雲のたちわかるともあはれとぞ思

【異同】ナシ

【現代語訳】船岡の船尾や船首と見えるあたりにたちこめている白雲が離れていく。あの雲のように君と別れ別れになったとしても、愛しいと思う気持は変わらないよ。

【語句】○ふなをか 山城国の歌枕。京都市北区紫野の大徳寺の西南にある丘陵。○ともへ 艫と舳。船尾と船首。「ふなをか」の縁で「ともへ」と言った。○たちわかるとも 立ち別るとも。離れ離れになったとしても。上三句は「たちわかるとも」を言い出す序詞。○あはれとぞ思 ああ恋しいと思う。「たちかへりあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつ白波」（古今集・四七四）。

【所載】ナシ

一〇四五 あはぬみようしやのおかのかりはすれどなをだにたえぬとりにもあるかな

【異同】うしやのおかの―うしやのおかに（御・桂・大）

【現代語訳】恋しい人に逢えない我が身よ。うしやの岡に狩をしてあの人を手に入れようとするけれども、憂しやの岡という名さえ絶えないで恋の実現しない私だなあ。

【語句】○あはぬみ 逢はぬ身。恋しい人に逢えない身。○うしやのおか うしやのをか。未詳。○かり 大鷹（鷹の雌）や小鷹（はやぶさ・はしたか）を使って野山で雁、鴨、兎などを捕らえる狩猟。ここでは女を手折ることを喩える。○なをだにたえぬ 名をだに絶えぬ。「憂しやの岡」という名さえ絶えない。○とり 「狩」の縁で、自分を不甲斐ない「鳥」にたとえた。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 橋本智美・林〕

もり

一〇四六 おほらきのもりのしたくさおいぬれとこまもすさめずかる人もなし

【異同】もり―ナシ（大） おほらきのおほらきの―おほあらきの（大）

【現代語訳】大荒木の森の下に生えた草は老いてしまつて、馬も心を留めないし、刈る人もいない。

【語句】◎もり 杜・森。木立のある所。または神域の木の茂つた所を言う。枕草子に「森は うへ木の森。石田の森。木枯の森。うたた寝の森。岩瀬の森。大荒木の森……」とあるように、単なる森としてよりも、歌枕として用いる場合が多い。○おほらき「おほあらき（大荒木）」の「」に同じ。大荒木の森は山城国と大和国の二説がある。山城とするのは八雲御抄や扶桑京華誌で、現在の京都市伏見区淀水垂町だという。大和とするのは万葉集に「大荒木の浮田の杜の」（二八五〇（旧二八三九））とあるのを根拠とし、奈良県五条市今井町の荒木神社の森か、とされる。○したくさ 下草。下に生える草。日のあたらぬ身である自分の比喩。当該歌以降、大荒木の森は「下草」と共に詠まれることが多くなる。○すさめず 心に留めないで。

【所載】古今六帖・第六帖「したくさ」三五七四／古今集・雑上・八九二／新撰和歌・三〇五／和漢朗詠集・四四一

【参考】作者名「おのゝこまち」（小野小町）とあるが、所載欄の古今集ではよみ人知らずとする。

一〇四七 人しれぬおもひするがのくにゝこそ身を木がらしのもりはありけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】人知れず私はもの思いをする、この駿河の国にこそ、（思いの火で）身を焦がす木枯らしの森はあ

るのだつたよ。
【語句】○人しれぬおもひするがの 人知れぬ思ひ駿河の。「する」に「駿河」を掛ける。「人しれぬおもひするがのふじのねのもえつつのみやこひわたるべき」（躬恒集IV・三三三六）。○木がらしのもり 木枯らしの森。枕草子「森は」章段にも出てくる歌枕。静岡市葵区羽鳥の、藁科川の中州にある森を指す『角川日本地名大辞典』。夫木抄は「こがらしのもり 木枯 駿河又山城」としている。「木枯らし」に「焦がらし」を掛ける。

【所載】夫木抄・一〇〇七四

一〇四八 山しろのいはたのもりのはゝそはらいはねど秋は色づきにけり
きのらう女

【異同】ナシ

【現代語訳】山城の石田の森の柞原よ、なにも言わないけれど、秋になって葉が色づいているのだな。飽きの色になつてきたなあ。

【語句】○いはたのもりの 石田の森の。万葉集以来の歌枕で京都市伏見区石田周辺。上三句は「いは」の音で下句の「いはねど」を導く序詞。○はゝそはら 柞原。柞が生えている原の意。柞は現在のナラ・クヌギ。黄葉する。

【所載】夫木抄・六〇六二

一〇四九 いづみなるしのだのもりのくずのはのちえにわかれてものをこそ思へ

【異同】ちえにわかれて―ちゝにわかれて(御・大)

【現代語訳】和泉にある信太の森の葛の葉が千枝にわかるるように、心は千々に乱れて物思いをすることだ。

【語句】○いづみなるしのだのもり 和泉なる信太の森。大阪府和泉市の北部、葛葉稻荷社にあった森。安倍晴明の出生譚である葛の葉伝説で有名。○ちえにわかれて 千枝に分かれて。茎が沢山に分かれているさま。上三句は「ちえにわかれて」を導く序詞。

【所載】夫木抄・一〇〇九三

一〇五〇 きみこふとわれこそむねをこがらしのもりとはなしにかげになりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたを恋うて、私こそが胸を、木枯らしの森でもないのにひどく焦がして、影のようにはかなくなつてしまいます。

【語句】○こがらしのもり 一〇四七番歌参照。○かげになりつゝ 恋をして、身も細る思いで影のようになつてしまふ、とする表現。「恋すればわが身は影と成りにけりさりとて人にそはぬものゆゑ」(古今集・五二八)。

【所載】夫木抄・一〇〇七五／平中物語・一五段・七一

(以上五首担当 杉本)

一〇五一 ふくかぜになびきもせなむおもふことわれにもいはのもりのした草

【異同】ナシ

【現代語訳】吹く風になびきもしてほしい、いはのもりの下草よ、（私の方へ心を寄せてほしいと）思っていることを、私にも言わせて。

【語句】○なびきもせなむ なびいてほしい。「せなむ」は、サ変動詞の未然形「せ」に、詠えの助詞「なむ」が接続したかたち。所載欄の文献では「なびきもしなん」。○いはのもり 所在不詳。「言は（せ）」をかける。所載欄の文献では四句は「われにいはせの」「いはのもり」は「いはせのもり」とは別らしい。

【所載】続後撰集・恋三・八一—

一〇五二 いとはやもなきぬるかりかこがのもりきにはふつたもみぢあへなくに
おほとものとら女

【異同】○おほとものとら女—おほとものらう女（桂）

【現代語訳】なんと早くも鳴いた雁か、久我の杜の木に這う鳶もまだ色変わりしそうでしていないのに。

【語句】○いとはやもなきぬるかりか いと早くも鳴きぬる雁か。北から飛来する雁の声を知らぬのだが、まだその時期ではないのに、という気持ち。「いとはやもなきぬるかりか白露のいろどる木々もみぢあへなくに」（古今集・二〇九）の初・二句に等しい。この言い回しは他にも例がある。古今六帖・三二七〇など。○こがのもり 久我（こが）の社。山城国愛宕郡。久我神社については大日本地名辞書に賀茂氏の氏神であつて建角身（タケツノミ）、一名八咫鳥（ヤタガラス）を祭るとする。この神が石河瀬見小川（イシカハノセミノヲガハ）に鎮座し、これを賀茂（カモ）といったとの記述が袖中抄の「セミノヲガハ」の項にある。現在の下鴨神社より北。「賀茂」の名は古くは「久我」であつた。なお、「こがのもり」は古今六帖・第五帖「人をよぶ」の「うちむれてこん人はなほこがのもりきぎのみぢのまだらぬまに」（二八四四）にもある。○もみぢあへなくに もみぢしきらないのに。下二段動詞「もみぢ」の連用形「もみぢ」に、「あへず」の連体形「あへぬ」のク語法「あへなくに」が接続したかたち。「あへぬ」はその上の動詞を受け、「……しきらない」の意味を加える。

【所載】夫木抄・六〇三五

【参考】作者名「おほとものとら女」は所載欄の文献に一致しない。夫木抄には「題不知六帖読人不知」とある。

一〇五三 おもふとはなにをかさらにみ山なるしげりのもりをわれとしらなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】「思う」とは何をさらに見るのだろうか。深山のしげりの森のふかさこそ私なのだと思ってほしいのです。

【語句】○おもふとはなにをかさらに 「思ふ」とは何をかさらに。自分の相手を思う気持ちの深さを強調する歌に「何をかさらに」を用いた例として「おもふとはなにをかさらにいし水こころをくみて人はしらなん」（古今六帖・一四五八）がある。この例歌では、「思う」とは何をさらに言おうか、言えない、の意。○み山なるしげりのもり 山深くある「茂りの森」。「み山」の「み」に「見」をかける。上からの続き「おもふとはなにをかさらにみ（む）」。「しげりの森」は固有名詞ではないだろう。「おほあらしのもりのしたくさしげりありひて深くも夏のなりにけるかな」（古今六帖・一〇五）の名歌により、「み山なるしげりのもり」は深いものの例えとしたか。

【所載】ナシ

【参考】歌枕名寄では「しげりのもり」の所在地を定めかね、第三十六未勘国上に「茂森」として「思ふとはなにをかさらにみ深山なるしげりの森を我としらなん」を挙げる。

一〇五四 いもがいへにいくたのもりのふぢのはないまこむ春もかくこそはみめ

【異同】ナシ

【現代語訳】生田の杜の藤の花の美しいこと！これからめぐりくる春もいつもこうして眺めたいものだ。

【語句】○いもがいへに 妹が家に。「イク」を導く。現代語訳には入れない。○いくたのもり 生田のもり、とすれば摂津国。ただし所載欄の万葉集には「いくりのもり」とある。○いまこむ春 これから来るであろう春。「む」は仮定を示す助動詞。○かくこそはみめ このようにしてこそ見よう。「みめ」は「見め」。「め」は助動詞「む」の已然形。上の「こそ」を受けて係り結び。

【所載】万葉集・三九七四（旧三九五二）伊毛我伊敝尔 伊久里能母里乃 藤花 伊麻許牟春毛 都祢加久之見牟 イモガイヘニイクリノモリノフヂノハナイマコムハルモツネカクシム いもがいへにいくりのもりの

ふぢのはないまこむはるもつねかくしみむ／和歌童蒙抄・五四七

【参考】夫木抄・三一〇二「いもがいへにいくりの森の藤の花いまこんはるもかへらばぞ見ん」という酷似した歌があるが、同一歌とは認定しない。

一〇五五 きくからにもゆるおもひは山しろのいはたのもりになくよぶこどり

【異同】ナシ

【現代語訳】声をきくやいなや恋しさに燃えるような思いでいっぱいになるのは、山城のいはたのもりにもゆるおもひは山しろのいはたのもりになくよぶこどり

【語句】○きくからに 聞くやいなや。聞くとすぐに。○もゆるおもひ 燃ゆる思ひ。恋しく人を思い身を焦がすことを言う。「消えずのみもゆる思ひは遠けれど身もこがれぬる物にぞ有りける」（後撰集・九九〇）。所載欄の夫木抄では「もゆる歎」とある。○いはたのもり 一〇四八番参照。○よぶこどり 呼び鳥。春から夏にかけて鳴く鳥。現在の何の鳥にあたるかは不明。郭公（かつこう）、また「ほととぎす」などの説がある。万葉集には「呼兒鳥」「喚兒鳥」などの表記で九例あり、平安和歌では「をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくもよぶこどりかな」（古今集・二九）をはじめ「人を呼ぶ」をかけて多く詠まれた。

【所載】夫木抄・一八三五

〔以上五首担当 平野〕

一〇五六 かたらひもりのことのはちりぬらんおもひの山のまつぞかはらぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】語らって下さったあなたの言葉は、かたらい森の木の葉が秋が来て散ってしまったように、今はなくなっていることでしょう。私の方は、思いの山の松と同じく、変わらぬお持ちしています。

【語句】○かたらひもり 語らひ森。初句は「かたらひの」の「の」が脱落したものと見る。「かたらひの森」の所在は不明。「かたらひのもり」「かたらひもり」は他に管見に入らないが、「かたらひ山」なら、「さよ更けてかたらひ山のほととぎす独り寝覚めの友と聞くかな」（肥後集・七六）があり、「談山 多武峰」のこと（肥後集全釈）。また、枕草子「岡は」の段に「かたらひの岡」の名がある。○ことのはちりぬらん ことばの意の

「ことのは」に木の葉の「は」を掛けた。「深き思ひそめつといひし言の葉はいつか秋風吹きて散りぬる」(伊勢集・二九四)。○おもひのやま 思ひの山。その所在は不明。「思ひ」は愛情の意。「あはれわがおもひの山をつきおかば富士の高根もふもとならまし」(夫木抄・八〇九六)。「かたらひの森」に「思ひの山」を対比させたか。○まつぞかはらぬ 松の葉の色が変らぬように、私の待つ気持ちも変らない。「松」に「待つ」を掛けた。

【所載】 夫木抄・一〇〇二一

【参考】 所載欄の夫木抄は古今六帖の二帖として当該歌をあげながら、「かたびらのもりのこのはは散りぬともおもひは山のまつぞかはらぬ」と全く別の趣の歌になっている。そして、「かたびらのもり」は、「国未勘之」とし、一本の「かたこひのもり」は「陸奥なり」とする。

一〇五七 たつた山たちなば君がなをみしめいはせのもりのいはじとぞ思

【異同】 ナシ

【現代語訳】 もし噂に立ったならば、あなたの名譽が惜しまれるので、私は決して二人の間のごとは、人に漏らすまいと思つています。

【語句】 ○たつた山 竜田山。大和国の歌枕。奈良県生駒郡の西方にある山。同音の「たつ」によつて第二句の「たちなば」を導く。「君によりわが名はすでにたつた山たちたる恋のしげきころかも」(万葉集・三九五三(旧三九三一))。なお、所載欄の文献は「たつた川」。○たちなば 噂に立ったならば。○なをみしめ 名を惜しみ。名が汚れるので、の意。○いはせのもりの 同音の「言はじ」を導く。磐瀬森は、大和国の歌枕。奈良県生駒郡斑鳩町にある森か。「ほととぎす」「鶯」「呼子鳥」「蟬」など鳴くものや、「紅葉」とともに詠まれることが多い。「かむなびのいはせのもりのほととぎすけなしの岡にいつか来鳴かむ」(万葉集・一四七〇(旧一四六六))。○いはじとぞ思 言はじとぞ思ふ。口に出すまいと思つています。

【所載】 後撰集・恋六・一〇三三／和歌初学抄・二二五

【参考】 所載欄の後撰集には、作者名「元方」とあり、詞書に、「しのびて住みはべりける人のもとより、かかるけしき人に見すなと言へりければ」とあり、詠歌事情が知られる。当該歌は、所載欄の和歌初学抄「両所ヲ詠歌」中に見えるように、二つの地名が詠み込まれる。

一〇五八 かつみつゝいはねのもりにすむせみはときをしらずやなきわたるらむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】実際には相手の姿を見ていながら、どうしてあのいわねの森に住む蟬はいつもいつも鳴き続けているのだろうか。実際にはあの人の姿を見ていながらどうして私は思いを口に出せずに、いつも泣いているのだろうか。

【語句】○かつみつゝ 一方では姿を見ていて。実際に姿を見ながらも。○いはねのもり にすむせみは いわねの森に住んでいる蟬は。「いはねの森」の所在は不明。「いはねの森」は、当該歌と次の一〇五九番歌にしか見えない。所載欄の文献に、出典を「六帖」として、「いはせの森」とある。「いはせの森の蟬」を詠む歌は後世の歌合に見える（夫木抄・三五九一・「長久二年五月庚申夜祐子内親王家名所歌合」）。○ときをしらずやなきわたるらむ どうしていつもなき続けているのであろうか。「ときをしらず」とは、いつもいつも、の意。係助詞「や」は疑問。「なき」に、「泣き」と「鳴き」とを掛け、「わたる」はずつと……し続ける、の意。

【所載】 夫木抄・三五九二、九九八八

一〇五九 つらきをもいはねのもりのしたにをふるくさのたもとぞつゆけかりける

【異同】 したにをふる―下にせる（大）

【現代語訳】いはねの森に生える下草がいつも露に濡れている。辛い思いを口に出さずじっとこらえている私の袖は、涙に濡れがちです。

【語句】○つらきをもいはねのもりの つらきをもいはねの森の。森の名の「いはね」に「言はね」を掛ける。「いはねの森」については一〇五八番歌参照。なお、所載欄の文献には、「つらきをもいはての山の」とある。○したにをふるくさの 下に生（お）ふる草の。森の木々の下で生育する草、それと同じように、の意。なお、所載欄の文献「谷におふる草の」。○たもとぞつゆけかりける 袂ぞ露けかりける。私の袂は涙がちで濡れてばかりいる。木の雫で下草が濡れている景に、涙がちで袂が濡れている人事を重ねて言っている。

【所載】 新勅撰集・雑四・一三一四

一〇六〇 わがゝどのわさともいまだかりあげねばかねてうつろふ神なみのもり

いっのおとくろまる

【異同】 わさともいまたーわさたもいまた (大)

【現代語訳】 家近くの早稲田もまだ稲刈りが終わっていないのに、はやくも紅葉し始めているよ、かむなみの森は。

【語句】 ○わがゞどのわさとも 「わさど」は不審。大久保本や所載欄の文献「わさだ」に拠って現代語訳した。

○いまだかりあげねば まだ稲刈りも終わっていないのに。「刈りあぐ」は、稲刈りをすっかり終えること。接続助詞「ば」は、ここでは逆接の意。○かねてうつるふ まだその時期が来ていないのにはやくも紅葉している、の意。「かねて」は、前もって、あらかじめ、の意。「うつるふ」は、色が変わる、紅葉すること。○神なみのもり 「かむなびのもり」「かみなびのもり」とも。「かむなび」は、「神の辺」の意で、神が鎮座する神聖な山や森を表す普通名詞。なお、万葉集では、「かむなびの磐瀬の杜」(一四三三(旧一四一九)、一四七〇(旧一四六六))、「……うまさけを神奈備山の帯にせる明日香の川の……」(三二八〇(旧三二六六))が大和国として詠まれる。後には、撰津国や丹波国の歌枕としても詠まれる。

【所載】 家持集Ⅰ・一八五/家持集Ⅱ・二二三

【参考】 作者名「いつのおとくろまろ」は、万葉集に見える「忌部首黒麿(いむべのおびとくろまろ)」を指すか。古今六帖に見える「忌部首黒麿或本をとくろ」(三三四)「いべのおとくろまろ」(三五六・一四一一)は、同一人物か。古今六帖・三三四番歌の参考欄参照。

当該歌の上句をほぼ同じくするものに、「わが門のわさだもいまだかりあげぬにけさふく風に雁はきにけり」(古今六帖・一一二〇)があり、下句が同じ表現をとるものに、「神な月時雨もいまだ降らなくにかねてうつるふ神なびのもり」(古今集・二五三)がある。

〔以上五首担当 斎藤・加藤〕

一〇六一 神無月しぐれにそむるもみぢばをにしきにをれるかみなびのもり
つらゆき

【異同】 ナシ

【現代語訳】 神無月に、時雨によって紅く染められるもみぢ葉を、錦に織っている神南備の森よ。

【語句】 ○神無月しぐれにそむるもみぢば 神無月が、時雨によって紅葉させているもみぢ葉。「神無月」は陰

曆十月、時雨、紅葉と常套的に取り合わされる。ここでは擬人法の主語とみる。「そむる」は、他動詞マ行下二段活用「染む」の連体形。時雨がしみ込んで色をつける。所載欄の貫之集は「神無月時雨にそめて」とあり、わかりやすい。元の形であったか。○にしきにをれる。錦に織れる。一面の紅葉を錦に織ったと見立てる。上三句の垂直方向の表現を、水平方向への広がりへに転ずる。○かみなびのもり 奈良県生駒郡斑鳩町にあるが、普通名詞とする説もある。一〇六〇番歌参照。時雨、紅葉の名所。「錦に織れる」の主語で、擬人化された表現。初句の「神無月」と頭韻が響き合う。「神無月時雨もいまだ降らなくなにかねてうつろふ神なびのもり」（古今集・二五三）。

【所載】貫之集Ⅰ・五〇五／貫之集Ⅱ・八九

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集では、「天慶五年亭子院御屏風のれうのうた廿一首」の内の一。一首。

一〇六二 人につくたよりだになしおほあらしのもりのしたなるくさのな身なればみつね

【異同】ナシ

【現代語訳】他に頼りにできる伝手（つて）すらありません。大荒木の森の下草のように誰からも顧みられないわが身です。

【語句】○つく あるもののそばを離れずに従う。頼りになる者に添い従う。○たより 頼みとしてすがれるような縁故。よるべ。「たよりにもあらぬ思ひのあやしきは心を人につくるなりけり」（古今集・四八〇）の「たより」は消息、音信の意だが、人につくとしており、当該歌と表現が似る。○おほあらしのもりのしたなるくさの身 「おほあらしのもり」は奈良県五条市の荒木神社とする説、京都市伏見区の与村（よど）神社とする説などがあり、死者を葬るまでの間、屍を仮に安置した「殯（あらしき）」を意味するともいう。一〇四六番歌参照。「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」（古今集・八九二、古今六帖・一〇四六）を本歌として、誰からも顧みられぬ我が身を、大荒木の森の下草に喩えた。

【所載】古今六帖・第六帖「したくさ」三五七六／後撰集・雑二・一一八六／躬恒集Ⅰ・二七九／躬恒集Ⅱ・一九七／躬恒集Ⅲ・三〇三／躬恒集Ⅴ・一六六

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。所載欄の後撰集の詞書には「もとより友達に侍りけれ

ば、貫之にあひ語らひて、兼輔朝臣の家に名簿を伝へさせ侍りけるに、その名簿に加へて貫之に送りける」、兼輔と主従関係を結ぶために名簿（なづき。権勢家と主従関係を結ぶ際になどに身分証明として贈る、自分の姓名を記した名札）を提出した折、仲介の労をとってくれた貫之に贈った歌とある。

一〇六三 おほあらしのもりの草とやなりにけむかりにきてとふ人のなきかな
たぐみね

【異同】ナシ

【現代語訳】わが身は、大荒木の森の草となってしまったのだろうか。ほんのかりそめにでも訪ねてくれる人もないよ。

【語句】○おほあらしのもり 一〇六二番歌参照。○かりにきて 草を「刈りに来て」に、仮初めにやつて来る意の「仮に来て」を掛ける。「山城の淀のわかごもかりにだに來ぬ人たのむ我ぞはかなき」（古今集・七五九）。

【所載】後撰集・雜二・一一七八／忠岑集Ⅰ・四七／忠岑集Ⅱ・一一一／忠岑集Ⅲ・六九

【参考】作者名「たぐみね」は所載欄の文献に一致する。所載欄の後撰集の詞書には「暇にて籠りゐて侍りける頃、人のとはず侍りければ」と、忠岑が辞職したか、喪中で引きこもっていた頃の歌とする。

一〇六四 ゆふかけていのるみむろの神さびてたゝるにしあればねぎぞかねつる
やしろ

【異同】ナシ

【現代語訳】木綿を懸けて祈るはずの御室がすっかり古くなって神のように崇るのであるから、祈願しかねるのだ。

【語句】◎やしろ 神の来臨するところ。神を祀つてある建物。神社。○ゆふかけて 木綿を垂れかけて。ゆふ（木綿）は、楮の木を皮を剥ぎ、その繊維を蒸して水にさらし、細かに裂いて糸状にしたもの、祭具。○みむろ 神が降臨して依り付く所。鏡や木綿をかけて神をまつる神座や、木、山、神社など。○神さびて 古めかしくなつて。神々しくなつて。「木綿懸けて祭る三諸の神さびて齋むにはあらず人目多みこそ」（万葉集・一三八一（旧一三七七））。○たゝるにしあれば 崇るのであるから。「崇る」は神仏などが人間の行為をとがめて

禍をもたらすこと。「にし」は、断定の助動詞「なり」の連用形「に」十副助詞「し」。「石上ふりにし恋の神さびてたゝるに我はねぎぞかねつる」(拾遺集・八六二)。○ねぎぞかねつる 祈願しかねるのだ。「ねぐ」は、祈ぐ。神の加護を受けるために祈願すること。「ゆふ」と取り合わされる例歌「ねぎかくる日吉の社の木綿だすき草のかきはもことやめてきけ」(拾遺集・神楽歌・五九三)。

【所載】ナシ

【参考】当該歌は、語句欄の万葉集・一三八一(旧一三七七)の上三句「木綿懸けて祭る三諸の神さびて」と、拾遺集・八六二の下三句「神さびてたゝるに我はねぎぞかねつる」を合わせたような形で作られている。

一〇六五 ちはやぶるかみのいがきもこえぬべしいまはわが身のをしからなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】(抑えがたい恋の思いは) 神域を囲む斎垣も越えてしまいそうだ、今となってはわが命も惜しくはないものを。

【語句】○ちはやぶる 「神」にかかる枕詞。○いがきもこえぬべし 神聖な神の斎垣をも越えてしまいそうだ。「いがき」は斎垣。神社の垣。聖域を囲む垣根。「斎垣を越ゆ」は、禁忌を犯す恋、恋のために思慮分別を失った状態を表す語。「ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし大宮人の見まくほしさに」(伊勢物語・第七十一段・一三〇)の上三句と同じ表現。○わが身のをしからなくに 自分の命も惜しくはないものを。「かくのみし恋ひしわたればたまきはる命も我は惜しけくもなし」(万葉集・一七七三(旧一七六九)など、恋のためには我が身を捨ててもよいという万葉集以来の常套表現。「をしからなくに」の「なくに」は、詠嘆的打消。……ないものを。……ないことだなあ。「命やはなにぞは露のあだ物をあふにしかへば惜しからなくに」(古今集・六一五)。

【所載】拾遺集・恋四・九二四／万葉集・二六七(旧二六六三) 千葉破 神之伊垣毛 可越 今者吾名之惜無 ちはやぶるかみのイカキモコエヌベシイマハワガナノヲシケクモナシ ちはやぶるかみのいかにきもこえぬべしいまはわがなのをしけくもなし／人麿集Ⅰ・一九〇／人麿集Ⅱ・三二四／人麿集Ⅳ・一五九／古来風体抄・一三三

【参考】万葉集では神祇に寄せる恋八首の内にある。

〔以上五首担当 中野〕

一〇六六 かつまたのいけにとりゐしむかしよりこふるいもをぞけふいまに見ぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】かつまたの池に水鳥がいた昔から思い焦がれている女性に、今日今に至るまで逢えない。

【語句】○かつまたのいけにとりゐし 勝間田の池に鳥がいた。勝間田の池は大和国の歌枕。「勝間田の池は我知る蓮なししか言ふ君が鬢なきことし」(万葉集・三八五七(旧三八三五))。和歌初学抄・歌枕名寄は「美作」、八雲御抄は「下総」、夫木抄では「美作又下総」とするなど諸説あるが、大和とする袖中抄の説が万葉代匠記以降支持されているようである。万葉集の左注を信ずれば、後に唐招提寺となる新田部親王邸付近にあったか。「鳥もめで幾代経ぬらんかつまたの池にはいひのあとだにもなし」(後拾遺集・一〇五三)とあるように、鳥もおらずはるか昔に水の失われた池とされる。初・二句は「むかし」を導く措辞。○いも 男性の側から親しみをこめて特定の女性を指す語。○いまに 過去から続いて今に至るまで。「年経ぬるおもひとだにもおもへかし今に忘れぬ心ながさを」(赤染衛門集・四七五)。

【所載】夫木抄・一〇七七-1

【参考】類歌として「みづがきの池に鳥ゐし昔よりこふるいもをぞけふいまにみぬ」(夫木抄・一〇八三八)、「かつまたの池にとりゐしむかしよりよはうき物とおもひしりにき」(袖中抄・一四二)がある。また、当該歌を参考にしたかと思われる「かつまたの池にとりゐしいにしへの過ぎにし程や君が行末」(夫木抄・一〇七七七)がある。

なお、当該歌は神社に関する内容が詠まれておらず、「やしろ」題に入っている理由は不明だが、二句に「とりゐ(鳥居)」を詠み込むことによるか。

一〇六七 われみてもひさしくなりぬすみよしのきしのひめまついくよへぬらん

【異同】ナシ

【現代語訳】私が見てからでも年久しくなった。住吉の岸の姫松はもう幾代経ているのだろう。

【語句】○われみても 私が見てからでも。「いにしへのことはしらぬをわれみても久しくなりぬ天の香具山」(万葉集・一一〇〇(旧一〇九六))。○すみよし 住吉。摂津国の歌枕。現在の大阪府住吉区の一帯。万葉集で「須

美乃延」「須美乃江」「住吉」「墨吉」などと表記して「すみのえ」と訓んだものが、平安時代には「すみよし」と訓まれるようになった。「住吉」は地名、「住の江」はその入り江と考えられており、どちらも「松」「浪」「忘れ草」などととも和歌に多く詠まれる。○ひめまつ 姫松。海岸に多く見られる小柄な松の愛称。「ひめ」は他の語に冠して小さなかわいいものの意を表す。

【所載】古今集・雑上・九〇五／新撰和歌・二二三三／和漢朗詠集・四二八／奥儀抄・二／袋草紙・二〇七／伊勢物語・第一一七段・一九八

一〇六八 ちはやぶるかものやしらのゆふだすき一日もをこひぬひはなし

本のまゝ

【異同】一日もを―一日も君を(大)

【現代語訳】(ちはやぶる) 賀茂の神社の木綿だすき。(木綿だすきを毎日かけるように) 私もあなたを一日も恋しく思わない日はない。

【語句】○ちはやぶる 「神」にかかる枕詞。「賀茂の社」にかかる例として「ちはやぶる賀茂の社のひめこまつよろづ世ふとも色はかはらじ」(古今集・一一〇〇)などがある。○かものやしら 賀茂の社。山城国の歌枕。京都市北区上賀茂にある賀茂別雷神社と左京区下鴨にある賀茂御祖神社の総称。山城国の一宮。平安京鎮護の神社とされ、齋院が祭事に奉仕する制度が平安初期より鎌倉時代初めまで続いた。○ゆふだすき 木綿だすき。神事に奉仕するときに掛けた、白く清浄な木綿で作ったすき。「かけ」「かかる」「結ぶ」などにかかる。「ちはやぶる神のたよりにゆふだすきかけてや人も我を恋ふらん」(貫之集・五〇四)。○一日もを 字足らずで、意味も不明。大久保本の「一日も君を」に拠って解した。○こひぬひはなし 恋しく思わない日はない。「するがなるたごの浦波たたぬ日はあれども君をこひぬ日はなし」(古今集・四八九)。

【所載】古今集・恋一・四八七／新撰和歌・三五二／和歌初学抄・一三〇

【参考】類歌に「ちはやぶる神のたむけのゆふだすきかけてや人のひとをこふらん」(続古今集・一二三一・つらゆき／万代集・一九三八)がある。また、当該歌を参考にしたかと思われる「ちはやぶる賀茂の社のゆふだすきちとせを君にかけよとぞ思ふ」(千五百番歌合・二二八四)もある。

一〇六九 あめつちの神をねぎつゝわがこふる君にかならずあはざらんやも

やかもち

【異同】 あはさらんやも―あはさらんやは（桂）

【現代語訳】 天地の神々に祈りながら、私が恋しいと思うあなたに、逢わないというようなことがあるのか、いやきつと逢える。

【語句】 ○ねぎつゝ、祈念しながら。「ねぐ」は神などの心を鎮める、祈願する。「をやまだのみだえせしよりあめにますいはとのかみをねがぬ日ぞなき」（好忠集・一四五）。○あはさらんやも 逢わないということがあるのか、いやない。必ず逢うことができる。「やも」は活用語の終止形もしくは已然形を受ける。ここでは反語。

【所載】 万葉集・三三〇一（旧三二八七）乾坤乃 神乎禱而 吾恋 公以必 不相在目八方 アメツチノカミヲイノリテワガコフルキミニカナラズアハザラメヤモ あめつちのかみをいのりてあがこふるきみいかならずあはずあらめやも

【参考】 作者名「やかもち」とあるが、所載欄の万葉集では女性が詠んだものとして収められた相聞歌群中の反歌の一首である。

一〇七〇 いにしへの神のみよゝりあひけらしいまのこゝろもとくわすられず

【異同】 ナシ

【現代語訳】 はるか昔の神の御代以来男女は逢ってきたらしい。今の私の心もすぐには忘れることができない。【語句】 ○あひけらし 逢ひけらし。逢ってきたらしい。「けらし」は過去の推定を表す助動詞。……したらしい。「恋せじとみたらし河にせしみそぎ神はうけずもなりにけらしも」（古今集・五〇一）。○とくわすられず すぐには忘れられない。「疾し」は速度の速いさま、時間の進行の早いさまを表す。「あふことは猶よそながらながらへよとくわすれなばとくやなげかむ」（相模集・二〇一）。所載欄の万葉集では「つねわすらえず」とあり、そちらの方が歌の内容に合う。

【所載】 万葉集・三三〇四（旧三二九〇）古之 神乃時従 会計良思 今心文 常不所忘 イニシヘノカミノミヨヨリアヒケラシイマノココロモツネワスラレズ いにしへのかみのときよりあひけらしいまのこゝろもつねわすらえず

〔以上五首担当 犬養悦・諸井彩子〕

一〇七一 ちはやぶる神なび川山のもみぢばに思はかけじうつろふものを

【異同】 神なび川山の—神なび山の(大)

【現代語訳】 あ的神なび川のもみぢ葉には、思いをかけたりなどすまい。色変わりするんだもの。

【語句】 ○ちはやぶる 「神」にかかる枕詞。○神なび川 「神なび」は神の鎮座する場所。「神なび川」は「神なび」の地を流れる川、普通名詞である。ただし、大久保本の「神なび山」の方が自然。底本も「山」を傍書しているが、ここは底本文のままに訳した。○うつろふ 事物の相が時の経過と共に変化してゆくこと。ここは「もみぢば」の色が盛りを過ぎて枯れ色に変ってゆくこと。恋の寓意が感じられる。

【所載】 古今集・秋下・二五四／新撰和歌・五四

一〇七二 まきもくのあらしナのやまの山人をは人もみるがね山かづらせよ

【異同】 あらしのやまの—あなしの山の(桂・大)

【現代語訳】 巻向の穴師の山の山人を人々が注目するように、山かづらをつけなさいよ。

【語句】 ○まきもくのあらし 底本では「ら」のところに「ナ」の傍書があり、桂宮本・大久保本は「あなし」である。古今集でも「あなし」、地名としても「まきもくのあなし」が妥当。巻向の穴師は大和国の歌枕。巻向は現奈良県桜井市の三輪山の北側から東方へかけての一带。この地を巻向川が西へ流れ、川をはさんで三輪山の対岸にある里が穴師。○山人 山に住んで樵や炭焼きなどの山仕事をなりわいとする人。○人もみるがね 人が見るように。「がね」は動詞連体形に付いて、……するよう、……するために、の意を表す終助詞。○山かづら 山に自生する蔓性の植物で作った飾り。神事の折、頭につけたり舞人の採り物にしたりした。

【所載】 古今六帖・第一帖「かぐら」二二四／古今集・神あそびのうた・一〇七六／綺語抄・二六七／奥儀抄・五九二／袖中抄・三四六、三四七／和歌色葉・二九六

一〇七三 いがきしてまもるやし人まろろのもみぢばもしめをばこえてちるてふものを

【異同】 ナシ

【現代語訳】斎垣を結いめぐらして斎き守る神のやしろのもみじ葉でさえも、しめ垣を越えて外へ散るものだというのに。

【語句】○いがき 斎垣。神聖なものまわりにめぐらした垣。みだりにこれを越えることは許されない。○まもるやしろのもみぢば 守る社の紅葉ば。恋の相手の女性の暗喩。親の守りがきびしくて逢いに出て来られないのである。○しめ 占め、また標（しめ）。占有のものであることをしめす標識。杭を立てたり、縄を張ったりしてそのしるしとした。○ちるてふものを 散るものだというのに。「ものを」に強い不満の情がこめられている。

【所載】ナシ

【参考】作者名「人まろ」とあるが、この歌が人麿の作であるかどうかは不明。万葉集二二一三（旧二二〇九）に「はふりらがいほふ社のもみぢばもしめなは越えて散るといふものを」という類歌があり、その歌は古今六帖二六〇六番に、初句を「はふりこが」として収載されている。

一〇七四 いその神ふるのやしろのすぎむらの思すぐべきみならなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】石上の布留のやしろの杉むら、その「すぎ」ということばのように、忘れ去ってしまうことのできるような、あなたではないものを。

【語句】○いその神ふるのやしろ 「いその神ふる」は大和国の歌枕。現奈良県天理市。「いその神」は「石上」で大地名、「ふる」は「布留」でその中の小地名。「ふるのやしろ」は、布留の地にある石上神宮。○すぎむら 群れ立っている杉。上三句は「すぎ」と「すぐ」の類音によって「思すぐ」を導き出す序詞。○思すぐべき 「思すぐ」は自動詞。心の中の思いが通り過ぎていってなくなる、すなわち忘れ去ること。「べき」は、ここでは可能を表す。忘れ去ってしまうような。○ならなくに 断定の助動詞「なり」の未然形「なら」に打消の助動詞のいわゆるク語法「なく」が付き、さらに助詞「に」が添えられたもの。……ではないのに。余意を残す言い方。

【所載】万葉集・四二五（旧四二二）石上 振乃山有 杉村乃 思過倍吉 君尔有名国 イソノカミフルノヤマナルスギムラノオモヒスグベキミニアラナクニ いそのかみふるのやまなるすぎむらのおもひすぐべききみにあらなくに／夫木抄・八六四一

【参考】万葉集によれば、石田王が卒したとき、丹生王が詠んだ挽歌（長歌と反歌二首）の中の歌である。

一〇七五 神つよのいがきにはへるもろかづらこなたかなたにむけてこそみれ

【異同】ナシ

【現代語訳】いにしえからの斎垣に這いまどわっているもろかづらが、二つの葉を持っているように、わたしも、こゝろか、あかかと、ふたとおりに考えてみていこうろだ。

【語句】○神つよ 上つ代。時代を遠くさかのぼったむかし。底本の表記は「神」の文字をあてているが、「神代」の意で「かみつよ」と言った例は他に見当たらない。○いがき 一〇七三番歌参照。○もろかづら フタバアオイのこと。山中の木陰に生える多年生草本。春になると伸びた茎の先から二枚の葉が出るので、フタバの名がある。上三句は「こなたかなた」を導く序詞。○こなたかなたに 此方彼方に。こゝろか、あかだろるか、ふたとおりに。「もろかづら」の双葉の縁で言った。○むけてこそみれ ふたとおりのことを仮定しながら、それぞれについて思案している、ということ。あるいは、恋にかかわる迷いか。

【所載】ナシ

【参考】第五句のミセケチ部分の本行は「介天」の草書体かと見えるが、ミセケチで「けて」とされている。

〔以上五首担当 山下〕

一〇七六 行がうへにまたもゆけこま神かけやみむろの山のやまかづらせむ

【異同】ナシ

【現代語訳】急いで行くうえに、なお一層速く行け馬よ。そして神に誓って三室の山の山かづらを髪に飾ろう。

【語句】○行がうへにまたもゆけ 行くがうへにまたもゆけ。（馬が）駆けているうえにもっと速く駆ける。○こま 馬の歌語。○神かけや 神に誓って。必ず。「や」は間投助詞。○みむろの山 神のいます御室の山の意。

「神垣のみむろの山の榊葉は神の御まへに茂りあひにけり」（古今集・一〇七四）。○やまかづら 山鬘。ヒカゲノカヅラ、マサキノカヅラのことともいう。「かづら」は蔓草で作った髪飾り。神楽の時、舞い人が用いる。

【所載】夫木抄・八八四三／貫之集I・一四六

【参考】作者については、一〇七九番参考欄参照。

一〇七七 人もみなかづらかざしてちはやぶる神のみあれにあふ日なりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】誰もみな葵の蔓を髪にさして、なるほど今日は賀茂祭のみあれに会う日だったのだなあ。

【語句】○かづら 蔓草などで作った髪飾り。ここでは賀茂祭に髪に挿す双葉葵。○ちはやぶる 枕詞。「神」「我が大君」「齋宮」などにかかる。○神のみあれ 陰暦四月中の酉の日(申とも)の賀茂祭の前に行われる、神霊を神に移して神を迎える儀式。○あふ日 「会ふ日」に「葵(あふひ)」を掛ける。

【所載】万代集・五二三／夫木抄・二四八二／貫之集Ⅰ・一三〇

【参考】作者については、一〇七九番参考欄参照。

一〇七八 あればきにひきつれてこそちはやぶるかものはなみたちわたりけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】賀茂祭のあればきのために連れだつて、川浪のたつ賀茂川を立ち渡ってきたことだ。

【語句】○あればき 「あれ」は祭神の出現の縁となるもので、神の木などをいう。それに鈴を付けた引き綱を結び、引いて多幸を祈願すること。○ひきつれて 人々が連なるように一緒になつて。接頭語「ひき」は「あればき」の韻をふんでいる。○ちはやぶる 枕詞。「神」「わが大君」「齋宮」などにかかる。ここでは「賀茂」の枕詞。○かものはなみ 賀茂神社を流れる賀茂川の波。○たちわたり 川波が「たつ」意に「たちわたる」の接頭語「たち」を掛ける。

【所載】貫之集Ⅰ・二四四

【参考】作者については、一〇七九番参考欄参照。

一〇七九 春がすみたちまじりつゝいなりやまこゆるおもひの人しれぬかな
已上四首 いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】春霞が立なびく中にまじりながら、思いが成就するという稲荷山を越える私の思いは、あの人には知られないことだなあ。

【語句】○たちまじりつゝ 霞「たち」にたち混じりの接頭語「たち」をかける。霞の中にまじりながら。○いなりやま 山城国の歌枕。京都市伏見区にあり、東山三十六峰の南端の山。この山に稲荷神社、上中下の三社が祀られている。○こゆるおもひ 参詣して成就を祈願する思い。旧暦二月の初午に参詣すると思いが叶うとされた。○人しれぬかな あの人にはわかつてもらえないことよ。

【所載】貫之Ⅰ・三三六

【参考】左注「已上四首いせ」とあるが一〇七六番〜一〇七九番の四首はいずれも貫之の歌である。

一〇八〇 いなり山ゆきかふ人はきみがよをひとりこころのいのりやはせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】稲荷山詣でに行き交う人々は、君の長寿を皆おなじ心で祈ることです。

【語句】○いなり山 一〇七九番歌参照。○ゆきかふ人 稲荷山に参詣する人々。○きみがよ 祈願の対象となる人の寿命。○ひとつこころ 皆おなじ気持ち。○いのりやはせぬ 祈らないだろうか。いや必ず祈る。「やは」は反語。

【所載】伊勢集Ⅰ・二〇五／伊勢集Ⅱ・二〇九／伊勢集Ⅲ・二〇八

【参考】伊勢集には、「東三条の御息所の御賀を、中務宮したまふに、屏風に」として「いなりの山越ゆるとこそ」とある。作者は「いせ」である。

〔以上五首担当 林〕

一〇八一 かきくもりあやめもしらぬおほぞらにありとほしをばいかにしるべき

オボユベシヤハ
ありとほしの神の本にてよめる

【異同】ナシ

【現代語訳】すっかり曇ってものの区別もつかない大空に星があるとは、どうして知ることができましようか。

いや、わかりはしませんよ。蟻通の明神とは知りませんでした。

【語句】○あやめもしらぬ 物の区別もわからない。「ほととぎす鳴くや五月のあやめぐさあやめも知らぬ恋もするかな」（古今集・四六九）。○ありとほしをば 「ありと星をば」に「蟻通をば」を掛ける。暗い曇り空では星があつてもわからないと言ひ、同時に、蟻通の神とは知らなかつたとも言つたもの。蟻通の明神は、現在の大阪府泉佐野市長滝に鎮座する蟻通神社。祭神は大名持命。所載欄の貫之集によると、当該歌は、紀貫之が紀伊国から帰京する途中、社前で馬が瀕死の状態となり、道行く人々に、それは蟻通の神の仕業だと言われて奉納した歌。蟻通明神の社名由来については枕草子二二七段にも見え、昔、帝の命に背いて老親を匿つていた中将が、七曲がりの玉に糸を通せという唐土の帝の難題を、蟻に糸を結んで通させるといふ老親の知恵で解決し、その人が神となつて、「七曲（ななわた）にまがれる玉の緒をぬきてありとほしとは知らずやあるらん」と詠んだという話を伝える。この話は、袋草紙、奥儀抄などにも見える。○いかゞしるべき どうして知ることができようか、いや知ることとはできない、という反語表現。

【所載】貫之集Ⅰ・八〇六／袋草紙・二四七

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。また、この話は俊頼髓脳や大鏡にも見え、謡曲「蟻通」の素材ともなつている。

一〇八二 くれなゐのすそびくみちをなかにをきてわれやゆくべき君やきまさむ
みち

【異同】ナシ

【現代語訳】紅の裳裾を引いて通る道の中に挟んで、私が行くべきでしょうか、それともあなたが来て下さるでしょうか。

【語句】◎みち 道。人や車などが通行するところ。また、道中、途中の意でも使われる。恋人のもとへ通う道が、特によく詠まれた。転じて、世間の道理や仏教の教えなど抽象的な意味にも用いられた。古今六帖の「みち」の項には、「たゞち」（近道の意）や「とを（ほ）みち」（遠道）という語を詠んだ歌も含まれる。○くれなゐのすそびくみち 女性が赤い裳の裾を引いて通る道。

【所載】万葉集・二六六三（旧二六五五）紅之 欄引道乎 中置而 妾哉将通 公哉将来座 一云、須蘇衝河平 又曰、待香将待 クレナキノスソビクミチヲナカニオキテワレヤカヨハムキミヤキサム 一云、スソツ

クカハヲ又曰、マチニカマタム くれなゐのすそびくみちをなかにおきてわれかかよはむきみかきまさむ 一云、すそつくかはを又曰、まちにかまたむ／夫木抄・九三〇三／人麿集Ⅱ・四七七／人麿集Ⅳ・一五五

一〇八三 いそのかみふるのなかみちなか／＼にみずはこひしと思はましやは

【異同】ナシ

【現代語訳】石上の布留の中道。なまじ逢わなければ、こんなに恋しいと思わなかっただろうに。

【語句】○いそのかみふるのなかみちなか／＼に「いそのかみふる」は大和国の歌枕。一〇七四番歌参照。参考欄の貫之集の詞書を勘案すれば、「布留」に「古（経）る」を掛けるか。「ふるのなかみち」は、布留を通つて行く道の意か。二句目までは「なか」の同音で「なかなかに」を導く序詞。「なかなか」は、なまじい、それくらいならいっせ、の意。また、「なか」は、「中」に（男女の）「仲」を掛けるか。○みずはこひしと思はましやは いっそのこと逢わなかった方がこれほど恋しく思わなくてすんだのに、以前逢つたことがあるためにますます恋しくてたまらないという気持ち。「あひ見ずは恋しきこともなからまし音にぞ人を聞くべかりける」（古今集・六七八）。

【所載】古今集・恋四・六七九／貫之集Ⅰ・六九四／袖中抄・五三五

【参考】古今六帖に作者名はないが、貫之集Ⅰに「あひしりたる人のもとにしばしかよはぬほどになりて、なかたえて又思ひ返していひやる」という詞書とともに見える。古今集も作者を「つらゆき」とする。

一〇八四 つきよゝみいもにあはむとたゞちからわれはくれどもよぞふけにける

【異同】われはくれとも―われ立くれとも（御）

【現代語訳】月が明るく照らすので、あの娘（こ）に逢おうと、私は近道をしてまっすぐやって来たけれど、夜が更けてしまったよ。

【語句】○つきよゝみ 月夜良み。「つきよ」は、当該歌では、月、月光の意。月が良いので。月光が明るく照らすので。「ひとへ山へなれるものを月夜よみ門に出で立ち妹か待つらむ」（万葉集・七六八（旧七六五））。○いも 妹。男性が妻や恋人を呼ぶ語。○ただちから 「ただち」は直道、直路。まっすぐに行ける近道。「恋ひわびて打ち寝（ぬ）る中に行きかよふ夢のただちはうつつならなむ」（古今集・五五八）。「から」は、経由を表

す格助詞。……を通過して。暗い夜は、遠回りでも通行しやすい道を行かざるを得ないが、月光が明るいので近道をするということ。

【所載】万葉集・二六二五（旧二六一八）月夜好三 妹二相跡 直道柄 吾者雖来 夜其深去来 ツキヨヨミイモニアハムトタダチカラワレハクレドモヨゾフケニケル つくよよみいもにあはむとただちからわれはきつれどよぞふけにける／人麿集Ⅱ・四六七

一〇八五 とゞむとも猶かよひなんたまほこのみちせばきまでしげきわがこひ

【異同】ナシ

【現代語訳】たとえ人が私を止めても、それでもやはり愛しい人の許へ通いましょう。道が狭くなるほど草木が繁るように、愛しい人への思いでいっぱいになっていく私の恋なのです。

【語句】○かよひなん 通おう。「な」は強意の助動詞「ぬ」の未然形、「ん（む）」は意志・希望を表す助動詞の終止形。○たまほこの 「道」にかかる枕詞。○しげきわがこひ 「しげき」は、上からの続きでは草が繁茂する意を表し、下への続きでは、相手への思いでいっぱいになっていることを表す。「たまほこのみちせばきまで」は「しげき」を導く序詞。「津の国の難波の葦の芽もはるに繁きわが恋人知るらめや」（古今集・六〇四・貫之）、「夏草のしげきわが恋住吉の岸の白波千重につもりぬ」（人麿集Ⅱ・三六五）。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 長戸〕

一〇八六 いにしへのなかなかふるみちあらためばあらためられよのなかふるみち
かしはゝらのみかど

【異同】ナシ

【現代語訳】ふるくなつたむかしの野中の古道が新しくなるのなら新しくなられよ、野中の古道よ。

【語句】○かしはゝらのみかど 桓武天皇。橿原陵に埋葬される。○いにしへの 古くなつたむかしの。○のなかなかふるみち 野原の中の古くなつた道。

【所載】日本後紀・三

【参考】日本後紀では、延暦十四（七九五）年四月の曲水宴で桓武天皇が誦じた古歌と伝える。

一〇八七 みちすらにしぐれにあひていとゞしくほしあへぬそでをぬらしつるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】道の途中でさえ時雨にあつてひどいのに、その上、乾ききれない袖を涙で濡らしてしまったことだ。

【語句】○みちすらに 途中でさえ。「すらに」は副助詞。○いとどしく さらにいっそう。いっそうひどく。

【所載】貫之集Ⅰ・一三六

一〇八八 ゆきやらぬころるやなにぞあきのこのみちはちさともあらじと思を
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたのもとに行こうとしても行ききれないこの気持ちは何なのでしよう。秋の野の、あなたと
ころまでの道ははるか遠くまで続くわけでもあるまいと思うのに。

【語句】○ゆきやらぬ 行こうとしても行き続けることができない。○ちさと 「千里」を訓読したもの。た
くさんの道のり。はるか遠くまで。平安和歌での用例は少ない。

【所載】古今六帖・第五帖「遠道隔てたる」二七八六／躬恒集Ⅰ・二二八／躬恒集Ⅱ・一四〇／躬恒集Ⅲ・一二
四／躬恒集Ⅳ・四七三／躬恒集Ⅴ・一〇一

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

一〇八九 たまほこのみちのちまたにいもまつとたちたるほどによはふけにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】わかれ道のところであの人を待って立っているうちに、夜は更けてしまったことだ。

【語句】○たまほこの 「道」に掛かる枕詞。○ちまた 道の分かれる所。

【所載】ナシ

一〇九〇 夏山のかげをしげみやたまほこのみち行人もたちとまるらむ
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】夏山の木陰がよく生い茂っているので、道行く人もここに立ち止まるのだろうか。

【語句】○夏山 夏の山。木々に葉が生い茂るので、人々は涼を求めて立ちどまる。○かげをしげみや 木々が生い茂って下蔭が深いからだろうか。「や」は疑問、歌末の「らむ」へひびく。○たまほこの「道」に掛かる枕詞。○みち行人 所載欄の貫之集では、「みちゆき人」。

【所載】拾遺集・夏・一三〇／貫之集Ⅰ・一／秀歌大体・四三

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 青木〕

一〇九一 たまほこのとをみちをこそ人はゆけなどかいまのみみぬはこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】人は遠い道のであつても行きます。それなのに、どうして遠く離れているわけでもないのに、今少しの間も会えないあなたが恋しいのでしょうか。

【語句】○たまほこの「道」の枕詞。○とをみち とほみち。遠い道のり。貫之集に当該歌を含めて三例あり、勅撰集ではこの一例のみ。「ひとひだにみねば恋しき心有るに遠道さして君がゆくかな」（貫之集Ⅰ・七〇五）。

○いまのま わずかの間。「あはざりし時いかなりしもの」とてかただ今の間も見ねば恋しき」（後撰集・五六三）。

○みぬはこひしき 見ぬは恋しき。逢えないあなたが恋しいのだろうか。

【所載】拾遺集・恋二・七三七／家持集Ⅰ・二八五／家持集Ⅱ・二九九／貫之集Ⅰ・六七四、七八六
【参考】拾遺集では恋の部に入集しているが、詞書に「源公忠朝臣日々にまかりあひ侍りけるを、いかなる日に
かありけむ、あひ侍らざりける日、つかはしける」とあり、ともに朱雀院別当であった源公忠に貫之が贈った歌。
貫之集の詞書も同様の詠歌事情を伝える。

一〇九二 わがやどのみちもなきまであれにけりつれなき人をこふとせしまに

【異同】こふとせしまに—まつとせしまに(大)

【現代語訳】私の家は、道もないほどにまで荒れてしまいましたよ。ちつとも訪ねてくれない薄情なあの人を恋慕っていた間に。

【語句】○つれなき人 薄情な人。冷淡な人。和歌では恋の相手の薄情さを表現することが多い。○みちもなきまで 道もなくなるまで。通う人がいないと「道」はなくなつた。「わがやどは雪ふりしきてみちもなしふみわけてとふ人しなければ」(古今集・三三二〇)。○こふとせしまに 恋していた間に。古今集以下の所載欄の他文献では傍記と同じ「まつとせしまに」で、「待つていた間に」の意となる。

【所載】古今集・恋五・七七〇／和漢朗詠集・六二三／遍昭集Ⅱ・三五／三十人撰・四三／三十六人撰・五一／八雲御抄・四九／愚問賢注・三七

一〇九三 こころにはちへにしき／おもへどもつかひをやらんすべもしらなみ

つかひ

【異同】すへもしらなみ—すゑもしらなみ(大)

【現代語訳】心の中では千重にも頻りに思っているけれども、言伝ての使いをやる手立ても知らないのです使いをやることもできない。

【語句】◎つかひ 使者。特に伝言を運ぶ人。万葉集では「君が使」「妹が使」など、恋の場面での使いが詠まれていることが多いが、古今六帖でも恋の使いの歌が並ぶ。○ちへにしき／ 千重にも頻りに。「しき／」はひき続いて起こるさま。「しくしく」に同じ。「一日にもちへにしきしきわが恋ふる妹があたり時雨ふり見ん」(古今六帖・四九二)。○すべもしらなみ 手段を知らなくて。言外にそれを残念に思う気持ちがある。「すべ」は手段、方法、の意。「しらなみ」の「み」は原因・理由を表す接尾語。

【所載】万葉集・二五五七(旧二五五二) 情者 千遍敷及 雖念 使乎将遣 為便之不知久 ココロニハチヘニシクシクオモヘドモツカヒヤラムスベノシラナク こころにはちへしくしくにおもへどもつかひをやらむすべのしらなく

一〇九四 かくばかりわれはこひつゝたまほこのキミガツカヒロマチャカネテン

【異同】キミカツカヒロマチャカネテン（底本、片仮名細字ニヨル補入）―きみかつかひをまちやかかねてん（桂、本行）、使やらすとわすると思ふな（大、本行）

【現代語訳】これほどまで、私は恋しく思いながら、あの人からの使いを待ちあぐねてしまっているのでしょうか。

【語句】〇かくばかりわれはこひつゝ、これほど私は恋しく思いながら。所載欄の万葉集では「かくだにもわれはこひなむ」。〇たまほこの玉梓の。「道」「里」にかかる枕詞。所載欄の万葉集では、「つかひ」の枕詞「たまづさの」となっている。ここは「玉梓の」の誤か。〇マチャカネテン 待っていても待ち受けることができないうのでしょうか。「まちかぬ」は、「まちあぐむ」意。「や」は詠嘆の意のこもった疑問。

【所載】万葉集・二五五三（旧二五四八）如是谷裳 吾者恋南 玉梓之 君之使乎 待也金手武 カクダニモワレハコヒナムタマヅサノキミガツカヒロマチャカネテム かくだにもあれはこひなむたまづさのきみがつかひをまちやかかねてむ／人麿集IV・二二〇

【参考】底本と御所本では下句は片仮名細字書きだが、桂宮本と大久保本では平仮名本行書き。大久保本では一〇九四と一〇九五の歌順が逆になっているなど文に乱れがある。

一〇九五 人ゴトノシゲキ、ミニハタマホコノつかひやらすとわするとおもふな

【異同】人ゴトノシゲキ、ミニハタマホコノ（底本、片仮名細字ニヨル補入）―人ことのしげきみにはたまほこの（桂・大、本行） つかひやらすとわするとおもふな―君かつかひをまちやかかねてん（大）

【現代語訳】人の噂のうるさくたつあなたに使いを遣らないからといって、私があなたのことを忘れたとは思わないでください。

【語句】〇人ゴトノシゲキ、ミニハ 人の噂がしきりであるあなたには。「人ゴト（ひとごと）」は世間の噂。「空蟬の世の人ごとのしげければわすれぬもののかれぬべらなり」（古今集・七一六）。〇タマホコノ 所載欄の万葉集では「たまづさの」。一〇九四番参照。〇つかひやらすと 使者を行かせないからといって。

【所載】万葉集・二五九一（旧二五八六）人事 茂君 玉梓之 使不遣 忘跡思名 ヒトゴトヲシゲクテキミニタマヅサノツカヒモヤラズワスルトオモフナ ひとごとをしげびときみにたまづさのつかひもやらずわするとお

もふな

【参考】底本と御所本では上句は片仮名細字書きだが、桂宮本と大久保本では平仮名本行書き。一〇九四番歌参照。
〔以上五首担当 三浦〕

一〇九六 わぎもこやいたくなわびそたまほこのつかひかよはぬものならなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】いとしい人よ。あまりふさぎ込んだりなさいませぬ。使いが通わないわけでもありませんので。

【語句】○わぎもこや 「わぎもこ」は「吾妹子」で、男性が女性を親しんでいる語。「や」は呼びかけの間投助詞。○いたくなわびそ 「な……そ」は禁止を示す助詞。「わぶ」は氣力を失って沈み込むこと。淋しく心細い思いをすること。○たまほこの 本来「道」「里」などにかかる枕詞。一〇九四番歌参照。○ものならなくに ものではないので。ものではないのに。「なくに」は打消の助動詞「ず」のク語法に、助詞「に」が伴った形。主として歌に用いられる。

【所載】ナシ

一〇九七 たまほこのみちゆく人も見えなくなげきをしつゝいできつるかも

【異同】ナシ

【現代語訳】道を行く人（あの人からの使い）も見えないので、嘆きを重ねながら、じっとしていられずにつてきてしまったことだ。

【語句】○たまほこの 「道」「里」などにかかる枕詞。○みちゆく人 当該歌は「つかひ」の項に見える歌なので、当然使いの人と考えるべきなのであろう。○見えなくに 「なくに」については一〇九六歌参照。○なげきをしつゝ ため息をつきながら。

【所載】ナシ

一〇九八 こひしねとするわぎならでたまほこのつかひもみえずなり行みれば

【異同】するわさならて—するわさならし(大)

【現代語訳】このまま恋死にをしるという仕打ちのようだ。あの人からの使いもふつりと来なくなつたところをみると。

【語句】○するわさならで 底本のままでは下句の「なり行(く)みれば」と照応しない。傍記ならびに大久保本の本文「するわさならし」によつて解した。「こひしねとするわさならしむばたまのよるはずがらに夢に見えつつ」(古今集・五二六、古今六帖・二〇三三)。「ならし」は「なるらし」の約。○たまほこの 一〇九四番歌参照。

【所載】ナシ

【参考】類歌に「こひしなばこひもしねとやたまほこのみちゆくひとのこともらなく」(万葉集・二三七四(旧二三七〇))や「恋しなばこひもしねとや玉ほこの道行人にことづてもなき」(人麿集I・一九九、II、IIIにも)などがある。

一〇九九 いつ人はみちもしげみにかよへどもわがまついもがつかひこぬかも

【異同】ナシ

【現代語訳】つまらない連中は道にあふれるほど行き来をしているが、私が待っている彼女からの使いは一向に來ないことだ。

【語句】○いつ人は 底本のままでは理解しがたい。万葉集には「家人者」とあり、本来「いへ人は」とあつたのを誤写したのである。「いへびと」は「家人(けにん)」を訓読した語。「家人(けにん)」は「奴婢(ぬひ)」などと同じく、律令制下における賤民の一。○みちもしげみに 道もいっばいになるほどに。人の往來のげしさをいう。○わがまついもが 「いも」は男性が女性を親しんでいる語。「いもが」の「が」は連体格助詞。

【所載】万葉集・二五三四(旧二五二九)家人者 路毛四美三荷 雖往來 吾待妹之 使不來鴨 伊へびトハミチモシミニミニカヨヘドモワガマツイモガツカヒコヌカモ いへびとはみちもしみみにかよへどもわがまついもがつかひこぬかも／夫木抄・一六六二六／俊頼髓脳・三一九

一一〇〇 たれかれとゝはどこたへむすべをなみ君がつかひをかへしつるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】あれは誰かと尋ねられたら答えようがなくて、せつかくのあなたの使いを帰してしまったことです。

【語句】○たれかれと 彼は誰かと。「たれかれと我をなとひそ長月の時雨にぬれて君まつ人を」（古今六帖・四九六）。ただし万葉集の「誰彼登」は、一般に「タヅカレト」と訓じられている。○こたへむすべをなみ 「こたへむ」の「む」は連体形で、「すべ」にかかる。「すべ」は、術、手だて、方法。「なみ」は、形容詞「なし」の語幹に、原因、理由を表す接尾語の「み」が伴った形。答えようと思っても答える方法がなくて。

【所載】万葉集・二五五〇（旧二五四五） 誰彼登 問者将答 為便乎無 君之使乎 還鶴鴨 タヅカレトトハバコタヘムスベヲナミキミガツカヒヲカヘシツルカモ たぞかれとはばこたへむすべをなみきみがつかひをかへしつるかも

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一一〇一 わがこひのことしかたらひなぐさめむきみがつかひをまちやかねてむ

【異同】きみかつかひを—きみか史を（大）

【現代語訳】私の苦しい恋のことをば語り慰めようと思うあなたの使いなのに、それさえも待ちかねていることだろうか。

【語句】○ことしかたらひなぐさめむ 「し」は強意の助詞。所載欄の万葉集や人麿集では「ことも」となっている。「かたらひなぐさむ」は語り合つて気持ちを慰める、ということ。「む」は意志の助動詞の連体形。○きみがつかひをまちやかねてむ あなたのお使いを待ちかねていることだろうか。「や」は疑問。男からの使いを待ちきれない気持ちを表す。一〇九四番歌参照。

【所載】万葉集・二五四八（旧二五四三） 吾恋之 事毛語 名草目六 君之使乎 待八金手六 ワガコヒノコトモカタラヒナグサメムキミガツカヒヲマチャカネテム あがこふることもかたらひなぐさめむきみがつかひをまちやかねてむ／人麿集Ⅱ・五四八／人麿集Ⅳ・二二六

一一〇二 わがやどのわさ田かりあげてかへすとも君がつかひをかへしはやらじ

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家の早稲田を刈りつくし（春になって）田を鋤き返しても、あなたの使いをそのまま帰しはすまい。

【語句】○わさ田 晩稲に対する早稲を植える田。「うち返し君ぞ恋しきやまとなるふるのわさ田のおもひいでつづ」（後撰集・五二二）。○かりあげてかへすとも 田を刈りつくして、田を耕すとしても。一首に「かへす」という語を重ねることで、田を返しても（あなたの）使いをすぐには帰さない、と展開させる。「わすらるる時しなければ春の田を返す返すぞ人はこひしき」（拾遺集・八一）。

【所載】家持集Ⅱ・二二九／俊頼髓脳・二二〇／和歌童蒙抄・三二七

一一〇三 あづまぢのむまや／とかぞへつゝあふみのちかくなるがうれしさ
むまや

【異同】ナシ

【現代語訳】東路の駅を駅、駅……と繰り返し数える内に近江が近づいてくる。今か今かと数えているうちに、あなたにお逢いする時が近づいてくる嬉しさよ。

【語句】◎むまや 駅（うまや）。古代駅制により官道に設けられた駅舎。令の規定では三十里ごとに設置すべきものとされていた。○あづまぢ 近江の逢坂と常陸との間の道筋。○むまや／と 今か今か。「むまや（駅）」に「むまや（今や）」を掛ける。「しのづかのむまやむまやとまちわびし君はむなしくなりぞしにける」（大和物語・七〇段・一〇二）。○かぞへつゝ 繰り返し数えながら。○あふみ 「近江」と「逢ふ身」をかける。「けふわかれあすはあふみとおもへども夜やふけぬらむ袖のつゆけき」（古今集・三六九）。

【所載】夫木抄・一四八七九

一一〇四 あづまぢのまとのとをさもあらなくにむまや／ときみをまつかな

【異同】ナシ

【現代語訳】東路の的が遠いわけでもないのに、今か今かとあなたの訪れを待つことよ。

【語釈】○まと 目的。目当て。めど。「あづまぢ」との関連で「まと」が用いられる用例は他にはない。「むま」と「まと」との組み合わせについては和泉式部続集「とをつらのむまならねども君がのる車もまとにみゆるなりけり」(一八一)に見られる。ただし、それは、車の輪を騎射の的の形にしていたという状況下でのもの。○あらくなくに……でもないのに。ただし「遠さもあらなくに」の用例は他に見られない。後代の例となるが金槐和歌集・五六四「玉ぼこの道は遠くもあらなくに旅とし思へばわびしかりけり」に「遠くもあらなくに」とつづく例がある。○むまや／＼ 「むまや」の「や」と「矢」とをかけるか。「矢」と「的(まと)」は縁語か。

【所載】ナシ

【参考】本歌第二句の「まと」については、意がよく通らない。一首の意としては、東路を行く際、駅(うまや)を通過する度に指折り数えて道のりの遠さを実感するが、恋人との距離はそう遠くないのに今か今かと訪れを心待ちにしている、ということであろうか。

春のた

一一〇五 このめはるはるのあらたをうちかへし思やみにし人ぞこひしき

【異同】ナシ

【現代語訳】木の芽が張る春には荒れた田を打ち返し、何度も繰り返し、私に愛情のなくなったあの人のことが恋しく思われることよ。

【語句】◎春のた 春の季節の田のことであるが、和歌では春に耕して田を作ることから「かへす」や「つくる」という語と共に詠われることが多い。○このめはる 木の芽張る。木の芽がふくらんでくること。ここでは「春」を導く枕詞。○あらたをうちかへし 荒田に鋤を入れて打ち返して。「あらた」は荒田、冬の間耕作せず荒れていた田。「うち返し」に繰り返しの意の「うち返し」をかける。「わが宿の前のあら田をうち返し春ふかきまで人待つかな」(道濟集・一一二)。○思やみにし人 思いがなくなつた人。愛情のなくなつた人。「思ひやむ」は慕うことをやめる、ということ。「あやしくもいとふにはゆる心かないにしてかは思ひやむべき」(後撰集・六〇八)。

【所載】後撰集・恋一・五四四／拾遺集・恋三・八二二

(以上五首担当 橋本・尾高直子)

一一〇六 あらきだをあらすきかへし／＼てもみてこそやまめ人のこゝろを

【異同】ナシ

【現代語訳】開墾したばかりの田を粗く、何度も鋤き返すように見て確かめて、見込みがないならば諦めよう。あの人の心を。

【語句】○あらきだをあらすきかへし 「あらきだ」は「新墾田」で開墾したばかりの田。万葉集に「ゆ種蒔くあらきの小田を」（一一一四（旧一一一〇））とある。「あらすきかへし」の「あら」の音の繰り返しにより、粗く鋤き返す様子を表現する。上三句は「かへしても」にかかる序詞。○みてこそやまめ この目で見て判断して、終わりにしよう、の意。

【所載】古今集・恋五・八一七

一一〇七 わきらるゝときしなれば春のたのかへす／＼ぞ人はこひしき
つらゆき

【異同】わきらるゝ―わすらるゝ（御・大）

【現代語訳】あの人を忘れられる時など無いので、春の田圃をかえすように返す返すもあの人を恋しいことだ。

【語句】○わきらるゝときしなれば 「わきらるゝ」では意がとりにくい。底本「き」（字母「記」）は「す」（字母「須」）の誤写と見て、「わすらるゝ」で解す。忘れられる時がないので。○かへす／＼ぞ 「田を鋤き返す」意と、「繰り返し」「何度も何度も」の意の「かへすかへす」を掛ける。

【所載】拾遺集・恋三・八一―貫之集I・一四二／元輔集I・二二二

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の拾遺集や貫之集Iに一致する。なお、当該歌は古今集五一四番歌「忘らるる時しなればあしたづの思ひみだれてねをのみぞなく」と初二句が一致し、同五一五番歌「からころもひもゆふぐれになる時はかへすがへすぞ人は恋しき」と下句が一致する。

一一〇八 春のたを人にまかせてわれはたゞはなにこゝろをつくるころかな

【異同】ナシ

【現代語訳】春の田の耕作を人に任せて、私はただ、花に心を寄せているこの頃だよ。

【語句】○人にまかせて 一一〇七番歌にあるように、春の田には、鋤き返すつらい作業が伴うのだが、それを人に任せて、の意。「任せる」に、種を「蒔かせる」を掛ける。○つくる 心をつける、寄せるの意の「付く」に「作る」を掛ける。「蒔かせ」「つくる」は「田」の縁語。

【所載】拾遺集・春上・四七／和漢朗詠集・五六九

【参考】一一〇九番歌左注には「已上三首つらゆき」とあるが、当該歌は所載欄の拾遺集によれば齋宮内侍の作。

一一〇九 あしひきの山のさくららのいろみてぞおちかた人はたねはまきてる

已上三首 つらゆき

【異同】たねはまきてる―たねをまきける（御・桂）、たねはまきける（大）

【現代語訳】山の桜の色を十分に見てから、遠いあちらの人は（稲の）種は蒔くものなのだ。

【語句】○おちかた人は をちかた人は。遠方の人は。○たねはまきてる このままでは意が通じないので、他本により、「たねはまきける」で解した。種は蒔いている。

【所載】夫木抄・一八六五／貫之集I・五一三

【参考】左注による作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

一一一〇 おりたてば身こそほつれ春のたのふみかくこともいまはやめてむ

【異同】ナシ

【現代語訳】降り立ったところ、（裾だけでなく）身こそが濡れてしまう。春の田に踏み入れ掻き均すように、文を書くことも今はやめてしまおう。

【語句】○おりたてば 田に降り立ったところ。○身こそほつれ 身こそそほつれ。「そほつ」は濡れるの意。○ふみかくことも 文を書くことも。「ふみかく」は、「文書く」に「踏み掻く」を掛ける。「掻く」は、田に水を入れて土を砕いてかきならす作業。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 杉本〕

一一一一 わぎもこがてさへぬれつゝうふるたをかりてをさめむくらなしの山 なつのゝ人まる

【異同】なつのゝ人まる―なつの田 人まる（大久保本ハ「なつの田」ト「人まる」ノ間ニ空白部分が存ス）

底本ニ題ハ無く、作者名ニ「なつのゝ人まる」トアル。コレハ桂宮本・御所本モオナジ。大久保本ノミ「なつの田」ト題ヲ記シ、作者名ヲ「人まる」トスル。

【現代語訳】いとしいあの子が手まで濡らして植えた田を（夏もすぎ秋になるとたわわに実る稲を）刈り取って納める蔵がない、くらなし山よ。

【語句】◎なつのゝ 本来は「夏の田」。ここに「なつの田」という題があつたと推定される。題を列挙した部分には「田 はるのた 夏の田 あきのた ふゆのた……」と四季の田があるからである。作者名「なつのゝ人まる」は他に例がない。大久保本のように「なつのゝ」の部分は位置がもつと上だつた可能性が高い。夏の田は梅雨の間の田植えの景を詠む。○わぎもこ 吾妹子。吾妹（わぎも）に同じ。「こ」は親愛の気持を表す。男から恋人を親しんで呼ぶ呼称。○てさへぬれつゝ 手さへ濡れつゝ。手まで濡らして。所載欄の万葉集では「赤裳ひづちて」。裳の裾を濡らし、泥に汚れて。○うふるた 植うる田。「植う」はワ行下二段活用の動詞。○をさめむくら おさめむくら。納めむ蔵。冒頭からこゝまでは「くらなし山」の「クラ」にかかる序詞。○くらなしの山 所在地不明。所載欄の万葉集では「くらなしのはま」。大分県中津郡龍王町の海岸（閼無浜また竜王浜）とする説があるが不明。

【所載】古今六帖・第三帖「はま一九二三／拾遺集・雑秋・一一二三／万葉集・一七一四（旧一七一〇）吾妹兒之 赤裳泥塗而 殖之田乎 刈將蔵 倉無之浜 ワギモユガアカモヒツチテウエシタヲカリテヲサメムクラナシノハマ わぎもこがあかもひづちてうゑしたをかりてをさめむくらなしのはま／人麿集Ⅰ・一七五／人麿集Ⅱ・七二／人麿集Ⅲ・六六九

【参考】本来のかたちと推定した「人まる」は、所載欄の文献に一致する。

一一一一 ときすぎばさなへもいたくおいぬべしあめにもたごはさはらざりけり マダ つらゆき

【異同】 さなへもいたく—さなへもいまた (大)

【現代語訳】 時期を逃したら (植えるべき) 早苗も、ひどく、とうがたつてしまいうだろう、(それで、あの) 田植えの者たちは雨の降るのもかまわず植えているのだったよ。

【語句】 ○ときすぎば 時過ぎば。「とき」は順当な時機。しかるべき機会。ふさわしい時期。「過ぎば」は過ぎてしまったら。○あめにもたごはさはらざりけり 雨にも田子は障らざりけり。雨にも妨げられず農夫は田植えをしているのだった。「田子」は田に降りて働くひとをいう。「さはらざりけり」の「さはる」は妨げになるの意。「霜月、師走のふりこほり、水無月の照りはたたくにもさはらず来たり」(竹取物語)。

【所載】 続古今集・夏・二三五／和漢朗詠集・五七〇／万代集・六五一／貫之集Ⅰ・一四九

【参考】 作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

秋のた

一一一三 あきのたのほにいでぬればうちむれてさ^{本のまゝ}とをよりかりぞきにける

【異同】 ナシ

【現代語訳】 秋の田の稲穂が実る時期となったから、私たちは連れだつて里から遠く刈りにやってきたのだ。狩りにやってきた。

【語句】 ◎秋のた 秋の田。秋は稲が育ち穂に実が生ずる、米の収穫時である。田一面の稲穂の上に霧がかかると景のほか、風にそよ音を詠む。また、稲穂が見えるようになることによそえ、秘めていた心が外にあらわれることを「穂に出づ」と表現するものが多い。○ほにいでぬれば 穂となつてあらわれ出てきたから。「穂にいづ」は稲の内部から穂が現れてくること。○うちむれて 人々が集まつて一緒に。群がって。○さとをより 意味不明。書写する人も不審であったから傍記に「本のまゝ」すなわち、見た本にはこのように書いてあった、と記した。所載欄の貫之集Ⅰは「里とをみより」。貫之集Ⅱは「さととをくより」。後者によつて現代語訳をした。○かりぞきにける 冒頭からの文脈では、秋の田の稲穂を「刈り」。それに「狩り」を掛ける。

【所載】 貫之集Ⅰ・一六／貫之集Ⅱ・一四

【参考】 所載欄の貫之集の詞書によれば、延喜二年月次の屏風の絵に添える歌として四五首奉った歌の一つ。

その絵は「小鷹狩り」であった。したがってここでも画中に群れている人の言葉として、現代語訳した。

一一一四 くもがくれなくなるのゆきてゐるうきたのほむきしげくしぞ思

【異同】ナシ

【現代語訳】雲に隠れて姿は見えぬ鳴きゆく雁の羽を休める渥田（うきた）、その稲穂は透き間なく繁く、わたしはあの人を忘れる時なく繁く思っている。

【語句】○くもがくれ 雲隠れ。雲に隠れて見えない。○なくなる 鳴くなる。「なる」は伝聞の助動詞「なり」の連体形。○ゆきてゐる 「ある」は止まる、じつとしている。○うきた 渥田。泥の深い田。○ほむき 稲穂がなびくこと。実った稲穂のさまとも。「秋の田の穂向のよれるかたよりに君によりななこちたくありとも」（万葉集・一一四）、「秋の田のほむき見がてりわがせこがふさ手折りけるをみなへしかも」（万葉集・三九六五）（旧三九四三）。所載欄の万葉集には「ほたち」とある。○しげくしぞ思 繁くしぞ思ふ。「繁く思ふ」を強める「ぞ」とその係り結び「思ふ」の連体形。「し」は強意の助詞。いつもいつも思う。思わないときははない。初句から四句までは「しげく」を導く序と考えられる。

【所載】万葉集・一五七一（旧一五六七）雲隠 鳴奈流鷹之 去而将居 秋田之穂立 繁之所念 クモガクレ
ナクナルカリノユキテキムアキタノホタチシゲクシゾオモフ くもがくりなくなるのゆきてゐむあきたの
ほたちしげくしおもほゆ／家持集Ⅰ・二四一／家持集Ⅱ・一三二

一一一五 あきのたのほにこそ人をいでゝざらめなどかこゝろにわすれしもせむ

【異同】いてゝざらめ—いてざらめ（御・桂）、こひざらめ（大）

【現代語訳】あの人に恋していると表にこそ出さないけれど、どうして心の中では忘れることがあるうか、片時も忘れない。

【語句】○あきのたの 秋の田の。「ほ（穂）」を導く措辞。○ほにこそ人をいでゝざらめ 「いでゝざらめ」の部分の底本だけが「て」のあと踊り字を書く。筆写の手が滑ったとみて、御所本・桂宮本の「いでざらめ」によって現代語訳した。「穂にいづ」は稲の穂が内から現れること。目に見えるようになること。「こそ」のあとに已然形があると、多くは逆説の意を生じる。表面に表さないけれども。所載欄の古今集では、「ほにこそ人

をこひざらめ」。○わすれしもせむ 忘れようか、忘れはしない。「忘れむ」を強めた言い方。「し」「も」は強
意の助詞。上の「なごか」を受けて反語となる。

【所載】古今集・恋一・五四七

〔以上五首担当 平野〕

一一一六 秋のたのほのうへきりあふあさがすみいづれのかたにわれこひやまむ
いはひめのきささき

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の田の稲穂の上に一面に立ちこめている朝霧。心の中に晴れやらぬ私の恋うる気持は、どちらの
方向で解消されるのだろうか。

【語句】○ほのうへ 稲穂の上。○きりあふ 霧り合ふ。「きらふ」に同じ。霧が立ちこめる。「奈良山の峰もき
りあふむべしこそまがきの下に雪は消えけり」(古今六帖・一三五二)。○あさがすみ 朝霧をいう。万葉集では、
時に秋の「霧」を「霞」と表現する例がある。「霞立つ天のかはらに君待つといゆき帰るに裳の裾濡れぬ」(一五
三二(旧一五二八))。○いづれのかたに どちらの方向に。「夕さればわが身のみこそ悲しけれいづれの方に枕
さだめむ」(後撰集・七三九)。なお、所載欄の万葉集「何時辺乃方二(いつへのかたに)」。○われこひやまむ
所載欄の文献にすべて「わ(あ)が恋やまむ」とある。

【所載】万葉集・八八 秋田之 穂上尔霧相 朝霞 何時辺乃方二 我恋将息 アキノタノホノウヘニキリアフ
アサカスミイツヘノカタニワガコヒヤマム あきのたのほのへにきらふあさかすみいつへのかたにあがこひやま
む／和歌一字抄・一〇六四／奥儀抄・六一二／袋草紙・七二〇／六百番陳状・七〇／古来風体抄・二八

【参考】作者名「いはひめのきささき」は、所載欄の万葉集に一致する。磐姫皇后は、武内宿祢の孫で、葛城襲津
彦(おそつひこ)の娘。仁徳天皇の后。

一一一七 ひとりしてものをぞおもふ秋のたのいなばのそよといふ人もなし
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】 独りきりでももの思いにふけている。秋の田の稲葉が風で「そよ」とかすかに音を立てるが、私には「そよ」（そうだ）と言ってくれる人もいない。

【語句】 ○ひとりして たった独りきりでいて。「夕されば寝にゆく鴛のひとりして妻ごひすなる声のかなしさ」（後撰集・一四〇〇）。所載欄の新撰和歌では「人しれず」。○ものをぞおもふ もの思いをしている。二句切れ。所載欄の文献はすべて「ものをおもへば」とあり、下に続く。○秋のたの 秋の田の。所載欄の古今集（底本は伊達本）は、「秋の夜の」だが、「秋のたの」とある本も、元永本・雅経筆崇徳天皇本・六条家本他の諸本及び古筆切など数多い。○いなばのそよと 「そよと」とは、稲の葉が、風に「そよ」と音を立てるの意に、「そよと言ふ」（そうだと言ふ）の意を掛ける。「人ならば語らふべきを思ふこと薄はそよといふかひぞなき」（好忠集Ⅰ・二二〇）。

【所載】 古今集・恋二・五八四／新撰和歌・二七六／躬恒集Ⅰ・二九一／躬恒集Ⅱ・一六一
【参考】 作者名「みつね（躬恒）」は所載欄の文献に一致する。

一一一八 人ごころいまはあきたのほになればいなばの露の思けぬべし
そせい

【異同】 ナシ

【現代語訳】 あの人の気持が今や私に飽きているとはつきり見えるので、思い悩んで私は死んでしまいたいそうだと。
【語句】 ○人ごころ 人心。ここは、相手の人の気持を言う。「人心たとへて見れば白露の消ゆるまもなほ久しかりけり」（後撰集・一二六三）。○あきたのほになれば 飽きて愛情が薄いことがはつきりしている。「秋田」に「飽き」を掛け、稲の「穂」と「秀になる」（はつきり目につく）を掛ける。○いなばの露の思けぬべし 稲葉の露がはかなく落ちるように、私もこの思いゆえ死んでしまいたいそうだと。「思ひ消ぬ」は、「思ひ」の火で露が消えてしまうのと、思いで自分が絶え入る意とを掛ける。「消（け）」は、「消ゆ」の連用形、「ぬべし」は、：：しまいにちがいない、の意。「音にのみきくのしら露夜はおきて昼は思ひにあへず消ぬべし」（古今集・四七〇）。

【所載】 新続古今集・恋二・一一二〇三

【参考】 作者名「そせい（素性）」は所載欄の文献に一致する。

一一一九 あきのたのほなみをしわけをく露のきえもしなゝん恋てあはずは

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の田に一面に実った稲を押し分けてびっしりと置いている露、その露が消えてしまうように、私は死んでしまいたい、恋いこがれるままもし逢えないのならば。

【語句】○ほなみ 穂波。稲穂が実り垂れて田一面に広がる様を波に見立てた表現。「山とほき門田のすゑは霧晴れてほなみにしづむ在明の月」（統拾遺集・三二七）。○をしわけをく露の おし分けおく露の。押し分けて置く露のように。上三句は「きえ」を導き出す序詞。露の重みで道を作るように稲穂が分かれている様を表現したものと解した。○きえもしなゝん 消えもしななむ。消えてしまつてほしい。消えてしまいたい。「なむ」は他へ詠え望む意の終助詞。ここは自分を露にたとえて、客体化して言つたか。○恋てあはずは 恋ひて逢はずは。恋して、その人に逢えないならば。「ずは」は、もし……ないならば、の意。

【所載】ナシ

【参考】古今六帖・第一帖「つゆ」五六六番には、「秋の穂をしのおしなべ置く露の消えもしなまし恋ひつ逢はずは」という類似した歌がある。

一一二〇 わがゝどのわさだもいまだかりあげぬにけさふくかぜにかりはきにけり
そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家の門近くの早稲田もまだ稲を刈り上げていないのに、今朝吹いた風によって雁はやって来たよ。

【語句】○わがゝどのわさだもいまだかりあげぬに この上句は、一〇六〇番歌に近似する。一〇六〇番歌参照。○けさふくかぜにかりはきにけり けさ吹く風とともに雁はやってきたことだ。まだ「かり」あげていないのに、「かり」はやってきた、というあそびもあるか。この歌の下句は古今六帖・一一三一番歌と同じである。

【所載】ナシ

【参考】作者名「そせい」とあるが、他文献で確認できなかった。

〔以上五首担当 斎藤・加藤〕

一一二二 秋の田のほにけのますらかたよりも君がよりなばこちよくならむ
に ほづみのわうじ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の田の稲穂が一つの方向になびいているように、ひたすらあなたが寄り添ってくれたならば、どんなによい気分になるだろう。

【語句】○ほにけのますら 意味不明。所載欄の万葉集歌の西本願寺本の訓「ホムケノヨスル（穂向けの寄する）」を採り、稲穂が一方に靡き寄せている意とみる。○かたよりに 「かたより」は、中央、あるいは標準の位置からはずれて一方に寄る状態。ひたすら。○よりなば 私に好意を寄せてくれたら。「寄る」は好意を寄せる。「なば」は事柄が完了した時を予想して仮定する。……てしまつたら。○こちよくならむ あまり例のない表現。近い表現として「心地よくおぼされん」（浜松中納言物語）がある。形容詞ク活用「心地好し」の連用形「こちよく」＋補助動詞ラ行四段「なり」の未然形「なら」＋推量の助動詞「む」の終止形。所載欄の万葉集の「言痛くありとも」（世間の噂がひどくても）が本来の形であつたと考えられるが、ここでは底本の本文通りに解した。

【所載】万葉集・一一四（旧一一四）秋田之 穂向乃所縁 異所縁 君尔因奈名 事痛有登母 アキノタノホムケノヨスルカタヨリニキミノヨリナナコチタカリトモ あきのたのほむきのよれるかたよりにきみによりななこちたくありとも

【参考】作者名「ほづみのわうじ」とあるが、万葉集では但馬皇女の作。「但馬皇女在高市皇子宫時 思穂積皇子御作歌一首」とあり、但馬皇女が高市皇子の宮に在った時に穂積皇子を思つて作つた歌とされる。「秋の田の穂向きの寄れる片寄りに我は物思ふつれなきものを」（万葉集・二二五一（旧二二四七））は、所載欄の万葉歌と上三句が共通する類歌。

一一二二 あきはてふゆ
ふゆ
一人もてふれぬひつちほのわがこちもておいづるなり

【異同】ふゆ―冬の田（大）

【現代語訳】秋も終わり、誰も手を触れないひつち穂が自然に生えてくるように、飽き果てた思いは、自分の

心から生じたものなのだ。

【語句】◎ふゆ 底本の永青文庫本では「ふゆ」とあるが、「春の田」「夏の田（永青文庫本では「野」）」「秋の田」の続きなので、ここは本来大久保本の本文のように「冬の田」とあるべきところ。一一三五番歌以下の「野」題でも、「春の野」「夏」「秋」「冬」の順となっている。○あきはてゝ 秋が終わる「秋果てて」に、相手のことに厭きる意の「飽き果てて」を掛けた。○ひつちほ ひつじ（穄・稻孫）の穂。「ひつじ」は刈り取った後の株から再び出た稲。誰も刈り取らない。「穄 唐韻に穄は音を呂と云ふ、後漢書に、穄は於路賀於比と読む、俗に比豆知と云ふ、自生の稲也。」（倭名類聚抄・元和古活字本）とあり、室町時代末期まで清音の「ひつち」であったという。類歌に「枯れる田におふるひつちの穂にいでぬは世を今更に秋はてぬとか」（古今集・三〇八）がある。○わがころもて 自分自身の意志で。自分の心から求めて。○おいづる 生ひ出づる。生え出る。

【所載】ナシ

一一二二二 ころもておふる山田のひつちほはきみまもらねどかる人もなし

【異同】ナシ

【現代語訳】自分から生えてきて実もならない、山田のひつち穂のような私は、あなたが守ってくださいられないけれども刈り取って下さる方などおりませんわ。

【語句】○ころもて 一一二二番歌参照。○ひつちほ 一一二二番歌参照。○まもらねど 守らなくても。「まもる」は、害をなすものの侵入を防ぎ守護する。「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形。「ど」は、逆接恒常条件。現にその事実があるわけではないが、その事実が現われた場合でも、必ずそれに反する結果になることを示す。たとえ……でも。

【所載】後撰集・秋上・二六九

【参考】所載欄の後撰集では、二人の男に物いひける女の、一人につきにければ、今一人がつかはしける」という詞書のある歌「あけ暮らしまもるたのみをからせつつ袂そほづの身とぞなりぬる」（後撰集・二六八）に対する返歌で、男の歌の「たのみ（田の実）」に対し、自らを「ひつちほ」として、そんな自分を守ってくれる男などいないという言い逃れをしている。

かりほ

一一二四 秋たかるかりほをみつゝこきくればころもでさむしつゆおきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】秋田を刈るための仮廬を見ながら稲扱きをしてくると、袖が寒々とする。露が置いているのだ。

【語句】◎かりほ 仮廬。「かりいほ」の略。万葉集時代は旅宿のための仮小屋も指したが、中古以降は收穫期の秋の田を監視し、刈り取るために一時的に設けた仮小屋をいう場合が多い。○こきくれば 扱きくれば。「扱き」は稲などをしごき落とすこと。「そのわたりの家の娘などひきもて来て、五、六人して扱かせ……」（枕草子・九五段）という例がある。所載欄の万葉集では「吾居れば」。○ころもで 衣手。袖。袂。

【所載】新古今集・秋下・四五四／万葉集・二一七八（旧二二七四）秋田苅 借廬乎作 吾居者 衣手寒 露置 尔家留 アキタカルカリイホヲツクリワレラレバコロモデサムシツユオキニケル あきたかるかりいほをつくりわがをればころもでさむくつゆぞおきにける／人麿集Ⅰ・一二三、二四一／人麿集Ⅲ・一七六／六百番陳状・七三

【参考】作者名はないが、所載欄の万葉集歌は、「秋の田のかりほの庵の苫をあらみわが衣手は露に濡れつつ」（後撰集・三〇二、百人一首・一）の原歌と見られる。一一二九番歌参照。

一一二五 み山田のをくてのいねをほしわびてまもるかりほにいくよへぬらん みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】深い山にある田の晩稲の稲を干しかねて、わびしい時間を見張りの仮廬で幾夜過ごしたことだろうか。

【語句】○み山田 深山田、深い山を切り開いて作った田。○をくて 晩稲。遅く成熟する稲。○ほしわびて 干しかねて。「わび」は補助動詞「わぶ」の連用形。……しかなる、……することが困難であるの意。

【所載】拾遺集・雑秋・一一二五／新撰朗詠集・五三二／万代集・一〇六八／夫木抄・五〇〇六／躬恒集Ⅰ・九三／躬恒集Ⅱ・二二二／躬恒集Ⅲ・一三九／躬恒集Ⅳ・一五四／躬恒集Ⅴ・二八

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 中野〕

一一二六 かりほにてひさにへにけりあきかぜにわさだかりがねはやもなかなん
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】仮小屋で久しく日を過ごしてしまった。早稲田の稲を刈り取る時分を知らせる雁が、はやく秋風にのって来て鳴いてほしいものだなあ。

【語句】○かりほ 仮廬。仮小屋。番小屋。一一二四番歌参照。○ひさに 久しく。所載欄の文献では「日さへ」。

○あきかぜに 秋風にのって。雁は秋風が吹くと飛来してくると考えられた。八雲御抄に「八月柳のすゑに風吹く時、常世の国より来て、二月に帰るといへり」とある。「秋風にさそはれわたる雁がねは雲あはるかに今日ぞ聞こゆる」（後撰集・三五五）。○わさだかりがね 「わさ田刈り」と雁の意の「かりがね」を掛ける。○はやもなかなん はやく鳴いて欲しい。雁が渡来しその鳴き声を聞くころが、稲刈りの時分。「綱はへて守（も）りわたりつるわが宿のわさだかりがね今ぞ鳴くなる」（貫之集・五一三）。

【所載】万代集・八九九／貫之集I・一五三

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集では屏風歌。

一一二七 秋はぎをかりほにつくりいほりしてあるらんきみとみるよしもがな

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の萩を仮小屋に葺いて廬を作りその中に住んでいる、そういうあなたとして逢えるような手だてがほしいものです。難なく逢えるように。

【語句】○秋はぎをかりほにつくり 秋萩を「かりほ」に作りなして。「かりほ（仮廬）」はかりそめに作った小屋。仮廬を作る際に萩の枝を用いた例歌に、「秋津野（あきつ）の尾花刈りそへ秋萩の花を葺かさね君が仮廬（かりいほ）に」（万葉集・一二九六（旧二二九二））がある。○あるらんきみとみるよしもがな そのようなあなたとして見るすがほしい。「……きみと」の格助詞「と」は、……というふうに、……として、の意。仮廬の中に君がいるならば、たやすく逢えるから、と言ったもの。「よし」は、手だて・手段の意。「もがな」は、願望を表す助詞。「秋の田のかりほに作りいほりしてひまなく君をみるよしもがな」（人丸集・一四五）。

【所載】万葉集・二二五二（旧二二四八）秋田叫 借廬作 五百入為而 有藍 君叫將見依毛欲得 アキノタヲカリイホツクリイホリシテアルラムキミヲミムヨシモガモ あきたかるかりいほをつくりいほりしてあるらむきみをみむよしもがも／人麿集Ⅰ・一四八／人麿集Ⅱ・四一四

【参考】当該歌と次の一一二八番歌は、万葉集の連番歌。

一一二八 たづがねのきこゆるなへにいほりしてたびにありきといもにつげなん

【異同】ナシ

【現代語訳】鶴のもの悲しい声を聞きながら、私が仮の庵をこしらえて旅の途にあつたと、鶴よ、私のことをあの愛しい人に告げてほしい。

【語句】○たづがね 鶴が音。鶴の鳴き声。旅路に鶴の鳴き声は悲しく聞こえたらしい。「……鶴が音の 悲しく泣けば はろばろに 家を思ひ出（で）……」（万葉集・四四二二（旧四三九八））。○なへに ……とともに、……と同時に、の意を表す助詞。所載欄の文献に「たぬに」。○いもにつげなん 恋人に告げてほしい。「なん」は願望の意の終助詞。鶴が人の上を告げるから鶴に聞いてほしいと詠む例に、軽太子が伊予に流された時の歌、「天飛ぶ鳥も使ひそ鶴がねの聞こえむときは我が名問はさね（空を飛ぶ鳥は私の使いなのだから、鶴の声が聞こえるときは私のことを尋ねてくれ）」（古事記・八五）がある。

【所載】玉葉集・旅・一一二五／新後拾遺集・羈旅・八九六／万葉集・二二五三（旧二二四九）鶴鳴之 所聞田井尔 五百入為而 吾客有跡 於妹告社 タヅガネノキコユルタキニイホリシテワレタビナリトイモニツゲコソ たづがねのきこゆるたぬにいほりしてわれたびなりといもにつげこそ

【参考】当該歌と一一二七番歌は万葉集の連番歌。

天地天皇御

一一二九 あきのたのかりほすいほのとまをせみわがこゝろもではつゆにぬれつゝ

【異同】かりほすいほのーかりほはいほの（桂）

【現代語訳】稲を刈り干す秋の田の番小屋に暮いてある苦の目は粗いので、私の袖は露に濡れていることです。

【語句】○天地天皇御 「天智天皇御」の宛字。「御」は御歌の意。○かりほすいほの 刈り干すための仮小屋

の。○とまをせみ 「とま」(苦)は、菅や茅などをむしろのように編んだもので、仮小屋の屋根や周囲を覆う。傍記「あらみ」ならば、苦で編んだ目は粗いのでとわかりやすい。現代語訳は「あらみ」に拠った。「秋の田の庵にふけるとまをあらみもりくる露のいやはねらるる」(和泉式部集・四四)。

【所載】後撰集・秋中・三〇二／新時代不同歌合・七／秀歌大体・五四／百人秀歌・一／百人一首・一／定家十体・一二／和歌童蒙抄・二〇九／万葉集時代難事・二三／古来風体抄・三二三／近代秀歌・四二／詠歌大概・三四／八雲御抄・六九／心敬私言・九

【参考】百人一首の巻頭歌。作者名天智天皇は所載欄の文献に一致する。一一二四番歌参照。

いなおほせどり

一一三〇 山田もるあきのかりほにをくつゆはいなおほせどりのなみだなりけり たぐみね

【異同】ナシ

【現代語訳】山田の番をする秋の仮小屋に露が降りているが、それはいなおほせ鳥の涙なのであったよ。

【語句】◎いなおほせどり 稲負鳥。秋、稲が実ったところにやって来て、稲刈りを促すように鳴くと詠まれる。

収税役人の意の「稲課(おほ)せ取り」を掛ける例もある。古今伝授の秘説「三鳥」の一つで、中世の歌論書に鳥の名はいろいろの挙がるが、未詳。○山田もる 山田の番をする。「もる」は、守る、番をする、の意。

【所載】古今集・秋下・三〇六／新撰万葉集・一四九／新撰朗詠集・五三三／忠岑集I・三五／忠岑集II・一六／忠岑集III・二四／忠岑集IV・二八／是貞親王家歌合・一／和歌一字抄・一〇九四／綺語抄・五七五／和歌童蒙抄・九五八／袋草紙・七五五／袖中抄・一〇五三／桐火桶・一一三

【参考】作者名「たぐみね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

一一三一 わがやどにいなおほせどりのなくなへにけさふくかぜにかりはきにけり 人まる

【異同】いなおほせどりの―いなおほ鳥の(大)

【現代語訳】わたしの家になおおせ鳥が来鳴くにつれて、けさ吹く風と共に雁がやってきたことだ。
【語句】○いなおほせどり 前歌(二一三〇) 参照。○なくなへに 鳴くのにつれて。「なへに」は、活用語の連体形に付いて、一つの動作・状態と同時に、別の動作・状態が生起することを表す。……と同時に。……につれて。……の折しも。上三句は「来にけり」にかかる。○かぜに 風によつて。風と共に。風に乗つて。

【所載】古今集・秋上・二〇八／猿丸集Ⅰ・四〇／猿丸集Ⅱ・四二／俊頼髓脳・三〇五／綺語抄・五七六／奥儀抄・四六五／袖中抄・一〇五二／和歌色葉・二四三

【参考】作者名「人まろ」とあるが、この歌を人麿の作とする典拠は見出せない。なお、古今六帖・一一二〇番歌は、下句がこの歌と同じである。

そぼづ

一一三二二 そぼづたつ山田のいけはいまもなをこゝろふかしなうきせはあれど

【異同】ナシ

【現代語訳】かかしの立っている山田にある池は、いまでもなお思うこころが深いのですよ。いろいろつらいこととはあるけれども。

【語句】◎そぼづ 「そぼど」の転。かかしのこと。古事記神代記に「少名毘古那の神を蹟(あらし)し白(まう)せしいはゆる久延毘古は、今に山田のそぼど(曾富騰)といふぞ。」とある。○そぼづたつ かかしの立っている。「山田」を修飾する句。○山田のいけ 山あいの田にある池。この歌の作者の暗喩。○いまもなをこゝろふかしな いまでもやはりあなたを思う気持ちは深いのだよ。「なを」は「なほ」。「ふかしな」の「な」は詠嘆を表す終助詞。池の深さが「深い」ことに、相手を思う気持が「深い」ことを重ねて言っている。○うきせはあれど いろいろつらいこととはあるけれども。「泥(うき)」に「憂き」を掛ける。「せ」は「瀬」、状況・局面などの意。「ふかし」「うき」「せ」は「いけ」の縁語。

【所載】夫木抄・五〇四五

【参考】なにかの事情で隔てられている恋であろう。

一一三三三 あきのたにたえぬばかりぞ君こふる袖のそぼづにならぬひるなし

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたに飽きられて、絶え入るばかりの苦しい思いです。あなたを恋い思う袖がびしょぬれにならぬ日はありません。

【語句】○あきのたに 秋の田に。「秋」に「飽き」を掛ける。○たえぬばかりぞ 命も絶えんばかりの苦しい思いをしている。「ぞ」で愁訴を強めた。○そほづ 「かかし」の意の「そほづ」に「濡（そほ）つ」を掛ける。

【所載】ナシ

一一三四 あしひきの山田にたてるそほづこそおのがたみを人にかくなれ

【異同】おのかたみを—おのかたのみを（御・桂・大）

【現代語訳】山あいの田に立っているあのかかしこそ、自分の頼みを人にかけるものだそうだ。（わたしも、あなたのところに期待をかけている。）

【語句】○おのがたみを このままでは意が通じない。諸本の「おのがたのみを」に拠って解釈する。自分の期待を。「田の実」に「頼み」を掛ける。「田の実」は田に実った稲の実。「頼み」はあてにすること、願い、期待。

「明け暮らしまもるたのみを刈らせつつたもとそほづの身とぞなりぬる」（後撰集・二六八）。○かくなれ かけるものなのだそうだ。「かく」は下二段動詞「掛く」の終止形、「なれ」は伝聞の助動詞「なり」の已然形。

【所載】ナシ

春のゝ

一一三五 くさも木もみどりにみゆるはるのゝに雨ふりそめば色やまさらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】草も木もみな緑に見える春の野に、雨が降り始めて野を染めたならば、草木の色はいっそうまざることであろうか。

【語句】◎春のゝ 「野」は自然のままの状態にある広い平地のこと。「春のゝ」は四季のうちの春の季節の野。古今六帖は「野」の項目の下に、「春の野」「夏の野」「秋の野」「冬の野」「雑の野」「かり」「ともし」「わし」「おほたか」「こたか」「きじ」「はと」「うづら」「大たかがり」「こたかがり」「みゆき」の十六題を立てており、「野」

を四季の季感によってとらえると同時に、狩の場としてもとらえていることが窺われる。○ふりそめば ふりはじめたならば。雨の「降り初めば」に草木の色の「振り染めば」を掛ける。「春雨のふりそめしより青柳の糸のはなだぞ色まさりゆく」(躬恒集I・一四五)。

【所載】ナシ

(以上五首担当 山下)

一一三六 春ふかくなりぬるときののべみればくさのみどりもいろまさりけり

つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】春が深まってきた時の野辺を見ると、草の緑も一層色が濃くなっていることだなあ。

【語句】○春ふかくなりぬるとき 春がきて、日が経ちその季節が深まってきた時。「春深き色にもあるかな住の江のそこも緑に見ゆるはま松」(後撰集・一一一)。○いろまさりけり 緑の色が一層濃くなったなあ。「けり」は初めて気がついて感動する意。

【所載】貫之集I・一一六

【参考】当該歌は貫之集Iに「延喜八年承香殿御屏風歌 人の春の野にあそぶところ」と詞書があり、作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一一三七 こまなべてめもはるのゝにまじりなむわかなつみつる人もありやと

【異同】ナシ

【現代語訳】馬を連れて、目の届く限り広い春の野に分け入ってしまおう。そこに若菜を摘んでいる人もいるかと。

【語句】○こまなべて 馬を一列に並べて。「なべ」は「なめ」の子音交替形。「駒なめていざ見にゆかんふるさとは雪とのみこそ花は散るらめ」(古今集・一一一)。○めもはるのゝ 目の届く限り遙かな春の野。「めもはる」に「目のみえる限り遙かに」と「芽も張る」春の野の意を掛ける。○わかなつみつる人 正月子の日に長寿を祈って若菜を摘み、それを羹(あつもの)にして食すため摘んでいる人。

【所載】新撰万葉集・一三／寛平御時后宮歌合・二一
【参考】類歌に「おしなべていざ春の野にまじりなむ若菜つみくる人もあふやと」（続千載集・三四、万代集・六〇）があげられる。

一一三八 なか／＼になにあひみてむかすがのゝやくるほのをよそにみましを

【異同】やくるほのをゝやくるほのみゝ（桂）

【現代語訳】なまじつか、どうしてあの人と逢ってしまったのだろう。もしこんな仲になっていなかったら春日野の野焼きの焰を、自分と関係のないものとして見ただろうものを。

【語句】○なか／＼に 中途半端に。なまじつか。○なにあひみけむ なぜあの人と親しい仲になったのだろう。○かすがの 春日野。大和国の歌枕。奈良市街の丘陵地。「春日の原」「春日の山」とも言う。○やくるほのを やくるほのほ。春日野で早春新芽を萌えやすくするために行う野焼きの焰。「春日野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり」（古今集・一七）を念頭に詠んでいる。○よそにみましを 自分と関係のないものとして見ただろうものを。「まし」は反実仮想の助動詞。「を」は強めの助詞。

【所載】ナシ

【参考】類歌に「なか／＼になにに知りけむ吾山にもゆる煙のよそにみましを」（万葉集・三〇四七〈旧三〇三三〉）がある。

一一三九 春のゝにわかなつまんとしめしのにちりかふはなにみちもまがひぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】春の野に若菜を摘もうとして標をつけておいた野に、時が経って今は花が一面に散り乱れ、道も分からなくなってしまった。

【語句】○わかかな 初春に摘む菜。また正月子の日に摘んで、食したり人に贈る菜。「あすよりは若菜つまむとしめしのに昨日も今日も雪はふりつつ」（万葉集・一四三一〈旧一四二七〉）。○しめしの 占有の印をつけておいた野。○ちりかふはな 入り乱れて散る花。○まがひぬ 交じり合っって見分けがつかなくなってしまった。

【所載】古今集・春下・一一六／寛平御時后宮歌合・八

一一四〇 わすらるゝときしなればかすがのゝとふひありやとまつぞかなしき^{わび}

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人を忘れられるときなど全くないので、訪ねてくる日があるかとあてのない日を空しく待つのは、どうしようもなくつらいことです。

【語句】○わすらるゝときしなれば 恋人を忘れられるときが全くないので。「るゝ」は可能の助動詞。「し」は強く指し示す意の助詞。○かすがの 一一三八番歌参照。○とふひ 恋人が訪れる日。「訪ふ日」に「飛ぶ火」をかける。「飛ぶ火」は大和国の歌枕。奈良市内にあり、昔春日野に外敵の侵入を知らせるのろしの「烽火」（とぶひ）が設けられたことから、この野を「飛ぶ火野」と呼ぶようになった。「飛ぶ火」に「訪ふ日」を掛けた例として「春日野の雪の下草人しれずとふひありやとわれぞ待ちつる」（齋宮女御集Ⅱ・五六）がある。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 林〕

なつ

ひとまろ

一一四一 なつのゆくをじかのつゝつかのまもみねばこひしき君にもあるかな

【異同】なつ―夏の野（大）

【現代語訳】古今六帖・第二帖「しか」九三二番歌既出。

【語句】◎なつ 夏。第二帖巻頭の目次によると「野」の項目のうち「夏の野」。大久保本にも「夏の野」とある。「夏野」もしくは「夏の野」は、夏草が繁茂する様が詠まれることが多い。

【所載】古今六帖・第二帖「しか」九三二番既出

一一四二 くさしげみしたしげりゆく夏のゝをわくとわくればそでぞひちぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】草が生い茂っているので、下蔭が盛んに茂っていく夏の野を分けに分けて通って行くと、すつかり袖が濡れてしまった。

【語句】○くさしげみ 草が茂っているので。「しげ」は形容詞「しげし」の語幹。「み」は、原因・理由を表す接尾語。○したしげりゆく 下が茂っていく。木の下蔭などの下草が盛んに繁茂していく意。「大荒木の森の下草しげりあひて深くも夏のなりにけるかな」(拾遺集・一三六)。「しげりゆく」の「ゆく」に、自分が行く意の「行く」を響かせるか。○わくとわくれば 分くと分くれば。かき分けかき分けて通ると。「夏草のしげきをわけし君なれど今は心にあきぞ来にける」(重之集・二五八)。同じ動詞を重ねた間に格助詞「と」を挿入するのは、強意の用法。○そでぞひちぬる 茂った草をかき分けて通ったため露で袖が濡れたことに、朝、女と別れて帰らなければならぬため涙に泣き濡れた寓意を込める。「秋の野に笹分けし朝の袖よりも逢はで来し夜ぞひちまさりける」(古今集・六二二)。

【所載】ナシ

【参考】寛平御時后宮歌合に「草しげみ下葉枯れゆく夏の日もわくとしわけば袖やひちなん」(五三三)、新撰万葉集に「草繁 芝多放往 夏之夜裳 別手別者 袂者沾南 クサシゲミシタハナレユクナツノヨモワケテワカレハソデハヌレナム」(三〇九)という歌がある。

秋

一一四三三 あきのゝにみだれてさけるはなの色のちぐさにものを思ころかな

【異同】秋—秋の野(大) あきのゝに—秋の野の(大)

【現代語訳】秋の野に咲き乱れている花の色は様々で、私も様々に思い乱れて物思いをするこの頃だよ。

【語句】◎秋 第二帖巻頭の目次によると「野」の項目のうちの「秋の野」。大久保本にも「秋の野」とある。古今六帖のこの項では、十一首中、十首が「秋の野」という語句を詠み込んだ歌で、他の一首も、秋風の吹く武蔵野を詠んでいる。秋の野に咲き乱れる種々の花・露・草葉の紅葉して枯れる様が詠まれ、時には、それらの秋の野の景が、人事と重ね合わせられている。○ちぐさに 千種に。様々に。上句からの続きでは花の色の種類が多いことを表し、あれこれと千々に思い乱れる意で下に続く。初句から三句目までは「ちぐさに」を導く序詞。「春来れば野辺のまにまにおひしげるちぐさにものを思ふ比かな」(古今六帖・三五四九)。

【所載】古今六帖・第六帖「秋(秋の草)」三五六五／古今集・恋二・五八三／貫之集I・五九二

【参考】作者名については一一四五番歌参照。所載欄の古今六帖・三五六番歌では、初・二句が「秋の野のちぐさにさける」、四句が「みだれて物を」となっている。

一一四四 秋のゝうつろふみればつれなくてかれにし人をくさばとぞ思

【異同】秋のゝ―秋のゝの(桂・大)

【現代語訳】秋の野が色褪せていくのを見ると、薄情で私との仲を絶ってしまった人は草葉と同じだったのだと思うよ。

【語句】○秋のゝ 桂宮本・大久保本に「秋のゝの」とあるのによつて、解釈した。「秋」に「飽き」を掛ける。○うつろふ 変わっていく。秋の野の草葉の色が褪せて枯れてゆく意の「うつろふ」に人の心変わりの意の「うつろふ」を掛けた。○かれにし人をくさばとぞ思 私から離れてしまった人を草葉と同じだったと思う。「山吹の花取り持ちてつれもなくかれにし妹を偲ひつるかも」(万葉集・四二〇八(旧四一八四))。「かれ」は、「離(か)れ」に「草葉」の縁語「枯れ」を掛け、あの人は、草葉だったから「かれ」ってしまったんだなあ、と見立てた。「霜さやぐ野辺の草葉にあらねどもなどか人めのかれまさるらむ」(延喜御集・三)。

【所載】貫之集I・五九〇

【参考】作者名については一一四五番歌参照。

一一四五 あきの野のくさもわけぬとわが袖のもの思なへにつゆけかるらん

已上 つらゆき

【異同】くさもわけぬと―くさもわけぬに(御・桂・大)

【現代語訳】秋の野の、露が置いた草をかき分けたわけでもないのに、どうして私の袖は物思うにつれて露に濡れたようになるのだろう。

【語句】○くさもわけぬと 他本には「くさもわけぬに」とあるのによつて解釈した。野の草を分けるということについては、一一四二番歌及びその語句欄の古今集六二二番歌参照。○なへに 一つの動作・事態と同時に、他の動作・事態が伴うことを表す。……とともに。……やいなや。……につれて。○つゆけかるらん なぜこのように露っぽいのだろう。なぜこのように涙がちなのだろうの意を含む。涙で濡れているのを露に濡れ

たように見立てた。「らん」は原因推量を表す助動詞。

【所載】後撰集・秋中・三一六／貫之集Ⅰ・六〇一／貫之集Ⅱ・八七／貫之集Ⅲ補遺・三五

【参考】「已上つらゆき」とある通り、一一四三番歌「一一四五番歌の作者は貫之であることが所載欄の文献によつて確かめられる。拾遺集に「秋の野の草葉も分けぬわが袖の露けくのみもなりまさるかな」（八三二・よみ人知らず）、一条撰政御集に「秋の野の草葉も分けぬわが袖のあやしやなどて露けかるらん」（一四三）という歌がある。

〔以上五首担当 長戸〕

一一四六 あきのゝにいまこそゆかめものゝふのおとこ女のはなにほふみに

ヲミナ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野に今こそ行こう。宮仕えする男女の美しく着飾った姿を見に。

【語句】○もののおふ 上代、朝廷に仕えた文官・武官の総称。「もののおの臣（おみ）の壮士（をとこ）は大君の任（ま）けのまにまに聞くといふものぞ」（万葉集・三七二（旧三六九））。○おとこ女 をとこをみな。男女の別なく、着飾つて出かける宮廷人たちをいう。○はなにほふ 咲き誇る花のように美しく照り映える。着飾つた宮廷人のさまをたとえた。

【所載】万葉集・四三四一（旧四三一七） 秋野尔波 伊麻己曾由可米 母能乃布能 乎等古乎美奈能 波奈尔保 比见尔 アキノニハイマコソユカメモノフノヲトコヲミナノハナニホヒミニ あきのはにいまこそゆかめものふのをとこをみなのはなにほふみに／袖中抄・三〇八、五四八

一一四七 あきのゝにしきのごともみゆるかな色なきつゆはをかじとぞ思

もとかた

【異同】あきのゝあきのゝの（桂）、秋の野の（大）

【現代語訳】秋の野が錦のようにも見えることだ。色の無い露は置かないだろうと思うよ。

【語句】○あきのゝ 本文は字足らず。桂宮本・大久保本の「秋の野の」に拠つて解す。○にしきのごと まるで錦のように。秋の野の色づいたさまを言った。「秋ののくさばを人もおりきしをにしきのごとも見えわたる

かな」（古今六帖・三七七五）。○色なきつゆはをかじとぞ思 「をかじ」は「おかじ」。色のない露は置かないだろうと思う。意の通りにくいところもあるが底本のまま解釈した。所載欄の後撰集では「色なき露は染めじと思ふに」とあり、その方がよくわかる。

【所載】後撰集・秋下・三六九

【参考】作者名「もとかた」とあるが、所載欄の後撰集では「よみ人知らず」とする。

一一四八 秋のゝにいかなるつゆのをけばかはちづくさばのいろかはるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野にいったいどんな露が置いたからというので、こんなにもさまざまに草葉の色が変わるのだろうか。

【語句】○いかなるつゆのをけばかは おけばかは。いったいどのような露が置いたからというのか。「かは」は疑問。○ちづくに 千々に。さまざまな色に紅葉したさまをいう。「白露の色はひとつをいかにして秋の木の葉をちづくにそむらん」（古今集・二五七）。

【所載】後撰集・秋下・三七〇／和歌一字抄・一〇七三／袋草紙・七三一

一一四九 あきのゝにをくしらつゆはたまなれやつらぬきとむるくものいとすぢ
あさやす

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野に置く白露はまるで玉であるよ。つらぬいて留めかけている蜘蛛の糸筋よ。

【語句】○たまなれや 「や」は詠嘆の終助詞（日本古典文学大系『古今和歌集』解説参照）。三句切れ。「風ふけば浪打つ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり」（古今集・六七二）。○つらぬきとむる 露を玉と見て、それを貫きとどめている。○くものいとすぢ 蜘蛛の糸を露の玉を貫く糸に見立てる。「くもの糸を片糸によりて白玉の緒にしたりとも我たえめやは」（古今六帖・三一九四）。

【所載】古今六帖・第六帖「くも」四〇二〇／古今集・秋上・二二五／新撰万葉集・三八二／新撰和歌・七六

【参考】作者名「あさやす」は所載欄の古今集に一致する。

一一五〇 あきのゝにわけゆくからにうつりつゝわがころもでははなのかぞする
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野に分け入るとすぐに、色や香りを染みこんで、私の袖は花の香りがすることだ。

【語句】○わけゆくからに 分け入るとすぐに。「からに」は接続助詞で二つの動作や状態が続いて生じる意を表わす。「吹くからに秋の草木のしをるればむべ山かぜをあらしといふらむ」（古今集・二四九）。○うつりつゝ 香移りがして。「うつる」は花の色や香りが衣装に染みこむの意。「つゝ」は、そのことが反復または継続して行われるさまをいう。○わがころもでは 私の袖は。「ころもで」は袖の意。

【所載】新古今集・秋上・三三五／躬恒集Ⅰ・二一九／躬恒集Ⅱ・二三七／躬恒集Ⅳ・四七四／躬恒集Ⅴ・一〇四

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 青木〕

一一五一 ゆく／＼とみれ^どもあかぬあきのゝはゆきもやられずとまるともなし
伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】歩みを進めるにつれて、どんなに見ても見飽きない秋の野は、行き過ぎてしまうこともできず、だからといって立ち止まるわけにもいかない。

【語句】○ゆく／＼と 行くに従って。次第に行くにつれて。「君がすむやどのこずゑのゆくゆくとかくるるまにかへりみしはや」（拾遺集・三五二）。ただし所載欄の続古今集では「さくはなを」、伊勢集では諸本すべて「行くと来と」とする。○ゆきもやられずとまるともなし 行き過ぎることもできず、また立ち止まることもできない。さまざまな花が美しく咲いている秋の野のすばらしさをいうのであろう。

【所載】続古今集・秋上・三三三／伊勢集Ⅰ・二四二／伊勢集Ⅱ・二四三／伊勢集Ⅲ・二四二

【参考】作者名「伊勢」は、所載欄の文献に一致する。

一一五二 秋かぜのふきと吹ぬるむさしのはなべてくさ木の色かはりけり

【異同】 ナシ

【現代語訳】 秋風が吹きつるあの武蔵野は、すべて草木の色が変わってゆくことだ。

【語句】 ○ふきと吹ぬる 吹きに吹く。しきりに吹く。吹きつる。○むさしの 武蔵国（今の東京都と埼玉県を中心とした地方）に広がる野原。○なべて すべて。全体にわたって。

【所載】 古今集・恋五・八二一

【参考】 古今集の当該歌は恋五に属し、配列の上からも「秋かぜ」には「飽きかぜ」が掛けられていて、相手の心変わりを嘆いている心境を詠んだ歌と解するのが普通だが、本集の場合は一般的な移ろいの哀感を詠んだものと解すべきか。なお「むさしのはなべて」という表現から、「紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみながらあはれとぞ見る」（古今集・八六七）の影響を考える頭註密勘や古今余材抄などの解もある。

一一五三 よのなかのつねとはみれどあきののうつろひかはるときぞわびぬる
そせい

【異同】 ナシ

【現代語訳】 これが世の中の常の姿とは見るけれど、やはり、秋の野の移ろい変わる時はわびしい気持ちにな
ることだ。

【語句】 ○あきののうつろひかはるとき 秋の野の草木が枯れはじめ、移ろい変わる時。

【所載】 新拾遺集・釈教・一四九〇

【参考】 作者名「そせい」は、所載欄の文献に一致する。

冬

一一五四 しもがれの人とわが身をおもひせばもえても春をまたさしものを
こまちがあね

【異同】 冬―冬の野（大）

【現代語訳】古今六帖・第一帖「しも」六六六番既出。

【語句】◎冬 巻頭目次には「冬の」とある。第二帖の「野」という大項目のもとに属している項目なので、正確には大久保本の「冬の野」に従うべきであろう。一面冬枯れの状態となった、荒涼たる野をいう。○人とわが身を 既出六六六番歌では「のべとわが身を」とある。

【所載】古今六帖・第一帖「しも」六六六番既出

【参考】作者名「こまちがあね」は不審。伊勢集に見え、古今集でも「伊勢」とする。

一一五五 かやのゝべいともかくなるみねのうへの松かへともひさしきものを

【異同】松かへともひさしきものにも「大」

【現代語訳】かやの野辺は本来にまあこんな状態になってしまったことだ。嶺の上の青々とした松や柏はともいつまでも変わらないものなのに。

【語句】○かやのゝべ 「かや」は、チガヤ、ススキなどイネ科の植物で、屋根を葺いたりする時に用いられる草の総称。茅。萱。○いともかくなる 本来にこのような。まったくこうした。冬の野の見渡す限り茅の枯れた状態をいうか。ただし「かくなる」と連体形になっているのは不審。古今六帖・三七八九にもこの歌は重出しており、そこでは「いともかふるゝか」とする。○松かへともひ 「かへ」は「柏」で、ヒノキ科の総称。「長歌」……しらたまの みがほしみおもわ ただむかひ みむときまでは まつかへ（松栢）の さかえいまさね たふときあがきみ」（万葉集・四一九三（旧四一六九））。

【所載】古今六帖・第六帖「かや」三七八九

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一一五六 冬タラネハヤごもりはるのおほのをやく人はタラネバヤやかねばや人のむねやく

【異同】やきやかねはやタラネハヤやきたらねはや（大）

【現代語訳】春の原野を焼く人は、焼ききれないので、人の胸を（恋心で）焦がすのだろうか。

【語句】◎ごまのゝ 雑の野。四季の野に続き、四季の範疇外の野の歌を集めた。○冬ごもり 「春」の枕詞。

○おほの 山すそなどの大きな野。広野。「小野」の対。○やきやかねばや 「ばや」は接続助詞「ば」＋係助詞「や」で、已然形に接続し確定条件の疑いを表す。傍記の「ヤキタラネバヤ」は「焼き足らないので」の意。春野を焼くのは焼畑の作業。所載欄の万葉集では「やきたらぬかも」「やきたらねかも」。

【所載】万葉集・一三四〇（旧一三三六）冬隠 春乃大野乎 焼人者 焼不足香文 吾情熾 フユコモリハルノオホノヤクヒトハヤキタラヌカモワガココロヤク ふゆこもりはるのおほのをやくひとはやきたらねかもわがこころやく

一一五七 むさしのゝくさのゆかりときくからにおなじのべともむつまじきかな

【異同】ナシ

【現代語訳】武蔵野の草、紫草と縁があると聞くだけで、（紫草の生えている）同じ野辺とも懐かしく思われま

すよ。

【語句】○むさしのゝくさのゆかり 古今集・八六七番「紫のひともとゆゑに武蔵野の草はみなながらあはれとぞ見る」を踏まえたもの。武蔵野は、武蔵国一帯の平野で「草」と共に多く詠まれる。○きくからに 聞くだけで。○むつまじきかな 「むつまじ」は「心がひかれる。なつかしい。」意。「をみなへしにほへる秋のむさしのは常よりも猶むつまじきかな」（後撰集・三三七）。

【所載】ナシ

一一五八 あふことをいなびのにすむしかこそはかりの人にはあはじてふらめ

【異同】あふことを―あふことは（大） いなひのにすむ―いなゐのにすむ（桂）

【現代語訳】逢うことがいやだという名の印南野に住む鹿こそは、狩人には会わないといっていますでしょう。私もかりそめの愛情しか持たない人には逢いませんわ。

【語句】○いなびの 播磨国印南郡の野。今の明石市から加古川市（加古川以東）にかけての一带。「否び」を掛ける。「かり人のたづぬるしかはいなびのにあはでのみこそあらまほしけれ」（女のほかはに侍りけるを、そこにと教ふる人も侍らざりければ、心づからとぶらひて侍りける返事につかはしける）・後撰集・一〇〇九。桂宮本は「いなゐ」の「ゐ」に「ひ」と傍記がある。○かりの人 「狩人」と「仮の人」（二時的、かりそめの愛情

しか持つていない人」を掛ける。○あはじてふらめ 会わないというでしょう。「てふ」は「といふ」の約。「らめ」は助動詞「らむ」の已然形で推量を表す。

【所載】夫木抄・四六九六

【参考】作者を男性と考えて、「あなたは鹿ではないのだから私に逢ってほしい」と解することも可能か。

一一五九 わするやとのにいでゝみればはなごそせいにふくめるものはあはれなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】忘れられるだろうかと、野に出てみれば、花の一つ一つが中に含めるようにもっているのは（あの人への）愛しさでしたよ。

【語句】○わするやと 苦しい恋を忘れることができるかと。○ふくめるものは「ふくめる」（下二段活用）は、「中に含みもつようにする」意。「梅の花さきたるなかにふくめるは恋やこもれるゆきをまつかも」（家持集・八）。○あはれなりけり いとしいと思われる。「あはれ」はここでは、愛情、好意の意。

【所載】ナシ

【参考】作者名「そせい」とあるが根拠不明。

一一六〇 はつかにもひとをみまくのすゝきのゝほにいでゝいまぞこひしかりける

【異同】ナシ

【現代語訳】ちらりとでもあなたを見るだろうという、すすき野のすすきが穂にできるように、私のあの人への気持も表面に出て、今、恋しいのですよ。

【語句】○はつか 瞬間的にちらりと見えたり聞こえたりする様子。○みまく 「見む」のク語法で、見ることに意。○すゝきの 所載欄の夫木抄は伊勢国とするが未詳。○ほにいでゝ 穂に出でて。それとわかるように。はつきりと表に現われ出て。「穂に出づ」は、すすきの穂が出るの意に、表面に現れる、人目につくようになる、の意を掛ける。「秋の野の草のたもとか花すすきはほにいでてまねく袖と見ゆらむ」（古今集・二四三）。上三句は「穂に出づ」を導く序詞。

【所載】夫木抄・九八三八

(以上五首担当 三浦)

一一六一 いなびのゝあさぢをしなみさねしよのけながくしあればいもをこそ思へ

【異同】いなびのゝいなみ野の(大)

【現代語訳】印南野の浅茅を押し均(なら)して寝る夜が幾日も続くので、妻のことばかりが思われることだ。

【語句】○いなびの 稲日野(いなびの)。印南野(いなみの)ともいう。兵庫県南部の加古川・明石川二流域

にまたがる野。溜め池が多いことで有名。一一五八番歌参照。○あさぢ 浅茅。丈の低いちがや。○をしなみ

「押し靡む」の連用形。「押し並ぶ」と同義で、上から押さえつけて平らにして、押し均(なら)して。「あさぢをしなみさねしよ」とは、旅中での不如意な旅寝の表現。○けながく 日数が多く経ち。日数が重なり。

【所載】万葉集・九四五(旧九四〇) 不欲見野乃 浅茅押靡 左宿夜之 氣長有者 家之小篠生 イナミノ

アサヂオシナミサヌルヨノケナガクアレバイヘシシノフル いなみののあさぢおしなべさぬるよのけながくし

あればいへししのはゆ／夫木抄・二三三五〇／袖中抄・五八五／六百番陳状・一五九／古来風体抄・六九

【参考】作者名はないが、万葉集では山部赤人の作。神龜三(七二六)年十月七日から二十九日まで、聖武天皇が播磨国印南野へ行幸した時に作った歌。

かり

やかもち

一一六二 ますらをのよびたてしかばさをしかのむなわけ行ぞあきのはぎはら

【異同】むなわけ行そ—むな分て行そ(大)

【現代語訳】ますらおが大声で追い立てたので、雄鹿が胸で押し分けて行ってしまふことだ、秋の萩原を。

【語句】◎かり 山野で鳥や獣を追い立てて捕らえること。鹿狩り、鷹狩りをいう場合が多い。和歌では主に鷹狩りが詠まれるが、当該歌は鹿狩りである。○ますらを 強く勇ましい男。上代では朝廷に使える大宮人を

指す場合が多い。○よびたてしかば 「呼び立て」は大声で呼ぶ意。狩においては、勢子が茂みに潜む鳥獣を追い出すために大声を発する。○むなわけ行ぞ むなわけ行くぞ。胸で押し分けて行くぞ。「胸分く」は、鹿な

どが胸で草むらや茂みなどを押し分けてゆくさまをいう。「さ雄鹿の胸別けにかも秋萩の散り過ぎにける盛りかも去ぬる」(万葉集・一六〇三(旧一五九九))。所載欄の万葉集歌は「むなわけゆかむ」と、推量の「む」が用いられる想像の景であるが、当該歌は現実の景として詠む。

【所載】万葉集・四三四四(旧四三二〇) 麻須良男乃 欲妣多天思加婆 左乎之加能 牟奈和氣由加牟 安伎野波疑波良 マスラヲノヨビタテシカバサヲシカノムナワケユカムアキノハギハラ ますらをのよびたてしかばさをしかのむなわけゆかむあきのはぎはら

【参考】作者名「やかもち」は、所載欄の文献に一致する。

一一六三 いなびのにかりするしたひくさふかみむつきはみえでゆみのはずみゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】印南野で狩られる鹿は、草が深く茂っているので、六か月は見ることができず、弓の筈だけが見える。

【語句】○いなびの 一一六一番歌参照。○したひ 未詳。所載欄の夫木抄の「かりするしかは」をとり「鹿は」として解す。○くさふかみ 草が深く茂っている。○むつき 六か月。「数ふれば今いつつきになりけり」「むつきにならばとふ人もあらじ」(実方集・六二・連歌)。○ゆみのはず 弓の筈。「筈」は弓の両端の弦をかけるところ。「弓」は「むつき」の「月」の縁語。

【所載】夫木抄・一六九八四

一一六四 山のべにさをちのねらひいをろしみおしかなくなりつまのめをほり

【異同】ナシ

【現代語訳】山辺では猟師の狙いが恐ろしいけれど、雄鹿が鳴いているよ、妻に逢いたいばかりに。

【語句】○山のべ 山辺。○さをち 未詳。傍記の「さつを」(猟師、狩人)として解す。所載欄の万葉集にも「さつを」とある。○いをろしみ 未詳。所載欄の万葉集の西本願寺本の訓「おそるれど」に拠って解す。○おしか をじか。雄鹿。○めをほり 「……が(の)目を欲る」は対象に逢うことを欲する意。「朝露の消やすき我が身他国(ひとくに)に過ぎかてぬかも親の目を欲り」(万葉集・八八九(旧八八五))。

【所載】万葉集・二一五三(旧二一四九) 山辺庭 薩雄乃祢良比 恐跡 小壮鹿鳴成 妻之眼乎欲焉 ヤマヘニハサツヲノネラヒオソルレドヲシカナクナリツマノメヲホリ やまへにはさつをのねらひかしこけどをしかなくなりつまがめをほり／夫木抄・四六四六／綺語抄・六四四／和歌童蒙抄・四五三／袖中抄・四六四

一一六五 あづさゆみすゑのとはけにとがりする君ゆづるのたえんと思へばや

【異同】君ゆつるの—君かゆつりの(大)

【現代語訳】末の腹野で鷹狩りをするあなたの弓弦が途中で断ち切れる、そんなふうに関係が絶えると思えましょうか。

【語句】○あづさゆみ 梓弓。「末」にかかる枕詞。○すゑのとはけ 未詳。所載欄の万葉集「すゑのはらの(末の腹野)に」に拠って解す。「腹野」は所在未詳、「原野」の当て字とする説もある。○とがり 鳥狩。鷹狩のこと。○君ゆづるの「弓弦(ゆづる)」は弓に張る糸。初句から第四句までが、第五句の「たえ(絶え)」を導く序詞。所載欄の万葉集には「きみがゆづるの」とあり、「が」が入ったものが本来の形と考えられるので、「が」を入れて解した。○思へばや 「思うからだろうか」の意となるが、歌意が通らない。「別れてはほどをへだつと思へばやかつ見ながらにかねて恋しき」(古今集・三七二)と文中に置かれた場合は、下にかかつてゆく形で解釈が可能だが、当該歌の如く文末に置かれた場合、上の文脈とうまく繋がらないため、所載欄の万葉集に拠り、「おもへば」として解した。「や」は反語。

【所載】新勅撰集・恋四・八七〇／万葉集・二六四六(旧二六三八) 梓弓 末之腹野尔 鷹田為 君之弓食之 将跡絶念甕屋 アツサユミスエノハラノニトガリスルキミガユヅルノタエムトオモヘヤ あづさゆみすゑのはらのにとがりするきみがゆづるのたえむとおもへば／夫木抄・九八三三／和歌童蒙抄・四五四

(以上五首担当 中野)

一一六六 たつかゆみてにとりもちてあさかりにたゝしらぬたなくこの木もと
左大弁きのいひまる

【異同】左大弁—底本・御所本・桂宮本・大久保本イズレモ題ノ位置ニアル。参考欄参照。 たゝしらぬたな

く―たゝしからぬたなく(御・大) この木もと―この木のもと(大)

【現代語訳】手束弓を手に取り持って、朝狩りにあなたはお立ちになった、棚倉の野へと。「下句は所載欄の万葉集に拠って解した。」

【語句】○左大弁 題の位置に書かれているが、作者名「きのいひまる」に冠された官職名であろう。参考欄参照。○たつかゆみ 手で握る部分を太くした弓か。袖中抄は雄山(おのやま)の関守が持つ弓とする紀伊国風土記の説を載せる。○たゝしらぬたなくこの木もと 意味不明。所載欄の万葉集歌「きみはたたしぬたなくらののに」に拠って解す。あなたは出立なさった、棚倉の野に。棚倉の野は、山城国の歌枕。綴喜(つづき)郡田辺町の棚倉の地とする説もあるが、ここでは万葉集歌の左注に「久迓の京都の時の歌」とあることから、相良郡山城町の平尾・綺田(かばた) 辺りかと思われる。

【所載】万葉集・四二八一(旧四二五七) 手束弓 手取持而 朝獯尔 君者立去奴 多奈久良能野尔 タツカユミテニトリモチテアサカリニキミハタチイヌタナクラノノニ たつかゆみてにとりもちてあさがりにきみはたたしぬたなくらののに／夫木抄・一六九六〇／俊頼髓脳・二二五／綺語抄・五三三／和歌童蒙抄・四二二【参考】「左大弁 きのいひまる」は作者名であり、所載欄の万葉集四二八一(旧四二五七) 番歌の題詞に「十月廿二日於左大弁紀飯曆朝臣家宴歌三首」とあり、同歌左注に「治部卿船王伝誦之久迓京都時歌未詳作主也」とある。すなわちこの歌は、左大弁紀飯曆家の宴の場で詠まれた作者不詳の歌である。なお、隆源口伝には「手束弓手に取りもちてあさかりの君は立たれぬ手枕のうし」(四七) という第二句までが同じ歌がある。

ともし

一一六七 さ月山このしたやみにともす火はしかのたちどのしるべなりけり
ぢぶ経はゝの大ききとも つらゆき

【異同】ちぶ経―ちぶら(御・桂・大)

【現代語訳】五月の山の、木の葉が生い茂る下蔭の暗がりに灯す照射の火は、鹿が立っている場所を知らせるものであったのだなあ。

【語句】◎ともし 照射。山中で篝火を焚いたり松明をともしたりして鹿をおびき寄せ、目に火影が反射するのを的に弓矢で射る狩。夏から秋にかけて行われたが、五月の景物として月次屏風に詠まれる。○ぢぶ経はゝの大 ききとも 参考欄参照。「ぢぶ経」は「治部卿」の意か。○さ月山 摂津国の歌枕とする説(歌枕名寄)もある

が、本来は五月の山の意で固有名詞ではない。郭公、鹿、照射などを詠み込む例が多い。○このしたやみに「このしたやみ」は、葉が生い茂り、樹下が暗くなっていること。○しかのたちどの 鹿の立っているところ。「たちど」は立っている場所。○しるべなりけり 手引きであったのだなあ。「しるべ」は、物を知るための手引き、導き。「あしまより見ゆるながらのはしはしら昔のあとのしるべなりけり」（拾遺集・四六八）。

【所載】拾遺抄・夏・七六／拾遺集・夏・一二七／貫之集Ⅰ・九

【参考】「ぢぶ卿は、の大きみとも」は、一一六六歌の左注と関係するか。一一六六番歌参考欄参照。作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一一六八 おぐら山ともしの松のいくそたびわれしかのねをなきてへぬらん

【異同】ナシ

【現代語訳】暗いという名を持つ小倉山に、照射の松明がいくつもいくつも灯され、鹿の鳴く声とする。私は幾夜も幾夜もこのように泣いて過ごすのだろうか。

【語句】○おぐら山 小倉山。山城国の歌枕。鹿が景物として歌に詠まれた。「小暗し」の意と掛けて詠まれることも多い。二〇七番歌参照。○ともしの松の 照射（ともし）の松明（たいまつ）の。照射は一一六七番歌参照。○いくそたび 幾十度。回数が多いものについていう。初・二句は「いくそ」を導く序詞。○われしかのねをなきてへぬらん 私はこのように泣いて過ごすのだろうか。「鹿」に「然（しか）」、鹿の「鳴く」に自身の「泣く」を掛ける。「われもしかなきてぞ人にこひられしいまこそよそに声のみきけ」（新古今集・一三七三、大和物語・一五八段・二六三）。

【所載】ナシ

一一六九 あふことをともしのしかのうちむきてめをだにみせばいるべきものを

【異同】ナシ

【現代語訳】照射の鹿が、顔を向けて目さえ見せたならば、射ることができるのに。（逢うことが少なく、逢瀬のきつかけさえつかめたならば、入り込むことができるのに。）

【語句】○あふことをともしの 「ともし」によって「しかの」を導く措辞。恋の文脈における「逢ふこと乏し」

を掛ける。同様の掛詞は「れふし（猟師）にもあらぬ我こそ逢ふことをともしの松のもえこがれぬれ」（順集・四九）に見える。「ともし」（照射）は一一六七番歌参照。○うちむきて「うちむく」は特定の方向に向くこと。「うち」は接頭語。和歌の用例は少ないが、「おもふことなりもやすとうちむきてそなたさまにぞ礼し奉る」（実方集・三六）がある。○めをだにみせば 目をだに見せば。（鹿が）目をさえ見せてくれたならば。鹿狩では、鹿の目が照射の光に反射することを利用して居場所を知る。○いるべきものを 射ることができぬのに。「射る」に「入る」を掛け、恋の相手の許に入ることができるのに、の意をこめる。「射る」は照射の縁語。ここでの「べし」は可能。

【所載】和歌初学抄・二七

一一七〇 ほととぎすまつにつけてやともしする人もやまつによをあかすらん
したがふ

【異同】まつにつけてや—まつにけてや（桂）

【現代語訳】郭公が鳴くのを待つというところで、照射をする猟師も松を灯して夜を明かすのだろうか。

【語句】○ほととぎすまつにつけて ほととぎすを待つにつけて。「待つ」に「松」を掛ける。○ともしする照射（ともし）をして鹿狩りをする。「ともし」は一一六七番歌参照。ほととぎすと同様に五月の景物。○人もやまつに 底本では疑問の「や」が二度出てきて不審。所載欄の文献では「人も山辺に」とあり、「やまへ」の「へ」を「つ」と誤ったか。ここでは照射をする猟師が松明を灯す意と解した。

【所載】拾遺抄・夏・七八／拾遺集・夏・一二六／順集Ⅰ・一一／順集Ⅱ・一七二
 【参考】作者名「したがふ」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 杉本・諸井〕

一一七一 つくばねにかくならわしのねをのみかなきわたりなばあふとはなしに
わし

【異同】かくならわしの—かくなくわしの（大）

【現代語訳】筑波山でかっかっかつと声高くなく驚きのように声ばかりをたてて泣き続けるとしたら。あなたに逢うこ

とはなくて。

【語句】◎わし ワシタカ科の鳥の総称。万葉集には三例みられ、筑波山と二上山の鷺について詠まれている。○つくばね 筑波嶺。常陸国の歌枕。○かくならわしの 不詳。所載欄の文献の「かかなくわしの」に拠って解した。「かか」は擬音語で鷺の鳴き声を表す。○ねをのみかなきわたりなば 声を立てて泣いてばかりいたならば、か。語法的に不審。「なきわたり」は鳥が鳴きながら渡っていく「鳴き渡る」と泣きつづけるの意の「泣き渡る」とをかける。所載欄の万葉集以下の諸文献では、第四句は「なきわたりなむ」となっている。

【所載】万葉集・三四〇八（旧三三九〇）筑波祢尔 可加奈久和之能 祢乃未乎可 奈伎和多里南牟 安布登波奈思尔 ツクハネニカカナクワシノネノミラカナキワタリナムアフトハナシニ つくはねにかかなくわしのねのみをかなきわたりなむあふとはなしにノ和歌童蒙抄・七七五ノ袖中抄・三九九

一一七二 しぶたにのふた神山にわしぞこむてふむさしのはにもきみがめにわしぞこむてふ

【異同】わしそこむてふ―わしそこむてふ（大）

【現代語訳】渋谷の二上山で鷺が子を産むという。鷺の材料にもと、わが君のために鷺が子を産むという。

【語句】○しぶたにのふた神山 越中国の歌枕。渋谷も二上山も富山県高岡市の地名。渋谷は二上山の麓、富山湾に面する。○わしぞこむてふ 大久保本の「わしぞこむてふ」に拠って解した。鷺が子を産むという。所載欄の文献のいずれも「わしぞこむといふ」。第六句にも「わしそこむてふ」とあり、鷺の営巢のあったことを旋頭歌体で詠ったとみられる。○むさしのはにも 意味不明。所載欄の文献の「さしはにも」に拠って解した。「さしは」は鳥の羽や絹を張った長いウチワのような道具で、貴人の外出時などに従者がさしかけた。○きみがめにわが君のために。「た」の脱落とみて「きみがために」で訳す。

【所載】万葉集・三九〇四（旧三八八二）渋谷乃 二上山尔 鷺曾子産跡云 指羽尔毛 君之御為尔 鷺曾子生跡云 シブタニノフタガミヤマニワシゾコウムトイフサシハニモキミガミタメニワシゾコウムトイフ しぶたにのふたがみやまにわしぞこむといふさしはにもきみのみためにわしぞこむといふノ夫木抄・一二六六三ノ和歌初学抄・一五五ノ井蛙抄・四五二

おほたか

一一七三 やかたをのましろのたかをひきすへて君がみゆきにあはせつるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】屋形尾の真白の鷹を腕にとまらせて、わが君の行幸にあわせたことですよ。

【語句】◎おほたか 全長五〇〜六〇センチメートルの大きな鷹。大鷹の雌を使って冬に狩を行なった。和歌では「大鷹狩」の題で詠まれることが多い。○やかたを 屋形尾。鷹の尾の模様の一首。「屋形尾のましろのたかをやどにすゑかきなでみつつかはくしよしも」(万葉集・四一七九(旧四一五五))。○ひきすへて ひきすゑで。腕に止まらせて。「はしたかをてにひきすゑて山ぎとのやどかりにこそけふはきにけれ」(能宣集・四〇一)。○あはせつるかな あわせたことです。「みゆき」の時機に「合はせ」たことに、鷹を放つ意の「あはせ」をかける。

【所載】ナシ

【参考】後葉集・四四二に「とやがへるましろのたかをひきすゑて君が御狩にあはせつるかな」という類歌がある。

一一七四 あらたかのいまは雲井になりぬればきてもやいとみするてだぬき

【異同】ナシ

【現代語訳】荒鷹がいまはもう遙か遠くの雲の彼方に行ってしまったので、こつちに来ては止まるかと見せているてだぬきですよ。

【語釈】○あらたか 荒鷹。新鷹。鷹狩の訓練がまだ十分にできていない、まだ人に馴れていない鷹。「やまがへりまだ手ならさぬあらたかをけふのみ狩にあはせつるかな」(教長集・六一一)のように「手なれぬ」という語句と共に詠まれることが多い。○きてもやいと きてもやゑると。来てもや居ると。こちらへ来ては止まるかと。○てだぬき 手手貫(てだぬき)か。「手貫(たぬき)」は革製の籠手で、手や腕をおおうもの。鷹狩の際に使用した。和名抄では「鞆」を「たかたぬき」と訓じている。

【所載】夫木抄・一二七六七／和歌童蒙抄・七八〇／和歌色葉・一六八

一一七五 うらむべきこゝろおほたかてにすゑへてかりにのみくる人やなになり

【異同】ナシ

【現代語訳】恨めしい気持は多いですよ。大鷹を手に止まらせてただ狩にばかり来る、ほんのかりそめにばかりやってくるあなたは、いったい何なのでしょう。

【語句】○おほたか 大鷹。鳥の「大鷹」に、恨む気持ちが「多」いことを掛ける。○かりにのみくる ほんのかりそめにだけ来る。「かりそめ」に「狩り」をかける。「冬草のかれもはてなでしかすがにいまとしなればかりにのみくる」(貫之集・五四五)。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 平野・尾高〕

一一七六 へをつきて山にいりにしあらたかのいとをきにくきそらごとなせそ

【異同】ナシ

【現代語訳】足に紐をつけたまま山に入ってしまった馴らしていない若鷹は、呼び戻しにくい。憎らしい嘘をどうか言わないで。

【語句】○へをつきて 「へを」をつけたままで。「へを」は、綜緒・攀。鷹狩に用いるために鷹を飼いならすとき、鷹の足に結び付けておく紐。足緒ともいう。「つきて」は、ついたままの状態で、の意。なお、所載欄の夫木抄には「へをとけて」。○あらたか 荒鷹。新鷹。捕まえたばかりで飼ひ馴らしていない若鷹。一一七四番歌参照。○いとをきにくき いとおきにくき。まことに手なづけにくい。「をきにくき」は、招きよせにくい、手なづけにくい、の意。同時に「憎き」を掛ける。上三句は、「いとをきにくき」を導く序詞。「わがためにをきにくかりしはしたかの人の手に有り」と聞くはまことか(後撰集・一一一五)。○そらごとなせそ 嘘をついてくれるな。

【所載】夫木抄・一一七七〇

こたか

おちのわう女

一一七七 にわくさをうづらすむまではらはせじこたかてにすへみむ人のため

【異同】ナシ

【現代語訳】庭草を鶉が住みつくまで刈り払わせることはすまい。小鷹を手に据えて狩りを試してみる人のために。
【語句】◎こたか 小形の鷹。隼（ハヤブサ）・鶴（ハシタカ、ハイタカ）・鶉（サシバ）などの総称。これらの小鷹を馴らして、鶉（ウズラ）や雲雀（ヒバリ）など小鳥を捕るのを小鷹狩といい、男性貴族たちの遊びであった。屏風絵に描かれたり、歌題ともなった。○にわくさを にはくさを。庭の草を。○うづらすむまではらせじ 鶉が棲みつくほどのくさむらになるまで手入れはさせまい。「はらふ」は、庭の木や草を刈りこんだり抜いたりして手入れすること。○こたかてにすへ こたかてにすゑ。小鷹を手に据えて。「手に据ゑ」とは、鷹を調教したり狩りをする時に、腕に鷹をとまらせること。

【所載】ナシ

【参考】作者名「おちのわう女」は、未詳。他文献でも確認できない。

一一七八 かりしてのほどなき身にもはしたかのねはなきはらふものにざりける

【異同】ねはなきはらふ—ねかなきはらふ（御・大） ものにざりける—ものにざりけり（大）

【現代語訳】「下句の文意がとれないので、完全な現代語訳が示せない。」狩りをしてまもない我が身でありましても、はしたかの「ねはなきはらふ」ものであります。

【語句】○かりして 狩りして。○ほどなき身 狩りの経験があまりないわが身とも、卑しい我が身とも解せる。○はしたか 鶉。鷹のなかでも小形の鷹で、小鷹狩に使われる。○ねはなきはらふ 異同欄の「ねかなきはらふ」を採っても、歌意が通らない。○ものにざりける 「ものにぞありける」に同じ。ものなのであります。

【所載】ナシ

一一七九 つらしともうらみざらなんはしたかのとがへる山のしゐもゝみぢず

【異同】ナシ

【現代語訳】冷淡であると私を恨まないでほしい。あのはしたかのとがへる山の椎の木が紅葉しないのと同じで、私の気持ちは少しも変わらないのですから。

【語句】○つらしともうらみざらなん 冷淡だとこちらのことを恨まないでくれ。「なん」は他へあつらえ望む

助詞。○はしたかのとがへる山。「はしたかの」は、「とがへる」にかかる枕詞。「とがへる」とは、鷹の毛が抜け変わる事。「とやがへる」とも。「はしたかのしら斑(ふ)に色やまがふらむとがへる山に霰降るらし」(金葉集・二七六)。○しほもみぢらず しほもみぢらず。常緑の椎も紅葉しない。「も」で、わが心もまた変わらな、と言ったもの。所載欄の文献では「椎はもみぢらず」が多い。

【所載】後撰集・雑二・一一七一／兼盛集Ⅰ・四八／兼盛集Ⅲ・五七／綺語抄・六二八／奥儀抄・三九七／袖中抄・三六七／和歌色葉・一六七

【参考】作者名はなく、後撰集にも「よみ人知らず」。兼盛集Ⅰ・Ⅲによれば、女のもとより、私を忘れたのかと言って寄こしたのに対して返した歌。

一一八〇 かりにてもすへじとぞ思はしたかのすゞろなるなをたちもこそすれ

【異同】すへしとぞ思へすゑらしとぞ思(御)、すへらしとぞ思(大)

【現代語訳】かりそめにもここに居させまいと思ひます。根も葉もない噂が立てられましたら困りますので。

【語句】○かりにても 仮りにても。かりそめにも。「仮りに」に「狩り」を掛ける。○すゑじとぞ思 すすじとぞ思ふ。ここに居させまいと思う。「すす」は、人や物を安定した状態でそこに置くこと。ここでは、ある人物を自分の身近に置くことはすまいと言ったものであろう。その「すす」に、鷹狩の鷹を手を「すする」を掛けた。○はしたかの 鷹につける「鈴」から「すずろなる」にかかる枕詞。○すゞろなるなを 根拠のない浮き名を。「すずろ」に「鈴」を掛け、「狩り」「据え」「鈴」は、「はしたか」の縁語。「はしたかのすずろ歩きにあらばこそかりとも人の思ひなされぬ」(清正集・二二)。なお、所載欄の文献「すずろなる名の」で現代語訳した。○たちもこそすれ 立ったりしたら困るから。

【所載】万代集・一九二三／和歌初学抄・二九

【参考】『古今和歌六帖標注』に、仁徳天皇紀四十三年秋九月の鷹狩の由来ともいうべき記事を引用する。仁徳天皇が珍しい鳥を献上され、酒君はその鷹を飼ひ馴らしてのち、「韋(をしかは)の縉(あし)を以って其の足に著け、小鈴を其の尾に著け、腕(ただむき)の上に居(す)ゑ」て天皇に献上、その日に百舌鳥野(もずの)で鷹狩りがあり、あまたの雉を捕らえた、と見える。

〔以上五首担当 斎藤・加藤〕

一一八一 としをへてかへりかたのゝすもりこのきみにしあへばとびたちぬべし
きじ

【異同】ナシ

【現代語訳】何年たつてもなかなか帰ることができない交野にいる巣守子のようなあなたに逢うと、うれしく飛び上ってしまうに違いない。

【語句】◎きじ 雉。古名は「きぎし」、「きぎす」ともいう。林や草原に住むキジ科の野鳥。雄は長く美麗な尾羽をもち、高い声で鳴く。和歌では鳴き声が詠まれ、妻を恋い、子を思う鳥とされる。鷹狩の場面が詠まれることもある。○としをへて 年月を経て。○かへりかたのゝ なかなか帰れない交野の。「帰る」に「解り」を掛け、地名「交野」に「難し」の語幹「かた」を掛けた。○すもりこ 巣守子、巣守児。「巣守」ともいう。他の鳥が巣立った後も孵化しないで残った卵のことで、いつまでも家で大切に育てられている娘を喩える。「かへり(解り)」、「とびたち」は「すもりこ」の縁語。「すもりこのかへらぬほどは冬の夜の鴨のうきねぞわびしかりける」(宇津保物語・九八三)。「としをへてかへりかたのゝすもりこの」までは「きみ」を導く序辞。

【所載】ナシ

【参考】当該歌には、題である「きじ」の語がみられないが、「交野」は雉の名所であり、「すもりこ」は鳥に關わる語である。

一一八二 すゝきのにさをどるきゞすいちしるくなきしもなかむこもりづまはも
やかもち

【異同】こもりづまはも—こもりづまめも(大)

【現代語訳】薄の野で跳ねている雉は、妻をもとめて、人に知られるほどはつきりと鳴きに鳴くのだろう、そのように、たまりかねて声をあげて泣く、人目を避ける隠り妻よ。

【語句】○すゝきのに 「すゝきの」は薄の生えた野原。所載欄の万葉集では「杉の野に」。○さをどるきゞす 「さ」は接頭語。「をどる」は跳ね回る意で、雄雉の求愛行動。例歌はあまり見られないが、拾遺集に「きじのをどり」として「河ぎしのをどりおるべき所あらばうきに死にせぬ身は投げてまし」(物名・四〇一)がある。「きぎす」は一一八二番歌参照。○いちしるく 明白に、はつきりと。初句「すゝきのに」から第三句「いち

しるく」までは、「なきしもなかも」を導く序詞とみることもできる。○なきしもなかも 「なきになく」の「に」を、強意の副助詞「しも」に置き換えた形で、同じ動詞を繰り返して、動きの程度が甚だしいことを強調するが、あまり例のない用法。雉が「鳴きしも鳴かむ」と、こもり妻が「泣きしも泣かむ」を掛ける。○こもりづまはも こもり妻よ。「こもりづま」は人目をはばかって隠れている妻。「はも」は強い詠嘆。「こもり」は「いちしるく」に対する語。

【所載】古今六帖・第五帖「かくれづま」三二一〇／万葉集・四一七二（旧四一四八）梶野尔 左乎騰流鳩 灼然 啼尔之毛将哭 己母利豆麻可母 スギノノニサヲドルキギスイチシロクネニシモナカムコモリヅマカモすぎののにさをどるきぎしいちしるくねにしもなかもこもりづまかも／夫木抄・一七七七／和歌童蒙抄・七八二

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の文献に一致する。一一八三番歌の参考欄参照。

一一八三 あしひきのやまをのき^{みねイ六ニハ山ヲ}ずなきとよむあさけのすがたみればかなしも

【異同】ナシ

【現代語訳】山峰（やまを）にいる雉が大きな声で鳴きたてている、その夜明けの姿を見るとなんとも悲しい。

【語句】○あしひきの 「山」にかかる枕詞。○やまをのきとす 「やまを」は山峰。山の稜線。所載欄の万葉集では「八つ峰（数多くの峰）。「きとす」は一一八一番歌参照。○なきとよむ 大きな声で鳴きさわぐ。「とよむ（響む）」は、あたりにひびきわたるさまの形容。鳴り響くほどの大きな音を立てる。大声をたてて騒ぐ。

○あさけのすがた 朝明けの姿。「あさけ」は朝明。明け方。夜明け。「春霞朝立つ野辺に立つ鳥もしのぼぬ音にや人もしるらむ」（中務集・三六・きじのこゑ）の如く、雉を擬人化し、恋する相手との朝の別れになく姿を「かなしも」とみた。

【所載】万葉集・四一七三（旧四一四九）足引之 八峰之鳩 鳴響 朝開之霞 見者可奈之母 アシヒキノヤツヲノキギスナキトヨム（ミ）アサケノカスミミレバカナシモ あしひきのやつをのきぎしなきとよむあさけのかすみみればかなしも／夫木抄・一七六六

【参考】一一八二番歌と当該歌は、万葉集では「聞曉鳴鳩歌二首」（四一七二（旧四一四八）と四一七三（旧四一四九））という題の連続した二首である。

一一八四 春きじのなくたかまとにさくらばなちりながらふるみむ人もがな

【異同】ナシ

【現代語訳】春の雉が鳴く高円山に桜花が流れるように散っている。見ようという人があるといいのになあ。

【語句】○たかまと 高円山。奈良市東方の春日山の東南にある山。桜が詠まれた例として「春雨のしくしく降るに高円山の山の桜はいかにかあるらむ」(万葉集・一四四四(旧一四四〇))がある。○ちりながらふる 散り流らふる。「ながらふる」は、「流らふ」の連体形で、散りながら風に漂い流れるさま。○みむ人もがな 見ようという人があるといいなあ。「む」は意志を表す。

【所載】万葉集・一八七〇(旧一八六六) 春雉鳴 高円辺丹 桜花 散流歴 見人毛我裳 キギスナクタカマトノヘニサクラバナチリナガラフルムヒトモガモ きぎしなくたかまとのへにさくらばなちりてながららむむひとものがも

一一八五 春のゝにおもみねきじのひとつがひわがこわだかにおぢやしぬらん

【異同】ナシ

【現代語訳】春の野で互いに相手のことを思って寝る雌雄の雉は、私の高い声に怯えてしまったのだろうか。

【語句】○春のゝ 春の野。○おもみねきじの おもひねきじの。互いに思い合って共寝する雉の。「おもみね」は思ひ寝。恋人を思って寝ること。「衣手ぞ今朝はぬれたる思ひ寝の夢路にさへや雨は降るらむ」(躬恒集・四五)。○ひとつがひ 雌雄の一对。「滝つ瀬の石間をみれば一つがひ鴛鴦ぞすみける山川の水」(能因集・二三一)。○わがこわだかに 我が声高に。「声高」は声の高いこと。私が声高に言ったその声によって。○おぢやしぬらん おびえてしまったのだろうか。「おぢ」は「おぢ(怖づ、懼づ)」の連用形で、恐れる、怖がる意。「や」は疑問、「らん」は現在推量、怯えて出てこない番いの雉の様子を想像する。

【所載】ナシ

(以上五首担当 中野)

一一八六 ねぐらなるしもうちはらひたつきじのそらにこそとれ人のこゝろを

【異同】ナシ

【現代語訳】ねぐらにおりている霜を打ち払い雉は空へと飛び立つ。あなたの心はうわの空であてにならないと思われることです。

【語句】○しもうちほらひ 霜を打ち払って。霜は涙の隠喩でもあるか。「あかつきの霜うちはらひなく千鳥も
の思ふ人の心をや知る」(源氏物語・総角・六七七)。○たつき 飛び立つ雉。雉が飛び立つ様に、男が朝方、
寝所を去っていく様を重ねるか。「ゆきすぐる秋の草ばにやどりして立つらんきじのこともたのまじ」(小馬命
婦集・一九)。○そらにこそとれ あてにならないと思う。「空」に、あてにならず空虚である意の「そら」を
掛ける。「頼みくるひとのこころのそらなればくもぬのかはに袖ぞぬれぬる」(斎宮女御集・一〇四)。「たつき
じのそらにこそ」で、雉が空へと飛び立つ様を表わし、「そらにこそとれ人のこころを」で、相手の心があてに
ならないという思いを表わすか。上三句は「そら」を導く序詞。

【所載】ナシ

一一八七 はるのゝにあさなくきじのつまごひにおのがありかを人にしられて

ルキッスノイ

シレッツ、

【異同】ナシ

【現代語訳】春の野で朝方鳴く雉は、妻を恋しがって鳴くその声によって、自分の居場所を人(狩人)に知ら
れてしまうのです。

【語句】○はるのゝにあさなくきじの 春の野で朝なく雉の。雉は繁殖期の春に雌を恋しがって鳴く。その鳴
き声によって人(狩人)に居場所を知られてしまう様が詠まれる。「かりにくる人もこそきけ春の野にあさなく
きじの近くも有るかな」(順集・二〇三)。○つまごひに 妻を恋慕って鳴くので。「に」は原因・理由を表す。

【所載】拾遺集・春・二一／万葉集・一四五〇(旧一四四六) 春野尔 安佐留雉乃 妻恋尔 己我当乎 人尔
令知管 ハルノニアサルキギスノツマゴヒニオノガアタリヲヒトニシレッツ はるのゝにあさるきじのつ
まごひにおのがあたりをひとにしれつつ／金玉集・一八／赤人集I・一一六／三十人撰・四七／三十六人撰・
四三／深窓秘抄・二二／能因歌枕・二四／隆源口伝・五五／袖中抄・一五四

【参考】古今六帖に作者名の記載はないが、所載欄の文献の多くが作者を大伴家持とする。

一一八八 くりこまの山にあさたつきじよりもわれをばかりにおもひけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】くりこまの山で一夜を過ごして朝飛び立って別れていく雉。(雉に狩りはつきものですが) あなたは私を、その雉よりもかりそめのもと思つていらつしやるのですね。

【語句】○くりこまの山 栗駒山。現在の京都府宇治市の丘陵地。栗駒山は、大和物語に「みかりするくりこまやまのしかよりもひとりぬる身ぞわびしかりける」(一四〇段・二二二)とあり、狩獵地として知られていた。○われをばかりにおもひけるかな 私のことをかりそめのもと思つていたのですね。「かりそめ」の意の「かり」に雉の「狩り」を掛ける。「くりこまの山に朝たつきじよりもかりにはあはじと思ひしものを」(大和物語・八二段・一一六)。

【所載】夫木抄・八五七三

一一八九 われをあきとふ^るゆつゆなれば山ばとのなきこそわたれきみまつのえに
はと

【異同】ナシ

【現代語訳】秋につゆが降るように私に飽きたあの人だから、私は山鳩のように松の枝でいつまでも泣き続けている。来ないあなたを待ちながら。

【語句】◎はと ハト科の鳥の総称。特にそのもの寂しい声の風情が取り上げられた。○われをあきと 「飽き」と「秋」を掛ける。○ふるつゆなれば 降る露であるから。「露が」降る」と古くなる意の「古る」を掛ける。「今はとてわが身時雨にふりぬればことのはさへにうつるひにけり」(古今集・七八二)。「つゆ」は涙の隠喩。○なきこそわたれ ずつと泣いている。鳩が「鳴く」ことに人が「泣く」ことを掛ける。「はつかりのなきこそわたれ世中の人の心の秋しうければ」(古今集・八〇四)。○きみまつのえに 「松」と「待つ」を掛ける。「こぬひとをまつのえだにふる雪の消えこそかへれあかぬおもひに」(元良親王集・一〇八)。

【所載】夫木抄・一二八三二

いづじ

やかもち

一一九〇 うづらなくふるきさとよりおもへどもなにぞもいもにあふよしもなき

【異同】ナシ

【現代語訳】（鶉鳴く）昔の都に居た頃からあなたを思っています、いったいどうしてあなたに会う機会もないのでしょうか。

【語句】◎うづら キジ科の鳥。荒廃し草深くなった土地に住み、寂寥感を感じさせる鳥として詠まれる。○うづらなく うづらが鳴く。「古る」の枕詞。「うづら鳴くふるしと人はおもへれど花橘のほふこのやど」（万葉集・三九四二（旧三九二〇））。○ふるきさと 昔の都。ここでは旧都の藤原京を指す。「藤原のふりにし里の秋萩はさきてちりにき君まちなかねて」（万葉集・二二九三（旧二二八九））。○なにぞも 代名詞「何」に強意の係助詞「ぞ」「も」がついたもの。どうして……なのか。

【所載】万葉集・七七八（旧七七五）鶉鳴 故郷従 念友 何如裳妹 相縁毛無寸 ウヅラナクフルキサトヨリオモヘドモナニゾモイモニアフヨシモナキ うづらなくふりにしさとゆおもへどもなにぞもいもにあふよしもなき／夫木抄・五六九五

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 犬養悦・市東〕

一一九一 のとならばうづらとなりてなきをらんかりにだにやは人のこざらん

【異同】ナシ

【現代語訳】もしこが野となつてしまつたら、わたしは鶉になって鳴いていきましょう。そうすれば、せめて狩になりと、かりそめにでも、あなたが来てはくださらないでしょうか。きつと来てくださるはずです。

【語句】○なきをらん 鳴いておりましょう。「鳴き」に「泣き」を掛ける。○かりにだにやは人のこざらん せめて狩になりと、かりそめにでも、あなたは来ないだろうか、いや、きつとくるはずだ。「狩に」に「仮に」を掛ける。「やは」は反語。「人」は、ここでは第二人称、相手をさしている。

【所載】古今集・雑下・九七二／業平集Ⅰ・六三／業平集Ⅱ・七八／業平集Ⅲ・三八／伊勢物語・一二三段・二〇七

【参考】古今集では、「年を経て住み来し里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ」（九七一）という業平歌

に対する返歌。業平集・伊勢物語でも同じ。

一一九二 うづらなくふるきみやこを^のあきはぎをおもふ人どちあひみつるかな
 さみがうた

【異同】 おもふ人とち―おもふ人とは（御・大）

【現代語訳】 この古都の秋萩を、親しい者同士でいっしょに見たことだなあ。

【語句】 ○さみがうた この歌は、万葉集巻八にある「故郷豊浦寺之尼私房宴歌三首」の中の二首目の歌。一首目の歌には「丹比真人国人」という左注があり、後の二首には「右二首沙彌尼等」の左注がある。「さみ」はこの場合沙彌尼、仏門に入つて十戒（沙彌戒）を受けた尼僧のこと。○うづらなく 「古る」にかかる枕詞。「うづらなくふるし」と人はおもへれど花たちばなのにはふこの宿（万葉集・三九四二（旧三九二〇））。○ふるきみやこ ここでは飛鳥の古京をさす。○おもふ人どち 心の通じ合った親しい者同士。

【所載】 万葉集・一五六二（旧一五五八）鶉鳴 古郷之 秋芽子乎 思人共 相見都流可聞 ウヅラナクフリニシサトノアキハギヲオモフヒトドモアヒミツルカモ うづらなくふりにしさとのおきはぎをおもふひとどちあひみつるかも／夫木抄・五六九三／家持集Ⅰ・一三四／家持集Ⅱ・一二五／綺語抄・六二三

【参考】 作者名「さみがうた」とあるのは、万葉集の所伝に一致する。和漢朗詠集には、「うづら鳴くいはれの野辺の秋萩をおもふ人ともあひ見つるかな」（二二八）という一首が丹比国人の作としてあり、この歌は、新拾遺集・秋上・三五三に「題しらず よみ人知らず」として収載されている。

おほたかどり

一一九三 おほきたかいまとしなればおほはらきのもりのしたくさ人もかりけり

【異同】 おほはらきの―おほあらきの（大）

【現代語訳】 いよいよ大鷹狩の時期となつたので、「刈る人もなし」と詠まれたあのおおあらきの森の下草を人も刈つて、狩に備えている。

【語句】 ◎おほたかがり 大鷹を使つて雁や鴨など大形の鳥をとる狩。冬季のものである。○おほきたか 大鷹。ワシタカ科の鳥で、馴致調教して大鷹狩りに使う。○おほはらきのもり おほあらきの森。「おほあらき」

は、古代において、貴人の死後本葬までのあいだ、遺体を仮に安置しておくこと。「おほあらきのもり」は、「おほあらき」の場となった森、の意で、本来は普通名詞であったはずである。万葉集に「かくしてやかくや守らむおほあらきのうきたの森のしめにあらなくに」（二八五〇（旧二八三九））と詠まれた「おほあらきのうきたの森」は大和国であるが、五代集歌枕は「おほあらきの森」を山城国とする。歌枕としての所在地はたしかには言えない。○もりのしたくさ人もかりけり 森の下草を人も刈ったことだ。古今集・八九二番の「おほあらきの森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」（古今六帖・一〇四六）を下に敷いている。

【所載】 夫木抄・七三七三／貫之集Ⅰ・二四〇

【参考】 作者については一一九六番参照。貫之集Ⅰでは、「延喜御時内裏御屏風の歌」二十六首の中の「おほたかがりしたるところ」二首の中の一。次歌（一一九四番）参照。

一一九四 しもがれになりにしのとしらねばやはかなく人のかりにきつらん

【異同】 ナシ

【現代語訳】 霜枯れとなりはてた野辺だと知らないから、はかなくも人は、狩に来るのであろうか。（すっきり気持ちの離れてしまったわたしだと知らないから、はかなくもあの人は、かりそめに来るのであろうか。）

【語句】 ○しもがれになりにしのと 霜枯れになってしまった野辺。「しもがれ」は、霜によつて草木が枯れること。ここでは作中人物の暗喩。気持ちの離れてしまったわたし。「枯れ」に「離れ」を掛ける。○はかなく「きつらん」へかかる。貫之集Ⅰでは「かひなく」となっており、その方が歌意はわかりやすい。○かりにきつらん 狩に来るのであろうか。「狩に」に「仮に」を掛ける。「らん」は第三句「や」の疑問を受けた推量。……なのだろうか。伊勢物語一二三段の二〇七番歌「野とならばうづらとなりて鳴きをらむかりにだにやは君は来ざらむ」（古今集・九七二、古今六帖・一一九一）を意識して詠んでいる。

【所載】 続後撰集・恋四・九三五／貫之集Ⅰ・二四一

【参考】 作者については一一九六番参照。貫之集Ⅰでは、前歌（一一九三）と同じ詞書の下にある屏風歌。前歌参照。

一一九五 冬くさのかれは^はしてなでしかすがにいまとしなればかりにのみくる

【異同】ナシ

【現代語訳】冬草が枯れはてるようには離(か)れてしまわずに、それでもさすがに、今の季節となれば、ほんのかりそめにばかり、狩にだけにあの人が来ることよ。

【語句】○冬くさの 「かれ」を導き出すための措辞。同時に「おほたかがり」の季節をも表す。○かれははてなで 枯れはててはしまわずに。草の「枯れ」に人事の「離れ」を掛ける。「なで」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に、打消の助詞「で」が付いたもの。……しないで。○しかすがに それでもさすがに。○かりにのみくる 狩のためにだけ来る。「狩に」に「仮に」を掛ける。前歌と同様伊勢物語二〇七番の歌を意識して詠んでいる。

【所載】貫之集Ⅰ・五三二

【参考】作者については、一一九六番参照。貫之集Ⅰによれば、天慶八年二月「うちの御屏風のれう二十首」の中「おほたかがり」の歌。年次の判明している中では、貫之最晩年の屏風歌である。

〔以上五首担当 山下〕

一一九六 しもがれのくさばをうしとおもへばや冬のゝのべを人のかるらむ

已上四首 なりひら

【異同】ナシ

【現代語訳】霜枯れの草葉は、疎ましいと思うから、それで冬野の野辺を人は狩りをするのだろうか。

【語句】○うしとおもへばや (霜枯れの野は見所もなく) うとましいと思うから……か。「や」は疑問を表す係助詞。○かるらむ 狩りをするのだろうか。「くさば」の縁で「狩る」に「刈る」を掛ける。

【所載】古今六帖・第六帖「ふゆ」三五六八／貫之集Ⅰ・二〇／貫之集Ⅱ・一八

【参考】左注「已上四首なりひら」とあるが、一一九三番〜一一九六番の四首は、いずれも貫之の屏風歌である。

一一九七 かりくらししたなばたつめにやどからむあまのかはらにわれはきにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】一日中狩りをして日を暮らし、今夜は織女に一夜の宿を借りよう。天の川原に、私は来てしまった

のだから。

【語句】○かりくらし 狩りをして日を暮らし。○たなばたつめ 織女。「あまのかは」という地名の縁でこう言った。○やどからむ 宿を借りよう。○あまのかは 今の大阪府枚方市を流れる川の名。七夕の「天の川」を掛ける。

【所載】古今集・羈旅・四一八／新撰和歌・一九〇／業平集Ⅰ・四五／業平集Ⅱ・四七／業平集Ⅲ・二〇／業平集Ⅳ・四三／今昔物語集・八八／伊勢物語・八二段・一四七

【参考】伊勢物語では「交野を狩りて、天の川のほとりにいたる」の題で在原業平が詠んだ歌。

一一九八 ひととせにひとたびきます君まてばやどかす人もあらじとぞおもふ

【異同】ナシ

【現代語訳】一年に一度逢いにいらっしやる、彦星だけを待っているの、あなたに宿を貸す人などいないだろうと思えますよ。

【語句】○ひととせにひとたびきます君 一年に一度いらっしやるあの方。彦星。○やどかす人もあらじとぞおもふ 彦星以外に宿を貸す人はないだろうと思う。

【所載】古今集・羈旅・四一九／業平集Ⅰ・四六／業平集Ⅱ・四八／業平集Ⅲ・二二／今昔物語集・八九／伊勢物語・八二段・一四八

【参考】伊勢物語では一一九七番歌に対する返歌。作者紀有常。古今六帖では「大鷹狩」の部にあるが歌の中に「かり」の言葉はない。

一一九九 すまのせき秋はぎしのぎこまなべてたかざりをだにせでやわかれん

【異同】ナシ

【現代語訳】須磨の関に、秋萩を踏みしだき馬を並べて、一緒に鷹狩をしたいのに、それすらしないで別れるのだろうか。

【語句】○すまのせき 須磨の関。摂津国と播磨国の境にあった関所。「須磨の浦」と共に歌枕。「淡路島かよふ千鳥のなく声にいく夜寝覚めぬ須磨の関守」（金葉集・二七〇）。○秋はぎしのぎ 秋萩を踏みつけのりこえて。

○こまなべて 馬を並べて。○たかどり 飼いならした鷹を使つてする狩獵。小鷹を使う秋の狩を「こたかがり」、大鷹を使う冬の狩を「おほたかがり」という。一九三番歌参照。

【所載】新拾遺集・離別・七四三／万葉集・四二七三（旧四二四九）伊波世野尔 秋芽子之努芸 馬並 始鷹獵 太尔 不為哉將別 イハセノニアキハギシノギウマナメテハツト（コタカ）ガリダニセデヤワカレム いはせのにあきはぎしのぎうまなめてはつとがりだにせずやわかれむ／夫木抄・五六五〇

こたゝかり

一一二〇〇 おもひいでゝこひしくもあるかあはづのゝこはぎがしたにわがゆきしるり^か

やかもち

【異同】こたゝかり—こたかゝり（御・桂・大）

【現代語訳】思い出すと恋しいことだなあ、粟津野の小萩の下をわけ入って、その昔私が行った狩のことが。

【語句】◎こたゝかり 「こたかがり」の誤り。小鷹狩り。秋に行う鷹狩。はやぶさ、はいたかななどの小型の鷹を使つて、うずら、ひばりなどの小鳥を狩る。○こひしくもあるか 恋しいなあ。「も」「か」は呼応して詠嘆の気持ちを強める。○あはづの 粟津野。近江国の歌枕。今の滋賀県大津市膳所。風景の寂しさを詠んだ歌が多い。粟津野の狩りを詠んだ例としては後世のものだが「わがせこがかりにのみくるあはづ野にうづらなくなり草がくりつつ」（堀河百首・一四〇六）がある。○こはぎ 小さな萩。萩の美称。○わがゆきしかり 私がその昔行つたあの狩が。

【所載】夫木抄・四一四三

【参考】作者名「やかもち」とあるが、所載欄の夫木抄では作者名「伊勢」。ただし家持集・伊勢集には当該歌はない。

〔以上五首担当 林〕

一一二〇一 あきのゝにかりぞくれぬるおみなへしこよひばかりのやどもかさなん

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野で狩りをして日が暮れてしまった。女郎花よ、今宵一夜だけの宿でも貸しておくれ。

【語句】○おみなへし をみなへし。女郎花。山野に自生する多年生草本。初秋に黄色の花が咲く。秋の七草の一つとして愛好された。その名前から、当該歌と同様に、女性に擬人化して歌に詠まれることが多い。「をみなへし我に宿貸せ印南野のいなといふともここを過ぎめや」（拾遺集・三四八）。○やどもかさなん 宿も貸さなん。宿を貸してほしい。「も」は、強意の係助詞。「なん」は、「……してほしい。……してもらいたい。」と他者に対してあつらえ望む意を表す終助詞。

【所載】後拾遺集・秋上・三二四／貫之集Ⅰ・一五／貫之集Ⅱ・一三／元輔集Ⅰ・二四六

【参考】作者名については、一二〇四番歌参照。貫之集によると、延喜六（九〇六）年に、醍醐天皇の下令によつて詠んだ月次屏風の歌の一首で、題は「小鷹狩り」。なお、元輔集Ⅰにも見え、後拾遺集でも清原元輔作とされている。しかし、元輔集Ⅰの当該歌を含む巻末部は先人の歌を集積した部分であり、後拾遺集はそれによつて元輔作としたと考えられ、当該歌の作者は貫之とみなされる（参考、後藤祥子『元輔集注釈』貴重本刊行会、一九九四年）。

一二〇二 かりにとてわれはきつれどおみなへしみるにこゝろぞ思つきぬる

【異同】ナシ

【現代語訳】狩りをしようとして、私は来たけれど、女郎花を見たら心が引かれてしまった。（ほんの仮初めの気持ちで私は来たのだけれど、女に逢ったらすっかり心を奪われてしまったよ。）

【語句】○かりにとて 狩りをしようとして。「かりに」は、「かりにのみ人の見ゆれば女郎花の袂ぞ露けかりける」（貫之集・二七五）という例のように、「狩りに」に「仮に」を掛ける。それによつて「かりにとて」は、「狩りをしようとして」の意と「仮初めにといふので」の両意を表す。「かりにとて来べかりけりや秋の野の花見るほどに日も暮れぬべし」（拾遺集・一六三）。○おみなへし をみなへし。女郎花。一二〇一番歌語句欄参照。

【所載】拾遺集・秋・一六五／貫之集Ⅰ・三九

【参考】作者名については、一二〇四番歌参照。貫之集によると、延喜十四（九一四）年十二月に、宇多法皇の下令によつて、醍醐天皇の第一皇女勸子内親王のための屏風歌を詠んだ中の一首。

一二〇三 はなのいろをひさしきものとおもはねばわれはの山をかりにこそみれ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 花の色をいつまでも変わらないものとは思わないので、私は野山を狩りのためにだけ、仮初めに
見るんだよ。

【語句】 ○はなのいろを 花の色を。「花」は、女性を暗示する。○かりにこそみれ 狩りのためにだけ見るの
だ。「かりに」は、「狩りに」と「仮に」とを掛ける。一二〇二番歌参照。「こそ」は強意の係助詞。「をみなへ
しうつろひがたになる時はかりにのみこそ人は見えけれ」（貫之集・八二）。

【所載】 貫之集 I・一一〇

【参考】 作者名については一二〇四番歌参照。貫之集によると、延喜一八（九一八）年四月、醍醐天皇皇子保
明親王のための屏風歌を詠んだ中の一首。題は「小鷹狩りしたる所」。

一二〇四 もくくさのはなはみゆれどをみなへしさけるなかにとかりくらしてん

已上四首 つらゆき

【異同】 已上四首—ナシ（御）、已上（大）

【現代語訳】 様々な草の花は見えるけれど、女郎花が咲いている中をめざして、一日中狩りをして日を暮らし
てしまおう。

【語句】 ○もくくさのはなは 百草の花は。「百草」は、百種類の草、種々さまざまな草の意。多数の女性、の
意を寓する。○をみなへし 一二〇一番歌語句欄参照。ここでは、多数の女性の中のひとりの人だけ、の意。
○かりくらしてん 狩りをして日を暮らしてしまおう。一一九七番歌参照。「てん」の「て」は強意を表す助動

詞「つ」の未然形、「ん」は意志の助動詞「む」の終止形。

【所載】 貫之集 I・三八〇

【参考】 貫之集 I、三六六番歌の詞書に「天慶三年四月右大将殿御屏風の歌廿首」とあるが、「天慶三年」は「天
慶二（九三九）年」の誤りで、天慶元年から同八年まで右大将だった藤原実頼の、恐らく四十の賀の屏風歌（実
際には二十二首）の中の一（参考、木村正中『土佐日記 貫之集』新潮日本古典集成 新潮社、一九八八年）。
当該歌の題は「小鷹狩り」。「已上四首つらゆき」とある通り、一二〇一番歌から一二〇四番歌までの作者は貫
之。すべて屏風歌。

一一〇五 かりにとてのべにぞきつるすゞむしのこゑはさやけきしるべなりけり

【異同】ナシ

【現代語訳】狩りをしようとして、野辺にやって来た。(私はほんの仮初めの気持ちで来たのだけれど) 鈴虫の声は清らかに澄みとおってはつきりとした道案内であったよ。

【語句】○かりにとて 「狩りに」に「仮に」とを掛けた。一一〇二番歌参照。この掛詞と虫の声とが詠まれた例として、貫之の「かりに来る我とは知らで秋の野になく松虫の声を聞くかな」(貫之集・五四一)という歌がある。○すゞむし 鈴虫。現在の松虫の古称と言われる。狩りをする野辺の鈴虫の声を詠んだ例としては、「みかりする人やことなるはし鷹のとがへる野辺の鈴虫の声」(長能集・一七八)という歌がある。「鈴」は、鷹狩りに使う鷹につける鈴の意をも込めたか。「尾本繫小鈴、雖入茂林、鷹主慕其鈴音尋之」(雍州府志『古事類苑』。○さやけきしるべなりけり はつきりとしてよくわかる道案内であった。「さやけき」は、鈴虫の声が清らかに澄みとおっていることと、明瞭な「しるべ」となっていることを表す。「しるべ」は道案内。手引き。虫の音を「しるべ」と詠んだ例として、「紅葉折る野辺の便りに来る人は松虫の音ぞしるべなりける」(元輔集・二四)という歌がある。

【所載】ナシ

【参考】古今六帖・第六帖「すずむし」に、「かりにきて野辺にぞまどふ鈴虫の声はさやけきしるべなれども」(四〇〇一)という類似した表現の歌がある。

〔以上五首担当 長戸〕

のべ

そせい
なば

一一〇六 いざけふは春の山べにまじりなむくれ○なげのはなのかげかは

【異同】ナシ

【現代語訳】さあ今日は春の山辺に分け入ろう。暮れてしまったら無くなるような花の陰だろうか。いや夜を過ごすのに立派な花の宿なのです。

【語句】◎のべ 野辺。野原。歌では春秋の野の花を連れ立って見たり、楽しむ場として詠まれている。○まじりなむ 分け入るう。○くれなげなげの 暮れてしまつたら無くなるような。「なげ」は形容動詞「なげなり」の語幹。いかげんな。かりそめの。実体がなくなる。○はなのかげ 花の陰。花の下。花の宿。「今日のみと春をおもはぬ時だにも立つことやすき花のかげかは」（古今集・一三四）。

【所載】古今集・春下・九五／新撰和歌・五七／素性集Ⅰ・二三／素性集Ⅱ・二四／綺語抄・四四〇／奥儀抄・四四六／和歌色葉・二二二／西行上人談抄・三／近代秀歌・三一／詠歌大概・一一

【参考】作者名「そせい」は所載欄の文献に一致する。

一一〇七 はるのゝあさぢがうへにおもふどちあそべるけふはわすられめやは

【異同】はるのゝ—春のゝの（桂・大）

【現代語訳】春の野の浅茅の上で、親しい者同士が遊山している今日のこと、忘れられようか、忘れられはしない。

【語句】○はるのゝ 春の野。底本は「の」を一字脱落させているので、桂宮本、大久保本の本文によって訳す。○あさぢ 丈の低い茅萱。○おもふどち 親しい者同士。気のあった者同士。○あそべる 遊山して過ごしている。「る」は完了の助動詞「り」の連体形で遊山して過ごしている状態が引き続き継続しているさま。○わすられめやは 忘れられようか。「め」は推量の助動詞「む」の已然形。「やは」は反語。

【所載】玉葉集・雑二・二〇六一／万葉集・一八八四（旧一八八〇）春日野之 浅茅之上尔 念共 遊今日 忘目八方 カスガノノアサヂガウヘニオモフドチアソベフアラバワスラレメヤモ かすがののあさぢがうへにおもふどちあそぶけふのひわすらえめやも／夫木抄・一七〇〇

一一〇八 はるがすみたつかすがのをたちかへりわれはあひみんいやとしのはに

【異同】ナシ

【現代語訳】春霞の立ちこめる 春日野を繰り返し私は友と一緒に見よう。これからもずつと毎年。

【語句】○かすがの 春日野。大和国の歌枕。奈良市街東方の丘陵地。「飛火野」とも言う。○たちかへり 繰り返す。つくづく。「わが宿にさける藤波たちかへり過ぎがてにのみ人の見るらむ」（古今集・一一二〇）。○あひ

みん 相見ん。接頭語「あひ」は互いに、一緒に、の意を添える。一緒に見よう。互いに見よう。○いや いやよ。ますます。○としのはに 毎年。「年のはに春の来たらばかくしこそ梅をかざしてたのしく飲まめ」(万葉集・八三七(旧八三三))。

【所載】万葉集・一八八五(旧一八八二)春霞 立春日野乎 往還 吾者相見 弥年之黄土 ハルカスミタツカスガノヲユキカヘリワレハアヒミムイヤトシノハニ はるかすみたつかすがのをゆきかへりわれはあひみむいやとしのはに／人麿集Ⅲ・六三／赤人集Ⅰ・一七四(第五句欠)／家持集Ⅰ・四

一一二〇九 はるのゝにこゝろやらむとおもふどちちぎりしけふはくれずもあらなん

【異同】こゝろやらむと—こゝろやらへと(桂)

【現代語訳】春の野に気晴らしをしようとして親しい者同士が約束して出かけて来た今日は、暮れないであつてほしいものだ。

【語句】○こゝろやらむと 心を晴らそうと。気晴らしをしようとして。○おもふどち 一一二〇七番歌参照。

【所載】玉葉集・春上・一一五／万葉集・一八八六(旧一八八二)春野尔 意将述跡 念共 来之今日者 不晚毛荒粳 ハルノニココロヤラムトオモフドチキタリシケフハクレズモアラヌカ はるののにこころのべむとおもふどちこしけふのひはくれずもあらぬか／人麿集Ⅲ・六二／赤人集Ⅰ・一七五

つらゆき

一一二一〇 こゝにしてけふはくらさむ春のひのながきこゝろをおもふかぎりは

【異同】ナシ

【現代語訳】ここにいて今日は一日過ぎそう。この長い春の日のように、いつまでも心変りしない思いのうちは。

【語句】○こゝにして こゝにおいて。ここに。に」は格助詞。○春のひの 春の日の。「長き」を導く言葉。

「あはずしてこよひあけなば春の日の長くや人をつらしと思はむ」(古今集・六二四)。○ながきこゝろ いつまでも心変わりしない思い。

【所載】貫之集Ⅰ・三四

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 青木・林〕

一一二一 はるくればはなみむと思こころこそのかすみとゝもにたちいづれ

【異同】ナシ

【現代語訳】春が来ると、花を見ようと思う心が野辺の霞とともにわき起こってくることだ。

【語句】○はるくれば 春が来ると。已然形接続の「ば」には、①「……ので」の意を持ち、原因、理由を示すもの、②「常に」「いつも」という意を持ち、恒常的な関係を示すもの、③必然的な関係ではなく、「……したところ」と偶然の関係を示すもの、などがあり、あることがらに気づいた折の感動がうたわれる和歌では理屈や説明になることを嫌い、一般に③の用法で解されることが多いと思われるが、この場合は順接恒時条件か。いつも、という気持ちであろう。○はなみむと思 花を見ようと思う。「思」は連体形で、「思ふ」の「ふ」が無表記。○たちいづれ 「たちいづ」の已然形。「こそ」の係り結び。霞が立つ意に、心がそぞろわき起こる意を掛ける。

【所載】後撰集・春下・一一二／新撰万葉集・二五一／寛平御時后宮歌合・一一二／袋草紙・六一八／八雲御抄・七六

一一二二 あだにこそこのべのはなみにわがこしかながくしひをくらしつるかをな

【異同】わかこしか―わかこしは(桂)

【現代語訳】ほんの気まぐれで野辺の花を見に私はやってきたのだったが、花の美しさに酔いしれ、長い長い一日をそこで暮らしてしまったことだ。

【語句】○あだにこそ 「あだ」は実のないこと。はかないさま。浮気なこと。心から野辺の花をめぐるつもりではなく、漫然と野辺の花を見に来たことをいう。「あだにこそ散ると見るらめ君にみなうつろひにたる花の心を」(後撰集・五四一)。○わがこしか わが来しか。私はやってきたのだけれど。「こしか」は、力変動詞「来」の未然形に回想の助動詞「き」の已然形がついた形。「こそ」の係り結び。逆接的に「……だが」「……けれど」の意となる用法。

【所載】ナシ

一一二二三 のべにいでゝみるともはなのさかざらばなにゝこゝろをなぐさめてこむ

【異同】ナシ

【現代語訳】野辺に出て見まわしてみても、もし花が咲いていなかったら、何によって心を慰めてこようか。

【語句】○みるともはなのさかざらば たとえ見るにしても花が咲かなかつたら。「とも」は逆接仮定条件、「ば」は未然形接続で順接仮定条件。「たとえ……しても、もし……だったら」の意で、すべて仮定。

【所載】ナシ

一一二二四 おもふどち春の山べにうちむれてそこともしらぬたびねしてしか

【異同】たひねしてしか―たひねしけしか(御)

【現代語訳】心の通じ合っている者同士、春の山辺にうち群れて、どこでもいい、興の趣くまま、旅寝をしたものだ。

【語句】○おもふどち 心の通い合う者同士。「春の野に心のべむと思ふどち来し今日の日は暮れずもあらぬか」(万葉集・一八八六(旧一八八二))。○そこともしらぬ そこが具体的にどこということもわからない。興の至ったところで、の意。指示代名詞の「そ」に打消が伴った形は、あるもの、ある事柄が、具体的に……でない、という意を表す。「山のかひそことも見えずをとつひも昨日も今日も雪の降れば」(万葉集・三九四六(旧三九二四))、「寂しさはその色としもなかりけり楨立つ山の秋の夕暮れ」(新古今集・秋上・三六一)。○たびねしてしか 旅寝をしたいものだ。「てしか」は願望を表す終助詞。

【所載】古今集・春下・一二六／素性集Ⅰ・一七／素性集Ⅱ・九／素性集Ⅲ・三二

一一二二五 もゝくさのはなのひもとく秋のゝにおもひみだれん人などがめそ

【異同】ナシ

【現代語訳】さまざまな花の咲きはじめる秋の野で、花と親しみ、われとわが心をなくしてしまおうでしょう。人よ、そんな私を咎めないでください。

【語句】○もゝくさの 多くの種類の。無数の。○ひもとく 本来は「紐解く」で、万葉の昔から下裳の紐を解き、異性と会う意に用いられてきた。ここでは花の蕾がほころぶ意。女性が男性に心を許して下紐を解く気持も籠める。「夕露に紐解く花はたまぼこのたよりに見えし縁にこそありけれ」（源氏物語・夕顔）。○おもひみだれん 「思ひ乱る」は常軌を逸して取り乱すこと。「ん」は推量の助動詞で、ここは連体形ではなく終止形であろう。四句切れ。○人なとがめそ 人よ、咎めるな。「人」は呼びかけ。「な……そ」は禁止をあらわす。

【所載】古今集・秋上・二四六／小町集Ⅰ・四三

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一一二六 あきのゝはみちもゆかれずともすればはなのあたりにめのみとまりて

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野は、道を進むこともままなりません。どうかすると、花のあたりに目ばかりとまってしまつて。

【語句】○ともすれば ややもすると。どうかすると。「思ふとはいふものからにともすればわする草の花にやはあらぬ」（後撰集・五五二）。○めのみとまりて 目ばかりが奪われて。「とまる」は「ゆく」の対比。

【所載】ナシ

一一二七 みや人のかずはしりにきをみなへしいづことゝはゞいかゞこたへん

【異同】ナシ

【現代語訳】宮人の数は知っていました。女郎花が、（来なかった宮人は）どこかと聞いたならば、何と答えたら良いのでしょうか。

【語句】○みや人 宮仕えをする人。官人。参考欄の躬恒集の詞書によると、共に行く約束した人。○をみなへし 秋の七草の一つ。山野に自生し、黄色い花を傘状につける。歌では、女性をたとえることが多い。○いづことゝはゞ どこと聞いたら。

【所載】躬恒集Ⅳ・一八七／躬恒集Ⅴ・二九〇

【参考】躬恒集Ⅳには「おなじ年の九月廿八日殿上の人々ちぎりて、いはて山のほとりに行きて遊ばんなどちぎ

る、人々うこの少将(三字分空白)少将(七字分空白)その日になりておの／＼さはりありてきたらず、二首の歌をつかひに付けておくる」との詞書で、一八六番歌「いつしかと待つしるしなき紅葉ばのおのが散り／＼散りやしまし」に続き当該歌がみえる。

一一二八 かりにとてくべかりけりや秋のゝのはなみるほどに日はくれにけり

【異同】ナシ

【現代語訳】狩りにといて、かりそめに来るべきだったのでしようか、いや、そうすべきではありませんでした。秋の野の花を見るうちに日は暮れてしまいましたよ。

【語句】○かりに 「仮に」(一時的な間に合わせ)と「狩に」とを掛ける。「かりにとて我はきつれどをみなへし見るに心ぞ思ひつきぬる」(拾遺集・一六五・貫之)。○日はくれにけり 日は暮れてしまったよ。

【所載】拾遺集・秋・一六三

一一二九 もみぢみに君にをくれてひねもすにおもはぬ山をおもひつるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】紅葉の見物であなたと一緒に行けずに後に残り、一日中、思いもよらなかった山を思ったことです。

【語句】○君にをくれて 君におくれて。「おくる」はとどまる、後に残るの意。○ひねもすに 一日中。○おもはぬ山をおもひつるかな 「おもはぬ山」は、今までに思いもよらなかった山。「思はぬ山を思ふ」は世を逃れて出家したい意にもつながるか。「身を捨て、心のひとりたづぬれば思はぬ山も思ひやるかな」(一条撰政御集・一八四)。

【所載】ナシ

一一三〇 かぎりなくわがおもふ人のゆく野辺は、色を散り散りにしたのだろうか、(色とりどりの美しい)花が

【異同】ナシ

【現代語訳】私が限りなく思う人の行く野辺は、色を散り散りにしたのだろうか、(色とりどりの美しい)花が

咲いたことですよ。

【語句】○かぎりなくわがおもふ人 限りなく私が敬慕する人。所載欄の貫之集の詞書によると、この歌は藤原清貫の六十賀に際して、清貫女の依頼で詠まれたもの。○いろやちらさめ 色を散り散りにしたのだろうか。係助詞「や」は連体形と結ぶので「ちらさめ」は文法的におかしい。所載欄貫之集の「色やちぐさに」の方が整合性がある。

【所載】貫之集Ⅰ・一八一

【参考】元輔集Ⅰ・二三三に「限なくわが思ふ人の行末は稲や千種に花ぞ散りける」という類歌がみられる。

〔以上五首担当 三浦〕

一一二二一 秋かぜはずしくなりぬこまなべていざのゆかんはぎのはなみよ_に

【異同】ナシ

【現代語訳】秋風は涼しくなった。馬を並べてさあ野に行こう。萩の花を見に。

【語句】○こまなべて 馬を並べて。「こまなべてめもはるのにまじりなんわかなつみつる人もありやと」(古今六帖・一一三七)。○はぎのはな 萩の花。秋風が吹き始めると咲き始める秋の景物。万葉集では露と共に詠まれることが多い。「秋風のひにけにふけば露をおもみ萩のしたばはいろづきにけり」(万葉集・二二〇八(旧二二〇四))。

【所載】新拾遺集・秋上・三五六／万葉集・二二〇七(旧二二〇三) 秋風 冷成奴 馬並而 去来於野行奈 芽子花見尔 アキカゼハスズシクナリヌウマナメテイザノニユカナハギノハナミニ あきかぜはずしくなりぬうまなめていざのゆかなはぎのはなみに／新撰朗詠集・二七〇／人麿集Ⅱ・六一

一一二二二 秋のゝにさきたるはなをてをりてかきかぞふればななくさのはな
山のうへのおくら

【異同】ナシ

【現代語訳】秋の野に咲いている花を指折り数えてみると、それは七種の花だよ。

【語句】○てをりて 指を折って。「手を折る」は指折り数える動作。「手を折りてあひ見しことをかぞふれば

十といひつつ四つは経にけり」(伊勢物語・一六段・二四)。○かきかぞふれば 数えてみると。「かき」は接頭語。「かきかぞふ ふたがみやまに かむさびて たてるつがのき もともえも……」(万葉集・四〇三〇(旧四〇〇六))。○ななくさのはな 七種の草花。春の七草と秋の七草とがあるが、この場合は秋。万葉集一五四二(旧一五三八)によると、萩・尾花・葛・撫子・女郎花・藤袴・朝顔のこと。一二二三番歌参照。

【所載】万葉集・一五四一(旧一五三七) 秋野尔 咲有花乎 指折 可伎数者 七種花 アキノノニサキタルハナヲテヲリテカキカゾフレバナナクサノハナ あきののにさきたるはなをおよびおりかきかぞふればななくさのはなノ夫木抄・四五三九ノ袖中抄・五四五

【参考】作者名「山のうへのおくら」は所載欄の文献に一致する。

一二二三 はぎのはなおばななくでしこをみなへし又ふぢばかまあさがほのはな

【異同】ナシ

【現代語訳】萩の花、尾花、などでしこ、女郎花、それに藤袴、朝顔の花。

【語句】○はぎのはな 萩・芽子の花。マメ科の落葉低木で、秋に紅紫色または白色の花を咲かせる。秋の野の華やかさは「秋の野の萩のにしきは女郎花たちまじりつつをれるなりけり」(貫之集I・四五四)などにみられる。○おばな をばな。ススキの花穂。「さを鹿の入野のすすき初尾花いづれの時か妹がてまかむ」(万葉集・二二八(旧二二七七))。○などでしこ 瞿麦・石竹・撫子。多年草で七月十月に茎の先に淡紅色の花が咲く。平安期には「常夏」という異名と共に夏の景物として詠まれることも多いが、万葉集では「野辺見ればなでしこの花咲きにけりわが待つ秋は近づくらしも」(一九七六(旧一九七二))のように秋の景物という認識が高い。○ふぢばかま 藤袴。キク科の多年草。秋に淡紫色の花をつける。茎や葉に香気がある。古今集以後の用例が多い。「ぬし知らぬ香こそほへれ秋の野に誰がぬぎかけしふぢばかまぞも」(古今集・二四一)。○あさがほ 植物の名ではあるが、一種に特定し難い。「朝顔は朝露おひて咲くといへど夕かげにこそ咲きまさりけれ」(万葉集・二一〇八(旧二一〇四))のように夕暮れにも咲くので、万葉の時代には現代の朝顔とは別の、秋を代表する植物であったか。また、新撰字鏡に「桔梗……加良久波又云阿佐加保」や「桔梗……阿佐加保又云岡止、支」とあり、「あさがほ」は平安初期以前に桔梗の異名であったらしい。

【所載】万葉集・一五四二(旧一五三八) 芽之花 乎花葛花 瞿麦之花 姫部志 又藤袴 朝貌之花 ハギノハナヲバナクズハナナデシコノハナヲミナヘシマタフチバカマアサガホノハナ はぎのはなをばなくずはななでし

このはなをみなへしまたふぢばかまあさがほのはな
 【参考】当該歌は秋の七草を詠んでいるが、六種しか詠まれていない。所載欄の万葉集歌より「葛花」が欠けた形になっている。万葉集では山上憶良を作者とする。

一二二四 ふるさとほよしのゝ山しちかければひとひもみゆきふらぬ日はなし
 みゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】故郷は吉野の山が近いので、一日として雪の降らない日はない。

【語釈】◎みゆき み雪。雪の美称。また御行（みゆき）のこと。天皇や上皇が皇居を出て他所へ行くこと。天皇の場合には「行幸」とも書く。一二二五番歌から一二三二番歌までは御幸について詠まれている。○ふるさと 昔のなじみの土地。古い都を指すこともあるがここは前者。「み吉野の山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまざるなり」（古今集・三三五）。

【所載】古今集・冬・三三二／新撰和歌・一三三／俊頼髓脳・五〇／近代秀歌・五三／詠歌大概・六一／桐火桶・一一九

一二二五 たまつしまいりえのこまつおいにけりふるきみやこのことやとはまし

【異同】ふるきみやこの一ふるきみゆきの（大）

【現代語訳】玉津島の入江の小松は年老いてしまった。古い行幸のことをできることなら尋ねるのだが。

【語句】○たまつしま 紀伊国の歌枕。和歌山市和歌浦にある玉津島神社周辺の地。現在は陸続きだが、古くは島が点在していたらしい。続日本紀などによると、神亀元（七二四）年十月の聖武天皇の行幸を初めとし、称徳天皇の天平神護元（七六三）年十月、桓武天皇の延暦二三（八〇四）年十月に玉津島行幸があった。○いりえのこまつ 入江にある小松。古今六帖・一六六五に「玉津島入江の小松人ならばいくよか経しとはましものを」とあり、玉津島の入江と松という景観が窺える。○ふるきみやこの 当該歌は「みゆき」題の中の一首であるので、大久保本「ふるきみゆきの」の本文に拠って解した。昔あった行幸の。聖武天皇を初めとした玉津島行幸のことを指すか。○ことやとはまし（できることなら）……ことを尋ねるのだが。「や……まし」はためらいの

気持ちを表す。「秋のの道もまどひぬ松虫のこゑする方にやどやからまし」（古今集・二〇一）。

【所載】 夫木抄・一〇四七八

【参考】 是則集には「このかはの入江の松は老いにけり古きみゆきのことやとはまし」（四二）という類歌がある。

〔以上五首担当 橋本・尾高〕

一二二六 あづさゆみつまつくよとのとほにも君がみゆきをきくがうれしき
うみのうへ^上の女わう

【異同】 ナシ

【現代語訳】 梓弓を弾き鳴らす音が夜中遠くから聞こえるように、はるかにでも大君がお出ましなるということを聞くのは嬉しうございます。

【語句】 ○あづさゆみつまつくよとの 「つまつく」では歌意不通、所載欄の万葉集「つまびく」に拠り解す。

「よと」は「よおと（夜音）」の縮まった表現。「梓弓つまびく夜音」とは、夜中に禁中警護の衛士が弓弦を引き鳴らす音、邪気などを退散させる鳴弦の音のこと。大伴家持の長歌「……梓弓 爪びく夜音の とほおにも

聞けば悲しみ……」（万葉集・四二三八（旧四二二四））にも同じ表現が見える。上三句は「とほと」を導く序詞。

○とほと 「とほおと（遠音）」の約。遠くから聞こえる音。遠くからの知らせ。「とほおとも君が嘆くと聞きつれば音のみし泣かゆあひ思ふ我は」（四二二九（旧四二二五））。○みゆき 天皇や上皇のお出まし一般を指す。

○きくがうれしき 聞くのが嬉しいことだ。「いとどしくこゑうきものを都鳥関のこなたに聞くが嬉しき」（宇津保物語・三七五）。

【所載】 万葉集・五三四（旧五三一） 梓弓 爪引夜音之 遠音尔毛 君之御幸乎 聞之好毛 アツサユミツマビクヨトノトホトニモキミガミユキヲキクハシヨシモ あづさゆみつまびくよとのとほにもきみがみゆきをきかくしよしも

【参考】 作者名「うみの上女わう」は、海上女王（うなかみのおおきみ）のことで、所載欄の万葉集に「志貴皇子之女也」とある。

左大臣たちばなのあそむ

一一二七 むぐらはふいやしきやどもおほきみのみゆきとしらばたましかましを

【異同】ナシ

【現代語訳】葎の生えるような卑しい家も、大君をお迎えすると知っていたならば、玉を敷き詰めましたものを。

【語句】○むぐらはふ 葎のおい茂る。自分の家を謙遜した表現。「むぐらふ」とも。「むぐらはふ下にも年はへぬる身の何かは玉のうてなをもみむ」(竹取物語・一三)。○おほきみのみゆき 天皇のお出まし。所載欄の続後拾遺集や万葉集は「おほきみのまさむ」、古今六帖「おほ君のこむ」。○たましかましものを 玉を敷きつめておきましたのに。「たま」は、美しい宝石や宝玉の総称。貴人の訪問に準備が不十分であったことを詫びる表現。

同じ橘諸兄が元明上皇難波宮御幸に詠んだ歌に「堀江には玉敷かましを大君を御船漕がむとかねて知りせば」(万葉集・四〇八〇(旧四〇五六))。

【所載】古今六帖・第六帖「むぐら」三八七〇／続後拾遺集・雑中・一〇九七／万葉集・四二九四(旧四二七〇)牟具良波布 伊也之伎屋戸母 大皇之 座牟等知者 玉之可麻思乎 ムグラハファイヤシキヤドモオホキミノマサムトシラバタマシカマシヲ むぐらはふいやしきやどもおほきみのまさむとしらばたましかましを

【参考】作者名「左大臣たちばなのあそむ」は、橘諸兄で、所載欄の文献に一致する。諸兄(天武十三(六八四)年～天平勝宝九(七五七)年)が左大臣に任ぜられたのは、聖武朝の天平十五(七四三)年。なお、所載欄の万葉集によれば、聖武上皇が天平勝宝四(七五二)年十一月八日に左大臣橘諸兄宅を訪れた折の、「肆宴歌四首」のうちの一首。

一一二八 松かぜのきよきかはべにたましかば君きまさむかきよきかはべに
右大弁 やつか山

【異同】松かぜの―松かけの(御・桂・大)

【現代語訳】松の木陰の、清らかな河辺に玉を敷いたならば、君はまたおいでくださるでしょうか、この清らかな河辺に。

【語句】○松かぜの 底本は「松かぜの」だが、他本や所載欄の「松かけの」に拠って現代語訳した。○きよきかはべに 「きよし」は、汚れない清らかなさま。万葉集や平安時代の和歌には、「きよきかはら」「きよきかはせ」なら見えるが、「きよきかはへ(べ)」と続く歌は見えない。夫木抄の「神風のきよき川べにみそぎしてちと

せの秋のはじめをぞまつ」(二七九三)という寛喜元(一一二九)年女御入内屏風歌が早い例か。所載欄の万葉集「きよきはまへ」なら、一二七番歌と同じく橘諸兄邸での歌なので、庭の池を海に見立てて賞賛した表現となり、他例も見える。○たましかば 玉を敷いたなら。一二七番歌参照。○君きまさむか 「まさ」は尊敬の意を表す「ます」の未然形、「む」は推量、「か」は疑問の意。○きよきはまへに 二句と五句とで同じ表現を繰り返すのは、古代の歌謡によく見られるとの指摘がある。

【所載】万葉集・四二九五(旧四二七一) 松影乃 清浜辺尔 玉敷者 君伎麻佐牟可 清浜辺尔 マツカゲノキヨキハマヘニタマシカバキミキマサムカキヨキハマヘニ まつかげのきよきはまへにたましかばきよきまさむかきよきはまへに／夫木抄・一五三三

【参考】作者名「右大弁やつか山」は、所載欄の万葉集に「右一首右大弁藤原八束朝臣」とあり、八束であることは確かだが、「山」が不審。八束(靈龜元(七二五)年(天平神護二(七六六)年)は、藤原房前息、後に真楯と改名。極官は大納言。なお、所載欄の万葉集によれば、当該歌は、一二七番歌と同じ折に詠まれた歌で、古今六帖では連番で採ったことになる。

一二二九 しらさきにみゆきかくあらばおほぶねのまかぢしらなみ又かへりこむ

【異同】ナシ

【現代語訳】白崎にまた行幸がこのようにあつたなら、大船を仕立てて、左右の櫓を使って、白波が返るように再び帰つてこよう。

【語句】○しらさきに 「しらさき(白崎)」は、和歌山県日高郡由良町にある岬。石灰岩から成る山が海岸線に目立つ。なお、所載欄の万葉集漢字表記は「白埼者」とあり、「……に」の読みは出てこないが、第二句の表現と関わつていよう。○みゆきかくあらば 行幸がこのようにあつたなら。所載欄の綺語抄「さちありとまで」。

○まかぢ 真梶。左右揃つた櫓。○しらなみ 「白崎」「白波」と繰り返す。傍記「ゲヌキ」とある。「まかぢしげぬき」(左右そろつた櫓を隙間のないようにたくさん取り付けて、の意は、歌では中世期以降にのみ見える。

○又かへりこむ 「かへり」は波の縁語。波が返ると自分が帰るとを掛ける。

【所載】万葉集・一六七二(旧一六六八) 白埼者 幸在待 大船尔 真梶繁貴 又将願 シラサキハサキクアリマテオホブネニマカヂシジヌキマタカヘリミム しらさきはさきくありまたおほぶねにまかぢしげぬきまたかへりみむ／綺語抄・五六四

【参考】所載欄の万葉集によれば、大宝元(七〇一)年十月持統上皇と文武天皇が紀伊国牟呂(むろ)の湯に行幸した折の一首。

一一三〇 おほきみのみゆきのまにはわぎもこがたまくらまかず月ぞへにける

【異同】ナシ

【現代語訳】おおきみの行幸の間には(供奉しているので)、我が妻の手枕をしないで、月を経てしまったことだ。

【語句】○みゆきのまには みゆきのあいだは。行幸の期間中は。「まには」は、和歌には例がなく、所載欄の文献「まにま」(……にまかせて、……まに)の方が自然な詠みぶり。○たまくらまかず 手枕まかず。手枕をしないで。「手枕まく」は、相手の腕を枕にして寝ること、共寝をすること。

【所載】万葉集・一〇三六(旧一〇三二)天皇之 行幸之随 吾妹子之 手枕不卷 月曾歴去家留 スメロキノ ミユキノ マニマワギモコガタマクラマカズツキゾヘニケル おほきみのみゆきのまにまわぎもこがたまくらまかずつきぞへにける/夫木抄・一六四八八

【参考】作者名はないが、所載欄の万葉集によれば、大伴家持が狭残(ささ)の行宮(かりみや)で詠んだ歌。

〔以上五首担当 杉本・加藤〕

にわじせりかはに行幸し給時ニ

ゆきひらの中納言

一一三一 さがの山みゆきふりにしせりかは^{チヨノ}のべのふるみちあと^{チヨノ}はありけり

【異同】ナシ

【現代語訳】いにしへの嵯峨天皇の行幸から時が経ってしまったが、野辺の古道は今なお失せることがなく、跡が残っていることだ。

【語句】○にわじせりかはに行幸し給時ニ 詞書の形で入れられている、古今六帖では例外的な形。光孝天皇が芹川に行幸された時、の意。「にわじ」は仁和寺。仁和寺は、仁和二(八八六)年光孝天皇の勅願により着工され、子の宇多天皇の仁和四(八九〇)年に完成した寺。現在の京都市左京区にある。ここでの「にわじ」は光

孝天皇のこと。光孝天皇の芹川行幸は仁和二（八六六）年十二月十四日のこと。○ゆきひらの中納言 在原行平のこと。弘仁九（八一八）年生、寛平五（八九三）年没。平城天皇皇子である阿保親王の子。在原業平の異母兄。○さかの山 嵯峨天皇の御代をいう。○みゆきふりにし 嵯峨天皇の行幸からすつかり時が経ってしまつた。嵯峨朝では遊獵行幸が盛んであつた。○せりかは 芹川。山城国紀伊郡にあつた川。周辺一帯は平安時代初期からの遊獵地で、古くから行幸が多くあつた。○のべのふるみちあととありけり 野辺の古道は今もなお跡が残っている。清和・陽明朝で絶えていた芹川出遊が光孝朝で復活したので、昔の遺風が残っていると云つたもの。

【所載】後撰集・雑一・一〇七五／時代不同歌合・二九／秀歌大体・一〇八／和歌初学抄・一九六／袖中抄・二四二／古来風体抄・三三三／近代秀歌・一〇二

【参考】作者名「ゆきひらの中納言」は所載欄の文献に一致する。

一一三二一 さゝなみのしがのからさきみゆきしておほ宮人のふなよそひせり

【異同】ナシ

【現代語訳】志賀の唐崎に行幸があり、大宮人たちは出船の準備をしている。

【語句】○さゝなみの 「志賀」、「近江」、「大津」など琵琶湖周辺の地名に掛かる枕詞。○しがのからさき 志賀の唐崎（幸崎）。現在の滋賀県大津市、琵琶湖岸にあり近江八景の一つ。志賀には天智天皇の時代に大津宮が置かれていた。○ふなよそひ 出船の準備。「おしるや難波の津ゆり船よそひ我は漕ぎぬと妹に告ぎこそ」（万葉集・四三八九（旧四三六五））。

【所載】ナシ

【参考】この歌と上二句が同じものに、「ささなみの志賀の唐崎幸くあれど大宮人の船待ちかねつ」（万葉集・三〇）がある。

みやこ

大ともの大納言やす丸

一一三三三 おほきみは神にしませば水とりのすだくみぬまをみやこになしつ

【異同】 神にしませは―神なしませは(御) すたくみぬまを―すたくみぬまの(桂)

【現代語訳】 大王は神であられるので、水鳥が集まる水沼を都に造営なさった。

【語句】 ◎みやこ 皇居のある所、天皇のいる所。和歌では旧都を詠む場合や、都の外にいて都を懐かしむ場合などがある。○大ともの大納言やす丸 大伴宿禰安麿。天武朝から元明朝の頃の官人。慶雲二(七〇五)年に大納言に任ぜられ、和銅七(七一四)年に没した。○すたくみぬま 集く水沼。「すたく」は集まる、群がるの意。「葦鴨のすたく池水溢(あぶ) るともまけ溝(みぞ)の方(へ)に我越えめやも」(万葉集・二八四四(旧二八三三))。

【所載】 万葉集・四二八五(旧四二六一) 大王者 神尔之座者 水鳥乃 須太久水奴麻乎 皇都常成通 才オキミハカミニシマセバミヅトリノスダクミヌマヲミヤコトナシツ おほきみはかみにしませばみづとりのすたくみぬまをみやことなしつ/夫木抄・一一三五二/綺語抄・五九一

【参考】 作者名「大ともの大納言やす丸」は、所載欄の万葉集に一致する。夫木抄はよみ人知らず、綺語抄は作者記載なし。

一一三三 四 いその神ふりにしならのみやこにもいろはかはらずはなさきにけり

【異同】 ナシ

【現代語訳】 古びた奈良の都にも、昔と変わることなく美しい花が咲くのだった。

【語句】 ○いその神 いそのかみ。現在の奈良県天理市石上地方をいう。同所の小地名「布留」にかかる枕詞。○ふりにしならのみやこ 古くなった奈良の都。平城京のこと。「古りにし」に地名「布留」を掛けた。○いろはかはらずはなさきにけり 色は昔と変わることなく花が咲いている。懐旧の情を述べたもの。

【所載】 ナシ

【参考】 類似した歌に「古里となりにし奈良の都にも色は変はらず花咲きにけり」(古今集・九〇)がある。

一一三五 みわたせばやなぎさくらをこきまぜてみやこぞはるのにしきなりける
そせい

【異同】 ナシ

【現代語訳】見渡してみると、柳を桜を混ぜ合わせて、都こそ一面の美しい織物、春の錦であったよ。

【語句】○こきまぜて 「こき」は動詞の上につき、その動作の意味を強める接頭語。混ぜ合わせて。「春なれば梅に桜をこきまぜてながすみなせの川のかぞする」(紀師匠曲水宴和歌・二二二)。○はるのにしき 春の錦。柳の緑と桜の花とが混じり合っている景観を錦と喻えた。

【所載】古今集・春上・五六／新撰和歌・五一／和漢朗詠集・六三〇／素性集Ⅰ・九／素性集Ⅱ・八／素性集Ⅲ・三一／三十人撰・五二／三十六人撰・五五／綺語抄・七三七／古来風体抄・二二三

【参考】作者名「そせい」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 平野・吉田優子〕

一一三六 山かくすかすみぞはるはうらめしきい〇れ宮このさかひなるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】山を隠す霞の仕打ちが、春には恨めしいものです。いったいどこが都なのでしょうか。

【語句】〇いづれ宮この いづれ都の。「いづれ」は指示代名詞の不定称。多数の物事や広範囲の中から、不特定の一つを指している。どれ、どこ。「霞たつみねやいづれぞたづねみむ花の遠目をまぎらはすかな」(惠慶集・三〇〇)。〇さかひなるらむ 「さかひ」は境。境界や境目をいう場合と、土地や場所をいう場合がある。古今集における諸注釈を見ても、その解釈には両説あるが、ここでは後者と解した。「思ひやるさかひはるかになりやするまどふ夢ぢにあふ人のなき」(古今集・五二四)。

【所載】古今集・羈旅・四一三

一一三七 ふぢなみのはなはさかりになりにけりならのみやこを思ほゆはきみ

おほとものよつな

サバキミ

【異同】おほとものよつな—おほとものよへな(御・大)

【現代語訳】藤の花は満開となったことだよ。奈良の都をお思いになりますか、あなた様は。

【語句】○ふぢなみの 「ふぢなみ」は藤の花のこと。花房が風に揺れるのを波に見立てた表現。○思ほゆはきみ 「思ほゆ」はヤ行下二段活用動詞。「おもはゆ」の転。おのずと思われてくること。他人の心情についてい

う例はみえない。傍記は「思ほさば君」で、「お思いになるならば、あなた」と解せるが、上三句と意がつながらない。所載欄の万葉集では「思ほすや君」、家持集では「思ひ出つや君」。ここでは万葉集に従って解した。

【所載】万葉集・三三三(旧三三〇) 藤浪之 花者盛尔 成来 平城京乎 御念八君 フヂナミノハナハサカリニナリニケリナラノミヤコヲオモホスヤキミ ふちなみのはなはさかりになりけりならのみやこをおもほすやきみ/夫木抄・二一〇—/家持集Ⅰ・四四/家持集Ⅱ・四五/袋草紙・三四六

【参考】作者名「おほとものよつな」は所載欄の万葉集「防人司佑大伴四綱」に一致する。この歌に続いて「帥大伴卿歌五首」と題する歌が並ぶことから、万葉集歌における「君」は大伴旅人を指すものとみられる。

一一三三八 いつしかもみやこにゆきてたけくまのまつをみつとも人にかたらむ

【異同】まつをみつ—松は見き(大)

【現代語訳】いつか早く都に行つて、(あの有名な)武隈の松を見た人と人に語りたいたいものです。

【語句】○いつしかも 「いつしか」は、これから起こる事態を待ち望む意。早く。「も」は強意の係助詞。「いつしかもこの夜の明けむうぐひすのこづたひちらす梅の花見む」(万葉集・一八七七(旧一八七三))。○たけくまのまつ 武隈の松。陸奥国の歌枕。宮城県岩沼市。「栽多し時契りやしけん武隈の松をふたたびあひみつるかな」(後撰集・二二四一)の詞書の影響から、枯れたあと植えかえられて存在し続ける松というイメージが定着した。また、「武隈のはなはの松は親も子もならべて秋のかぜはふかなん」(宇津保物語・六五五)にみえるように相生の松として認識されており、二木(ふたき)であることから、「見き(三木)」と対応させて詠むようになった。当該歌でも傍記や大久保本の「まつはみき」をとると、「二木」なのに「三木(見き)」と語っておもしろさが生きる。当該歌の影響を受けたとみられるものに「武隈の松はふたきをみやこ人いかがとはばみきとこたへむ」(後拾遺集・一〇四二)がある。

【所載】ナシ

一一三三九 みやこ人いかにとゞはゞやまたかみはなぬくもゐにわぶとこたへよ

【異同】ナシ

【現代語訳】都の人が、私のことをどうしているかと問うたならば、山が高いために雲も心も晴れることのない

遠い地で、つらい思いをしていると答えてください。

【語句】○はれぬくもゐに 雲の晴れることのない遠い地で。「晴る」は、雲が晴れる意と、心が晴れる意の掛詞。ここでの「雲居」は、雲が留まり続ける様子と、都の人にとって遠い空の果てであることを表す。「ふるさとをかすみへだててよしの山はれぬくもゐにとほざかるらん」(重之子僧集・一〇)。○わぶとこたへよ つらい思いをしていると答えてください。「わぶ」は、つらさを嘆くこと。「わくらばにとふ人あらばすまの浦にもしほたれつつわぶとこたへよ」(古今集・九六二)。

【所載】古今集・雑下・九三七／新撰和歌・三四七／伊勢物語・二三四

一一四〇 みやこちをとほみやいもがたのころはうけひてぬれどゆめにみえこぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】都までの道が遠いからだろうか。この頃は神に誓いを立てて寝るけれど、いとしいあなたが、夢にも出てこない。

【語句】○みやこち 都へ行く道。○とほみやいもが 遠いからだろうか、いとしいあなたが。「とほみ」は、遠いので、の意。「みちとほみゆきてはみねどさくら花こころをやりて今日はくらしつ」(後拾遺集・九七)。「や」は疑問。○うけひてぬれど 誓いを立てて寝るけれど。「うけふ」は神に誓うことによつて吉凶・成否を占うこと。誓約。「あひ思はず君はあるらしぬばたまの夢にも見えずうけひてぬれど」(万葉集・二五九四(旧二五八九))。

【所載】万葉集・七七〇(旧七六七) 都路乎 遠哉妹之 比来者 得飼飯而雖宿 夢尔不所見来 ミヤコヂヲトホクヤイモガコノコロハウケヒテヌレドユメニミエコヌ みやこちをとほみかいはこのころはうけひてぬれどいめにみえこぬ／袖中抄・一〇一四

〔以上五首担当 斎藤・諸井〕

一一四一 わたつみはみやこゝぞりていにけらしよをうち山の神もみなくに

【異同】ナシ

【現代語訳】海の神々は、都を挙げて一人残らず立ち去ってしまったらしい。世を憂しとする宇治山の神も見えないのに。

【語句】○わたつみ 海の神々。第二句に「こぞりて」とあるから複数と見る。○ゝ(こ)ぞりて 挙りて。一人残らず。だれもかれも。○いにけらし 立ち去ってしまったらしい。「往ぬ」の連用形に「けるらし」の転化した「けらし」がついた形。○よをうち山(宇治山)の「う」に「憂」を掛ける。「わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり」(古今集・九八三)をもとに発想された語か。わたつみが立ち去るとあるから、「よをうち山(やま)」に「世をうち止む」の意を物名として潜ませ、「世をうち止む、宇治山の神」とした可能性も考えられる。宇治山の神が世をうち止む恐ろしい神であるとする例はないが、「宇治山」を詠み込んだ物名歌「わたつみの波うちやまば浜にいでてひろひををらむ恋忘れ貝」(躬恒集・三四)に、「わたつみの波」が「うちやむ(打ち止む)」とした例がみられる。

【所載】ナシ

【参考】どのような状況で詠まれたか不明。歌意をとりにくい「海の神」と「山の神」を対比させ、「海の神」が「宇治山の神」を恐れ、皆で逃げ出したという構図。「わたつみ」に「たつみ」を潜ませ、「みやこ」という語が使われていることを考えると、語句欄に挙げた喜撰歌の言葉を組み替えたアナグラムの歌で、誹諧歌、物名歌の系列に属するとみることが出来る。

一二四二 けにし身に又もけぬべしはるがすみかすめるかたをみやことおもへば
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】一度(人間界から)消えてしまった我が身に、再び消え失せそうな思いがある。春霞にかすむ彼方が(帝のいらつしやる)都だと思ふと。

【語句】○けにし身に 消えて(死んで)しまった身に。「けにし」は下二段「消(く)」の連用形「け」+完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」+過去の助動詞「き」の連体形「し」。伊勢集I(西本願寺本)では、「きえし身に」となっている。○又もけぬべし もう一度消え果てて(死んで)しまいそうになる。「おとにのみきくの白露夜はおきて昼は思ひにあへずけぬべし」(古今集・四七〇)。上二句は下三句と倒置され、自らの消え果ててしまいたい思いを強調する。

【所載】伊勢集I・五九/伊勢集II・六二/伊勢集III・五八

【参考】作者名「いせ」は所載欄の文献に一致する。伊勢集Iには、宇多天皇が「長恨歌」の屏風を描かせ、

歌を作らせた時、伊勢が玄宗皇帝の立場と楊貴妃の立場で五首ずつ詠んだ歌の中の一首で、楊貴妃の立場に立ったものである。「長恨歌」における「頭を回して下のかた人寰を望む処 長安を見ずして塵霧を見る（死後、仙山に住んでいる楊貴妃が、彼女を訪ねあてた方士に、帝の恩愛を感謝して語るところ）」という詩句に相当するが、当該歌の上二句は、詩の内容を膨らませて、楊貴妃の帝に対する思慕の情を歌うものとなっている。

一二四三 あをによしならのみやこはさくらばなのほひのごとくいまさかりなり
大ざいのそち をのゝ

【異同】 さくらはなのーさくらはな（桂）

【現代語訳】 奈良の都は、桜花が咲き誇るはなやかな美しさに似て、今真つ盛りでありますよ。

【語句】 ○あをによし 奈良にかかる枕詞。奈良坂の辺で青土（あをに）を産したことよという。○ならのみやこ 平城京。○さくらばな 桜花。所載欄の万葉集では「さくはなの」。奈良の都の美しさ、はなやかさの比喩。○にほひのごとく 「にほひ」は本来赤い色が外に発散する意で、つややか、華やかな色の美しさを表し、後に嗅覚にも転用される。所載欄の万葉集では「にほふがごとく」（西本願寺本の訓）、「にほへるがごとく」（現代訓）。

【所載】 万葉集・三三一（旧三二八）青丹吉 寧楽乃京師者 映花乃 薰如 今盛有 アヲニヨシナラノミヤコハサクハナノニホフガゴトクイマサカリナリ あをによしならのみやこはさくはなのほへるがごとくいまさかりなり

【参考】 作者名「大ざいのそち をのゝ」は、万葉集では「大宰少弐小野老朝臣」の作となっている。「大ざいのそち をのゝ」は「大宰帥 小野の」。「大ざいのそち」は、「をのゝ」に冠せられた官職名と思われるが不審。大宰帥はこの歌が詠まれた邸宅のあるじの官職名。「をのゝ」は大宰少弐小野老のことと思われる。大宰帥であった大伴旅人の邸宅で開かれた宴で詠まれた歌とみられ、上京して戻ってきた小野老が、大宰府の官人たちに都の様子を報告する形で歌ったものであるという（伊藤博『万葉集訳注』二 集英社、二〇〇五年）。

みやこどり

なりひら

一二四四 なにしをはぐいざことゝはむみやこどりわがおもふ人はありやなしやと

【異同】ナシ

【現代語訳】都という名を持つてゐるならば、さあ尋ねよう。都鳥よ。私が思う人は無事でゐるかどうかと。
 【語句】◎みやこどり ミヤコドリ科の大形の鳥（頭と背が黒く、腹部が白く、嘴と足は赤い）だが、歌や物語で「みやこどり」とされるのはカモメ科のユリカモメであるという。○なにしをは、名にし負はば。「都」という名を背負い持つならば。「名にしおはば逢坂山のさねかつら人にしられでくるよしもがな」（後撰集・七〇〇）。○いざこととはむ さあ尋ねよう。「いざ」は自分からある行動を実行に移そうとする時に発する声。「こととふ」は、ものを言いかける、尋ねる。○ありやなしやと 「ありやなしや」は無事でゐるかどうか。生きてゐるか死んでゐるかの意とみる説もあるが、単に安否を気遣つたものとみてよい。「心ありてとふにはあらず世の中にありやなしやのきかまほしきぞ」（拾遺集・一一九三）。

【所載】古今集・羈旅・四一一／新撰和歌・一九四／業平集Ⅰ・八一／業平集Ⅱ・二五／業平集Ⅲ・五七／業平集Ⅳ・四二／和歌体十種・四〇／平家物語（延慶本）異本歌／今昔物語集・一八五／伊勢物語・九段・一三
 【参考】作者名「なりひら」は、所載欄の文献に一致する。伊勢物語、第九段において、昔男が東下りをして、武蔵国と下総国の間にある隅田川の岸辺に着き、舟に乗つて川を渡ろうとすると、嘴と脚が赤い白い鳥が川べりで遊んでおり、名を尋ねると、渡し守が「これこそが、あの都鳥だ」と答えたのを聞いて詠んだ歌とある。

一二四五 めづらしくなきもきたるかみやこどりいづれのそらにとしをへぬらん

【異同】ナシ

【現代語訳】珍しく鳴きつつやつてきたことだなあ。あの都鳥は、いったいどここの空で年月を過ごしてきたのだろうか。

【語句】○なきもきたるか 鳴きも来たるか。鳴きつつやつて来たものだなあ。「……も……か」は詠嘆の意。「夢にだに見ざりしものをおほほしく宮出もするかさ松の隈廻を」（万葉集・一七五）。○みやこどり 一二四四番歌参照。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 中野〕

一一四六 わび人のすみふるやどはみやこどりことつてたえてとしぞへにける

【異同】ナシ

【現代語訳】世をはかなむ人が暮らしてきた古い住まいには、京からの便りもすっかり絶えて長い歳月が経ってしまったことよ。

【語句】○わび人 世をはかなんでいる人。岩井宏子『わび人』の周辺」(『古今的表現の成立と展開』和泉書院、二〇〇八年)によれば、「わび人」とは、古今集初見の語であり、歌人により時代により意味の差異はあるものの、「何らかの形で不本意な人生を歩むこととなり、心底に失意の念を持つ人で」「社会的に隔絶した孤独な生活を送りがちな人」と定義づけられるという。○すみふるやど 住み経て古くなった住みか。「住み経る」に「古る宿」を掛ける。○みやこどり 一一四四番歌参照。都鳥は、京より便りを運んでくる鳥の意から、「こと(言)つて」を導く。○ことつて 物や人に託してものごとを人に伝えること、伝言。日葡辞書に、「ことつて」よりも「ことつて」の方がまさると見えるので、清音で読んだ。○としぞへにける 年ぞ経にける。所載欄の夫木抄に「年をへつらん」。

【所載】夫木抄・一一八五四

一一四七 ふなきはふほりえのかはのみなきはにきゐつゝなくは宮こどりかも
おとまろ

【異同】ふなきはふ—ふなきほふ(桂・大)

【現代語訳】舟が漕ぎ競う堀江の川の川べりにやって来て鳴いているのは、都鳥であろうか。

【語句】○ふなきはふ 桂宮本・大久保本や所載欄の万葉集「ふなきほふ」により現代語訳した。「ふなきほふ」は、舟が先を競うように漕ぐこと。○ほりえ 「堀江」は人工的に作られた水路、掘割のこと。こは普通名詞ではなく、難波堀江のこと。参考欄参照。○みなきは 陸地の水に接するところ、水の際。「きは」は清音。○きゐつゝなくは やつて来て鳴いているのは。都鳥が鳴くのを歌う例は数少ない。「きゐつゝ」と詠むのも少ないが、「鶯のきゐつゝなけば春雨にこのめさへこそ濡れて見えけれ」(貫之集・二九九)などがある。

【所載】万葉集・四四八六(旧四四六二) 布奈芸保布 保利江乃可波乃 美奈伎波尔 伎為都都奈久波 美夜故 杼里香蒙 フナギホフホリエノカハノミナキハニキヤツツナクハミヤコドリカモ ふなきほふほりえのかはのみ

なきはにきあつたなくはみやこどりかも／夫木抄・一二八四九

【参考】作者名「おとまる」は不審。夫木抄に「読人不知」とあるが、万葉集卷二十の目録によると、天平勝宝八（七五六）年二月に聖武上皇・孝謙天皇・光明皇后らが河内離宮を経て難波宮に御幸した折のもので、当該歌は、同じく目録に、「二十日、大伴宿祢家持の、興に依りて作りし歌五首」（四四八四〇〜四四八四一）とある中の一首。これに拠れば作者は供奉していた家持となる。

もゝしき

一二四八

もゝしきのおほ宮人はおほけれどわが思人はことにぞありける
ひとまる

【異同】もゝしきの—もゝしきの（御・桂・大） おほけれと—おほかれと（桂・大）

【現代語訳】宮中に仕える人は数多くいるけれど、わたくしが思う方は、それは際立って素晴らしいのでありますよ。

【語句】◎もゝしき 万葉集では「ももしきの」のかたちで、「大宮人」に掛かる歌がほとんどであり、古今集以後には「ももしき」のみで内裏・宮中をあらわすようになる。「百石城」で、「百」（沢山の）、「石」（イシの頭音が脱落）の「城」（または「木」）の意で、大宮の規模をほめ讃える意味かという。○やま川のおほみや人 「やま川」の訂正は、次の一二四九番歌にすべきところを誤ったものと見られる。ここはミセケチで訂正される前の「もゝしきの」でないかと歌意が通じない。「大宮人」は宮中に仕える人。○おほけれど 多けれど。多いけれども。傍記「おほかれ」は「多し」のかり活用已然形。『新編国歌大観』にあたると、歌でも詞書でも、本行「おほけれ」（已然形）よりも、傍記「おほかれ」の用例数が断然多い。平安和歌では「おほかれ」がほとんどだが、古今六帖・一五七や秋萩帖に数少ない「おほけれ」が見える。「松のうへに霜のさむければ来むやとたのむよこそおほけれ」（秋萩集・九）。○ことに 「異なり」「殊なり」の連用形で、他に比べて際立っている、すぐれている、の意。

【所載】ナシ

【参考】作者名に「人麿」とあるが、他文献で確認できなかった。

伊勢

一二四九 もゝしきのおとにのみきくもゝしきを身をはやながらみるよしもがな

【異同】 もゝしきの—やま川の（御・桂・大）

【現代語訳】今は噂に聞くだけの内裏であるが、かつてのわが身のままで見る手だてがあればいいのになあ。

【語句】 ○もゝしきの 本来は他本のように、一二四八番に訂正された「やま川の」があるべき箇所。「山川の」は「音」にかかる枕詞。○おとにのみきく 人づてに聞くだけの。噂に聞くばかりの。○身をはやながら 「み」は、「身を」と「水脈」を掛け、「はやながら」は、昔のわが身のままでの意の「早ながら」に、水の流れが急な意の「速ながら」を掛ける。「水脈」「速ながら」は「山川」の縁語。○みるよしもがな 見る手だてが欲しいなあ。「よし」は、方法、手だて。「もがな」は願望を詠嘆的に言う終助詞。上代の「もがも」に代わって中古以降用いられるようになった。

【所載】 古今集・雑下・一〇〇〇／後撰集・雑四・一二九一／伊勢集Ⅰ・三二／伊勢集Ⅲ・三二／東野州聞書・一二二

【参考】 作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。なお、所載欄の古今集や伊勢集によれば、醍醐天皇より歌を召された折に献上した家集の奥に書きつけた歌。宇多天皇退位後、中宮温子に従って内裏を離れた後（一二五〇番歌参照）、歳月を経過してからの歌である。

一二五〇 しらつゆはおきかはれどももゝしき^をのうつろふ秋はものぞかなしき^{おなじ}

【異同】 ナシ

【現代語訳】白露は置いて草木の色が変わるけれど、御代がわりがあつて宮中を去るこの秋はいろいろ悲しいこととです。

【語句】 ○しらつゆはおきかはれども 白露は置き変はれども。露が置いて草木が紅葉するけれど。接続助詞「ども」は漢文訓読語的で不審。所載欄の伊勢集Ⅰ「白露のおきてかかれる」、伊勢集Ⅲ「白露のおきしかはれば」、新古今集「白露はおきてかはれど」。○もゝしきを 「ももしき」は内裏宮中のこと。所載欄の文献「ももしきの」とある方が自然な表現。○うつろふ秋 移り変わる秋。「うつろふ」は、草木が変色する意と、宮中から離れ住まいが変わる意とを掛ける。参考欄参照。○ものぞかなしき 伊勢集Ⅰに「(秋の)ことぞかなしき」。

【所載】新古今集・雑下・一七二二／伊勢集Ⅰ・二三八／伊勢集Ⅱ・二三八／伊勢集Ⅲ・二三八
【参考】作者名「おなじ」とあるのは、前歌において表示されている伊勢を指し、所載欄の文献に一致する。伊勢集Ⅰ詞書に、「亭子のみかどのおりさせたまはむとせさせたまひしときの秋」とある。宇多天皇の讓位は、寛平九（八九七）年七月のこと。

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

一二五一 わかるれどあひも思はぬもゝしきをのみざらむことやなにかゝなしき

【異同】ナシ

【現代語訳】こうして別れても（こちらは内裏のことを決して忘れないのに）、こちらのことを相思ってほくれないこの内裏を、こののち見ることがないだろうということが、なぜこんなにまでかなしいのであるうか。

【語句】○ていじのみかど 亭子の帝。宇多天皇のこと。退位後の一時期、東七条の亭子院を御所としたので、そう呼ばれた。○あひも思はぬ 双方が互いに思い合うことのない。こちらがどんなに「もゝしき」のことをなつかしく思っても、「もゝしき」の方はすこしもこちらのことを思はない、ということ。「もゝしき」を擬人化している。○もゝしき 内裏のこと。

【所載】後撰集・離別・一三二二／寛平御集・一六／伊勢集Ⅰ・二三九／伊勢集Ⅱ・二三九／伊勢集Ⅲ・二三九／大鏡・六六／大和物語・一段・一

【参考】寛平九（八九七）年七月三日の宇多天皇退位の直後、天皇と中宮温子がまだ内裏にとどまっていた時期に、伊勢が詠んで弘徽殿の壁に掲げた内裏への惜別歌。伊勢集によれば、前歌（一二五〇番）と同時詠である。「ていじのみかど」という作者名はあやまり。

一二五二 もゝしきの大宮人はあめつちと月日とゝも人まろによろよづよにかも

【異同】ナシ

【現代語訳】この大宮人たちは、天地と共に、また月日と共に、万代まで栄えるであろう。

【語句】○もゝしきの「大宮」にかかる枕詞。○大宮人 宮中に仕える人々。○よろづよにかも 万代にわたって永く栄えるであろう。「かも」は詠嘆。

【所載】万葉集・三二四八(旧三三三四)百礮城之 大宮人者 天地与 日月共 万代尔母我 モモシキノオホミヤヒトハアメツチトヒツキトモニヨロヅヨニモガ ももしきのおほみやひとはあめつちひつきとともによろづよにもが

【参考】万葉集の長歌三二四八(旧三三三四)番の末尾五句が、古今六帖で一首の短歌とされている。万葉集では、この長歌には題詞がなく、詠歌事情は審らかでないが、長歌全体の内容からみて、伊勢方面へ行幸あつたときのもののようである。作者名「人まろ」の根拠は不明。

一二五三 もゝしきのおほ宮人のたまほこのみちにもいでぬにこふるこのごろ

【異同】みちにもいでぬに―底本最後ノ「に」ニミセケチトシタアト、ミセケチノシルシヲ消ス。

【現代語訳】大宮人たちが道にも出ないで、(春の野山を)恋いこがれているこのごろであるよ。

【語句】○もゝしきのおほ宮人 前歌(一二五二番)参照。○たまほこの 「道」にかかる枕詞。○いでぬに出ないことによつて。出ないので。活用語の連体形を受ける接続助詞「に」は、順接・逆接いずれにもはたらくが、ここは順接と見しておく。

【所載】万葉集・九五三(旧九四八)百礮城之 大宮人之 玉梓之 道毛不出 恋比日 モモシキノオホミヤヒトノタマホコノミチニモイデズコフルコノコロ ももしきのおほみやひとのたまほこのみちにもいでずこふるこのころ

【参考】万葉集の長歌九五三(旧九四八)番の末尾五句が、古今六帖で一首の短歌とされている。万葉集における左注によれば、聖武朝の神龜四(七二七年正月、諸王子や諸臣の子らが春日野に出て打毬に興じていた折にわか)に雷鳴起り、宮中に侍従・侍衛がいけないという状態になった。ために諸王子・諸子らは、罰として外出を禁じられたが、それを悒憤して詠んだ長歌だという。

くに

中納言いしかはのとしなり

一二五四 あめつちもいほつゝなはふよろづよにくにさかえむといほつゝなはふ

【異同】くにさかえむとくにさくむと(御・大)、くにさかへんと(桂)

【現代語訳】天地もあまたの綱を張りわたしている。万代にわたって国が栄えるであろうと、あまたの綱を張りわたしている。

【語句】◎くに 国土、または国家。ひとつの政治的統治権力の及んでいる区域。またその国家の下にある地方行政区域をも「くに」と言った。古今六帖の「くに」題の下では、最初の一首(一二五四番)のみが前者の「くに」を詠んだ歌、二首目以下はみな後者の「くに」を詠んだ歌である。○中納言いしかはのとしなり 淳仁朝天平宝字六(七六二)年に没した大納言御史大夫石川年足のこと。蘇我馬子の孫連子の末裔、聖武朝の参議であった石川石足の長子。ただし、年足が中納言となったのは、孝謙朝末期のことで、この歌の詠まれた時(参考欄参照)はまだ参議であった(公卿補任)。○いほつゝなはふ 「いほつゝ」は「五百つ」、数の多いこと。「ゝ(つ)なはふ」は「網延ぶ」、綱を長く張りわたすことか。「いほつゝなはふ」については、確かな解を示し難いが、新嘗会の場の設営を称えて寿いだものか。鴻巣盛広『万葉集全釈』は、「上代の建築は黒木を葛の類で結んで作ったので、おのづからその結びあまりが見えてゐるわけであるが、この歌のは、主として屋根の棟などに、結び堅めたあまりの綱をさしてゐる。」としている。

【所載】万葉集・四二九八(旧四二七四)天尔波母 五百都綱波布 万代尔 国所知牟等 五百都都奈波布 アメニハモイホツツナハフヨロヅヨニクニシラレムトイホツツナハフ あめにはもいほつつなはふよろづよにくにしたらさむといほつつなはふ

【参考】作者名「中納言いしかはのとしなり」とあるが、万葉集の題詞によれば、この歌は、孝謙天皇の天平勝宝四(七五二)年十一月二十五日、新嘗会肆宴の際の応詔歌六首の中の一首である。左注には「式部卿石川年足朝臣」という作者名もあるが、また歌のあとには「似古歌而未詳」の注も見られる。

一二五五 山しろのこはたのもりにむまはあれどおもふがためはあゆみてぞくる
人まろ

【異同】こはたのもりに―木幡のさとに(大)

【現代語訳】山城の国の木幡の森に馬はあるのだけれども、(馬を使えば人に知られやすいから)心に思う人のためには、こうして歩いて来るのです。

【語句】○山しろのこはた 山城国の木幡。現在の京都府宇治市木幡の一带。「やましなのこはた」と言われることが多い。○おもふがためは 思う人のためには。すなわち、あなたのためには、の意。「おもふ」は動詞の体言的用法。○あゆみてぞくる 馬を使わずに、徒歩で来るのだ。人に知られぬための用心である。

【所載】拾遺集・雑恋・一二四三／万葉集・二四二九(旧二四二五)山科 強田山 馬雖在 歩吾来 汝念不得 ヤマシナノコハタノヤマニウマハアレドカチヨリワレク(ジクル)ナレヲ(キミヲ)オモヒカネ やましなのこはたのやまをうまはあれどかちよりわがこしなをおもひかねて／夫木抄・一三〇〇一／人麿集Ⅱ・四二八／人麿集Ⅲ・五六五／俊頼髓脳・一三三三／古来風体抄・一一一

【参考】作者名「人まろ」とあり、人麿集Ⅱ・Ⅲにも見られる歌だが、万葉集では、人麿歌集の歌となっている。
〔以上五首担当 山下〕

一二五六 しきしまややまとのくにゝ人はふたりありとし思はゞなにかなげかむ

【異同】ナシ

【現代語訳】このやまとの国に私の恋しい人が二人いると思うのなら、どうしてこんなに嘆きましようか。ただあなたひとりか恋しいのです。

【語句】○しきしまや 枕詞。「やまと」「たかまとやま」「みむろのやま」「みわのやま」などにかかる。○やまとのくに 畿内五か国の一つ。今の奈良県。日本国の称でもあるが当該歌が「くに」の項目にあるので「やまと」の国と解した。○ありとし思はゞ (恋しい人が二人) いると思うのなら。「し」は強めの助詞。○なにかなげかむ どうして嘆こうか。

【所載】万葉集・三二六三(旧三二四九)式嶋乃 山跡乃土丹 人二 有年念者 難可將嗟 シキシマノヤマト ノクニニヒトフタリアリトシオモハバナニカナゲカム しきしまのやまとのくににひとふたりありとしおもはば なにかなげかむ

一二五七 かくちのやかたなのやまのかたきしにゆきかはなかとみぞよせける^く

【異同】ナシ

【現代語訳】かくちのの、かたなの山の一方が崖になっている岸に、雪か花と見まがうように波が寄せてくるよ。

【語句】○かくちのやかたなのやま 不明。所載欄の夫木抄・八三二一には「かふちのやかたの山のかたきしに雪か花かと波ぞよせける」とあり「河内のや交野のやま」の誤写の可能性が考えられる。「河内」は畿内五か国の一つ。今の大阪府の東部。「交野」は河内国の歌枕。今の大阪府交野市、枚方市にまたがる地方。「さみだれは交野の浦のかたもなくしほみつ海の心ちこそすれ」（忠盛集・二五）の歌があり、当該歌第五句の「なみぞよせくる」のような所があったらしい。○かたきし 一方が崖になっている岸。○ゆきかはなかと 雪か花かと思まがうように。

【所載】夫木抄・八三二一

一二五八 つのくにのあしのやえぶきひまをなみこひしき人にあらぬころかな

【異同】ナシ

【現代語訳】津の国の、葦を沢山使って葺いた屋根の隙がないように、私は少しも暇がないので、恋しい人に逢わないこの頃だなあ。

【語句】○つのくに 「つのくに」は撰津の国。今の大阪府と兵庫県にまたがる地方。「つのくにの」は枕詞。「いくた」「こや」「なには」「あし」などにかかる。「つのくにの難波のあしのみはるにしげきわが恋人知るらめや」（古今集・六〇四）。○あしのやえぶき あしのやへぶき。葦の八重葺き。葦で幾重にも厚く葺いた屋根。○ひまをなみ 暇がないので。「隙」に「暇」をかける。

【所載】ナシ

【参考】類歌として「つの国のこやとも人をいふべきにひまこそなけれ葦の八重葺き」（和泉式部集Ⅰ・六九〇）がある。

一二五九 こひせんとなれるみかはのやつはしのくもでものをおもふころかな

【異同】ナシ

【現代語訳】恋をしようと生まれてきた身でしようか。そうではないのに、三河の八橋のくもでのようにあれこれと心が乱れて、物思いをする頃です。

【語句】○こひせんとなれるみかは 恋をしようと生まれてきた身でしようか。「かは」は反語。「身かは」に「三

河」をかける。「三河」は東海道十五か国の一つ。今の愛知県の東部。○やつはし「八橋」は三河国の歌枕。今の愛知県知立市。灌漑用の水路が八方に流れており、それぞれに橋をかけたのでこの名がある。「みかはのやつはし」は「くもで」に掛かる。○くもでに 蜘蛛が足を八方に広げたさまをいうが、ここでは「ものを思ふ」に掛かる修飾語。「くもでにもものをおもふ」は、あれこれと心が乱れるさま。「うちわたし長き心は八橋のくもでに思ふ事はたえせじ」(後撰集・五七〇)。

【所載】続古今集・恋一・一〇四四／俊頼髓脳・二二二／綺語抄・一八七／和歌童蒙抄・三八五／袖中抄・八八六

一一二六〇 とをたふみいなさほそえのみをつくしわれをたのめてあらましものを

【異同】ナシ

【現代語訳】遠江(とおとうみ)のいなさほそえの滞つくしを舟がたよりにしているように、私をあてにさせていたらよかつたのに。

【語句】○とをたふみ とほたふみ。遠江。とほつあはうみの約。東海道十五か国の一つ。今の静岡県の西部。○いなさほそえ 引佐細江。今の静岡県引佐郡。浜名湖の北側あたりにある町。○みをつくし 「水脈(みお)の串」の意。海や川の船の通る水路と定められた場所に、杭を並べ立てて目印としたもの。○われをたのめて私をあてにさせて。「今ははや恋しなましをあひ見むとたのめし事ぞいのちなりける」(古今集・六一三)。○あらましものを そういう状態であつたらよかつたのに。

【所載】万葉集・三四四八(旧三四二九) 等保都安布美 伊奈佐保曾江乃 水乎都久思 安礼乎多能米弓 安佐麻之物能乎 トホツアフミイナサホソエノミヲツクシアレヲタノメテアサマシモノヲ とほつあふみいなさほそえのみをつくしあれをたのめてあさましものを／夫木抄・一〇六四四／袖中抄・九三五／古来風体抄・一六〇

(以上五首担当 林)

一一二六一 としふればするがなるてふうどはまのうとくのみなどなりまさるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】年月が経つと、駿河にあるという有度浜の「うと」という言葉のように、ますますうとくとしく

疎遠にばかり、どうしてなつていくのだらうか。

【語句】○するが 駿河。現在の静岡県の一部。○うどはま 有度浜。駿河国の歌枕。現在の静岡市にある有度山の南麓の海岸。三保の松原から西南に延びる細長い浜。「東遊歌」の駿河舞歌に「駿河なる有度浜」とあり、駿河舞登祥の地とされる。「するがなるてふうどはまの」は、「うと」の音の相通により「うとく」を導く序。「あやしきは駿河のかみといひしよりなど有度浜のうとくくなるらん」（兼盛集・一三七）。

【所載】ナシ

【参考】類似した歌に「いつとなく恋するがなる有度浜のうとくも人のなりまさるかな」（相模集・五八四）がある。

一一六二 かひのくにつるのこほりのいたのなるしらたまこすげかさになむひてん

【異同】ナシ

【現代語訳】甲斐の国の都留の郡の板野に生えている白玉小菅を、きつと笠に縫おう。（白玉のように美しいあの娘とぜひ結び結ばれたいものだ。）

【語句】○かひのくに 甲斐の国。現在の山梨県。○つるのこほり 都留の郡。甲斐の国の歌枕。現在の山梨県都留地方（富士吉田市・都留市・大月市等）。「甲斐へまかりける人につかはしける」という詞書の歌の例に、「君が世は都留の郡にあえてきね定（さだめ）なき世の疑ひもなく」（後撰集・一三四四）とある。○いたの甲斐の国の「いたの」は未詳。影響歌と見られる近世の詠に「風寒み白玉小すげ乱れあひて甲斐の板野は霰降るなり」（林葉累塵集・七二二）とある。同じく近世の『甲斐名勝志』に「井戸と云地に板野と云野有。菅多く茂れり。里人いたやと唱ふ。」と見える。『甲斐叢書』は、当該歌とともに「はるく」と甲斐の高根は見えがくれ板野の小菅すゑ靡くなり」という宗祇の歌を挙げて、板野は井戸の支村の板屋であろうとし、近くに小菅村があつて昔は此辺りから小菅笠を縫出したと伝える（引用は、『甲斐叢書』〈第一書房、昭和四十九年〉による。句読点を補った）。○しらたまこすげ 白玉のように美しい小菅の意か。嘉元百首に一例ある他は、前掲の林葉累塵集七二二番歌の例しか見あたらない。「菅」は、カヤツリグサ科の草の総称。「しらたまこすげ」の類似表現「玉小菅」・「白菅」（菅の一種で葉が白味を帯びる）・「小菅」は、万葉集以来和歌に詠まれている。「みなのや葦が中なる玉小菅刈り来我が背子床のへだしに」（万葉集・三四六四（旧三四四五）、「いざこども大和へ早く白菅の真野のはり原手折りて行かむ」（万葉集・二八三（旧二八〇））。また、現在の北都留郡に小菅村があ

る。○かさにぬひてん 笠に縫ってしまおう。「笠に縫ふ」とは、笠に縫い綴ること。女性と結ばれる意を寓する。「真野の池の小菅を笠に縫はずして人の遠名を立つべきものか」(万葉集・二七八二(旧二七七二))。「てん」は、強意を表す助動詞「つ」の未然形に、意志を表す助動詞「む」の終止形が付いたもの。

【所載】 夫木抄・一四五七

一一六三 むさしのくさばもそむきともかくもきみがまにくわれはよりにき

【異同】 ナシ

【現代語訳】(靡きやすい) 武蔵野の草葉もそむいていますが、私は、どのようでも、あなたの意のままに靡き寄ってききました。

【語句】○むさしの 古くは「むさしの」と濁音。武蔵野。武蔵国の歌枕。現在の東京都と埼玉県にまたがり、神奈川県の一部も含む広大な野。○くさばもそむき 「草葉」が「そむく」と詠んだ例は見あたらない。所載欄の万葉集では「久佐波母呂武吉」。「そ」は「ろ」の誤写の可能性があるか。一応底本の本文によって、「靡きやすい武蔵野の草葉もそむいているが」の意と仮に解釈した。○きみがまにく 君がまにまに。あなたの意のままに。「新室の壁草刈りにいましたまはね草のごとよりあふをとめは君がまにまに」(万葉集・二三五五(旧二三五二))。

【所載】 万葉集・三三九五(旧三三七七) 武蔵野乃 久佐波母呂武吉 可毛可久母 伎美我麻尔末尔 吾者余 利尔思乎 ムザシノノクサハモロムキカモカクモキミガマニワレハヨリニシヲ むさしののくさはもろむきかもかくもきみがまにまにわはよりにしを

一一六四 ひたちなるあさかのうらのたまもこそひけばねたゆれわれはたえせじ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 常陸にあるあさかの浦の玉藻こそ引けば根が絶えるけれど、私のあなたへの思いは決して絶えずまい。

【語句】○ひたち 常陸。現在の茨城県の大部分。○あさかのうら 常陸の国の「あさかのうら」は未詳。所載欄の万葉集では「なさかのうみ」。歌枕としての「あさかのうら」は、摂津の国の浅香の浦が知られる。「夕

さらば潮満ち来なむ住吉（すみのえ）の浅香の浦に玉藻刈りてな」（万葉集・一一二）。○たまも 玉藻。藻の美称。

【所載】万葉集・三四一五（旧三三九七）比多知奈流 奈左可能宇美乃 多麻毛許曾 比気波多延須礼 阿杵可多延世武 ヒタチナルナサカノウミノタマモコソヒケバタエスレアドカタエセム ひたちなるなさかのうみのたまもこそひけばたえすれあどかたえせむ／夫木抄・一〇三三〇、一一六一二

一二六五 あふみのうみゆふなみ千どりなくなればこゝろもしらぬむかし思ほゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】近江の海で夕波千鳥が鳴く声が聞こえると、心もわからないような昔のことが思われる。

【語句】○あふみのうみ 近江の海（淡海）。近江国の歌枕。滋賀県の琵琶湖の古名。○ゆふなみ千どり 夕方の波の上に群れている千鳥。千鳥は、チドリ科の鳥の総称。河や海辺、湖沼の水辺に群れている小形の鳥で、古来和歌に多く詠まれた。○こゝろもしらぬむかし思ほゆ 当時の事情や人々の気持ちも知らない昔のことと思われる。所載欄の万葉集では、「こゝろもしのいにしへおもほゆ」とあつて人麿が近江朝時代を偲ぶ思いを表す。

【所載】続後拾遺集・冬・四五七／万葉集・二六八（旧二六六）淡海乃海 夕浪千鳥 汝鳴者 情毛思努尔 古所念 アフミノウミユフナミチドリナガナケバココロモシノニイニシヘオモホユ あふみのうみゆふなみちどりながなげばこゝろもしのいにしへおもほゆ／夫木抄・六八四二／人麿集Ⅲ・七二一／綺語抄・四七一、五八七、六〇一／和歌童蒙抄・七五六／袖中抄・五七六／古来風体抄・三三

【参考】古今六帖には作者名がないが、所載欄の万葉集には「柿本朝臣人麿歌一首」とあり、人麿集にも見える。

〔以上五首担当 長戸〕

一二六六 みの山にしげりかさなるたまがしはとよのみあかりにあふがたのしさ
サカユル
くろぬし
トヨノアリニ

【異同】ナシ

【現代語訳】美濃山に重なりあつて繁る玉柏、その柏を用いる豊の明かりにめぐり会える楽しさよ。

【語句】○みの山 美濃国の山々を総括して言う。○しげりかさなる 「繁り重なる」の意。ただし所載欄の夫木抄では、「六帖」の第二帖から採つたとして「みの山にしげりさかゆる山かざし豊のあかりにあふがうれしさ」とする本文を伝える。参考欄参照。○たまがしは 「柏」の美称。柏の葉は祭祀の際に食器として用いる。○とよのみあかりに 「み」は美称。「とよのあかり」は、豊の明かりの節会。新嘗祭、または大嘗会の翌日に行われる宴会。天皇が新穀を摂り、群臣にも賜り、五節の舞などが行われる。なお傍記の「トヨノアリニ」は、他本では「トヨノアカリニ」とある。○あふがたのしさ 大嘗会での豊の明かりの節会に同席できたことを喜ぶ。美濃国が大嘗会の悠紀国になつた折の詠。

【所載】夫木抄・八八七七

【参考】万代集・一六二五番には、「承和大嘗会悠紀方美濃国風俗歌」との詞書を付し、作者を「読人不知」として、「みのやまに四時におひたるたまがしはとよのあかりにあふがたのしさ」を挙げる。同じ歌の異伝歌かと思われるが、夫木抄には、万代集の冬歌として、当該歌に並べて八八七八番に掲げる。少なくとも夫木抄では両歌を同じ歌と認識していいことになる。なお、古今集・志香須賀本では「神遊びの歌」の末尾（一〇八六番の次）に、作者を「黒主」として、「美濃山に繁（しじ）に生ひたる玉柏豊のあかりにあふがうれしさ」を載せ、催馬楽（五五）にも「美濃山に 繁に生ひたる 玉柏 豊の明かり あふがたのしさや あふがたのしさや」とある。

木の女わう

一一六七 ひだくくみふりぬいたまもあるものをいつの露ぞや袖にもりつゝ

【異同】いつの露ぞや―いつの露にや（大）

【現代語訳】飛驒匠の手になる古びない板間もあるというのに、いつの露なのか、袖に洩れているのは。

【語句】○ひだくくみ 飛驒から上京し、都の造営や修理にあつた大工。「飛驒のたくみ」とも。「とにかくに物は思はずひだたくみうつ墨縄のただひとすちに」（拾遺集・九九〇）。○ふりぬいたま 古くならない板間。「板間」は屋根の合わせ目の隙間で「君まさであれたるやどの板間より月の洩るにも袖はぬれけり」（古今六帖・二四八四）などと光が洩れたり、また「杉板もてふける板間のあはざらば如何せんとかわが寝そめけん」（拾遺集・七四六）のように、板の合わないことと二人が逢えないことを掛け、叶わぬ思いを詠む場合に用いられるこ

とが多い。ここでは飛驒匠の腕前をたたえ、古びないので露に濡れることはないという前提に立つ。「ふりぬ」を古くならない意で用いた例としては「年ごとにとこめづらなる鈴虫のふりてもふりぬ声ぞきこゆる」(公任集・一一二)がある。○袖にもりつゝ 袖に露が洩れている状態をいう。濡れるはずのない袖が濡れているのは、実は忍びきれぬ涙によるものであるとする。「知る人もなくてやみぬるあふことをいかで涙の袖に洩るらん」(後拾遺集・六七七)。

【所載】ナシ

【参考】作者名「木の女わう」については未詳。万葉歌人の「紀女郎」あるいは「紀皇女」のことか。いずれにしても当該歌は他文献には見出だせない。

一一六八 しなのなるちりまのかはのさざれいしのきみしふみてばたまとひろはむ

【異同】さざれいしの—さざれ石(大)

【現代語訳】信濃を流れる千曲川の小さな石が、もしあなたが踏んだなら、珠と違って拾いましょう。

【語句】○ちくまのかは 千曲川。信濃国を経て越後国で日本海にそそぐ。現在では信濃川の上流部をいう。○さざれいし 小石。「わが君は千代にましませさざれいしのはほとなりて苔のむすまで」(古今六帖・二二三四)。○きみしふみてば 「てば」は完了の助動詞「つ」の未然形に仮定条件の接続助詞「ば」の付いたもの。……たならば。「梅が香を袖にうつしてとどめてば春は過ぐともかたみならまし」(古今集・四六)。

【所載】万葉集・三四一八(旧三四〇〇) 信濃奈流 知具麻能河泊能 左射礼思母 伎弥之布美弓婆 多麻等比呂波牟 シナノナルチグマノカハノサザレシモキミシフミテバタマトヒロハム しなのなるちぐまのかはのさざれしもきみしふみてばたまとひろはむ／夫木抄・一〇九九六

一一六九 かはつけのさのくくたちおりはやしわれはまたむしことしらずかも

【異同】○ことしらすかも—ことしらすとも(大)

【現代語訳】上野国の佐野の青菜の茎を「折りはやし」て私は待ちましょう。「来なさい」と言うのも知らずになあ。

【語句】○かはつけの 上野の。「かんづけ」「かみつけ」とも。上野国は現在の群馬県。万葉集・卷十四には「上

野国」の歌が二十二首収められ、当該歌もその一つ。○さの 佐野。現在の群馬県高崎市、烏川の北岸一帯の地。○くくたち 青菜。茎が伸びることによる名。「山たかみ花の色をも見るべきにくくたちぬる春がすみかな」(拾遺集・物名・三九八、四句に「くくたち」を隠す)。○おりはやし をりはやし。折り栄やす意。「栄やす」はよいものにするの意であることから、手折って料理にする(窪田空穂『萬葉集評釋』)とも、折ったものを植え立てて翌年の豊作を予祝する(伊藤博『萬葉集釋注』)ともいう。○われはまたむし 私は待とう。「し」は強意の副助詞か。ただし一般的には強意の「し」が文末に用いられることはない。所載欄の万葉集では「またむゑ」とある。「ゑ」は感嘆を表す間投助詞。○ことしらずとも 難解。万葉集では「ことしこずとも」とあり、今年来ずとも(中西進)、来とし来ずとも(今はちつとも来なくても、伊藤博)などと解されている。同じく夫木抄では「ことし見ずとも」とあり、今年見ずとも、と解せる。ここでは仮に「こ」を「来」の命令形と取っておく。

【所載】万葉集・三四二五(旧三四〇六)可美都気野 左野乃九久多知 乎里波夜志 安礼波麻多牟恵 許登之 許受登母 カミツケノサノククタチヲリハヤシアレハマタムエコトシコ(三)ズトモ かみつけのさのくくたちをりはやしあれはまたむゑことしこずとも/夫木抄・九八〇三

一二七〇 みちのくにありといふなるなとり河なきなとりてはくるしかりけり たぐみね

【異同】ナシ

【現代語訳】陸奥にあるという名取川、そんな名前のように、なき名、あらぬ噂を立てられては苦しいことだなあ。

【語句】○みちのくにありといふなる 同様の歌い出しの例として「みちのくにありといふなるたま川の玉さかにてもあひみてしかな」(古今六帖・一五五六)などがある。○なとり河 名取川。現在の宮城県名取市を流れ、仙台湾にそそぐ川。「いぬがみのとこの山なるなとり河いさとこたへよわがなもらすな」(古今集・一一〇八)。初句からここまで、「なきなとり」を導く序詞。○なきなとり 「なき名」はあらぬ噂。ここでは、実際にはまだ何もないのに、逢瀬を重ねているなどという噂。「名取り」は噂が立つことをいう。

【所載】古今集・恋三・六二八/人麿集Ⅱ・五六三/忠岑集Ⅰ・二二五/忠岑集Ⅱ・四七/忠岑集Ⅲ・四九/忠岑集Ⅳ・六七/宝物集・四二二

【参考】作者名「たぐみね」は、人麿集を除き、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 青木・久保木〕

一二七一 いではなるあねとのせきのすみだがはながれてもみむ水やにごると

【異同】ナシ

【現代語訳】出羽にある姉戸の関のほとりを流れるすみだ川のように、流れて、年月が経っても、見てみよう、この水が濁るかどうかと。清らかなままで心変わりしないかどうかと。

【語句】○いでは 出羽。現在の山形県と秋田県にほぼ相当する。○あねとのせき 姉戸の関。『大日本地名辞書』（改訂版）には、「補」として羽後国（今の秋田県）の最後に付されている。もともと所載欄の夫木抄では「あねはのせき」、参考欄の歌枕名寄では「阿保登関」とする。○すみだがは 歌枕名寄では「澄田河」とする。また前掲『大日本地名辞書』には「清田川」の項に、「在阿保登関址、在大戸、清田川（古今六帖）」とある。「清田川」と書いて「すみだがは」と読むか。○ながれても 川の「流れ」に時間の「経過」の意をこめているのである。

【所載】夫木抄・一一三三五

【参考】歌枕名寄、卷二十六「出羽」の項に、

阿保登関 付澄田河
六帖

いではなるあほとの関のすみだ川ながれてもみん水やにごると（六八五一）と見える。

一二七二 わかさなるのちのせ山のちもあはむわがおもふ人にけふならずとも

【異同】のちのせ山のちもあはむ―のちのせ山のちもあはむ（御）、後せの山のちもあはむ（桂・大）

【現代語訳】若狭にある後瀬の山の、「後」にまた逢いましょう。私のいとしい人に、今日でなくても。

【語句】○わかさ 若狭。現在の福井県南部。○のちのせ山のちもあはむ 底本字足らず。異同欄に見える「後せの山のちもあはむ」によつた。所載欄の夫木抄も同じ。のちに逢いましょう。「後瀬の山」は、福井県小浜市にある小山。「かにかくに人はいふとも若狭路の後瀬の山の後も逢はむ君」（万葉集・七四〇（旧七三七））。初

・二句は「のち」を導く序。
【所載】夫木抄・八五二五

一一七三 たばちのやおほえの山のさねかづらたえむものとはわがおもはななくに

【異同】ナシ

【現代語訳】丹波路の大江山のさねかづらが絶えるだろうとは思えないように、あなたとの仲が絶えるだろうなどと私はまったく思っていないせんのに。

【語句】○たばちのや 丹波路の。「丹波路」は山城国（現在の京都府南部）から丹波国（現在の京都府、兵庫県、大阪府のそれぞれ一部にまたがる地域）に行く道。「や」は間投助詞。○おほえの山の 大江の山の。「大江山」は山城国と丹波国との間にある山。「大江山いくの道の遠ければふみもまだみず天の橋立」（金葉集・五五〇）。○さねかづら モクレン科のつる性常緑低木。上三句が下二句の序。○わがおもはななくに 私は思わないことなのに。「なくに」は、打消の助動詞「ず」のク語法「なく」に、助詞「に」がついた形。ないことなのに。【所載】万葉集・三〇八五（旧三〇七一）丹波道之 大江乃山之 真玉葛 絶牽乃心 我不思 タニハミチノオホエノヤマノサネカツラタエムノココロワレハオモハズ たにはぢのおほえのやまのさなかづらたえむのころわがおもはななくに／袖中抄・一〇〇九

一一七四 たぢまなるゆきのしらはまもろよせにおもひしものひとのとやみむ

【異同】おもひしもの—おもひしものを（御・桂・大）

【現代語訳】但馬にある雪の白浜の諸寄ではないが、もろ寄せ、お互いに心を寄せ合っていたかと思っていたのに、あなたのことを他の人のものとして見るようなことがあるでしょうか。

【語句】○たぢま 但馬。現在の兵庫県北部。○ゆきのしらはま 兵庫県美方郡新温泉町諸寄にある浜。一面白砂で覆われ、「雪の白浜」と呼ばれる。上三句が「もろよせ」を導く序。○もろよせに 地名の「諸寄」に「もろ寄せ」を掛ける。「もろ寄せ」の用例は見あたらないが、「もろ」は、二つが対になっているものの両方（「もろ手」「もろ矢」など）、あるいは、多くのものすべて（「もろ人」「もろ心」など）の意を持つ。ここは、お互いに心を寄せ合う、相思相愛の意か。なお地名の「諸寄」は、枕草子に「浜は、……打出の浜、諸寄の浜、……」

と見える。○おもひしもの 底本は字足らずなので、他本の「おもひしものを」によって解した。所載欄の古今六帖における重出歌でも「おもひしものを」とある。○ひとのとやみむ 解しにくいのが、「や」は反語か。人のものとして見るだろうか、見はしないだろう。

【所載】古今六帖・第三帖「はま」一九二〇／夫木抄・一一八五四

一二七五 たちわかれないなばの山のみねにおふるまつとしきかばとくかへりこむ

【異同】とくかへりこむ—いま帰こん(大)

【現代語訳】あなた方とお別れして私はこれから任地の因幡に行きますが、その因幡の山の峰に生えている「松」のように、あなた方がもし私を「待つ」と聞いたら、すぐにでも帰って来ましょう。

【語句】○いなばの山の 因幡国(現在の鳥取県東部)にある稲羽山。「往なば」を掛ける。○みねにおふる「おふる」は「生ふる」。峰に生えている。○まつとしきかば もし待っていると聞かぬならば。「まつ」は「待つ」に「松」を掛ける。上三句は「まつ」を導く序。「し」は強めの副助詞。

【所載】古今集・離別・三六五／時代不同歌合・二五／百人秀歌・九／百人一首・一六／定家十体・一五四／和歌初学抄・六九／古来風体抄・二六四／近代秀歌・六三／詠歌大概・七二／桐火桶・一四一／井蛙抄・三二二

【参考】作者名の記載はないが、所載欄の古今集などでは「在原平朝臣」とする。通説では、行平が因幡赴任に際し、都の人と別れを惜しんで詠んだ歌とするが、任果てて帰京する際の歌とする説もある。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一二七六 いはみのやたかつの山のこのまよりわがそでふるといもみつらむや
ひとまろ

【異同】ナシ

【現代語訳】石見の高角山の木の間から、私が袖を振っていると彼女は見ただろうか。

【語句】○いはみのや 「いはみ」は国名、石見国。島根県の西部。「や」は感動の助詞。所載欄の拾遺集では「いはみなる」、万葉集・一三九や人麿集Ⅲ・六五三では「いはみのうみ」。○たかつの山 角の地にある高い山

の意か。所載欄の拾遺集では「たかまの山」、万葉集・一三九では「打歌山（うつたのやま）」、人麿集Ⅲ・六五三では「うつるのやま」。所在については諸説ある。○このまより 木の間から。万葉集・一三四では「このまゆも」。○わがそでふるると わが袖振ると。私が袖を振っていると。万葉集はじめ、所載欄の文献では「わがふるそでを」が多い。袖を振るのは妻との別れを惜しんでのこと。○いもみつらむや 妹見つらむや。妻は見たであらうか。所載欄の文献では「いも見けんかも」「いもみつらむかも」「いもみつらむか」等。

【所載】拾遺集・雑恋・一二三九／万葉集・一三二（旧一三二）石見乃也 高角山之 木際従 我振袖乎 妹見都良武香 イハミノヤタカツノヤマノコノマヨリワガフルソデライモミツラムカ いはみのやたかつのやまのこのまよりわがふるそでをいもみつらむか、一三四（旧一三四）石見尔有 高角山乃 木間従文 吾袂振乎 妹見監鴨 イハミナルタカツノヤマノコノマニモワガソデフルライモミケムカモ いはみにあるたかつのやまのこのまゆもわがそでふるをいもみけむかも、一三九（旧一三九）石見之海 打歌山乃 木際従 吾振袖乎 妹見兒香 イハミノウミウツタノヤマノコノマヨリワガフルソデライモミツラムカ いはみのうみうつたのやまのこのまよりわがふるそでをいもみつらむか（左注）右は、歌の体同じといへども、句、相替れり。これに因りて重ねて載せたり。／夫木抄・八三九、八五〇八／人麿集Ⅰ・一／人麿集Ⅱ・二二四／人麿集Ⅲ・六五三、七二四、七二五／和歌初学抄・一五三／柿本人麻呂勘文・六二／袖中抄・一七〇／古来風体抄・三三／正徹物語・二

【参考】作者名「ひとまる」は所載欄の文献に一致する。石見相聞歌の一首。万葉集の三種の歌詞の關係には諸説あつて、松田好夫氏は一三四—一三九—一三二の順序で作者の推敲が行われたとし、伊藤博氏は一三九—一三四—一三二の順序による推敲を推定している。

一二七七 はりまなるいくたのうらによをつくすあまのつりぶねこがるればなど

【異同】ナシ

【現代語訳】播磨にある生田の浦に一生を終える海人の釣舟は漕ぐことができるが、（私があの人に）恋焦がれるのはなぜなのでしょう。

【語句】○はりまなるいくたのうら 播磨なる生田の浦。播磨は旧国名で現在の兵庫県西部。生田は、現在の神戸市中央区を中心とする一帯で、摂津国の歌枕。「津の国」に伴つて用いられることが多く、「はりまなる」と詠まれたのはこの歌のみ。○よをつくす 一生を終える。「白波の寄する渚によをつくす海人の子なれば宿も定めず」（新古今集・一七〇三）。○こがるればなど 思い焦がれるのはなぜでしょうか。初句から第四句までは「漕

がるれ」と同音の「焦がるれ」を導く序詞。「おくれずぞ心にのりてこがるべき波にもとめよ舟みえずとも」(後撰集・一三四五)。「浦」「釣舟」「漕がる」は「海人」の縁語。「已然形十ば」は「……すると」「……するので」など、と順接の確定条件を表す。

【所載】ナシ

【参考】歌枕名寄・四一五六番に「生田篇・釣舟」の題でこの歌がある。

一二七八 まかねふくきびの中山おいこせるほそたにがはのおとのさやけさ
くろぬし

【異同】おいこせる―おぬこせる(御)、おひにせる(桂・大)

【現代語訳】吉備の中山が帯にしている細い谷川の川音のさわやかなことよ。

【語句】○まかねふく 鉄の精錬が行われた地名につく枕詞。○きびの中山 「吉備」は美作・備前・備中・備後の総称。現在の岡山県と広島県東部にあたる。「中山」は備前、備中の国境にある高くない山で、吉備津の宮があった。○おいこせる 意味不明。傍記「おびにせる」に拠って解する。帯にしている。帯が腰をとりまくように川が山の麓をめぐり流れているさま。「帯にする細谷河に見ゆる火は螢もまかねふくにやあるらん」(夫木抄・三二五五)。○ほそたにがは 細い谷川。「妹背山細谷川を帯にして霞の衣けさやきぬらん」(夫木抄・五二七)。

【所載】古今集・神遊びの歌・一〇八二／綺語抄・二二三／和歌童蒙抄・一七九／奥儀抄・五九七／和歌初学抄・二二四／袖中抄・二六五／和歌色葉・二九八

【参考】作者名「くろぬし」とあるが、所載欄の他文献に作者名はない。催馬楽「真金吹」に「真金吹く 吉備の中山 帯にせる なよや らいしなや さいしなや 帯にせる 帯にせる はれ／帯にせる 細谷川の 音のさやけさや らいしなや さいしなや 音のさや 音のさやけさや」とみえ、また、万葉集・一一〇六(旧一一〇二)、人麿集I・二二三、人麿集II・一九四には「おおきみのみかさのやまの帯にせる細谷川の音のさやけさ」と類歌がみられる。川をほめることよって、それを帯にしている山をもほめる国ほめ歌。

一二七九 すわうなるいはくに山をこえくればたむけよせくにあらしその山

【異同】すわうなる―周防なる(大) たむけよせくに―たむけよくせよ(御・桂・大)

【現代語訳】周防の国にある磐国山を越えて行くと、手向けをよくしなさい。険しくて危険ですよ、その山は。
【語句】○すわうなるいはくに山 「すわう」は周防で、現在の山口県東部。「いはくに山」は山口県岩国市から西南の玖珂町にいたる間の山か。山陽道中最大の難所といわれる。○こえくれば 越えて行くと。所載欄の文献の「こえむひは」の方が合理的。○たむけよせくに このままでは意が通らないので他本に従い「たむけよせよ」で解する。手向けを心をこめてなさい。「たむけ」は、旅の無事を祈って、峠など道の難所で神に幣などを供えること。○あらしその山 荒しその山。危険である、その山は。倒置した言い方。

【所載】万葉集・五七〇(旧五六七)周防在 磐国山乎 将超日者 手向好為与 荒其道 スハウナルイハクニ ヤマヲコエムヒハタムケヨクセヨアラキノミチ すはにあるいはくにやまをこえむひはたむけよせよあらしそのみち/夫木抄・八一―一九/和歌童蒙抄・一六九

【参考】万葉集の左注によれば、大宰帥旅人が病床に伏し、遺言を語ろうとして、異母弟の稻公と甥の胡麻呂との派遣を乞うたが、数十日して病が癒えたので、京に戻る二人のために饞の宴を開いた時の歌であるという。

一一八〇 ながとなるおきつかりしまをくましてわが思人はちとせにもせむ

【異同】ナシ

【現代語訳】長門にある沖の借島のように、心の奥にいらして私が思っているあの方は、千年も長生きしていた
だきたいものです。

【語句】○ながとなる 長門なる。長門にある。長門は山口県西北部。○おきつかりしま 所在未詳。下関市の蓋井島など諸説ある。上二句は「をくまして」を導く序詞。○をくまして 奥にいらして。所載欄の文献では「おくまへて」で、「おく」を心の奥と解し、「心の奥に秘めて」とする説と、時間にかかわる将来と解し、「行く末をかけて」とする説がある。○わが思人は 私が心に思う人は。○ちとせにもせむ 千年も長生きしてほしい。「む」は意志の強調表現に「希望」の意をあてたもの。

【所載】万葉集・一〇二八(旧一〇二四)長門有 奥津借嶋 奥真経而 吾念君者 千歳尔母我毛 ナガトナル オキツカリシマオクマヘテワガオモフキミハチトセニモガモ ながとなるおきつかりしまおくまへてあがおもふ きみはちとせにもがも/夫木抄・一〇五六五/綺語抄・四二六、四八〇

〔以上五首担当 三浦〕

一一八一 きのくにのさかひのうらをみわたせばあまのともし火なみまよりみゆ

【異同】ナシ

【現代語訳】紀の国のさかひの浦を見渡すと、海人のともす漁火が、波間から見えるよ。

【語句】○きのくにのさかひのうら 所在不明。所載欄の万葉集では、「きのくにのさひかのうら」で、それならは現和歌山市和歌の浦の雑賀崎あたりの浦。○あまのともし火 漁師が漁のためにともしている火。○なみまよりみゆ 波の間を通してその向こうに見える。

【所載】万葉集・一一一三(旧一一九四) 木国之 狭日鹿乃浦尔 出見者 海人之燎火 浪間従所見 キノクニノサヒカノウラニイデミレバアマノトモシビナミマヨリミユ きのくにのさひかのうらにいでみればあまのともしびなみのまゆみゆ／夫木抄・一一六三四／綺語抄・二四九

一一八二 もつちのやそのしまをばこえくれどあはぢのしまをみれどあかぬかも
人まろ

【異同】もつちの—もつちの(大)

【現代語訳】数多くの島々を越え過ぎてきたけれども、あはぢの島を、見てもなお見あかぬことだなあ。

【語句】○もつちの 語義不明。万葉集では、「ももつたふ」で、それならば「やそ」にかかる枕詞。○やそのしま 八十の島。あまたの島々。○こえくれど 越えくれど。越え過ぎてきたのだが。船旅をして「やそのしま」を通り過ぎてきたのであろう。○あはぢのしま 島の名と思われるが、所在不明。所載欄の万葉集では、「あはのこじま」。ただし、その「あはのこじま」も所在は不明。

【所載】万葉集・一七一五(旧一七二一) 百伝之 八十之嶋廻乎 榜雖来 粟小嶋者 雖見不足可聞 モモツテノハ(ヤ)ソノシマワヲユギクレデアハノコシマハミレデアカヌカモ ももつたふやそのしまみをこぎくれどあはのこじまはみれどあかぬかも／人麿集Ⅲ・六一一

【参考】作者名「人まろ」とあるが、万葉集では、左注によって「右二首或云、柿本朝臣人麿作」とされている中の一首である。

一一八三 とよくにのかぢみの山にいはとたてくもりとけらしまでときまさず

【異同】くもりとけらしーくもりにけらし(御・桂・大)

【現代語訳】豊の国の鏡の山に岩戸を閉ざして(かくれられたために)、曇ってしまったらしい。いくら待っても、もうおいでにならない。

【語句】○とよくに 豊の国。九州東北部、豊前国と豊後国とを併せた区域。現在の大分県全域と福岡県東部に相当する。○かゞみの山 豊前の鏡山。現福岡県田川郡香春(かわら)町にあり、歌枕として八雲御抄に登載されている。○いはとたて 岩の戸を閉め切ってしまったて。「たて」は戸を閉ざすこと。○くもりとけらし 意味が判然としないが、「くもり」を「曇り」と見、かつ諸本の「くもりにけらし」に拠って現代語訳した。曇ってしまったらしい。所載欄の万葉集では「こもりにけらし」で、意味分明である。「くもり」は「かがみ」の縁語。

【所載】万葉集・四二一(旧四一八)豊国乃 鏡山之 石戸立 隠尔計良思 雖待不来座 トヨクニノカガミノ ヤマノイハトタテカクレニケラシマテドキマサズ とよくにのかがみのやまのいはとたてこもりにけらしまでどきまさず/夫木抄・一四九五五/和歌童蒙抄・一六一/和歌色葉・一一四/井蛙抄・四四〇

【参考】万葉集では「河内王葬豊前国鏡山之時手持女王作歌三首」とある中の第二番目の歌。河内王は大宰帥在任中に没し、鏡山に葬られた。現在の香春町鏡山には、宮内庁が陵墓参考地としている河内王陵がある。

一一八四 わがためにつらきこゝろはおほすみのけしきのもりのさもしるきかな

【異同】ナシ

【現代語訳】あの人(わたし)に対して抱いている冷たい気持は、まるであの大隅の国にあるけしきの森の、その「けしき」ということばのように、外から見えるようすにあらわれて、いかにもはっきりとわかることだなあ。

【語句】○わがために わたしに対して。○つらきこゝろ 冷淡な気持。薄情なこゝろ。○けしきのもり 大隅の国にありとされていた森。歌枕として八雲御抄に見える。「けしき」とは、こころの内奥のさまがそぶりやふるまいとなつて外に表れ出るようすのこと。○さも 然も。いかにもまことに。○しるき 著き。顕著である。歴然としている。

【所載】夫木抄・一〇〇六〇

一一八五 いづみなるひねのこほりのひねもすにこひてぞくらすきみがしるらん

【異同】ナシ

【現代語訳】和泉の国にある日根の郡、その「ひね」の名のように、わたしはひねもす恋しく思つて暮らしていません。このことは、あなたが知つてくださるでしょう。

【語句】◎こほり 郡。律令の国郡制下における地方行政組織のひとつ。「国」の下に置かれ、その下に里・郷・村などを包括していた。令制初期には「評」の文字が宛てられている。○いづみなるひねのこほり 和泉国日根野。現大阪府泉佐野市日根野。初・二句は「ひね」の音をくりかえして「ひねもすに」を導き出すための措辞。○ひねもすに 一日中。○きみがしるらん あなたが知つてくれるであろう。所載欄の夫木抄では下句が「こひてくらすと人はしらん」となつており、この方がわかりやすい。

【所載】夫木抄・一四五二〇

〔以上五首担当 山下〕

一一八六 君がためいのちかひへてぞわれはゆくつるのこほりのよはひうるなり
ありはらのしげはる

【異同】われはゆく―われはゆけ(御) つるのこほりの―つるのこほりに(桂)

【現代語訳】あなたのために、命を買いに、甲斐の国へ行くのです。(甲斐の国の) 都留の郡には鶴の千年の齢を売つていて、それを得ることができるといふのである。

【語句】○君がため、あなたのために。命との組み合わせで詠まれるのは、当該歌と一三二六番歌が早い例である。○いのちかひへぞ 「かひ」に、命を「買ひ」と国名「甲斐」を掛ける。また、「かひ(買ひ)」と第五句の「うる(売る)」とは縁語。「東路にここをうるまといふことはゆきかふ人のあればなりけり」(後拾遺集・五一五)。○つるのこほりのよはひうるなり 「つるのこほり」の名にあやかつて鶴のように千年の齢を得るといふことだから。都留の郡は、一一二六番歌の語句欄参照。ここでは、地名と千年の齢を持つという「鶴」を掛ける。

【所載】新千載集・雑・二二六六／夫木抄・一四五二六／忠岑集Ⅱ・五三／忠岑集Ⅳ・七九

【参考】作者名「ありはらのしげはる」とあるが、所載欄の忠岑集他全て忠岑作とする。在原滋春は在原業平の

二男、自身が甲斐国へ下行途中で亡くなった際の歌が古今集（哀傷・八六二）にある。当該歌は所載欄の忠岑集IV詞書に「甲斐の国の罷り申しに」とあるように忠岑が甲斐国へ下る時の歌。

三七

一一八七 おほはらのふりにしさとに君をよきてわれいねかつゆめにみえたへ

【異同】われいねかつ―われいねかねつ（桂） ゆめにみえたへ―ゆめにみえたく（桂）

【現代語訳】大原の古里にあなたを置いてきてしまったので、私は眠ることができない、あなたが夢にずっと見えているので。

【語句】◎さと 里。または郷。律令の国郡里制下における地方行政区画の一つ。または、人家のある場所のこと。和歌ではそうした風景としての「里」の他、古里は「懐旧」「旧都」「旧都」、伏見の里は「荒廢」など特定のイメージを伴って詠まれた。○おほはらのふりにしさと 大原の古びた里。大原は、現在の奈良県高市郡明日香村の小原（おはら）の古称。「吾里に大雪降り大原の古りにし里に降らまくは後」（万葉集・一〇三三）。○われいねかつ 意味不通。桂宮本「われいねかねつ」に拠って解した。私は眠りかねて。○ゆめにみえたへ 底本「みえたへ」、桂宮本「みえたく」では意が通じない。万葉集以外の所載欄文献に拠り、「みえつつ」として解した。見えるので。「つつ」はそのことが反復継続して現れるさまを表す助詞。

【所載】風雅集・恋四・一一三〇／万葉集・二五九二（旧二五八七）大原 故郷 妹置 吾稻金津 夢所見乞オホハラノフリニシサトニイモヲオキテフレイネカネツイメニミエコソ おほはらのふりにしさとにいもをおきてわれいねかねつためにみえこそ／夫木抄・一四二四七／人麿集IV・二三四

【参考】作者名はないが、所載欄の文献のうち夫木抄は作者を人麿とする。人麿集IVにも見えるが、万葉集には作者名がなく未詳。類似歌に「大原のあらものゝにわが妹をきていねこそかねつ夢にみゆれば」（人麿集II・四六二）がある。

一一八八 いざこゝにわがよはへなんすがはらやふしみのさとのあれまくをし

【異同】ナシ

【現代語訳】さあここに住みかを定めて我が生涯を過ごすしよう。菅原の伏見の里が荒れてしまうのがしの

びないから。

【語句】○いざこゝにわがよはへなん さあ、ここで私は生涯を過ごそう。「よ」は生涯、一生の意。「へなん」は「経なん」。送ろう、過ごそう。○すがはらやふしみのさと 菅原の伏見の里。大和国生駒郡の地名。現在の奈良市菅原町のあたり。○あれまくもをし 荒れまくも惜し。荒れてしまうのが惜しいから。「まく」は推量の助動詞「む」のク語法、「も」は強意の助詞。

【所載】古今集・雑下・九八一／新撰和歌・二七四／定家十体・一五九／奥儀抄・五七一／袖中抄・四九五／六百番陳状・一四九／古来風体抄・二九三／井蛙抄・三二八

【参考】古今伝授の秘伝歌の一つで神仙の歌とされた。

一一八九 久かたのつきのかつらのさとなればひとりかをのみぞたのむべらなる
伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】こちらは月影のさす桂の里ですので、ただその月の光ばかりを頼みにしております。

【語句】○久かたのつきのかつら 「久かたの」は月に掛かる枕詞。また、「月の桂」とは月の中に桂の木が生えるという中国の伝承（初学記「月中仙人桂樹」）からきた表現。「久方の月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ」（古今集・一九四）。○ひかりをのみぞたのむべらなる 光をのみぞ頼むべらなる。光ばかりを頼みにしています。所載欄古今集九六八番歌の詞書「桂に侍りける時に、七条の中宮のとはせ給へりける御返事」にたてまつれりける」に拠れば、「月の光」は中宮温子の愛顧・恩寵を意味する。

【所載】古今集・雑下・九六八／伊勢集I・二三／伊勢集II・二五／伊勢集III・二二／井蛙抄・一四八

【参考】作者名「伊勢」は、所載欄の文献に一致する。

一二九〇 いまぞしるくるしきものと人またんさとをばかれずとふべかりけり
なりひら

【異同】ナシ

【現代語訳】今こそ思い知ったことだ、苦しいものだ。私のことを待っているであろう里を、疎遠にならず

に訪れるべきだったのだ。

【語句】○いまぞしる 今、思い知ったことだ。「くるしきものと」倒置されている。○人またんさと 人待たん里。人を待っているであろう里。○かれず 離れず。足を絶やすことなく。疎遠にならずに。

【所載】古今集・雑下・九六九／新撰和歌・三〇三／業平集Ⅰ・六五／業平集Ⅱ・六／業平集Ⅲ・四〇／業平集Ⅳ・二六／三十人撰・四六／三十六人撰・四九／伊勢物語・四八段・八九

【参考】作者名「なりひら」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 杉本・吉田〕

一一九一 おそくいづる月にもあるかな山のはのあなたのさともをしむなるべし

【異同】ナシ

【現代語訳】なかなか出て来ない月だなあ。これはきつと、山の端の向こう側の里でも月との別れを惜しんでいるせいだろう。

【語句】○おそくいづる 「おそく……する」は、現在の「なかなか……しない」の意。「門おそく開くとて歸りにける人のもとにつかはしける」(後拾遺集・九六七詞書)。○山のはの 山の端の。「山の端」は山の稜線、尾根。○あなたのさともをしむなるべし 向こう側の里でもきつと惜しんでいるからだろう。

【所載】古今六帖・第一帖「雑月」三三七番既出

一一九二 夏のはつきにぞあかぬやまのはのあなたのさとにすむべかりけり

【異同】あなたのさとに—あなたの里も(桂)

【現代語訳】夏の夜は短くて、月を見ても満足することがない。月の沈む山の端のあちら側の里に住めばよかった。

【語句】○夏のはつきに 夏の夜は短く、すぐに明ける。○つきにぞあかぬ 月にぞ飽かぬ。月の出ている間が短く、見ても満足しない。「明く」と「飽く」を掛け、対比させた。

【所載】新拾遺集・夏・二九九

【参考】所載欄の新拾遺集は作者を業平とするが、未詳。

一一九三 ふるさとにあらぬものからわがために人のこゝろのあれてみゆらむ^{いせ}

【異同】ナシ

【現代語訳】(人々が去って荒れているという) 古里ではないのだが、私にはあなたの心が離れて見えるのです。

【語句】○ふるさと かつて起居した場所、旧都をいう。「荒れ」ているものとされる。○人のこゝろ あなたの心。ここの「人」は第二人称。○あれてみゆらむ 離れてゆくように見える。「あれ」は「離(あ)れ」で、離れてゆくさまをいう。古里が「荒れ」ることに、人の心が「離れ」ることを掛ける。

【所載】古今集・恋四・七四一／伊勢集Ⅱ・一四五

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。

一一九四 あきのゝのうつろひゆけばすがはらやふしみのさとおもほゆるかな

【異同】おもほゆるかな—おもゆるかな(大)

【現代語訳】秋の野の草葉の色が変わってゆくのをみると、「荒れまくも惜し」と歌われた) 菅原の伏見の里が思い起こされることですよ。

【語句】○うつろひゆけば 色が変わってゆくと。○すがはらやふしみのさと 一一八八番歌の語句欄参照。

【所載】ナシ

一一九五 あづまぢのいさめのさとははつかりのながよをひとりあかすわがな^ソ

【異同】あかすわがな^ソ—あかすわか名そ(大)

【現代語訳】東路の「いさめの里」とは、初雁の来る秋の長い夜をひとりで明かす我が名であるのだろうか。

【語句】○はつかりの 初雁の声で秋が来たのを知るといふ詠み方は多い。○ながよ 長夜。長い夜。

【所載】古今六帖・第一帖「初秋」一三一 番既出

(以上五首 平野・吉田)

一一九六 こひわびぬねをだになかむこゑたてゝいづれなるらんおとなしのさと

【異同】ねをたになかむ―侘ねをなかむ(大)

【現代語訳】人を恋う思いは耐え難いほどになつてしまった。こうなつたらせめて、声を上げて泣きたい。声の外には聞こえないという、音無の里はどこなのだろう。

【語句】○こひわびぬ 恋しさに耐えられなくなつてしまった。「こひ侘びぬしほしもねばや夢のうちにみゆればあひぬみねば忘れぬ」(小町集・五〇)。○ねをだになかむ せめて声を上げて泣きたい。「音を泣く」は、声に出して泣くこと。「だに」は、意志、希望を表す語(ここでは「なかむ」を伴い、取りあげた事柄が最小限であることを示す。「せめて……だけでも」の意。○おとなしのさと 音無の里。音や声が聞こえないという架空の里。夫木抄では紀伊国とするが確証はない。「おとなしのさと」とはみれどこゑたててなくべきまでになれる我が恋」(輔親集・一九七)。

【所載】拾遺抄・恋下・三〇七／拾遺集・恋五・七四九

一一九七 あすからはあすかのさとをいでゝいなばきみがあたりをみずやなりなん

【異同】あすからは―あすかゝは(大)

【現代語訳】明日から、この明日香の里を出て行くならば、あなたの家のあたりを、もう、見ることもなくなつてしまふでしょう。

【語句】○あすからは 明日からは。「あす」の音の繰り返しによつて「あすか」を導くための措辞か。○あすかのさと 現在の奈良県高市郡明日香村飛鳥一帯を指す。○いでゝいなば 出て行くならば。「いなば」は「往ぬ」の未然形「往な」に順接仮定条件を表す接続助詞「ば」の付いたもの。「年をへてすみこしさとをいでていなばいとど深草野とやなりなむ」(古今集・九七二)。○きみがあたりを あなたの家のあたりを。

【所載】新古今集・羈旅・八九六／万葉集・七八 飛鳥 明日香能里乎 置而伊奈婆 君之当者 不所見香聞安良武(一云 君之当乎 不見而香毛安良牟) トブトリノアスカノサトヲオキテイナバキミガアタリハミエズカモアラム(一云、キミノアタリヲミズテカモアラム) とぶとりあすかのさとをおきていなばきみがあたりはみえずかもあらむ(一云、きみのあたりをみずてもあらむ)

一一九八 わがやどにおほゆきふればおほはらやふりにしさとにふらまくはうし
きよむらのみかど

【異同】ふらまくはうし—ふらまくはおし(大)

【現代語訳】私の家の方に大雪が降ったのだから、大原よ、その古い里に雪が降るような様子なんて、気の毒で見ていられないというものよ。

【語句】○わがやどに 私の家に。屋戸(家の戸口)から転じて、家屋、すみか、の意。○おほはらやふりにしさとに 一二八七番歌参照。「おほはらや」の「や」は間投助詞。呼びかけを表す語について、感動の意を添える。大原よ。○ふらまくはうし 降るであろうことが気の毒だ。「まく」は、推量の助動詞「む」の古い未然形。「ま」に、上接の活用語を名詞化する接尾語「く」の付いたもの。降るだろうこと、降るようなこと。「うし」は辛い、心苦しい。所載欄の万葉集では「ふらまくはのち」。

【所載】万葉集・一〇三 吾里尔 大雪落有 大原乃 古尔之郷尔 落卷者後 ワガサトニオホユキフレリオオハラノフリニシサトニフラマクハノチ わがさとにおほゆきふれりおほはらのふりにしさとにふらまくはのち
 【参考】作者名「きよむらのみかど」とあるが、所載欄の万葉集は「明日香清御原宮天皇」と呼ばれた天武天皇の歌とする。「きよむらのみかど」は、「清御原宮天皇」の転訛であろう。

一一九九 家人にこひずあらめやかはづなくいづみのさとにとしのへぬれば
いしかはのひろなり

【異同】ナシ

【現代語訳】妻を恋しく思わずにいられようか、いやいられまい。(妻と離れて) この蛙の鳴く泉の里で何年も年を過ごしてしまっている。

【語句】○家人に 「家人」は家族や妻、同じ家の人。当該歌では妻。○こひずあらめや 恋せずにおれようか、いやおれまい。「めや」は推量の助動詞「む」の已然形に係助詞「や」が付いたもの。反語を表す。○かはづなく 「かはづ」は小型のカジカガエルのこと。谷川に住み、夏から秋にかけて、澄んだ声で鳴く。○いづみのさと 五代集歌枕、八雲御抄に山城国とある。京都府相楽郡木津町、加茂町などの泉川(現木津川)に沿った地で

あるという。○としのへぬれば 年久しくなったので。

【所載】万葉集・六九九(旧六九六) 家人尔 恋過目八方 川津鳴 泉之里尔 年之歴去者 イヘビトニコヒス
ギメヤモカハツナクイヅミノサトニトシノヘユケバ いへびとにこひすぎめやもかはづなくいづみのさととし
のへゆけば/夫木抄・一九三六

【参考】作者名「いしかはのひろなり」は、所載欄の万葉集に一致する。

ふるさと

一三〇〇 こまなべていざみやゆかむふるさとゆきとのみこそはなはちるらめ

【異同】こまなへて—駒なめて(大) いさみやゆかむ—いさみにゆかむ(御・桂・大)

【現代語訳】馬を並べて、さあ、見に行こう。旧都は今、雪そのものとばかりに、花が散っているだろうよ。

【語句】◎ふるさと 古都、あるいは昔なじんだ土地、生まれ育った土地。飛鳥時代には都が頻繁に移り、平城京において、また平安京遷都後もしばらくは、旧都はかつて住んだ土地でもあった。遷都の行われなくなった平安期には旧都の奈良を指すことが多く、忘れ去られ、荒れてしまった土地というイメージで捉えられるようになる。○こまなべて 馬を並べて。「こま」は子馬から転じた語。主として乗用の、小さい馬をいう。中古以降は「馬」の歌語。「なべて」は「なぶ」(バ行下二段活用)の連用形に接続助詞「て」の付いた形。並べての意。○いざみやゆかむ 校合した三本及び所載欄の文献では「いざみにゆかむ」。これによって解した。「いざ」は、他に対して行動を促す意の感動詞。さあ、見に行こう。○ふるさと は「こ」は旧都を指すか。「ふるさと」はよしの山しちかければひと日もみ雪ふらぬ日はなし(古今集・三二二)。○ゆきとのみこそはなはちるらめ まるで雪のように花が散っているであろう。

【所載】古今集・春下・一一一/新撰和歌・七九/桐火桶・六一

〔以上五首担当 斎藤・諸井〕

つらゆき

一三〇一 みしごともあらずもあるかなふるさとははなの色のみぞあせずありける

【異同】はなの色のみそ—花の色のみ(大)

【現代語訳】かつて見たようでもなく、すっかり変わってしまったことだ。ふるさととは花だけが色あせないで咲いているよ。

【語句】○みしごともあらず 以前見たようでもない。「ごと」は「ごとし」の語幹。「ふるさとは見しごと」もあらず斧の柄の朽ちし所ぞ恋しかりける（古今集・九九一）。○ふるさと 一三〇〇番歌参照。旧都奈良、あ
るいは、かつて住んでいた、また行ったことのあるなじみの土地。ここでは後者であろう。「ふるさと」の荒廃
と、変わらずに咲く花の対照は、「ふるさととなりし奈良の都にも色は変はらず花は咲きけり」（古今集・九
〇・平城帝）を基点として、「ふるさとに咲けるものから桜花色は少しもあれずぞ有りける」（貫之集Ⅰ・三二
七）、「人はいさ心もしらずふるさととは花ぞ昔の香にほひける」（古今集・四二二）という形で、しばしば貫之に
よって取り上げられた。

【所載】貫之集Ⅰ・四二六

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。貫之集では天慶二年、宰相中将（敦忠）屏風の歌
の一首である。

一三〇二 ちりちらずきかまほしきをふるさとのはなみてかへる人もあはなむ
伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】もう散ってしまったか、まだ散らずにいるか聞いてみたいものを。ふるさとの花をみて帰る人
にもゆき逢わないかなあ。

【語句】○ふるさと 一三〇一番歌参照。○きかまほしきを 聞いてみたいものを。「を」は詠嘆の間投助詞だ
が、理由をあらわす軽い順接の意を含む接続助詞的用法。「君により言の繁きを故郷の明日香の川にみそぎしに
行く」（万葉集・六二九（旧六二六））。○あはなむ 逢わないかなあ。「なむ」はあつらえ望む意の終助詞。ゆ
き逢うことを仮想し、望んだ言い方。

【所載】拾遺抄・春・三〇〇／拾遺集・春・四九／金玉集・一九／伊勢集Ⅰ・九五／伊勢集Ⅱ・九七／伊勢集Ⅲ
・九五／前十五番歌合・四／和歌体十種・二八／三十人撰・三四／三十六人撰・三四／深窓秘抄・二四／今昔
物語集・七一／無名草子・九三

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。伊勢集Ⅰでは「御屏風歌」、伊勢集Ⅱと拾遺集では「齋院

屏風」とある。無名草子では「若宮の御袴着の御屏風」、今昔物語集では「皇子の御袴着の屏風の和歌」とある。

一三〇三 きつゝのみなくうぐひすのふるさとはちりにしむめのはなにざりける
おきかぜ

【異同】ナシ

【現代語訳】ひたすらやって来ることを繰り返しては鳴く鶯のふるさとは、既に散ってしまった梅の花であつたのだなあ。

【語句】○きつゝのみ 何度もやって来ることを繰り返してばかりいる。「つゝ」は反復継続の接続助詞。「のみ」は取り立てて強調し、限定する副助詞。……だけ。……ばかり。ひたすら。もっぱら。そうした鶯の動作と呼応して「ふるさと」が導かれる。「つゝのみ」は、「鶯のきつゝのみなく青柳をうしろめたくも折らせつるかな」（躬恒集Ⅳ・四一七）など、躬恒集に多い表現。○うぐひすのふるさと 「ふるさと」は古くからのなじみの場所。一三〇一番歌参照。鶯と梅との取り合わせは万葉集以来の伝統。「我が宿の梅の下枝に遊びつうぐひす鳴くも散らまく惜しみ」（万葉集・八四六（旧八四二））、「梅が枝にきある鶯春かけてなげどもいまだ雪はふりつつ」（古今集・五）など。○むめのはなにざりける 梅の花にざりける。「ざりける」は……だったのだなあ。梅の花が鶯のふるさとであつたことに気づいた詠嘆。

【所載】新勅撰集・春上・三六／興風集Ⅰ・二二／興風集Ⅱ・六／躬恒集Ⅰ・五一／躬恒集Ⅱ・九〇／躬恒集Ⅲ・七八、一五四／躬恒集Ⅳ・四二九／躬恒集Ⅴ・七二／是則集・七／亭子院歌合・五／袋草紙・六八四

【参考】作者名「おきかぜ」は、新勅撰集では坂上是則、亭子院歌合、袋草紙では躬恒となっており、興風集、躬恒集、是則集に見える。亭子院歌合では、当該歌（躬恒、左、勝）と、「三千代へてなるてふ桃は今年より花さく春にあひぞしにける」（是則、右、負）が番になっているため、混同された可能性がある。

一三〇四 ひとりのみながめてとしをふるさとのあれたるさとをいかにみるらむ
しきぶ経あつみのみこ

【異同】しきぶ経あつみのみこ—しきぶ羅あつみのみこ（御）、しきぶ卿あつみのみこ（桂）、しきぶらあつみのみこ（大）

【現代語訳】一人で物思いにふけてばかりいて年月を過ごしている、このゆかりの地である荒れ果てた里をあなたはどうか覧になつたでしようか。

【語句】○ひとりのみながめてとしをふる ひとりで物思いにふけてばかりいて過ごす。「としをふる（年を経る）」の「ふる」は、「ふるさと」の「ふる」との掛詞。「ひとりのみながめふるやのつまなれば人を忍ぶの草ぞおひける」（古今集・七六九）。「ふるさと」は所載欄の後撰集の詞書によれば仁和寺（参考欄参照）。

【所載】後撰集・雑一・一一一九

【参考】作者名「しきぶ経あつみのみこ」は、所載欄の文献に一致する。「しきぶ経あつみのみこ」は、式部卿敦実親王のこと。敦実親王は、宇多天皇第八皇子、醍醐天皇の同母弟。時平の女（京極御息所の妹）と婚し、天曆四（九五〇）年出家（日本紀略）、仁和寺宮と呼ばれた（小右記、本朝皇胤紹運録）。所載欄の後撰集の詞書に拠れば、「京極の御息所、尼になりて戒受けん」とて、仁和寺にわたりて侍りければ」とあり、敦実親王が、戒を受けるために仁和寺を訪ねてきた京極御息所に贈った歌とされる。京極御息所は、宇多法皇の寵愛を受け、三親王を儲けたが、出家の時期は不明。宇多天皇が開き、法皇として入寺した仁和寺は、敦実親王と京極御息所にとってゆかりの深い地。

やど

伊せ

一三〇五 あれにけ^るふあはれいくよのやどなれやすみけむ人のおとづれもせぬ

【異同】ナシ

【現代語訳】荒れてしまった、ああ、いったい幾世を経た家なのだろうか。かつて住んでいたであろう人が訪れもしないことよ。

【語句】◎やど 万葉集では家の戸や戸口付近の庭先を意味していたが、後に家そのものも指すようになる。庭先の景や荒れ果てた寂しさが歌われることが多い。○あれにける 荒れてしまった。連体形であるから、「やど」にかかるとみて解する。所載欄の古今集の「あれにけり」という終止形がもとの形であったと考えられる。○おとづれもせぬ 訪ねてくることもないなあ。「ぬ」は打消の助動詞の連体形で、「人の」の「の」を受けて詠嘆の意を表す。

【所載】古今集・雑下・九八四／新撰和歌・二七一／袖中抄・五五九／和歌無底抄・二九／伊勢物語・五八段

【参考】作者名「伊せ」とあるが、古今集ではよみ人知らず。和歌無底抄は齋宮とするが、所載欄の他の文献に作者名はなく、伊勢集には見られない。伊勢物語第五八段では、長岡京に家を造った色好みの男に対して、こともなき女どもが詠んだ歌とある。

〔以上五首担当 中野〕

一三〇六 とふ人もなきやどなれどくる秋はやへむぐらにもさはらざりけり

【異同】くる秋は―くる春は（大）

【現代語訳】訪れる人もいない宿であるが、秋の訪れは八重葎にも妨げられないことだ。

【語句】○くる秋は 訪れる秋は。「わがためにくる秋にしもあらなくに虫の音きけばまつぞかなしき」（古今集・一八六）。大久保本及び所載欄の文献では全て「くる春は」である。○やへむぐら 幾重にも生い茂った雑草。多く荒廃した住居の様子をいうのに用いる。「やへむぐらしげれるやどのさびしきに人こそ見えね秋はきにけり」（拾遺集・一四〇）。○さはらざりけり 妨げられないことだなあ。八重葎に妨げられないという例に、「花ざかり山辺をおもふ心をばやへむぐらにもさはらじとしれ」（定頼集・五七）、秋が妨げられないでやってくるという例に「葦引の山の山もりもる山も紅葉せさする秋はきにけり」（後撰集・三八四）がある。

【所載】新勅撰集・春上・八／新撰和歌・七七／貫之集Ⅰ・二〇七／三十人撰・一一／三十六人撰・一一／深窓秘抄・四

【参考】作者については一三二〇番歌参照。

一三〇七 やへむぐらおひこしやどにからころもたがためにとかうつこゑのする

【異同】ナシ

【現代語訳】八重葎が生えてきた宿に、誰のためにであろうか、衣を砧で打つ音が響く。

【語句】○おひこし 生ひ来し。生えてきた。○からころも ここでは衣の美称。○うつこゑのする 打つ声のする。槌で衣を柔らかくするために打つ砧の音がする。「から衣うつこゑきけば月清みまだねぬ人を空にしるかな」（貫之集・二二五）。漢詩文では李白の「子夜呉歌」に代表されるように、遠征から帰ってくる夫を待ち、

孤閨を守る妻が歌われている。当該歌では、訪れる人がいない家で衣を打つ悲哀を詠んだもの。

【所載】貫之集Ⅰ・八四

【参考】作者については一三二〇番歌参照。

一三〇八 よとゝもにとりのあみはるやどなればみえかゝらむとくる人もなし

【異同】ナシ

【現代語訳】つねづね、鳥を捕まえる網を張るような、訪れる人のない宿なので、対面して「このようである」と訪れる人もいない。

【語句】○よとゝもに 世とともに。つねづね。いつも。「世とともになげきこりつむ身にしあればなぞやまもりのあるかひもなき」(後撰集・七六一)。○とりのあみはるやど 鳥の網張る宿。門前雀羅を張った住まい。訪れる人のない住居を表す。史記の汲鄭列伝贊の翟公の故事に、廷尉となつたときは多くの人が訪れていたにも関わらず、その職を廃せられると訪れる人がいなくなり「門前雀羅を設くべし」という状態であつたとある。○みえかゝらむと 見え斯からむと。対面して、このようであると。「みえ」は「対面し」の意。「このようである」の意の「斯からむ」に鳥が網に「かからむ」を掛ける。所載欄の貫之集や夫木抄では「身はかからんと」である。

【所載】夫木抄・一二五五九／貫之集Ⅰ・三二二

【参考】作者については一三二〇番歌参照。

一三〇九 きくのはなおちてながるゝみづにさへなみのしりなきやどにざりぞける

【異同】ナシ

【現代語訳】菊の花が落ちて流れる水にまでも、波が立たない宿であることだなあ。

【語句】○きくのはな 菊の花。芸文類聚などに見られる菊水伝説をふまえるか。菊水は河南省にある川で、上流に菊の花があり、そのしずくがしたり落ちた川の水は甘く、飲めば寿命を延ばすという。当該歌では、菊の呪力で水に波が立たない、という発想と考えられる。「菊の花下行く水に影見ればさらに波なく老いけるかな」(貫之集・一九七)。○なみのしりなき 意味不明。所載欄の貫之集の「波の皺なき」に拠って解した。

波を皺と表現する例は「なにはのうらに たつ浪の 浪のしわにや おぼほれむ」（古今集・一〇〇三）がある。〇にざりける 「にぞありける」の約。……であることだ。「よのなかにひさしきものはゆきのうちにもと色かへぬ松にざりける」（貫之集・二七九）。

【所載】貫之集Ⅰ・三四八

【参考】作者については一三二〇番歌参照。

一三二〇 つれぐととしふるやどはむまたまのよる^もひもながくなりぬべらなり

已上五首 つらゆき

【異同】むまたまの—むは玉の（大）

【現代語訳】変化も無く年を経る家では、夜も昼も長くなってしまったようだよ。

【語句】〇つれぐと 変化も中断もなく単調な様子が長く続くさま。〇むまたまの 「むばたまの」に同じ。黒に関係ある「髪」「夜」「闇」などに掛かる枕詞。ここでは「夜」に掛かる。「むまたまのよるひるくもり暗くとも妹がことははやくつげてよ」（赤人集・二八〇）。〇よもひも 夜も昼も、の意味で解した。〇ながくなりぬべらなり 長くなってしまったようだよ。「べらなり」は、古今集時代に多く用いられた、非現実的な虚構表現を示す確定推量の助動詞（中野方子『古今集』における「べらなり」—喩に承接される助動詞—『国文』八十六号 平成九年一月）。六一番歌参照。

【所載】貫之集Ⅰ・四四〇

【参考】「已上五首つらゆき」とあり、一三〇六番から一三二〇番までの五首とも貫之集に収められている。

〔以上五首担当 犬養悦・諸井〕

一三二一 春にさへわすられにけるやどなれば色^{いせ}くらぶべきはなだにぞなき

【異同】ナシ

【現代語訳】わたくしの家は、春にまでも忘れ去られた宿ですから、（いただいた花と）美しさを比べられるよ
うな花すらありません。

【語句】○春にさへわすられにけるやど 人にばかりでなく、春にまでも忘れられてしまった宿。自分の家についての謙辞。詠まれた季節が春だったのであろう。○色くらぶべきはなだにぞなき 色の美しさを比べることのできるような花さえもない。「色」は、花の色彩的な美しさのこと。

【所載】伊勢集Ⅰ・二二三／伊勢集Ⅱ・二一九／伊勢集Ⅲ・二二五

【参考】作者名「いせ」は、伊勢集諸本と一致する。伊勢集Ⅰの詞書は、「となりなる人の、そこにくらべよとて、花をおこせたるに」とあり、伊勢集Ⅱ・Ⅲの詞書もほぼこれと同じである。隣家より贈られた花に対する謝礼の歌。

一三二二 わがやどをさしてこざりし月だにもいらではたゞにかへる物かは

【異同】ナシ

【現代語訳】特にわたくしの家をめざしてやってきたわけでもない月でさえ、家の中にさし入ることなくして、徒らに帰ってゆくでしょうか。(いいえ、ちゃんと家の中までさし入ってくれます。まして、月ならぬあなたが、わたくしの家にお入りにもならずにお帰りになりますとは。)

【語句】○さして 「めざして」の意の「指して」に、月光がさし入るの意の「射して」を掛ける。○いらで 入らずして。人が家の中に入らぬ意の「入らで」に、月光がさし入らぬ意の「入らで」を掛ける。○たゞに なにもしない。徒らに空しく。○物かは ……するものだろうか、いやそうではない。「かは」は反語。

【所載】ナシ

【参考】古今六帖第五帖「くれどあはず」の項に、「君がためいでてこざりし月だにもいらではただにかへるものかは」(三〇二六)があり、第三句以下がこれと一致する。

一三二三 やへむぐらしげるやどにはまつむしのこゑよりほかにとふ人もなし

伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】やえむぐらの繁る荒れはてたこの家には、人を待つというあの松虫の声よりほかに、おとずれてくる人もない。

【語句】○やへむぐら 幾重にも深く繁ったむぐら。荒れた家や庭の形容に用いられることが多い。「むぐら」は、カナムグラ・ヤエムグラなど蔓性の雑草の総称。○まつむし 鈴虫の古名と言われる。歌では「待つ」に掛けて詠まれることが多い。ただし、所載欄の文献の歌はすべて、第三句「夏虫の」である。

【所載】後撰集・夏・一九四／詠歌一体・一三／三五記・一九三
【参考】作者名「伊勢」の根拠は不明。後撰集ではよみ人知らず。

一三二四 おもひあまりわびぬるときはやどかれてあくがれにぬべきこゝちこそすれ

【異同】ナシ

【現代語訳】もの思いがこころに余ってつらいときは、ひとりでに家を出て、上の空でさまよい歩きそうな気持ちになってしまふよ。

【語句】○おもひあまり 思ひ余り。もの思いが昂じて、こころのうちに収まりきれなくなつて。○わびぬるときは やりきれなくなつたときは。つらくてたまらなくなつたときは。○やどかれて 宿離れて。家を出て。○あくがれぬべき ふらふらとさまよい出てしまふような。「あくがれ」は動詞「あくがる」の連用形。対象に心ひかれるあまりに、心身が本来あるべき場所を離れてさまよい出ること。

【所載】万代集・二四〇三／夫木抄・一七〇九四／貫之集Ⅰ・六一五

一三二五 わがやどは雪ふりしきてみちもなしふみわけてとふ人しななければ

【異同】ナシ

【現代語訳】わたしの家は、雪がいちめん降り積もつて人の通う道もない。この雪を踏みわけて訪ねてきてくれる人もいないものだから。

【語句】○ふりしきて 降り敷きて。雪がいちめん地に覆つたさま。

【所載】古今集・冬・三二二／新撰万葉集・四〇四

【参考】底本第五句「人しなければ」の「し」は、本行に薄く「も」とあるのを消して「し」と重ね書きしてある。底本では「人もなければ」であると見て解釈した。

〔以上五首担当 山下〕

一三二六 わがせこはきませりけらしわがやどのくさもなびけり露もおちたり

【異同】ナシ

【現代語訳】私の夫は、気がついてみるとうまいでになっていたらしい。なぜなら庭の草も踏まれて倒れ伏しているし、葉の露も零れ落ちていくから。

【語句】○わがせこ 夫または恋人である男性を親しんで呼ぶ語。○きませりけらし おいでになっていたらしい。「ませ」は尊敬の意をあらわす。「り」は動作の存続をあらわす。「けらし」は回想の助動詞「けり」の連体形「ける」に推定の助動詞「らし」が付いた「けるらし」から変化したものとされる。所載欄の新撰和歌は「きませりけりな」。○くさもなびけり 草も倒れ伏している。

【所載】新撰和歌・三一九

一三二七 さとはあれて人はふりにしやどなれやにはもまがきも秋のゝらとなる
そう正へせう

【異同】そう正へせう—そう正へんせう（桂） 秋のゝらとなる—秋のゝとなる（御・桂・大）

【現代語訳】里は荒廃し、住んでいる人は年老いて、手入れの行き届かない家だからでしょうか、邸内も垣根も、すっかり秋の野らの風情でございませう。

【語句】○さと 里。山野にたいして、人家の有る所。○人はふりにしやど そこに住んでいる人は年老いて、手入れの行き届かぬ家。「しぐれつゝふりにし宿の言の葉はかき集むれど留まらざりけり」（拾遺集・一一四一）。○には 邸内の敷地。○まがき 柴・竹などであらく編んで作った垣根。○秋のゝらなる 秋の原野のようになっている。校合に用いた三本は「秋のゝとなる」であるが、所載欄の古今集・遍昭集Ⅰ・綺語抄は「秋の野らなる」である。

【所載】古今集・秋上・二四八／遍昭集Ⅰ・二〇／遍昭集Ⅱ・二〇／綺語抄・一六八

【参考】作者名「そう正へせう」は所載欄文献に一致する。光孝天皇が石上（いそのかみ）の滝へ行幸し、遍昭の母の家に立ち寄られた時、遍昭が詠んだ歌。

一三二八 つゆわけてさらにやとはむもみぢばのふりからしてしやどゝみながら

【異同】ナシ

【現代語訳】露の置いた草を踏み分けて、わざわざ訪ねるでしょうか。もみじ葉が散ってすっかり枯れ葉としてしまった庭としりながら。

【語句】○さらにやとはむ わざわざ訪うであろうか。「さらに」はこのうえ。わざわざ。「や」は疑問を表す。○ふりからしてしやど もみじ葉が散ってすっかり枯れ葉と化してしまった庭先。所載欄歌の古今集は「ふりかくしてしみち」。

【所載】古今集・秋下・二八八

やどり

一三二九 あしひきの山べにいまはやどりせじかすみもふかしとふ人もなし

【異同】ナシ

【現代語訳】山のほとりに、今となつては、仮住まいなどしないつもりだ。霞も濃いし、訪ねてくる人もいないから。

【語句】◎やどり 一、旅先で宿泊すること。二、仮の住みかとすること。当該歌では二、の意味。○山べ 山のほとり。○今は 今となつては。

【所載】続古今集・雑・一四八九

【参考】所載欄の続古今集には作者僧正遍昭とあるが、遍昭集Ⅰ・Ⅱには無い。

一三二〇 やどりして春の山べにねたるよはゆめのうちにもはなぞちりける
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】旅先で春の山べに一夜の宿をとった夜は、夢の中にも、昼間見た桜の花が散っていたよ。

【語句】○やどりして 旅の宿をとって。所載欄の古今集詞書によれば、「山寺にまうでたりけるによめる」と

あり、山寺の宿。○ゆめのうちにも 昼間見た花の映像が、夢の中にまで。

【所載】古今集・春下・一一七

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 林〕

一三三二一 いづこにかやどりとるらむあさひこがさすやほかべのたまざくのうへに

【異同】さすやほかへの—さすや岡への（御・桂・大）

【現代語訳】古今六帖・第一帖「てるひ」二六九番歌既出。

【語句】○ほかへの、他本に「岡への」、底本にも二六九番歌では「をかべの」とあるのにより、誤写とみなす。

【所載】古今六帖・第一帖「てるひ」二六九番既出

一三三二二 山がつかきほのさけるあさがほはしのゝめならでみるよしもなし

【異同】かきほのさける—垣ねにさける（大）

【現代語訳】山賤の家の垣に咲いている朝顔は、東雲に、篠竹の垣の間からでなくては見るすべもない。

【語句】◎かきほ 垣穂。垣のこと。「ほ」は「秀」の意で、突き出ているさま、人目につくものを表す。そこに生える植物の名と共に歌に詠まれることが多い。「あな恋し今も見てしか山がつかきほにさける大和なでしこ」（古今集・六九五）。○山がつか 山人。山中で暮らす、身分の賤しい者。樵など。○あさがほ 植物名に、

女性の寝起きの顔の意の「朝顔」を掛ける。「垣ほなる君が朝顔見てしかなかへりてのちはものや思ふと」（大和物語・一三二）。植物名としての「あさがほ」は、具体的に何を指すか未詳だが、当該歌では早朝に咲いて日がたけるとしほむ現在のアサガオ（牽牛子）か。○しのゝめ 早朝、東の空がわずかに明るくなる時を指す「東雲」に、「垣」の縁語の「篠の目」を掛ける。「宿近き竹の林にねぐらしてしのめ」ことに鶯ぞ鳴く」（為忠家初

度百首・二四）。また、東雲は、男女が逢った後の後朝（きぬぎぬ）の別れの時刻でもあった。「東雲のほがらほ

がらと明けゆけばおのがきぬぎぬなるぞかなしき」（古今集・六三七・よみ人知らず）。

【所載】新古今集・秋上・三四四

【所載】新古今集・秋上・三四四

【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の新古今集によると作者は貫之。山賤の家の女の顔は、垣間見なければ見られないという意を込めるか。

一三二二三 こひしともいふ人なしや山がつかきほのはなをなにゝをるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】「恋しい」とも言う人はいないよ。それなのに、山賤の家の垣に咲く花をどうして折り取るのだろう。

【語句】○山がつかきほのはな 一三二二二番歌語句欄参照。そこに挙げた古今集・六九五番歌を踏まえて、山賤の家の垣に咲く花に、女性の意を込めるか。

【所載】ナシ

一三二二四 山がつかきほにのみやこひわびむわが身も人もつゆのいのちに

【異同】ナシ

【現代語訳】山賤の家の垣でばかり（人知れず）恋の思いに悩むのだろうか。自分自身も恋しい人も、露のようにはかない命なのに。

【語句】○山がつかきほにのみやこひわびむ 一三二二三番歌語句欄に挙げた古今集・六九五番歌を踏まえる。「のみ」は限定の副助詞。ただ……だけ。……ばかり。○つゆのいのち 露が消えやすいようにはかない命。「ながらへば人の心も見るべきに露の命ぞ悲しかりける」（後撰集・八九四）。

【所載】ナシ

一三二二五 あさぢふの野べやかるらむやまがつかきほの草は色もかはらず

【異同】ナシ

【現代語訳】浅茅の生えている野辺は、今頃はもう枯れていることでしょうか。山賤の家の垣の草は色も変わりません。

【語句】○あさぢふ 浅茅生。丈の低い茅萱の生えている所。浅茅は、秋に色づき枯れていくさまを心変わりに喩えて、歌に詠まれた。「浅茅」で心が浅いことを寓する。「思ふよりいかにせよとか秋風になびく浅茅の色ことなる」（古今集・七二五）。○かる 「枯る」に、「離（か）る」を掛ける。「時すぎてかれゆく小野の浅茅には今は思ひぞ絶えず燃えける」（古今集・七九〇）。○やまがつかきほ 一三二二番歌語句欄参照。○色もかはらず 浅茅と違つて枯れるどころか色も変わらないということ、心が浅いあなたは心変わりしてはだるうけれど、それに対して、私の心は少しも変わらないという意を込めた。

【所載】新古今集・恋四・一二四五／延喜御集・四

【参考】古今六帖に作者名はないが、延喜御集によると、作者は、三条右大臣藤原定方女、醍醐天皇女御能子（山下道代『歌語りの時代―大和物語の人々―』筑摩書房、一九九三年）。当該歌は、「三条右大臣の女御、久しう参り給はざりけるに／霜さやぐ野辺の草葉にあらねどもなか人めのかれまさるらむ」という歌に対する返歌で、歌に続いて「と、きこえ給けるを、ちゝおとゞめで給て、御手づからおりて、なでしこにつけてぞ参らせ給ける」とある。

〔以上五首担当 長戸〕

一三二六 なにしをはゞながつきごとなきみがためかきほのくさのつゆのいのちを

伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】「ながつき」という名を持つのならば、毎年長月となることに、「長」というその名にあやかつて、あなたのために、垣の上に置く露のようなはかない命を、長かれと願うことです。

【語句】○なにしをはゞ なにしおはほ。……というその名を持つのならば。こゝでは、下につづく「ながつき」の「長」にことよせて、「長い」というその名を持つのならば」と言つたもの。○ながつきごとに 毎年長月となるごとに。「ながつき」は陰曆九月の称。下旬にある「つゆ」の語などから推して、九月九日重陽の節に合せて詠まれた歌か。○かきほのくさ 垣の上に生えている草。「かきほ」の「ほ」は秀（ほ）。上にぬきんでているものこと。「かきま（垣間）」「かきね（垣根）」などに対する語。○つゆのいのちを 下に「長かれと願う」の意が省略されているものと見る。「つゆのいのちを」とあるのは、「きみ」のいのちをさすものと見ておく。初句「なにしをはゞ」に対する末の句の語法対応がはっきりしないので、完全な現代語訳が示しにくい。

【所載】ナシ
【参考】作者名「伊勢」の根拠は不明。他文献においても、これが伊勢の作であることを確認することはできない。後撰集・秋下・三九八番には「名にし負へば長月ごとく君がためかきねの菊はにほへどぞ思ふ」という上三句の近似した題しらず・よみ人知らずの歌がある。

一三二七 かきほなる人といへどもこまにしきひもときあくるきみもなきかな^も
人まろ

【異同】ナシ
【現代語訳】垣ほのように人が取り巻いている、と世の人は言うけれども、ほんとうは、私の衣の紐を解きあけてくれるような恋人は、いないことだ。

【語句】○かきほなる人 「かきほ」は前歌（一三二七番）参照。本文のままならば「かきほ」のような人ということで、取り巻く人の存在が「かきほ」のように目立つ、と解せざるをえない。所載欄の万葉集の歌では「かきほなす人は言へども」であって、「恋の噂があたかも垣のように取り巻いて」というような意味になり、その方が歌意の整合性は高い。○こまにしき 高麗錦。高麗伝来の錦、または高麗風の錦。ここでは「ひも」にかかる枕詞。「こまにしき紐解きあけて夕べだに知らずある命恋ひつつかあらむ」（万葉集・二四一〇（旧二四〇六））。

○ひもときあくるきみ 着ている衣の紐を解きあけてくれるあなた、すなわち夜を共にする夫または恋人。
【所載】古今六帖・第五帖「ひも」三三四七、第五帖「にしき」三五三〇／万葉集・二四〇九（旧二四〇五）垣廬鳴 人雖云 狛錦 紐解開 公無 カキホナス（ナル）ヒトハイヘドモコマニシキヒモトキアクルキミモナキカモ かきほなすひとはいへどもこまにしきひもときあけしきみならなくに／人麿集Ⅲ・四二七

【参考】作者名「人まろ」は、人麿集Ⅲとは一致するが、万葉集では作者不明歌。夫木抄・一五六五二番には、「かぎりなく人は言へどもこまにしきわがカタひもも結びあへなくに」という類似した歌がある。

一三二八 あづさゆみは^るな^るの山べにいへゐしてわれまづきかんうぐひすのこゑ

【異同】ナシ

【現代語訳】春の山辺に住まいして、私がまず聞こう、うぐいすの声を。

【語句】◎家 人が生活の本拠としている住居。住まいとしての建築物をさすだけでなく、家庭、あるいは家族と共に居住しているところ、という意味でも用いられる。○あづさゆみ 「はる」にかかる枕詞。○いへゐして 家居して。居住して。家を構えて住んで。

【所載】新古今集・春上・二九／万葉集・一八三三（旧一八二九）梓弓 春山近 家居之 続而聞良牟 鶯之音 アヅサユミハルヤマチカクイヘキシテツギテキクラムウグヒスノコエ あづさゆみはるやまちかくいへをればつぎてきくらむうぐひすのこゑ／人麿集Ⅲ・七〇／赤人集Ⅰ・一一八／赤人集Ⅱ・二／家持集Ⅰ・六／家持集Ⅱ・六

一三二九 春くればうぐひすのねもなつかしきいざぬなかいづくうちむれてゆかむ

【異同】ナシ

【現代語訳】春が来れば、鶯の鳴き音もなつかしく思われます。さあ、鶯のいるいなかはどこなのか、みんな連れ立ってたずねて行きましょう。

【語句】○ぬな 京（みやこ）から離れた地方。ひな。「むかしこそ難波ぬなかといはれけいまはみやこひき都びにけり」（万葉集・三二五（旧三二二））。○うちむれて うち群れて。「うち」は接頭語。みんなでいっしょに連れ立って。

【所載】ナシ

【参考】この一首の中に直接「家」の語は用いられていないが、「ぬなか」の中に「家居」の意が含まれると見て、この題の下に収めたのであろう。

一三三〇 山かぜにかをたづねてやむめのはなにほへるやどにいへるそめけむ
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】山風によってその香のありかをたずねてきて、この梅の花の咲きにおう宿に、住まいはじめたのでしょうか。

【語句】○山かぜにかをたづねてや 梅の香を運んでくる山風によって、その香のありかを尋ねてであろうか。「や」は疑問の係助詞、結句の「けむ」と呼応している。○いへるそめけむ 住まいを定めて、住みはじめたの
であろうか。

【所載】貫之集Ⅰ・三二

【参考】貫之集Ⅰで見れば、延喜十四(九一四)年に詠まれた貫之の屏風歌。作者名「つらゆき」は、これと一致する。新勅撰集・春上・三五番には、「山風に香を尋ねてや梅の花にほへる里にうぐひすのなく」と、下句が異なる形で収められている。

〔以上五首担当 青木・山下〕

一三三二 いもがいへのはあいにたてるあをやぎのいまやなくらむうぐひすのころ
みつね

【異同】はあいにたてる―はひいりにたてる(大)

【現代語訳】あの子の家の入り口に立っている青柳に、今ごろは鶯が来て鳴いていることだろうか。

【語句】○はあいに 這ひ入り。入り口の意。

【所載】後撰集・春上・四一／躬恒集Ⅰ・二三四／躬恒集Ⅱ・一〇／躬恒集Ⅲ・二五八

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

一三三三 おとめこがはなるゝ神をゆふやまのくもなくしそいへのあたりみむ

【異同】ナシ

【現代語訳】少女の振り分け髪を結う、由布山の雲よ、どうか隠さないでおくれ、あの子の家のあたりを見た
いから。

【語句】○おとめこが をとめこが。少女の。「が」は連体格助詞。○はなるゝ神を このままでは意味が通じ
ない。所載欄の万葉集には「放髪乎」とある。「髪」を「かみ」と書写し、「神」と誤認したのであろう。「放(は
な)りの髪」は少女の振り分け髪をいう。伸びるにまかせていた髪を成人すると結び上げる。「くらべこし振り
分け髪も肩すぎぬ君ならずして誰かあぐべき」(伊勢物語・二三段・四八)。初・二句は「ゆふ」の序詞。○ゆ

ふやまの 「ゆふ」は「結ふ」と「由布山」の掛詞。「由布山」は大分県由布市にある山。由布岳。○くもなかくしそ 雲よ隠してくれるな。「な……そ」は禁止をあらわす。

【所載】万葉集・一二四八(旧一二四四) 未通女等之 放髪乎 木綿山 雲莫蒙 家当将見 ヲトメラガフリワケガミヲユフノヤマクモナカクシソイヘノアタリミム をとめらがはなりのかみをゆふのやまくもなたなびきいへのあたりみむ／夫木抄・八八三六

つらゆき

一三三三三 かへるかりわがことつてよくさまくらたびはいつこそこひしかりけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】帰って行く雁よ、私の言葉を伝えておくれ。旅は、家が本当に恋しいことだ。

【語句】○かへるかり 帰る雁。漢の蘇武が匈奴に捕らえられた時、雁の足に手紙をつけて放ったという故事による。○わがことつてよ 私の言葉を伝えて欲しい。「つてよ」は伝える意の下二段動詞「伝(つ)つ」の命令形。○くさまくら 「旅」の枕詞。○たびはいつこそ 「いつこそ」は、「いづこそ」であれば、旅はどこかの意。ただし、所載欄の風雅集では、「旅はいもこそ」、貫之集Iでは「旅はいへこそ」とあり、題の「家」や「こひしかりけれ」との係り結びを考えると、「つ」は「へ」の誤りで、「たびはいへこそ」が本来の姿と思われる、現代語訳はその本文に従った。

【所載】風雅集・恋四・一二二七／貫之集I・七六

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

きのらう女

一三三三四 人ごをしげしときみをうづらなくひとのふるいへにあひてやりつる

【異同】きのらう女―きのわう女(桂)

【現代語訳】人の噂をやかましいと、あの人を、(うずらの鳴く)他人のあばら屋に呼び出して、こっそり逢って帰したことだ。

【語句】○人ごを 人言を。人の言うことを。人の噂を。○しげしと 「繁しと」で、甚だしいと。○うづ

らなく 「うづら」 はきじ科に属し、人の住まない荒地地に棲む習性があるところから、「古」に掛かる枕詞。○ひとのふるいへ 自分の所有でない廃家。人目につかない逢い引きの場所として用いた。

【所載】万葉集・二八〇九(旧二七九九) 人事乎 繁跡君乎 鶉鳴 人之古家尔 相語而遣都 ヒトゴトヲシゲシトキミヲウヅラナクヒトノイニシヘニ(フルイヘニ) アヒイヒテヤリツ ひとごとをしげみときみをうづらなくひとのふるへにかたらひてやりつ／夫木抄・五六九四

【参考】作者名「きのらう女」は「紀郎女(きのいらつめ)」であろうが、他文献では確認できない。ただし「きみを」と言っている内容から考えても女の歌であろう。

一三三五 思にしあまりにしかばすゑをなみいでゝぞゆきしいへのあたりみ^には

人まろ

【異同】すゑをなみ―すへをなみ(大)

【現代語訳】何とも思案にあまつてしまったので、どうしようもなく、出かけていったことだ。あの子の家のあたりを見に。

【語句】○思にしあまりにしかば 「思にし」は、「思ひにし」とも、「思ふにし」とも読めそうだが、一応「思ひにし」と読んで、「思ひ」を名詞として解した。思いにあまつてしまったので。「し」は強めの副助詞。ここは順接確定条件の「……ば」と対応する。○すゑをなみ 大久保本に「すへをなみ」とあり、所載欄の万葉集にも「為便無三」とあるので、本来「すべをなみ」だったのであろう。「すべ」は、手段、方法。どうしようもなく。仕方がなくて。

【所載】万葉集・二五五六(旧二五五二) 念之 余者 為便無三 出曾行之 其門乎見尔 オモフニシアマリニシカバスベヲナミイデテゾユキシノカドヲミニ おもひにしあまりにしかばすべをなみいでてぞゆきしそのかどをみに

【参考】作者名を「人まろ」とするが、他文献では確認できない。

〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一三三六 いもがありてつぎてみてましやまとなるおほしまみねにいへもあらましを

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたがいて、（私はそのあなたを）いつもいつも見ていたいの。大和の大島嶺に家もあればよいものを。

【語句】○いもがありて あなたがいて。「いも」は「せ」に対する親しい女性の称。○つぎてみてましを一間をおかずにいつも見ていたいの。「つぐ」は「続けてする」意。「まし」は事実相反する仮定の上にたつて推量・意向を表すので、不満や希望の意をこめて使われることが多い。○おほしまみね 所在未詳。○いへもあらましを 家もあつたら良いのに。

【所載】新千載集・恋四・一四四六／万葉集・九一 妹之家毛 繼而見麻思乎 山跡有 大嶋嶺尔 家母有猿尾 一云、妹之当 繼而毛見武尔 一云、家居麻之乎 イモガイヘモツギテミマシラヤマトナルオホシマミネニイヘモアラマシラ 一云、イモガアタリツギテモミムニ 一云、イヘキセマシラ いもがいへもつぎてみましをやまとなるおほしまのねにいへもあらましを 一云、いもがあたりつぎてもみむに 一云、いへをらましを／夫木抄・九〇五一／井蛙抄・四〇五

【参考】万葉集の詞書によれば天智天皇が鏡王女に賜った歌。万葉集九二番には「秋山之 樹下隠 逝水乃 吾許曾益目 御念従者 アキヤマノコノシタガクレユクミツノワレコソマサメミオモヒヨリハ あきやまのこのし たぐくれゆくみづのわれこそまさめおもほすよりは」（鏡王女奉和御歌一首）がみえる。

となり

伊勢

一三三七 かきごしにみればかひなしさくらばなねごめにかぜはふきもこさなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】垣根越しに見ると、（美しい）桜の花もだいなしです。風はいつそのこと桜を根ごと吹き送ってほしいものです。

【語句】◎となり 家や土地が相接する状態。用例は万葉集からあるが、歌題としては永久百首（一一一六年）に見える。後拾遺集一三八番詞書には「隣花」とある。古今集・一〇二二番歌「冬ながら春の隣の近ければ中垣よりぞ花は散りける」のように時間的に隣接する季節をさす用例もあるが、古今六帖では隣家に関する歌が並ぶ。○かきごしにみればかひなし 垣根ごしに見たのでは甲斐がない。○ねごめに 根ごとに。根こそぎに。所載欄

の伊勢集では全て「ねながらかぜの」。○ふきもこさなむ 吹きよこしてほしい。「吹き越す」は、へだての向こう側にあるものを、こちら側へ吹きよこすこと。「なむ」は願望を表す終助詞。

【所載】後撰集・春下・八五／新撰朗詠集・五三七／伊勢集Ⅰ・三六四／伊勢集Ⅱ・三七〇／伊勢集Ⅲ・四九〇
【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。伊勢集では一三三九番と贈答になっている。

一三三三八 ちかければあはむとおもふに春なれどはなのゆきにぞふりへだつめる

【異同】ナシ

【現代語訳】近いのでお会いしようと思うのですが、春なのに雪のように降る花に隔たれているようです。

【語句】○はなのゆき 花を雪にたとえた表現。「またやみむかたののみの桜がり花の雪ちる春のあけぼの」(新古今集・一一四)。

【所載】ナシ

一三三三九 さくらばなうへてわれのみみむとやはとなりありきは人やしるとぞ

【異同】ナシ

【現代語訳】桜の花を植えて、私ひとりだけで見ようか、そうではありません。人(あなた)が隣歩きを知っていらつしやるかと思つて(そして来てくださると思つて)のことなのですよ。

【語句】○さくらばな 桜花。所載欄の伊勢集Ⅲでは「梅花」。○うへて うゑて。植えて。○みむとやは 見ようとしてのことであろうか。いやそうではない。「やは」は反語を表す。○となりありき 隣歩き。隣まで歩くこと。○人やしるとぞ あなたが知っているかと思つて。ここの「人」は第二人称。相手のこと。隣人の隣歩きを期待している。

【所載】伊勢集Ⅰ・三六五／伊勢集Ⅱ・三七一／伊勢集Ⅲ・四九一
【参考】伊勢集では一三三七番歌に対する朝忠の返歌。

井

やかもち

一三四〇 わがやどのいた井のしみづさとゝをみ人しくまねばみくさおゐにけり

【異同】いた井のしみづ―坂井の清水(大)

【現代語訳】私の家の板井の清水は、人里が遠いので、人が汲まないものだから、水草が生えてしまいましたよ。

【語句】◎井 泉や川から水を汲みとる所と、地を掘り下げて地下水を汲みとる所があった。万葉集に「御井」という表現があるように、古代では井戸聖視の傾向が強かった。この他万葉集では「走り井」「石井」「山の井」等様々な井が詠まれたが、古今集以後は「山の井」が主流となる。○わがやどの 私の家の。古今集では「わがかどの」。○いた井のしみづ 「板井」は、板を筒として囲った井。「清水」は清く澄んだ水。○みくさおゐにけり みくさおゐにけり。水草が生い茂ってしまいましたよ。

【所載】古今集・神遊びの歌・一〇七九／綺語抄・二一九

【参考】作者名「やかもち」とあるが、所載欄の文献に作者名はない。古今集では、神前で樂人が手に持って舞う採物についての歌で、これは水を汲む柄杓を採物とする歌。

(以上五首担当 三浦)

一三四一 おほはらやせがゐのみづをてにくみてとりはなくともあらひてゆかむ

【異同】あらひてゆかむ―あそひてゆかむ(桂・大)

【現代語訳】大原の清和井(せがい)の水を掌に汲んで、一晚中神樂や管弦などを演奏していこうよ。夜明けを上げる鶏がないても。

【語句】○おほはら 山城国の歌枕。大原と呼ばれる地は二つあり、一は京都市左京区の「大原」。寂光院、三千院があり、隠遁する土地のイメージとして詠まれる。二は京都市西京区の「大原野」。小塩山、大原野神社を中心に藤原氏の神社として慶賀の場で詠まれることが多い。○せがゐ 清和井。山城国の歌枕。京都市左京区の三千院や、西京区の大原野神社境内に遺跡と伝える所があるが実地は不明。「大原やせがゐのみぐさかきわけておりやたたまし涼みがてらに」(好忠集・一三七)。○てにくみて 掌で汲んで。所載欄の歌はいずれも「ひさこもて」。○あらひて 「あそびて」の誤りであろう。桂宮本・大久保本及び所載欄の歌いずれも「あそびて」。現代語訳はこれによって訳した。あそびは神樂を演じたり、詩歌、管弦などを奏すること。

【所載】夫木抄・一二四七九／袖中抄・四二四

一三四二 おちたぎつはしりゐのみづきよければすてゝはわれはさかりかねてむ 伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】湧き出る水のあふれ落ちて激しく流れる走り井の水は、あまり清らかなので、此所を素通りして離れて行くことなど、私はとてもできないだろう。

【語句】○おちたぎつ 勢いよく落ちて湧きかえる(水のさま)。○はしりゐ 本来は水が勢いよく湧き出て流れる井戸の意であったが、次第に逢坂の関に近い特定の井戸を言うようになった。「井は、ほりかねの井。玉の井。走り井は逢坂なるがをかしきなり。」(枕草子・井は)。「逢坂の関とはきけどはしりゐの水をばえこそとどめざりけれ」(後拾遺集・五〇〇)。○きよければ 澄んでいるので。○すてゝは 放つておいては。○さかりかねてむ 離れることがどうしてもできないだろう。「さかり」は離れる、遠ざかるの意。「かね」は……しかねるの意の接尾語。「てむ」はきつと……だろう、と強い意志をあらわす。「て」は完了の助動詞「つ」の未然形。「む」は推量の助動詞。

【所載】万葉集・一一三二(旧一一二七) 隕田寸津 走井水之 清有者 度者吾者 去不勝可聞 オチタギツハシリキミツノキヨケレバワタラバワレハユキカテヌカモ おちたぎつはしりゐみづのきよくあればおきてはわれはゆきかてぬかも

【参考】作者名「伊勢」は所載欄の文献には無し。伊勢集にも無し。

一三四三 わくがごとめにはみゆれどわがやどのいしゐのしみづぬれまさりけり

【異同】めにはみゆれと―目には見ゆると(大)

【現代語訳】こんこんと湧き出ている我が家の石井の清水は、あたかも沸き立っているかのように目には見えるが、少しも温むことなく清冽な冷たさを保っているなあ。

【語句】○わくがごと 湯が沸騰するように。水が噴き出ている様子の「湧く」と掛ける。○いしゐのしみづ 岩間に湧く清水。石で囲った井戸の清水。○ぬれまさりけり 所載欄の歌はみな「ぬれまさりけり」であるので現代語訳はこれによって訳した。なま暖かくはならないなあ。「ぬるむ」は生暖かい、ぬるいの意。「けり」は眼

前の事実にはっと気づいた驚きや詠嘆の気持ちを表す。

【所載】玉葉集・雜二・二〇六八／伊勢集Ⅰ・六六／伊勢集Ⅱ・六八／伊勢集Ⅲ・六五

一三四四 みくなすのなかにむかへるさくらゐのたえずかよはむソコニツマモカそらにつゝむか

【異同】ナシ

【現代語訳】みくなすの中にむきあっている桜井の水が絶えないように、私は絶えず通って来よう。君はうわの空で逢うのを気兼ねするのか。

【語句】○みくなすの 不明。○むかへる 真正面にむきあっている。○さくらゐ 山城、撰津、伊予の歌枕(能因歌枕)。奈良県桜井市とも、大阪府三島郡島本町桜井ともいわれる。上三句までは「たえず」にかかる序詞。

○そらに 心が落ちつかず。うわのそらで。○つゝむか 気兼ねするのか。隠すのか。

【所載】万葉集・一七四九(旧一七四五)三粟乃 中余向有 曝井之 不絶将通 彼所余妻毛我 ミツクリノナカニムカヘルサラシキノタエズカヨハムソコニツマモガ みつぐりのなかにむかへるさらしゐのたえずかよはむそこにつまもが／夫木抄・一二四五—

一三四五 むさしなるほりかねのゐのそこをあさみおもふこころをなにとへん

【異同】ナシ

【現代語訳】武蔵の国にある堀兼の井戸は底が浅いので、私の深く思っている心を何にたとえたらいいのかだろう。

【語句】○むさしなる 武蔵の国にある。○ほりかねのゐ 武蔵国の歌枕。埼玉県狭山市堀兼にある井戸。「ほりかねの井」は掘ることが困難な、掘りにくい井戸のことで、すぐに土砂が崩れて底が浅い意味にも、水源が深く掘りにくい意味にも理解されていた。後者の例として「いかでかと思ふ心は堀兼の井よりもなほぞ深さまされる」(伊勢集・三九四)がある。○おもふこころ 相手を深く思っている心。

【所載】夫木抄・一二四七四

(以上五首担当 林)

一三四六 あしびなすさかえし君がほりし井のいは井のみづはめとあかぬかも

【異同】めとあかぬかも―めにあかぬかも（御・大）

【現代語訳】栄華を誇った君が掘らせた井戸の、石井の水は、飲んでも飲み飽きることがない。

【語句】○あしびなす 「栄ゆ」を修飾する措辞。馬酔木の花は、房状の小花を一斉に咲かせることから、その様子を人の栄華に喩えた。○さかえし君が 栄えられた君が。「はしきやし栄えし君のいましせば昨日も今日も我を召さましを」（万葉集・四五七（旧四五四））。○いは井のみづ 石間から沸く水、また石で囲って造った井の水。○めとあかぬかも 意味不通。所載欄の万葉集歌「のめどあかぬかも」に拠って解す。飲んでも飲み飽きることがない。

【所載】万葉集・一一三二（旧一一二八）安志妣成 栄之君之 穿之井之 石井之水者 雖飲不飽鴨 アシビナスサカエシキミガホリシキノイハキノミツハノメドアカヌカモ あしびなすさかえしきみがほりしゐのいしゐのみづはのめどあかぬかも

まがき

一三四七 ゆふぐれのまがきはやまとみえなむよるはこえじとやどりとるべく

【異同】ナシ

【現代語訳】夕暮れのころの籬は山に見えて欲しい。そうすれば、夜のうちには（山を）越えられまいと、ここで宿を取るようになるから。

【語句】◎まがき 竹や柴などで目を粗く編んだ垣。女郎花、撫子、虫など多種多様な題材と共に詠まれ、特に「籬の菊」は好んで詠まれた。単に風景として詠まれる他、家の内と外とを隔てる物であることから、恋に関連して詠まれることも多い。○まがきはやまとみえなむ 籬は山と見えて欲しい。

【所載】古今集・離別・三九二／新撰和歌・一八九／遍昭集Ⅰ・七／遍昭集Ⅱ・七／和歌用意条々・七／井蛙抄・一五二

一三四八 ゆふぐれのまがきにさけるなでしこのはなみるときぞ人は恋しき

【異同】ナシ

【現代語訳】夕暮れの籬に咲いている撫子の花を見る時こそ、あの人のことが恋しくてたまらなくなることだ。

【語句】○なでしこ ナデシコ科の多年草。秋の七草の一つ。山野に自生するが、庭にも植栽された。異名の「常夏」に「床」を掛けることから愛しい女性、恋の相手を想起させる花。○はなみるときぞ人は恋しき 花を見る時こそあの人のことが恋しくてたまらない。

【所載】ナシ

一三四九 ふゆながらはるのとなりのちかければなかゞきよりぞはなはちりける
ふかやぶ

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家はまだ冬のままなのだが、春は隣まで来ていて近いので、家を隔てている中垣から雪がもう花のように散ってきたのだよ。

【語句】○ふゆながら まだ冬のままであるのに。「ながら」は、……のまま、……であるのに、の意。「冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ」（古今集・三三〇）。○はるのとなり 春に近いこと。冬から春に移ろうとする、変わり目の時期。「梅の花匂ひの深く見えつるは春の隣のちかきなりけり」（拾遺集・一一五六）。当該歌では所載欄古今集の詞書に「明日春立たむとしける日……」とあることにより、立春前日を指していることが分かる。○なかゞき 中垣。隣家との隔ての垣根。物と物との隔て。○はなはちりける 花は散りける。所載欄古今集の詞書に「隣の家のかたより風の雪を吹き越しけるを見て」とあることにより、ここにいう花は雪の喩である。

【所載】古今集・雑体・一〇二一／深養父集・一八

【参考】作者名「ふかやぶ」は所載欄の文献に一致する。片桐洋一『古今和歌集全評釈』は、「春は東から隣まで来ているというのも大げさな設定だが、実は隙間だらけの中垣を越えてというのも大げさである。つまりすべて大げさに構えて言っているところに、この歌の誹諧性があった」とする。

つらゆき

一三五〇 春はむめあきはまがきのきくのはなおのがくかくぞあはれなりける

【異同】ナシ

【現代語訳】春は梅、秋は籬に咲く菊の花。その各々の花の香りは、このように心惹かれるものなのだ。

【語句】○春はむめあきはまがきのきくのはな 春は梅、秋は籬の菊の花。春秋を代表する花を挙げた。○おのがくかくぞ 己が香、斯くぞ。それぞれの花の香りがこのように。

【所載】ナシ

【参考】作者名「つらゆき」とあるが、その根拠は不明。貫之集Ⅱには「春は梅秋は籬の菊の花おのがじしこそ恋しかりけれ」（八八）と上三句の一致する歌がある。

〔以上五首担当 杉本・吉田〕

一三五一 春さればそのはななくたしわがこえしいもがかきほはあれゆかむかも

【異同】そのはななくたし—うのはななくたし（御・桂・大）

【現代語訳】春になると、花をいためてひそかにわたしが越えたあの子の家の垣根は、今は荒れてゆくのか（もう通えなくなつて）。

【語句】○そのはな 底本は「そのはな」だが、右傍に「う」と書く。諸本は「うのはな」。所載欄の万葉集にも「うのはな」とある。「うのはな」は「うつぎ」のこと。○くたし くだす。朽ちさせる。くさらせる。○いもがかきほ 妹が垣ほ。「垣ほ」の「ほ」は、上にあらわれて見えるもの意。垣、垣根。○あれゆかむ 荒れ行かむ。荒れていくだろう。「む」は推量の助動詞。

【所載】万葉集・一九〇三（旧一八九九）春去者 宇乃花具多思 吾越之 妹我垣間者 荒来鴨 ハルサレバウノハナグタシワガコエシイモガカキマハアレニケルカモ はるさればうのはなぐたしわがこえしいもがかきまはあれにけるかも

一三五二 なら山のみねもきりあふむべしこそまがきのしたにゆきはきえけれ

【異同】なら山の—なか山の（大） ゆきはきえけれ—ゆきは消けり（桂）

【現代語訳】なら山の峰も霧が覆っている。なるほどその時期になったから垣根の下に雪は消えたのだった。
【語句】○なら山 奈良山。平城山とも。奈良市の北にある山。○きりあふ 霧り合ふ。霧があたりをおおう。
「霧る」は動詞。○むべしこそ うべしこそ、ともいう。まことにもつともだ。

【所載】万葉集二二二〇(旧二二一六) 奈良山乃 峰尚霧合 宇倍志社 前垣之下乃 雪者不消家礼 ナラヤ
マノミネナホキリアフウベシコソマガキノシタノユキハケズケレ ならやまのみねなほきらふうべしこそまが
きがもとのゆきはけずけれ/人集曆Ⅲ・一九五

【参考】所載欄の万葉集では「垣根の下の雪はきえずに残っている」、とちようど反対の表現となる。

一三五三 うつたへにまがきのすがたみまほしみゆくとはいもをみにこそきつれ
やかもち

【異同】ナシ

【現代語訳】決して、まがきの様子を見たくて行くのではありません。あなたを見にきたのです。

【語句】○うつたへに 決して……ではない。下に否定を伴うのが一般的だが、ここには否定の言葉がない。「ゆくとほ」のあとに「言はじ」などを補う。○まがきのすがた 垣根の様子。○みまほしみ 見たくて。「見る」に形容詞「まほし」が接続し「見まほし」。原因を表す接尾語「み」がついたかたち。○いもを 男性は恋人を「イモ」と呼ぶ。○みにこそきつれ 他でもない……を見るためやってきたのだ。「こそ」は強意。「梅の花見にこそきつれ鶯の人來(ひとく) 人來といとひしもをる」(古今集・一〇一一)。

【所載】万葉集・七八一(旧七七八) 打妙尔 前垣之酢堅 欲見 将行常云哉 君乎見尔許曾 ウツタヘニマ
ガキノスガタミマクホリユカムトイヘヤキミヲミニユソ うつたへにまがきのすがたみまほりゆかむといへ
やきみをみにこそ/奥儀抄・三五四/袖中抄・七六〇/和歌色葉・一二四

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の文献に一致する。所載欄の万葉集では、巻すべて相聞歌ばかりの巻四
にあり、紀女郎に贈った家持の連作五首の一つである。

一三五四 おもふ人こむとしりせばやへむぐらはるこるにはにたましかましを
には

【異同】はゐこるにはに―はひこる庭に（桂・大）

【現代語訳】大切なあの方がいらつしやると知っていたら、雑草の所狭しと生えるこの庭に一面美しい玉を敷き詰めるものを。（そうは出来なかつた。）

【語句】◎には 庭。広い場所。家の庭を指す場合も、また宴会や行事などが催される場所を指す場合もある。

○こむとしりせば 来むと知りせば。来ると知っていたら。「せば……まし」は反実仮想の表現で、実際とは異なることを仮定する。○やへむぐら 八重葎。アカネ科の蔓性の雑草を指す場合もあるが、ここでは普通名詞として解す。生い茂る蔓草。○はゐこる 「はひこる」の表記の「ひ」が「ゐ」とされた。古く訓点語に「滂」「ハヒコリ」とある。満ちる、充滿する、の意。一面に生えるさま。「はひこれる葛の下ふく風の音も誰かは今は聞くべかりける」（斎宮女御集Ⅰ・三九）。○たましかましを 玉敷かましを。玉を敷こうものを。「玉」は、寶石。「玉敷く」は、玉を敷き並べる。「むぐらはふいやしき宿もおほきみのみゆきと知らば玉しかましを」（古今六帖・一二二七）。

【所載】万葉集・二八三五（旧二八二四）念人 将来跡知者 八重六倉 覆庭尔 珠布益乎 オモフヒトコム トシリセバヤヘムグラハヒタルニハニタマシカマシヲ おもふひとこむとしりせばやへむぐらおほへるにはにたましかましを／和歌童蒙抄・三八一

一三五五 おとめごがたまもすそびくこのにはに秋かぜふきてはなはちりつゝ

【異同】ナシ

【現代語訳】少女たちが美しい裳裾をひいて歩むこの庭に、秋風吹いて花はあちこちに散っている。

【語句】○おとめご をとめご。若い娘。○たまもすそびく 玉裳裾びく。所載欄の万葉集では「須蘇婢久」と記し濁音である。美しい衣裳の裾を引く。参考欄の万葉集の詞書では、宮中での詠歌であったことがわかる。

○このには この庭。宴は「内南安殿（うちのみなみのやすみどの）」であった。この場所を「庭」といったことがわかる。○はな 秋の花である。風に散る光景。参考欄参照。

【所載】万葉集・四四七六（旧四四五二）平等壳良我 多麻毛須蘇婢久 許能尔波尔 安伎可是不吉弓 波奈波知里都都 ヲトメラガタマモスソビクコノニハニアカカゼフキテハナハチリツツ をとめらがたまもすそびくこのにはにあきかぜふきてはなはちりつゝ／夫木抄・四五四〇／和歌童蒙抄・四八二

【参考】同じ場で詠じた歌に、「秋風の吹き扱（こ）き敷ける花の庭清き月夜に見れど飽かぬかも」（万葉集・

四四七七（旧四五三）がある。

〔以上五首担当 平野〕

一三五六 ありそうみのはまにもあらぬにはきてかずしられぬはわすれでぞつむ

【異同】ナシ

【現代語訳】荒磯海の浜でもない庭に来て、数限りない砂子は、忘れないで積んでくださったのですね。

【語句】○ありそうみのはまにもあらぬ 荒磯海の浜でもない。「ありそうみ」は荒波の打ちつける浜。「昔より思ふ心はありそ海の浜の真砂は数も知られず」（大和物語・一一八段）のように、砂の多さを詠む例がある。○にはきて 庭に来て。所載欄の伊勢集では「にはにても」。○かずしられぬは 数限りないことは。砂の数の限りなさど解した。伊勢集では「かずしられねば」。○わすれでぞつむ 忘れないで積む。「有そ海の浜のまさごとたのめしは忘るる事のかずにぞ有りける」（古今集・八一八）の「忘るる事のかず」を逆転させ、当該歌では忘れていないことを表現したか。

【所載】伊勢集Ⅰ・二二二／伊勢集Ⅱ・二二七／伊勢集Ⅲ・二二四

【参考】所載欄の伊勢集の歌の詞書によれば、庭の砂子を提供してくれた人に対する謝礼の歌。

一三五七 こぬ人をいまや／＼とよもすがらまつにはとりのこゑのみぞする
にはとり

【異同】ナシ

【現代語訳】訪ねて来ない人を、今来るか今来るかと夜通し待っていると、（待つ人は一向に来ないで）鳥の声が聞こえてくるばかりだ。

【語句】◎にはとり 鶏。キジ科の鳥。肉や卵を食べるために古来飼育されてきた。和歌では夜明けを告げ、後朝の別れを促すものとして詠まれる。古今六帖の「にはとり」題に「ゆふつけ鳥」の歌が見えることから「ゆふつけ鳥」は鶏の異名とされる。○よもすがら 夜通し、終夜。「すがら」は、初めから終わりまで続く意を表す。「なにごとと思ふともなくよもすがらねぬにわけぬる夜をぞうらむる」（中務集・二二四）。○まつにはとりの待つには鳥の。「にはとり」の語を詠み込む。

【所載】ナシ

一三五八 くれたけのふしてねぬべきよもすがらまつにはとりのなきあかすまで

【異同】ナシ

【現代語訳】(呉竹の) 臥して寝るはずの一晚中、(起きて恋しい人を) 待っていると、鳥が鳴き明かすほどだ。
私も泣きながら夜を明かすほどだ。

【語句】○くれたけのふしてねぬべきよもすがら 臥して寝るはずの一晚中。「くれたけ」は淡竹(はちく)の異名。「くれたけの」は「節(ふし)」や「節(よ)」に掛かる枕詞。当該歌と同様「ふし」に掛かる例として「くれたけのゆくすゑ遠きふしなるをまたき夜がれと人やみるらん」(一条撰政御集・二七)などがある。「ふし」は「臥し」と「節(ふし)」の掛詞。「よ」は「夜」と「節(よ)」の掛詞。「節(ふし)」「節(よ)」は「くれたけ」の縁語。○まつにはとりの 一三五七番歌参照。○なきあかすまで 鳴き明かすほどだ。「なきあかす」はなきながら夜を明かすこと。「人知れぬ思ひやしげきほととぎす夏の夜をしも鳴き明かすらん」(新撰万葉集・八三)。「なき」に鶏が鳴く意と、人が泣く意を掛ける。「まで」は事柄の程度を表す助詞。

【所載】ナシ

一三五九 にはとりのかけのたりをのしだりをのながくしよをひとりかもねん

【異同】ナシ

【現代語訳】鶏の長く垂れ下がっている尾のように長い夜を、一人で寝るのであるうか。

【語句】○かけのたりをのしだりをの 鶏の長く垂れ下がっている尾。「かけ」は鶏の古名。神楽歌に「には鳥はかけると鳴きぬなり」とあり、鳴き声によるもの。「たりを」「しだりを」はいずれも長く垂れ下がる尾。上三句は「長々し」を導く序。「庭つ鳥かけの垂り尾の乱れ尾の長き心も思ほえぬかも」(万葉集・一四一七(旧一四一三))。○ひとりかもねん 一人で寝るのであるうか。「かも」は、係助詞「か」+係助詞「も」。疑問の意を表す。

【所載】夫木抄・一二七五九

【参考】三句以降が同じ歌として、百人一首にも採られて有名な「あしひきのやまどりのをのしだりをのながな

がしよをひとりかもねむ」(万葉集・二八一三、古今六帖「山どり」九二四)がある。

一三六〇 こひく〜てまれにこよひぞあふさかのゆふつけどりはなかずもあらなん

【異同】ナシ

【現代語訳】恋し続けて、稀に今夜は逢うのだ。(夜明けを告げる)逢坂のゆふつけ鳥は鳴かないでほしいものだ。

【語句】○こひく〜て 同じ語を重ねて、その語の意味の継続を表す。恋し続けて。○まれにこよひぞあふさかの逢坂は近江国の歌枕。奈良時代以来逢坂の関が置かれ、畿内と東国の境界として交通の要地であった。和歌では「逢ふ」という言葉に掛けて恋歌で詠まれる例が多い。こども「稀に今宵ぞ逢ふ」の「逢ふ」と「逢坂」の掛詞。○ゆふつけどり 鶏の異称。呼称の由来は不明であるが、尾が白い木綿を垂らしたように見えることから名付けられたとする説もある。古今集に逢坂の関とともに詠まれた例が三首見られ、院政期の歌学書には、都に疫病が流行すると、疫病を追い払うために逢坂など都を守る四つの関で「四境祭」が行われて鶏に木綿をつけて放つと説明するが、明証はない。古今和歌集打聴に「関には暁を告る鶏をおくべき也」とあり、函谷関の故事のように、逢坂の関と鶏には関わりがあったか。「相坂のゆふつけどりもわがごとく人や恋しきねのみなくらん」(古今集・五三六)。

【所載】古今集・恋三・六三四

〔以上五首担当 斎藤・諸井〕

一三六一 あふさかのゆふつけどりにあらばこそ人のゆき^{いせ}をなきつ^{ナクくモミメ}もみめ

【異同】ナシ

【現代語訳】逢坂の関のゆふつけ鳥であるならば、あなたの行き来を鳴きながら(泣きながら)見送るのでしようけれど、逢うこともない私にはそれでもできません。

【語句】○あふさか 逢坂。近江国の歌枕。逢坂の関付近。四三三番歌、四七二番歌参照。所載欄の古今集の詞書には、「中納言源昇の朝臣の近江介に侍りける時、よみてやれりける」とあり、近江介である源昇が、任地

の近江と京の往復にしばしば逢坂の関付近を通ったために女が詠んでやった歌。○ゆふつけどり 世の中が騒がしい時、都の四境の関で、木綿(ゆふ)を付けて放った鶏という。「逢坂のゆふつけ鳥もわがごとく人や恋しき音のみなくらん」(古今集・五三六)。○あらばこそ 「ば」は順接仮定条件。……であるならばこそ。○なきつゝもみめ 鳴きながらも見ることでしよう。鶏が鳴きながら見ることと、自分が泣きながら見送ることを掛ける。「も」は強意の副助詞。「め」は推量の助動詞「む」の已然形で、「こそ」の結び。「逢坂」のゆふつけ鳥であるなら、あなたの行き来を見られるが、逢うこともできない自分はそれがかなわない、ということ。「人を思ふ心木の葉にあらばこそ風のまにまに散りも乱れめ」(古今集・七八三)。

【所載】古今集・恋四・七四〇／綺語抄・六〇八／和歌童蒙抄・七八八／奥儀抄・五三九／袖中抄・一〇四五／和歌色葉・二七一

【参考】作者名「いせ」とあるが、古今集、和歌童蒙抄、袖中抄では閑院の作、綺語抄、奥儀抄、和歌色葉は作者名なし。

一三六二 たがみそぎゆふつけどりぞからころもたつたの山にたちかへりなく

オリハヘテ

【異同】ナシ

【現代語訳】誰の褌のために木綿を付けた鳥であるのか、竜田の山で繰り返し鳴いているよ。

【語句】○みそぎ 罪や穢れを洗い流して身を清浄にすること。○ゆふつけどりぞ 木綿つけ鳥なのか。「ゆふつけ鳥」は、一三六一番歌参照。大和と河内の境の竜田山にも放つたことがあったか。……であるのか。○からころも 「裁つ」の連想から、「たつたの山」を導く枕詞。「ゆふつけ鳥」の「ゆふ(木綿)」、「たつたの山」の「たつ(裁つ)」は「唐衣」の縁語。○たつたの山 奈良県西北部三郷町立野の竜田本宮の西方の山。大和と河内を結ぶ「竜田越え」で知られる。四三六番歌、一〇五七番歌参照。○たちかへり 何度も繰り返し。

【所載】古今集・雑下・九九五／新撰和歌・二二三／猿丸集I・四七／俊成三十六人歌合・二二／時代不同歌合・四七／俊頼髓脳・三三四／綺語抄・六〇七、六〇九／袖中抄・一〇四六／六百番陳状・一三六／近代秀歌・一〇八／心敬私語・九八／大和物語・二五八

【参考】大和物語(二五四段)には、京から来た男が大和の国に住む美しい娘を盗んで逃げ、日暮れて竜田山に宿った時、泣き止まぬ女に詠みかけた歌として載る。

一三六三 あかつきととりぞなくなるよしへやしひとりぬるよはあけばあけなん

【異同】ナシ

【現代語訳】 曉だからといって鳥が鳴いているのが聞こえる。もうどうにでもなれ、一人で寝る夜は明けるなら明けてしまえ。

【語句】 ○あかつきと あかつきだからと。「あかつき」はこれから夜が明けようとするまだ暗い時分。○とりぞなくなる 鳥ぞ鳴くなる。鶏が鳴くのが聞こえる。「なる」は音声の存在や聴覚による推定を表す「なり」の連体形。○よしへやし よしゑやし。副詞「よし」に上代の間投助詞「ゑ」、「やし」が付いたもの。ある事態をやむをえないと容認する。どうなるうとも。「天の原ふりさけみれば夜ぞふけにけるよしゑやし」一人ぬる夜はあけばあけぬとも（万葉集・三六八四（旧三六六二））。○あけばあけなん 明けるなら明ければよい。「あけば」は、下二段動詞「明く」に順接仮定条件の接続助詞「ば」がついた形。「あけなん」の「なん」は希求の終助詞。

【所載】 万葉集・二八一〇（旧二八〇〇） 旭時等 鶏鳴成 縦恵也思 独宿夜者 開者雖明 アカツキトトリ ハナクナリヨシエヤシヒトリヌルヨハアケバアクトモ あかときとかけはなくなりよしゑやしひとりぬるよはあけばあけぬとも

かど

みわの御

一三六四 わがやどはみわの山もとこひしくはとぶらひきませすぎたてるかど

【異同】ナシ

【現代語訳】 私の住まいは三輪山のおもと。恋しいなら訪ねて来て下さい。杉の立っている門です。

【語句】 ◎かど 家の周囲に巡らした囲いの出入り口。また家の出入り口。門。門口。○みわの山もと 三輪山の山のおもと。三輪山は大和の国の歌枕。現在奈良県桜井市の東北部。大神（おおみわ）神社があり、山自体が御神体となっている。○こひしくは 「は」は形容詞の連用形「く」「しく」を受けて順接仮定条件を表す接続助詞の用法の係助詞。恋しいなら。恋しかったら。「恋しくは見てもしのばむもみぢばを吹きなちらしそ山おろしの風」（古今集・二八五）。○とぶらひきませ 訪ねてきてください。「ませ」は、尊敬の補助動詞「ます」

の命令形。○すぎ スギ科の常緑針葉樹。万葉集に「味酒を三輪の祝がいはふ杉手触れし罪か君にあひがたき」(万葉集・七一五(旧七一二))と見え、既に三輪山の神木として歌われているが、以後の歌に大きな影響を与えたのは当該歌である。古今采雅抄には、「宿を教へたる也。三輪の山をたづねしるしの杉などよむことは此歌よりおこれり。」とある。

【所載】古今六帖・第六帖「すぎ」四二七六／古今集・雑下・九八二／新撰和歌・三一六／俊頼髓脳・六四／綺語抄・七二二／和歌童蒙抄・七〇七／奥儀抄・三九〇／袋草紙・二〇三／袖中抄・三五八／古来風体抄・二九四／和歌色葉・一五五、一五七／八雲御抄・一九五

【参考】作者名「みわの御」は三輪明神の御神詠の意。俊頼髓脳、綺語抄、奥儀抄、袋草紙、古来風体抄、和歌色葉(二首)は三輪明神、和歌童蒙抄は神女の作とする。古今六帖の四二七六番歌、袖中抄、八雲御抄には作者名なし、古今集ではよみ人知らずとなっている。古今集註(顕昭)、両度聞書などの古今集の古注は三輪明神の歌とするが、古今集勘物・書入(寂恵)は、三輪明神の歌とする説を挙げ、「慥(たしか)ニシリガタシ。ミワノ山ノホトリニスミケル人ノヨメルナメリ」とする。当該歌の作者名が古今和歌六帖成立期からのものであるとすれば、この歌を三輪山説話に付会し、三輪明神作とするかなり早い例である。

一三六五 わがゝどのまつのかはなみうちすぎてみしがごとくもあらぬきみかな

【異同】わがゝとの—わかことの(桂)

【現代語訳】(わが家の門の松の)川波が通り越してゆく、そのように時が過ぎていってみると、かつてお逢いした時のようではなくなってしまうたあなたよ。

【語句】○わがゝどのまつのかはなみ わが門の松の川波。「わがゝどのまつ」と「かはなみ」の関係は定かではないが、「わがゝどのまつのかはなみ」が「うちすぎて」を導く序詞と見ておく。○うちすぎて 「うちすぎ」は、時間的、空間的に過ぎる、経過する。○みしがごとくもあらぬきみかな 見しがごとくもあらぬ君かな。かつて見たようでもなくなってしまうたあなたよ。類語「見しごとく」を用いた例歌に「見しごとくもあらぬかな古郷は花の色のみぞあれずは有りける」(貫之集・四三六)がある。

【所載】ナシ

(以上五首担当 中野)

一三六六 いづこより思ひいもてかまどふらむこひはかどなきものところそきけ

【異同】思ひいもてか―思ひいりてか（御・桂・大）

【現代語訳】いったいどこから恋の思いが入ってきて、このように思いつめ悩むのであろうか。恋というものは門などないと聞いているが、まさしくこのことだなあ。

【語句】○いづこより思ひいもてかまどふらむ 底本「思ひいりてか」は、他本「思ひいりてか」に拠って解しはすゑのとほければ思ひいりても年のへぬらん」（続古今集・一〇四二）。○こひはかどなきものところそきけ 恋は門なきものところそ聞け。恋にはその入口となるような門などないと聞いていたが、まさしくその通りであった、の意を含む。恋の思いは神出鬼没、「家にある櫃（ひつ）に鍵さしをさめてし恋の奴（やつこ）がつかみかかりて」（万葉集・三三八三）（旧三八一六）は、家の中にある櫃に入れ鍵をかけておいたはずなのに恋の思いは不意に自分につかみかかるとある。

【所載】ナシ

一三六七 かどわさだもるやひとめのしげゝればほにこそいでねわすれやはする

【異同】ナシ

【現代語訳】家近くの早稲田を守っている人の目、人の目は多く煩わしい、だから私はそぶりにも出さないけれど、あなたを片時も忘れてたりするものですか。

【語句】○かどわさだ 門早稲田。『新編国歌大観』を検索してもこの一例のみ。「門田の早稲」や「門田早稲」と同じく、家の門前あるいは家周辺にある、早稲の稲田をいうのである。なお、所載欄の歌集には、初句すべと一とほやまだ（遠山田）。第二句以下は、既出九六九番歌参照。

【所載】古今六帖・第二帖「山田」九六九／続古今集・恋一・九八六／躬恒集Ⅱ・二五九

【参考】作者名の記載はないが、所載欄の続古今集に躬恒とあり、躬恒集Ⅱに見える。

一三六八 うきよにはかどさせりともみえなくになどかわが身のいでがてにする
こたふむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 このつらい世には門に鍵をかけているとも見えないのに、どうしてわが身は出家しがたいのであるか。

【語句】 ○うきよ 憂き世。つらい世の中。○かどさせり 門鎖せり。門に鍵をかけている。憂き世という抽象世界に「門」などあるはずはないが、行き場のない閉塞感を擬人的に表現。○みえなくに 見えないのだけれど。○などか どうしてか。係助詞「か」は疑問。○いでがてにする 出でがてにする。出ることができにくいのであろうか。連語「がてに」は、……できないで、の意。「憂き世」から「出(い)でがてにする」とは、なかなか出家できないことをいう。

【所載】 古今集・雑下・九六四／拾遺集・雑上・四八一／大和物語・拾穂抄付載附一・二九五／平中物語・一段

【参考】 作者名「さだふむ」(平貞文)は所載欄の勅撰集に一致する。なお、古今集の詞書に「官(つかさ)解けて侍りけるとき詠める」と、官職を剥奪されたときの歌とする。

一三六九 よのつねにわがおもひせばかくばかりかたきみかどをまたいでめやは

【異同】 ナシ

【現代語訳】 並一通りにあなたのことを私が思っているのであったなら、こんなに守りの厳重な御門を一度ならずもまた抜け出して逢いにくるなどありますでしょうか。

【語句】 ○よのつねにわがおもひせば もし私があなたをごく普通に愛しているのならば。「よのつねに」は、普通に、世間なみに。「世のつねに思ひやすらむ露ふかき道のささ原分けて来つるも」(源氏物語・総角・六六三)。「おもひせば」は、「思ひす」の未然形に接続助詞「ば」が接続した形。○かくばかり これほどまでに。「かたき」に掛かる。○かたきみかど 難き御門。出入りに厳しい、守りの厳重な御門。○またいでめやは また出てきたりするだろうか、いやそんなことはない、の意。「やは」は反語。

【所載】 万葉集・二五七三(旧二五六八) 凡 吾之念者 如是許 難御門乎 退出米也母 オホヨソニワレシオモハバカクバカリカタキミカドヲタチ(マカリ) イデメヤモ おほろかにわれしおもはばかくばかりかたきみかどをまかりいでめやは

【参考】「おほかたはわが思ふことかくばかりかたきみかどをまかり出でなん」（古今六帖・第四帖・二一六六）は、所載欄の万葉集の異伝歌かと思われるが、当該歌と言葉の重ね方はよく似ているが歌の内容が異なるようなので、所載欄には入れなかった。

一三七〇 君やこむわれやゆかむのやすらひにまきのいたどをさゝでねにけり^と

【異同】ナシ

【現代語訳】貴方が来て下さるのか私の方から出かけようかと躊躇って、板戸に鍵せぬまま寝てしまったことです。

【語句】◎と 邸内に入入りする戸口。「戸」で単独に歌われることも、「真木の戸」「朝戸」「天（あま）の戸」「岩戸」など他の語と組み合わせることもある。なお、万葉集から「門（かど）」と「戸（と）」とは分化しているが、それは漢語の用法差を意識するようになったためであろうという『古語大辞典』。○君やこむわれやゆかむの あなたが来るか、私が行くかの。「君」と「我」、「来む」と「行かむ」と対照させる。○やすらひに躊躇のために。ためらって。○まきのいたどをさゝでねにけり 真木の板戸を鎖さで寝にけり。真木の板戸を戸じまりもないままで寝てしまった。「まき」は「真木」、「真」は美称の接頭語で、りっぱな木を意味し、杉・檜・イヌマキ・コウヤマキなどを指す。「真木の板戸」は、「真木の戸」と同じで、男が女に会いに行くため通る戸として詠まれた。

【所載】古今集・恋四・六九〇／奥儀抄・五二七／袖中抄・九五九／和歌色葉・二六四

〔以上五首担当 犬養悦・加藤〕

一三七一 かぜふくと人にはいひてとはさゝじあはむと君にいひてしものを

【異同】ナシ

【現代語訳】風が吹いてそれで戸が開くのだと、人には言いつくろって、戸はしめないでおきましょう。今夜逢いましよう、あなたに言ったのですもの。

【語句】○かぜふくと 風吹くと。風が吹いてそのせいで戸が開くのだと。○とはさゝじ 戸は鎖すまい。

【所載】 ナシ

【参考】 古今六帖・四四二、四四三番歌と下句が類似している。

一三七二 あまのとのさもあけがたくみえしかなこやなつのよのみじかゝりける

【異同】 ナシ

【現代語訳】（お帰りの時の）明け方の戸が、いかにも開けにくく見えましてよ。これがまあ、夏の夜というもののなのでしょうか。（逢瀬は）ほんとに短いことでした。

【語句】 ○あまのとの 「あけ」にかかる措辞。二句「あけがたく」との関係から、あるいは、天の岩戸伝説にことよせて「あまのと」と言ったものか。○さも 然も。いかにも。まことに。○あけがたく 夜の「明け方」に戸の「開け難」を掛けた。○こや 此や。近称の代名詞「こ（此）」に疑問の助詞「や」が付いた形。これがまあ。言外に「……だろうか」の意を伴う。「あさぼらけひぐらしのこゑ聞こゆなりこやあけぐれと人の言ふらむ」（拾遺集・四六七）。

【所載】 ナシ

一三七三 ゆかなくにわれくらむかとあさとあけてあはれわぎもこまちつゝをらむ

【異同】 ナシ

【現代語訳】 わたしはきようは行かないのに、（そうとは知らず）わたしが来るだろうかと朝の戸を開けて、ああ、わが恋人は、待っていることだろうなあ。

【語句】 ○ゆかなくに わたしが行かないのに。なにかの事情で行けなくなったのであろう。「ゆく」は、作者の側から言ったことば。○くらむかと 来るであろうかと。「く（来）」は、恋人の側から言ったことば。○わぎもこ 吾妹子。男性が妻あるいは恋人を親しんで呼ぶ語。

【所載】 万葉集・二五九九（旧二五九四）不徃吾 来跡可夜門 不閉 何怜吾妹子 待筒在 ユカヌワレクトカヨカドモササズシテアハレワギモコマチツツアラム ゆかぬわをこむとかよるもかどささずあはれわぎもこまちつつあるらむ

一三七四 あさといでのきみがすがたをよくみずてながきはるひもこひやくらさむ

【異同】ナシ

【現代語訳】朝の戸を開けて帰って行ったあなたの姿をよく見なかったので、この長い春の日も、わたくしはひもすがら恋い暮らすことでしょうか。

【語句】○あさといで 朝の戸を開けて出てゆくこと。ここは、夜来ていた恋人が朝帰って行ったこと。○みずて 見ずして。見なかったのだ。

【所載】万葉集・一九二九（旧一九二五）朝戸出乃 君乃儀乎 曲不見而 長春日乎 恋八九良三 アサトイデノキミガヨソヒヲヨクミズテナガキハルヒヲコヒヤクラサム あさといでのきみがすがたをよくみずてながきはるひをこひやくらさむ／赤人集Ⅰ・二〇六／赤人集Ⅱ・八七

一三七五 あしひきのやまさくらとをあけをきてわがまつ君をたれかとむる

【異同】ナシ

【現代語訳】山ざくらの戸を開けたままにしてわたくしが待っているあの人を、いったいたれが引きとめているのだらう。

【語句】○あしひきの 「やま」にかかる枕詞。○やまさくらと 山桜の木で作った戸。万葉集初出の語だが、中古の用例は古今六帖のこの一語のみ。中世和歌には用例多く、夫木抄には「山ざくら戸」の項が設けられている。○あけをきて あけおきて。開けた状態にしておいて。○たれかとむる いったいたれがあの人を引きとめているのだらう。恋人がなかなか来ないと、待ちかねる気持を言っている。

【所載】続後拾遺集・恋三・八〇二／万葉集・二六二四（旧二六一七）足日本能 山桜戸乎 開置而 吾待君乎 誰留流 アシヒキノヤマサクラトヲアケオキテワガツキミヲタレカトドムル あしひきのやまさくらとをあけおきてわがまつきみをたれかとむる／夫木抄・一四九三一／人麿集Ⅱ・四六六

〔以上五首担当 山下〕

一三七六 まきのとのかりそめにしもしにけるがいたづらいねをなになりくにつゝまゝし

【異同】 かりそめにしもーかりそめふしも(御・桂・大) なにゝつゝまゝしーなにゝつゝまし(御・桂・大)

【現代語訳】 榎の戸の外で仮そめ臥しもしてしまったが、むなししい独り寝をどうしてかくそうか。「第二句を「かりそめふし」で訳す。」

【語句】 ○まきのと 榎の戸。檜・杉・松など良質の堅い木で造った戸。「夜もすがらくひなよりけになくなくぞまきの戸口に叩きわびつる」(新勅撰集・一〇一九)。○かりそめにし 校合した三本、及び所載欄の歌は「かりそめふし」であるのでそれによって訳す。「かりそめふし」は仮りそめに臥すこと。所載欄の後撰集の詞書に「人のもとにまかりて待るに、呼び入れねば、すのこにふしあかしてつかはしける」とある。○いたづらいねむなく独り寝すること。「いね」は動詞下二「いぬ(寝)」の連用形。「かりそめふし」の「かり(刈り)」の縁で「稲」を掛ける。「徒ら稲」は役に立たない稲。○なにゝつゝまゝし どうして包み隠そうかなあ。「何に」はどうして。「つゝむ」は隠す。秘める。「まし」は「何に」をうけて迷ったり躊躇いの気持ちをおあらわす。

【所載】 後撰集・恋四・八四五／俊頼髓脳・一八五／奥儀抄・一六〇／和歌初学抄・四〇

【作者】 作者名「なりに」は所載欄の文献と一致する。

一三七七 千はやぶる神のいがきもこゆる身はくさのとぎしにさはるものかは

【異同】 ナシ

【現代語訳】 神社の垣根だって平気で越えられるこの身は、茂った草で閉ざされた門なんか障害になるものか。

【語句】 ○千はやぶる 枕詞。「神」「わが大君」「齋宮」などにかかる。○神のいがき 神の齋垣。「い」は清められた、神聖な意の接頭語。神社の垣根。○くさのとぎし 草で門戸を閉ざすこと。「秋の夜の草のとぎしのわびしきはあくれどあけぬものにぞありける」(後撰集・八九九)。○さはるものかは 障害になるものか。「かは」は反語。

【所載】 ナシ

一三七八 おく山のまきのいたどをとく／＼としらでわがひかむにいでゝきなさね

【異同】 ナシ

【現代語訳】槇の板戸を早く早くと、とんとん叩いているものかもしれないで、私がこんなに引っ張っているのだから無理をしても、出て来てほしいなあ。

【語句】○おく山の 枕詞。「深き」「まき」にかかる。○まきのいたど 槇の板戸。檜・杉・松などの板で造った戸。○とく／＼と 形容詞「疾(と)し」の連用形が副詞化した「疾く」に、槇の戸を叩く擬声語「とくとく」をかけた。○わがひかむに 私引つ張っているのだから。「に」はあとに述べる事柄の理由やより所を示す。○いでゝきなさね 無理にも出て来てほしい。「なさ」は動詞なすの未然形でことさら何々するの意。「ね」は未然形につき、他にたいする希望をあらわす終助詞。

【所載】万葉集・三四八六(旧三四六七) 於久夜麻能 真木乃伊多度乎 等杼登之豆 和我比良可武余 伊利伎弓奈左祿 オクヤマノマキノイタドフトドシテワガヒラカムニイリキテナサネ おくやまのまきのいたどをとどとしてわがひらかむにいりてきなさね

すだれ

ぬかだのみこ

ウゴカシ

一三七九 ひとりしてわがこひをればわがやどのすだれとほりて秋かぜぞふく

【異同】ナシ

【現代語訳】一人であの人を恋しく思つて、訪れを待っていると、我が家のすだれを通り抜けて、秋風が吹いてゆく。

【語句】◎すだれ 細く削った竹や葦などを使つて糸で編み連ねたもの。部屋の内外を隔てたり、牛車や輿などの出入り口にたらしめた。「ころもたに隔てしよひは恨みしにすだれのうちの声ぞかなしき」(中務集・一九二)。

○ひとりして たったひとり。所載欄歌の初句、二句「君まつとこひつつふれば」、四句「すすきう(き)」。【所載】古今六帖・第一帖「あきの風」四〇一番既出

【参考】作者名「ぬかだのみこ」は四〇一番歌の所載欄の万葉集・四九一(旧四八八)、一六一〇(旧一六〇六)の作者名に一致する。万葉集には「額田王思近江天皇作歌一首」とある。

一三八〇 たまだれのこすのすだれをゆきがてにいはいねられぬどきみはかよはす

【異同】ナシ

【現代語訳】我が家の美しいすだれを通り抜けられず、内でゆっくりと寝ることはできないけれど、それでもあなたはお通いになります。

【語句】○たまだれの 枕詞。「こす」「をす」「をち」などにかかる。「たまだれ」は玉で飾った美しいすだれ。すだれの美称。○こすのすだれ 小簾(こす)のすだれ。美しいすだれ。○ゆきがてに 通り抜けることができないうで。「がてに」は何々できないで。○いはねられねど 寝ることはできないけれど。「い」は名詞「寝ること」。「ね」は動詞下二「ぬ(寝)」の未然形。「られ」は可能の助動詞「らる」の未然形。「ね」は打消の助動詞「ず」の已然形。○かよはず お通いになる。「ず」は尊敬の助動詞。

【所載】万葉集・二五六一(旧二五五六) 玉垂之 小簾之垂簾平 往謁 寝者不眠友 君者通速為 タマダレノ コスノタレスヲユキカチニイヲバネネドモキミハカヨハス たまだれのをすのたれすをゆきかちにはなさずともきみはかよはせ/夫木抄・一五四二〇

【参考】通い婚時代の歌。男は通つて来ても、女の親の目を盗んですだれの内に入ることが難しく、女は外で密かに逢っていた、と解した。

〔以上五首担当 林〕

一三八一 われならぬ人にや人にたまだれのみすなやみすなあらはなりとも

【異同】ナシ

【現代語訳】私以外の人に、決して顔を見せてはいけませんよ。たとえあらわな場合であっても。

【語句】○人にや人に 「人に」の意を、繰り返すによる強調表現。「や」は間投助詞。○たまだれの 玉を貫いて飾りとしたところから、「御簾」「緒」などの枕詞。ここは「御簾」に「見す」を掛け、「見すな」を導く。

○みすなやみすな 「みすな」は、見せるな。「夢よ夢よ駒わたりこし逢坂の関の清水に影みすな君」(四条宮主殿集・一八)。ここも繰り返すによる強調表現。

【所載】ナシ

一三八二 ときのまにはやなぐさめよいその神ふりにしとこをうちはらふべく

【異同】ナシ

【現代語訳】今すぐ、早く私を慰めてください。疎遠になってしまった床の上におく塵をうち払って、再び二人の仲を取り戻すために。

【語句】◎とこ 寝床。特に男女の関係で用いられることが多く、二人が疎遠になることを床に塵がおくという。○ときのま ほんの少しの間。○いその神 「古」「振る」「降る」などにかかる枕詞。ここでは「ふりにし」にかかると。一般には「石上」と書き、「布留」とともに、現在の奈良県天理市にある地名。○ふりにし床 古くなつてしまった床。二人の関係が途絶えていることをいう。○うちはらふべく 床の上に積もった塵を払うのである。関係の復活を意味する。

【所載】後撰集・恋三・七五六／業平集Ⅱ・七四／業平集Ⅲ・一八／伊勢集Ⅰ・一四／伊勢集Ⅱ・一五／伊勢集Ⅲ・一四／袋草紙・三九／古来風体抄・三二五

【参考】所載欄の他の文献では、当該歌と次の一三八三番歌とは贈答歌である。伊勢と関係のあった男性は枇杷左大臣藤原仲平であるから、作者表記は本来「なかひら」とあるべきで、「ゆきひら」あるいは「業平集」所載は誤りであろう。

一三八三 わたつみとあれにしとこをいまさらにはらほそでやあはときえなん

伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】涙が溜まって大海のように荒れた床、あなたが離れていってしまったその床の塵を、今再びあなたとの共寝のために払ったら、その袖は泡のように消えてしまうでしょうか。

【語句】○わたつみと 「わたつみ」は海。海と同じように。○あれにし 海が「荒れ」と、男が「離(あ)れ」とを掛ける。○あはときえなん 「あは」は「泡(あわ)」。袖は泡のように消えてしまうだろうか。関係修復はむずかしいという意味表示であろう。

【所載】古今集・恋四・七三三／後撰集・恋三・七五七／業平集Ⅱ・七五／伊勢集Ⅰ・一五／伊勢集Ⅱ・一六／伊勢集Ⅲ・一五／袋草紙・四〇／古来風体抄・三二六

【参考】 作者名「伊勢」は所載欄の文献に一致する。

一三八四 ふしてぬるとこはくさばにあらねども秋くるよひはつゆけかりけり

【異同】 ナシ

【現代語訳】 横になって寝る床は草の葉ではないけれども、秋がやって来るころの宵は、草葉に露が置くように涙でしめつぽかったことだ。

【語句】 ○ふしてぬる 臥して寝る。「ぬる」は下二段活用動詞「寝（ぬ）」の連体形。○つゆけかりけり 露でしめつぽい。涙がちである意に用いられることが多い。

【所載】 古今集・秋上・一八八／清正集・七二

【参考】 所載欄の清正集には初句を「一人ぬる」として収めるが、古今集では「よみ人知らず」とする。

一三八五 ふしてぬるとこめづらなる君なればいましもあへるこゝちこそすれ
そせい

【異同】 ナシ

【現代語訳】 共寝をするあなたは、いつも新鮮で愛らしいから、たった今、はじめて逢っている感じがすることだ。

【語句】 ○とこめづらなる 臥して寝る「床」と「常（とこ）珍らなる」の掛詞。「常珍らなる」は、常に新鮮だの意。「難波人葦火たく屋はすすたれどおのがつまこそとこめづらなれ」（拾遺集・八八七）。

【所載】 ナシ

【参考】 他の文献に見えず、作者が「素性」であるかどうかについては確認できない。

〔以上五首担当 久保木〕

一三八六 ゆめならであふことかたきよのなかはおほかたとこをよきさずやあらまし
いせ

【異同】ナシ

【現代語訳】夢以外には逢うことが難しいあの人との仲なので、ほとんど床から起きずにいようかしら。

【語句】○ゆめならであふことかたき 夢の中でなくては逢うことが難しい。現実にはなかなか恋しい人に逢えず、夢でしか逢えないという意。「夢ならで逢ふことかたき君ゆへに我もたつ名をたゞにやは聞く」（人麿集Ⅱ・五七一）。○よのなかは 世の中においては。世の中では。当該歌の「世の中」は、男女の仲の意。○おほかた ほとんど。たいてい。総じて。

【所載】伊勢集Ⅰ・一八〇／伊勢集Ⅱ・一八四／伊勢集Ⅲ・一八四

【参考】作者名「いせ」は、所載欄の文献に一致する。

一三八七 けさのとこつゆをきながらかなしきはあかぬゆめちをこふるなりけり
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】今朝の床を涙の露で濡らしながら起きて悲しくてならないのは、飽き足りない夢での逢瀬を恋しく思うためだったんだなあ。

【語句】○つゆをきながら つゆおきながら。涙を流しながら起きて。（床を）涙で濡らしながら起きて。「露」の縁語の「置（お）き」に、「起（お）き」を掛ける。「露」は、涙の比喩。「思ひしる人に見せばやよもすがらわがとこ夏におきあたる露」（拾遺集・八三二・清原元輔、仲文集・一六）。○あかぬ 飽かぬ。十分ではない。満ち足りない。もっと逢っていたいのにという気持。○ゆめち 夢路。夢の中で恋しい人に逢うための通い路。「限なき思ひのままに夜も来む夢路をさへに人はとがめじ」（古今集・六五七）。

【所載】貫之集Ⅰ・六五四

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。

一三八八 ゆめにてもこひしき人をみつるよはあしたのどこぞおきうかりける

【異同】ナシ

【現代語訳】夢の中でも恋しい人を見た夜は、その翌朝の床が起きづらいものだったんだなあ。

【語句】○おきうかりける 起き憂かりける。起きるのがつらいものだったんだなあ。起きにくいものだったんだなあ。「限りとは思はぬものを暁の別れの床は起き憂かりけり」(陽成院親王二人歌合・三五)。

【所載】古今集・恋二・五七五／素性集Ⅰ・五九／素性集Ⅱ・三六／素性集Ⅲ・一

【参考】古今六帖に作者名はないが、所載欄の文献によると、作者は素性。

一三八九 ひとりぬるところちめやはあやむしろおになるまでも君をばまたむ
むしろ

【異同】ナシ

【現代語訳】独りで寝る寝床が朽ちるものでしょうか、そんなことはありませんまい。だから、その寝床の綾筵が擦り切れて緒になるまでも、ずっとあなたをお待ちしましょう。

【語句】◎むしろ 筵。わら・真菰などを編んで作った敷物の総称。古今六帖では、「あやむしろ」「苔むしろ」「いなむしろ」と詠まれた三首が、「むしろ」の項にある。一般的にも、「さむしろ」など、「むしろ」に素材や状態などを表す語を冠して用いることが多い。○ところちめやは 床朽ちめやは。床が朽ちることがあるだろうか、いや朽ちない。「ところ」は、所載欄の万葉集では「菱」とあり、「コモ」と「トコ」の両様の訓がある。「めやは」は、助動詞「む」の已然形「め」に係助詞「やは」が付いたもので、反語の意を表す。○あやむしろ 綾筵。模様を織り出した筵。○おになるまでも 緒(を)になるまでも。擦り切れてはつれ、編み紐だけになるまでも。当該歌では、独り寝の寝床の綾筵がすっかり傷んでしまうまでも、ずっと(待ち続ける)という意か。「あや筵緒になるまでの年月も朽ちぬは人の契りなりけり」(新千載集・一二五〇・後醍醐院)。

【所載】新千載集・恋二・一二四九／万葉集・二五四三(旧二五三八) 独寝等 菱朽目八方 綾席 緒成及 君乎之将待 ヒトリヌト(ヌル) コモ(トコ) クチメヤモアヤムシロヲニナルマデニキミヲシマタムひとりぬところちめやはあやむしろをになるまでにきみをしまたむ／人麿集Ⅱ・四三九／人麿集Ⅳ・二二五／綺語抄・五四七／和歌童蒙抄・四九九／古来風体抄・一二七

【参考】『古今和歌六帖標注』は、第五帖の「にしき」と「いと」の間に、「あや」の題で、作者を「ひとまろ」とし、「獨ねのこもちめやは綾むしろをに成までに君をしまたん」(『新編国歌大観』では、古今六帖の異本歌四四九六番として掲出)という小異のある重出歌を補っている。

一三九〇 かすがのゝあをねがみねのこけむしろたれかをりけんたてぬきなしに

【異同】ナシ

【現代語訳】春日野の青根が峰の苔の筵は、いったい誰が織ったのだろうか。縦糸も横糸もなくて。

【語句】○かすがのゝあをねがみね 春日野の青根が峰。春日野は大和国の歌枕、現在の奈良市東郊の野。青根が峰も大和国の歌枕であるが、現在の吉野郡、金峰山の東北にある山である。すなわち「かすがのゝあをねがみね」は地理的に不審。所載欄の万葉集の歌では「みよしのの青根が峰の」である。○こけむしろ 苔が一面に生えているさまを筵に見立てた語。「白雪の降りしきぬれば苔むしろ青根が峰も見えずなりゆく」（祐子内親王家紀伊集・六五）。○たれかをりけん たれかおりけん。誰か織りけん。誰が織ったのだろうか。○たてぬき 経緯。（織物の）縦糸と横糸。「経もなく緯も定めずをとめらが織れる錦に霜な降りそね」（万葉集・一五一六（旧一五一二）・大津皇子）。

【所載】万葉集・一一二四（旧一一二〇）三芳野之 青根我峰之 蘿席 誰將織 経緯無二 ミヨシノノアヲネガミネノコケムシロタレカオリケムタテヌキナシニ みよしののあをねがたけのこけむしろたれかおりけむたてぬきなしに／夫木抄・九〇六三、一五四一七／袋草紙・八〇〇、八三二／和歌初学抄・一九一

〔以上五首担当 長戸〕

一三九一 たまほこのみちゆきつかれいなむしろしきても君がこひらるゝかな

【異同】ナシ

【現代語訳】旅の道を行き疲れて休むのにいなむしろを敷く、その「しく」ということばのように、しきりにあなたのこと恋しく思われるなあ。

【語句】○たまほこの 「道」にかかる枕詞。○いなむしろ 稲筵。稲のわらで編んだむしろ。○しきても 稲筵を「敷く」ことに、「しきりに」の意の「頻く」を掛けた。「あかときの夢に見えつつ梶島の磯越す波のしきて思ほゆ」（万葉集・一七三三（旧一七二九））。上三句は「しきても」を導く序詞。○こひらるゝかな 恋しくなることだ。「らるゝ」は自発の助動詞。ひとりでにそうなってゆくさまを表わす。

【所載】新勅撰集・恋四・八八〇／万葉集・二六五一（旧二六四三）玉戈之 道行疲 伊奈武思侶 敷而毛君平 将見因毛鴨 タマホコノミチユキツカレイナムシロシキテモキミヲミムヨシモガモ たまほこのみちゆきつか

れいなむしろしきてもきみをみむよしもがも／人麿集Ⅰ・一三／人麿集Ⅱ・三九四／綺語抄・五五一／奥儀抄・四〇三／袖中抄・二四四／和歌色葉・一七四

おきな

一三九二 あぢきなしなにのまがこといまさらにわらはごとするおきなにしても

【異同】ナシ

【現代語訳】ばかばかしい。なんとつまらぬことばだ。いまさら子どもじみたことを言うのだ、いい年をした翁の身でもって。

【語句】◎おきな 翁。年老いた男性。おうな（嫗）の対。その白髪は雪にたとえて詠まれることが多い。○あぢきなし ばかばかしい。どうしようもない。対象に対して愛想をつかし、さじを投じている気持。○まがこと 禍言。まちがったことば、よくないことば。○わらはごとする 「わらはごと」は童言。子どもの言いそうな、おとなげないことばを言うのだ。○おきなにしても 翁の身でもって。いい年をした翁でありながら。「に」は指定の助動詞「なり」の連用形、「し」は強意の助詞、「もて」は「もちて（以て）」の音便形「もって」が転じたもの。

【所載】万葉集・二五八七（旧二五八二）小豆奈九 何枉言 今更 小童言為流 老人二四手 アヂキナクナニノマガコトイマサラニワラハゴトスルオイヒトニシテ あづきなくなにのたはこといまさらにわらはごとするおひひとにして

一三九三 しらゆきのやへふりしけるかへる山かへるぐもおいにけるかな

【異同】ナシ

【現代語訳】白雪が幾重にも降り重なったかえる山よ。私は、つくづくと年老いてしまったなあ。

【語句】○しらゆきのやへふりしける 白雪が幾重にも降り重なった。「ふりしく」は降り頻く。しきりに降り重なること。この句には、白髪の老翁のイメージがある。○かへる山 越前国の歌枕。現福井県南越前市（旧南条郡今庄町）鹿蒜（かひる）にある山。歌では「帰る」を意識して詠まれることが多い。「からにきたちて越路のかへる山かへるがへるものうかりしか」（元良親王集・三七）。上三句は、同音によって「かへるぐ」を

導き出すための序詞。○かへるくも 「かへすがへすも」に同じ。つくづく。何度考えてもまったく。

【所載】古今集・雑上・九〇二／新撰万葉集・一六九／業平集Ⅱ・一〇七／寛平御時后宮歌合・一三四

一三九四 おいらくのこむとしくせばかどさしてなしとこたへてあはざらましを

【異同】ナシ

【現代語訳】老いがやってくるわかつていたならば、門を鎖して、不在だと答えて、逢わないだろうになあ。
【語句】○おいらく 老いというもの。動詞「老ゆ」のク語法。「老い」を擬人化した言い方。○しりせば 知っていたならば。「せば」は、第五句の「まし」と呼応する反実仮想の語法。○かどさして 門を鎖して。○なしとこたへて あるじは不在だと答えて。○あはざらましを 逢うことをしないだろうになあ。実際には門内に入れてわが身に迎え入れてしまった、ということ。「を」は詠嘆。

【所載】古今集・雑上・八九五／暮春白河尚齒会和歌・二二／俊頼髓脳・七六／古今著聞集・一七〇

一三九五 わたつみのおきなもはなはかざしけり春のいたらぬところなければ

【異同】ナシ

【現代語訳】(年老いた)翁でさえも、花はかざしとして挿している。折しも、春の到らぬところはないから。
【語句】○わたつみのおきな 「わたつみ」は「沖」にかかる枕詞。「沖」に「おきな」を掛けた。○かざしけり かざしとして挿している。「かざし」は「カミサシ」の転。草木の花や枝を髪や冠に挿したものだ。

【所載】夫木抄・一六五四

〔以上五首担当 青木・山下〕

一三九六 おきなさび人などがめそかりころもけふばかりぞとたづもなくなり
なりひら

【異同】けふはかりそとーけふはかりとそ(大) たつもなくなりーたつも啼なる(大)

【現代語訳】年寄りじみていると皆さん咎めないでください。この狩衣を着るのも今日限りだ(今日は狩だ)

と鶴も鳴いているようですので。

【語句】○おきなさび 老人くさい。年青りくさい。「さぶ」は接尾語。いかにもそのものらしい、その属性を發揮する、の意。「神さぶ」「乙女さぶ」など。○人なとがめそ 人よ咎めるな。「な……そ」は禁止をあらわす。○けふばかりぞと 「今日ばかりぞと」に「今日は狩ぞと」を掛ける。○たづもなくなり 「たづ」は鶴。多く歌語として用いられる。「なり」は耳で聞いて推定する意。

【所載】古今六帖・第五帖「かりころも」三三〇七／後撰集・雜一・一〇七六／業平集Ⅱ・一〇九／俊頼髓脳・三二六／和歌童蒙抄・三一四／奥儀抄・三二一／万葉集時代難事・六四／袖中抄・二三三／和歌色葉・三三六／宝物集・一一／伊勢物語・一一四段・一九五

【参考】作者名「なりひら」については、業平集Ⅱや伊勢物語にも見えるが、後撰集をはじめ歌書類ではすべて「行平」とする。なお後撰集や伊勢物語によれば、当該歌は仁和二（八八六）年十二月十四日に行われた仁和の帝（光孝天皇）の芹川行幸の折の詠で、業平没より六年後の作。作者名「なりひら」は誤りである。

一三九七 ふりそめてともまつゆきはむばたまのくろかみのまたかはるなりけり
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】降りをはじめてあたりを白く染め、あとから降ってくるのを消えずに待っている雪は、実は、黒髪がまた白く変わっていくことだったのですね。

【語句】○ふりそめて 「降り初めて」に「降り染めて」を掛ける。○ともまつゆきは 「とも」は「友」で、はじめに降った雪の立場から、次々とあとから降ってくる雪をいうのであろう。漢語でも、そうした雪を「待伴」という。○むばたまの 黒、あるいは黒と関係のある、髪、鬘などにかかる枕詞。○かはるなりけり ここでは黒髪が白髪に変わることをいう。降りをはじめてあたりを徐々に白くしてゆく雪は、実はまた黒髪が徐々に白くなってゆくことだったのだ、の意。「なりけり」ははじめて気がついたという気持ちを表す。

【所載】後撰集・冬・四七一／兼輔集Ⅳ・五五／貫之集Ⅰ・八一七／貫之集Ⅱ・九〇／袖中抄・七二三
【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。

一三九八 くろかみのいろふりしかはるしらゆきのまちつるともはうとくもあるかな

【異同】いろふりしかはる―いろふりしくる（御・大）、いろふりしかはる（桂）

【現代語訳】降ることによって黒髪の色が変わる白雪、その白雪が友を待っているとのことですが、友といつても私には縁のないものですよ。

【語句】〇うとくもあるかな 「うとし」は、疎遠だ、親しみがない、関係が薄い意。

【所載】後撰集・冬・四七二／兼輔集Ⅲ・九四／兼輔集Ⅳ・五六／貫之集Ⅰ・八一八／袖中抄・七一四

【参考】作者名「かねすけの中納言」は所載欄の文献に一致する。後撰集等によれば、当該歌は一三九七番歌への返歌である。貫之の年齢は不詳だが、兼輔の方が大分年少だったらしいから、まだ私は若いのに、と戯れているのか。

一三九九 としごとにしらがのかずをますかぐみつゝぞゆきのともはましける

【異同】ナシ

【現代語訳】毎年毎年白髪の数が増えてゆき、くりかえし鏡を見ながら、「雪の友」、共に白髪になる友は増えたことでした。

【語句】〇ますかぐみ 「真澄鏡」の略とも、また「まそかがみ」の転ともいう。澄んだ、りっぱな鏡。ここは「増す」との掛詞。〇ともはましける 「ましける」は一応「増しける」と解したが、あるいは敬語「いましける」の意で、友がいらっしやったことでした、とわざわざ大袈裟にふざけたか。なお、所載欄の文献ではすべて「ともはしりける」とする。その場合は、一緒に白髪になってゆく友がいることを知ったという意になり、両者の絆の深さを再確認する詠となろう。

【所載】後撰集・冬・四七四／兼輔集Ⅲ・九五／兼輔集Ⅳ・五八／袖中抄・七一五

【参考】作者名無表記だが、所載欄の文献によれば、当該歌もまた貫之の一三九七番歌に対する兼輔の詠。

一四〇〇 いたづらにおひにけるかなたかさこのまつやわが身のはてをかたらむ
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】私はなすこともなく年老いてしまったことだなあ。あの高砂の松がわが人生の終わりを語ることであろうか。

【語句】○いたづらに 無為に。無駄に。○おひにけるかな 「生ひにけるかな」ではなく、「老いにけるかな」であろう。○たかさご 本来普通名詞だったがらしいが、古今集の仮名序では歌枕として扱われている。現在の兵庫県高砂市加古川の河口付近とされ、長寿の松とともに詠まれることが多い。「誰をかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに」(古今集・九〇九)。

【所載】続後拾遺集・雑上・九六八／万代集・三〇八二／貫之集Ⅰ・一九九／貫之集Ⅱ・九一

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集によれば屏風歌である。
〔以上五首担当 犬養廉・久保木〕

一四〇一 わかなつむ春のたよりにとしふればおいつむ身こそわびしかりけれ

【異同】ナシ

【現代語訳】若菜を摘むという春到来の知らせを聞くと、私は年をとっているの、(若菜ならぬ)老いを積み重ねるこの身にはわびしいことですよ。

【語句】○わかな 正月子の日あるいは春の初めに食用に摘む菜。若菜の「若」は「老い」の対。○春のたより 春が来たという知らせ。「たが里の春のたよりに鶯の霞にとづる宿をとふらん」(千載集・九六二)。○おいつむ身 老いを重ねる身。「積む」に「摘む」を掛ける。「なき名ぞといふ人もなし君が身においのみつむとぎくぞくるしき」(和泉式部なき名たつことありてなげきけるころ、若菜をつかはして侍りけるかへりごと) 大江雅致朝臣「万代集・三〇六四」。○わびしかりけれ やりきれないことだ。「わびし」は物事が思うようにならずつらくてやりきれない意。「春の日の光にあたる我なれど頭の雪となるぞわびしき」(古今集・八)。

【所載】貫之集Ⅰ・二八〇

一四〇二 たのまれぬうきよのなかをなげきつゝひけにおいぬる身をいかにせん
なりひら

【異同】 ナシ

【現代語訳】あてにならない憂き世の中を嘆きつつ、日ごとに老いてしまふこの身をどうしましようか。

【語句】○たのまれぬ あてにならない、期待できない。「うきながら消ぬる泡ともなりななむ流れてどだにたのまれぬ身は」（古今集・八二七）。○ひけに 「日増に」の意か。「ひけに」の用例はないが、万葉集には「いやひけに」「いやひにけに」「ひにけに」の用例がみられる。「恋にもそ人は死にする水無瀬川下ゆ我瘦す月に日に異に」（万葉集・六〇一（旧五九八））。所載欄の他文献では業平集Ⅱ以外、下旬は「日かげにおふる身をいかにせん」である。あるいはこちらが本来の形か。○おいぬる身 老いてしまふ我が身。

【所載】後撰集・雑二・一一二五／業平集Ⅰ・七三／業平集Ⅱ・一〇／業平集Ⅲ・四八／綺語抄・四六二

【参考】作者名「なりひら」は所載欄の文献に一致する。業平集・後撰集の詞書によると、我が身の不遇を前太政大臣（藤原良房か）に訴えた歌である。

一四〇三 おいぬとてなごかわが身をせめぎけむおいずはけふにあはましもの^かを^{かしゆき}

【異同】 ナシ

【現代語訳】年老いたといつて、どうして自分を恨んで嘆いたりしたのでしょうか。もし老いるまで長く生きなかつたとしたら、今日という日を迎えることはできなかつたでしょうよ。

【語句】○なごかわが身を どうして自分を。○せめぎけむ 「せめぐ」は、「恨み嘆く」意。「いたづらにあたらいのちをせめぎけんながらへてこそけふにあひぬれ」（拾遺愚草・一〇九九）。○あはましものか 「まし」は反実仮想。「か」は反語。長寿のおかげで、今日という晴儀に参加できたことを喜んでゐる。

【所載】古今集・雑上・九〇三／敏行集・二／暮春白河尚歯会和歌・一八／古今著聞集・一六七

【参考】作者名「としゆき」は所載欄の古今著聞集以外の文献に一致する。敏行集 古今集では寛平の御時に殿上人たちに大御酒を賜うて管弦の御遊びのあつた折に献上した歌である。古今著聞集では、承安二（一一七二）年に藤原清輔が白河宝莊厳院で催した尚歯会で、清輔が人々とともに誦した歌としてみえる。尚歯会は白楽天が行つたのが最初で、七叟（七人の高齢者）・垣下（相伴者）ともに詩歌をつくり遊宴する敬老会。通常は詩会で、和歌会は承安二年が最初。

とう三条の左大臣

一四〇四 うぐひすのかさねにぬふてふむめのはなりおもてかざむおひかくるやと

【異同】ナシ

【現代語訳】鶯が笠に縫いあげるといふ梅の花を折ってかざしとしよう。私の老いが隠れるかと思つて。

【語句】○とう三条の左大臣 源常。嵯峨天皇皇子。弘仁三（八一二）年もしくは弘仁五年生。仁寿四（八五四）年六月十三日没。○うぐひすのかさにぬふてふむめのはな 鶯が笠に縫うといふ梅の花。古今集一〇八一番「青柳を片糸によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠」を本歌とする。「ぬふてふ」は縫うといふ、の意。○おひかくるやと おひかくるやと。老いが隠れるかと思つて。

【所載】古今六帖・第六帖「むめ」四一二七／古今集・春上・三六／秀歌大体・一六／奥儀抄・四四四

【参考】作者名「とう三条の左大臣」は所載欄の文献に一致する。

一四〇五 かひがねを山ざとみればあしたづひきのいのちをもたる人ぞすみける

【異同】ナシ

【現代語訳】甲斐が嶺の山里を見ると、（千年の寿命を持つという）鶴の長寿をもった人が住んでいましたよ。

【語句】○かひがねを 「かひがね」は甲斐の国の山。「富士山」とする説と「白根山」とする説がある。所載欄の他文献では「かひがねの」「かひがねを」では意が通じないので、ここでは「かひがねの」で解する。○あしたづのいのち 千年の寿命をもつ鶴と同じ長寿。「あしたづ」は鶴の歌語。甲斐の国には鶴と同音の「都留の郡」があることにひかれたか。「君がため命かひにぞわれは行くつるのこほりに千世はうるなり」（新千載集・二一六六、古今六帖・一二八六）。

【所載】夫木抄・一四四三三／貫之集I・一六一／和歌童蒙抄・三三二

【参考】作者名「つらゆき」は所載欄の文献に一致する。貫之集の注釈書によると、延長二（九二四）年、左大臣藤原忠平の北の方、源順子（宇多天皇皇女。実頼の母。）の四十の賀の屏風歌か（田中喜美春・恭子説）。木村正中説は、延長二年、左大臣忠平室、源昭子（源能有女）の賀の屏風歌とみる。貫之集からこの屏風が名所絵屏風であることは明らかで、西本願寺本貫之集の題に「鶴」とあるのは、時雨亭文庫素寂本にある「つるのこほり」

からの脱落であろう。

〔以上五首担当 三浦〕

一四〇六 春にあふとおもふころはうれしくていまひとせをおいぞひける
みつね

【異同】ナシ

【現代語訳】春にあうと思う、その心はうれしくて、しかし一方、考えてみると、もう一年老いが加わることだなあ。

【語句】○春にあふと 新しい春を迎えると。春を迎えることはすなわち新年を迎えることである。○おいぞひける 満年齢と違って、数え年では年が改まると皆一斉に年齢が一歳増え、老いが添うことになる。

【所載】拾遺集・雑春・一〇〇〇／躬恒集Ⅰ・一三五／躬恒集Ⅱ・四六、二二八／躬恒集Ⅲ・三四／躬恒集Ⅳ・一四〇

【参考】作者名「みつね」は所載欄の文献に一致する。

おむな

一四〇七 いにしへのなむにしもてかくばかりこひにしづまむてわらはのごと
いしかはのひめ

【異同】なむにしもて―おんなにしもて（桂・大）

【現代語訳】年をとったばあさんで、どうしてこれほどまでに恋に溺れるのだろうか、まるで幼な子のように。

【語句】◎おむな 「おきな」につづく配列や、列記されている歌の内容、また万葉集等の表記から考え、ここは「をんな（女）」の意ではなく、「おうな（嫗）」の意であろう。老女。○をむにしもて 題や他本により「おむなにしても」の意に解する。老女でもって。「し」は強めの副助詞か。「もて」も「以て」の意か。なお、所載欄の万葉集には「嫗尔為而也 オウナニシテヤ」とあり、自嘲的な口調の歌で、ここは疑問・反語の助詞「や」の欲しいところであろう。○てわらは 手で抱くほどの幼児。

【所載】万葉集・一二九 古之 嫗尔為而也 如此許 恋尔将沈 如手童児 イニシヘノオウナニシテヤカクバ

カリコヒニシヅママタワラハノゴト　ふりにしおみなにしてやかくばかりこひにしづまむたわらはのごと
【参考】作者の「いしかはのひめ」については、万葉集に「天津皇子宫侍石川女郎」とある。

一四〇八　おちつもる松をひろひてとしふればおいのつま木と人やみるらむ
たゞふさ

【異同】ナシ

【現代語訳】落ち積もる松を拾って年月を過ごしているの、あれは老いというたきぎを拾っているのだと人は見ているであろうか。

【語句】○おちつもる松をひろひて　松が落ち積もるとはどういう状態をいうのか、またそれを拾うことが題の「おむな」とどうかかわるのか、いまひとつわかりにくい。○おいのつま木　「つま木」は、たきぎにする小枝。木ぎれ。あるいは「老いの妻」が掛けられているか。

【所載】夫木抄・一六七―〇

【参考】作者名「たゞふさ」は、所載欄の夫木抄に「藤原匡房」とある。「たゞふさ」が正しければ、「藤原忠房」は古今集作者で、中古歌仙三十六人の一人。

一四〇九　もゝとせにおいくちひそみなりぬともわれはわすれずこひやますとも
やかもち

【異同】われはわすれず―我は忘れし（大）

【現代語訳】あなたが百歳にもなり、年をとって口がゆがむようになっても、私は忘れないでしょう、恋い募ることはあつても。

【語句】○もゝとせに　「なりぬとも」にかかる。○おいくちひそみ　老い、口ひそみ。「ひそみ」は、ゆがむ、しかめる、べそをかく意。○こひやますとも　たとえ恋が増したとしても。「や」は間投助詞。「とも」は逆接の仮定条件を表す接続助詞。

【所載】万葉集・七六七（旧七六四）百年尔　老舌出而　与余牟友　吾者不厭　恋者益友　モモトセニオイシタ
イデテヨヨムトモワレハイトハジコヒハマストモ　ももとせにおいしたいでてよよむともわれはいとはじこひは

ますとも／和歌童蒙抄・三一二

【参考】作者名「やかもち」は所載欄の万葉集に一致する。紀女郎が家持に贈った歌二首、神さぶと否にはあらずはたやはたかくしてのちにさぶしけむかも玉の緒を沫緒に縊りて結べらばありてのちにも逢はずあらめやもに対する「和ふる歌」となっている。

おや

一四一〇 たらちねのおやのまかせで君もわれあふとはなしにとしぞへぬべき

【異同】ナシ

【現代語訳】親が自由にさせてくれないで、あなたも私も、逢うこともなく年が過ぎてしまうことでしよう。

【語句】◎おや 父親、両親、あるいは広く祖先も意味するが、どちらかというと母親を指すことが多い。特に「たらちねの」に導かれる場合はほとんど母親と考えてよいか。○たらちねの 「おや」「はは」にかかる枕詞。○おやのまかせで 親がまかせないで。「おや」が主語なので、「まかせて」は「まかせで」と打ち消しに読むべきであろう。

【所載】古今六帖・第五帖「としへていふ」二五六〇／万葉集・二五六二（旧二五五七）垂乳根乃 母白者 公毛余毛 相鳥羽梨丹 年可経 タラチネノハハニマウサバキミモアレモアフトハナシニトシハヘヌベシ たらちねのははにまをさばきみもあれもあふとはなしにとしぞへぬべき

〔以上五首担当 久保木〕

いへのおとくろまろ

一四一一 たらちねのおやのかふこのまゆごもりいぶせくもあるかいもにまかせて

【異同】いへのおとくろまろ―いゑのをとくろまろ（大）

【現代語訳】（親の飼う蚕がまゆの中にもつて鬱々とした気分だろうが）あなたにまかせていては逢うこともできず、気分が晴れないことだ。

【語句】○たらちねの 「親」にかかる枕詞。○おやのかふこ 親の飼う蚕（こ）。万葉集では当該歌の他二例。

「たらつねの母がかふこのまよごもりこもれる妹を見むよしもがも」(二五〇〇(旧二四九五))、「あらたまの年はきさりて……たらちねの 母がかふこの まよごもり いきづきわたり……」(三二七二(旧三二五八))。○まゆごもり 蚕が繭の中にこもること。○いぶせくもあるか 「いぶせし」は気分が晴れ晴れとしないで、鬱陶しい気持ちをいう。「こもりのみ居ればいぶせみ慰むといでたちきげばきなくひぐらし」(万葉集・一四八三(旧一四七九))のように、上三句は閉じこもってばかりいると気分が晴れないということを踏まえた上で「いぶせくもあるか」を導く序詞。○いもにまかせて あなたに任せて。「いも」は男性から相手の女性をさすことば。「まかせて」は「春の田を人にまかせて我はただ花に心をつくるころかな」(拾遺集・四七)のように相手に意のままに委ねるといふ意。万葉集の「いもに逢はずして」の方が、歌意の整合性は高い。

【所載】古今六帖・第五帖「わぎもこ」三〇八七／古今集假名序／拾遺集・恋四・八九五／万葉集・三〇〇四(旧二九九一)垂乳根之 母我養蚕乃 眉隠 馬声蜂音石花蜘蛛荒鹿 異母二不相而 タラチネノオヤ(ハハ)ガカフコノマユゴモリイブセクモアルカイモノアハズシテ たらちねのははがかふこのまよごもりいぶせくもあるか いもにあはずして／人麿集I・一八五／人麿集II・三二二／和歌童蒙抄・八四四

【参考】作者名「いべのおとくろまろ」とあるが、所載欄の万葉集に作者名はない。

一四二二 人のをやのころはやみにあらねどもこをおもふみちにまどひぬるかな
かねすけ

【異同】まとひぬるかな—まよひぬるかな(御・桂)

【現代語訳】人の親の心というものは闇ではないのに、子を思う道に迷う、子を思うあまり分別がつかなくなる
ことよ。

【語句】○人のをやの 人のおやの。人の親の。○ころはやみにあらねども 心は暗闇ではないのだが。「かさくらす心のやみにまどひにき夢うつとは世人さだめよ」(古今集・六四六)。○まどひぬるかな まよつてしまふことよ。惑乱してしまふことだ。道に迷うといふ意の「まどふ」に分別のつかない意の「まどふ」をかける。「まどふ」は「闇」「道」の縁語。

【所載】後撰集・雜一・一一〇二／兼輔集I・一二六／兼輔集II・一〇六／兼輔集III・九六／兼輔集IV・七七／兼輔集V・一一一／前十五番歌合・一一／三十人撰・五三／三十六人撰・六七／深窓秘抄・八六／宝物集・四五八／大和物語・四五段・六一

【参考】作者名「かねすけ」は所載欄の文献に一致する。

一四一三 たらちねのおやのまもりとあひそふるこゝろばかりはせきなどぐめそ

【異同】ナシ

【現代語訳】（私の身は子と共にには行けないが、せめて）親が「お守り」として添える心だけは塞き止めないでほしい。

【語句】○まもり お守り。その人を守護してくれるもの。「見るほどのまもりと思へどみをごろもこだにかたみのなきぞ悲しき」（赤染衛門集・五四五）。○こゝろばかりは 心だけは。身は共に行けないが心だけは、という意。○せきなどぐめそ 塞きとめないでほしい。「せきとどむ」は水などの流れを堰などで遮ること。「な……そ」は禁止の語法。

【所載】古今集・離別・三六八

【参考】所載欄の古今集の詞書には「小野千古が陸奥のすけにまかりける時に、母のよめる」とある。

一四一四 おなじいろのまつと竹とはたらちねのおやこひさしきためしなりけり
つらゆき

【異同】ナシ

【現代語訳】同じ常緑の松と竹とは、親子が幾久しく暮らしていくというしるしなのだなあ。

【語句】○おなじいろのまつと竹とは 同じ常緑の松と竹とは。松も竹も常緑なので長寿を寿いだ歌は多い。「色かへぬ松と竹とのすゑの世をいづれひさしと君のみぞ見む」（拾遺集・二七五）。○おやこ 親子。貫之集の詞書によると、藤原忠平とその娘貴子。参考欄参照。○ためしなりけり しるしなのだなあ。「おきかはる霜にまぎれて立つ霧は久しき秋のためしなりけり」（公任集・一三五）。

【所載】夫木抄・一六五五八／貫之集Ⅰ・三三四、八八二／貫之集Ⅱ・五六

【参考】作者名「つらゆき」は、所載欄の文献に一致する。所載欄の貫之集Ⅱには「忠平と申す太政大臣の東なる殿より西なる殿にうつり給はんとて、かの西なる殿のひとつ屋に御むすめの内侍のかみのおはするかたと我がおはすべきかたの隔ての障子に松竹鶴など絵にかきてありけるを、題にてよませてかかせ給ひける」とあり、忠

平と娘貴子とが同じ邸宅に住むことになった折の歌と知られる。

一四一五 たらちねのおやにまかせでわがもたるころはゆかずきまがまに／＼

【異同】ナシ

【現代語訳】親の意向に従わないで、私の気は進みませんが、あなたの思うとおりにいたしましょう。

【語句】○おやにまかせで 親の思う通りに従わないで。「まかす」は「相手の意のままに委ねる」という意。

「で」は打消の助詞。○ころはゆかず 気持ち晴れない。さつぱりとしなない。○きまがまに／＼ あなた
の思うままにいたしましょう。

【所載】万葉集・二五四二(旧二五三七) 足千根乃 母尔不知所 吾持留 心者吉恵 君之随意 タラチネノハ
ハ(オヤ)ニシラセズ(セデ)ワガモタルココロハヨシエキミガマニマニ たらちねのははにいらえずわがもて
るころはよしゑきまがまにまに

【参考】万葉集・二五四二(旧二五三七)には「たらちねの母にいらえずわがもてる心はよしゑ君がまにまに」という類歌がある。また、同じく万葉集・三二九九(旧三二八五)には「たらちねの母にもいはずつつめりし心はよしゑ君がまにまに」という歌もある。

〔以上五首担当 杉本・尾高〕

うのなぬ

一四一六 うなひこが神ふりつるふぢのはなきるなつかしく思ほゆるかな

【異同】きるなつかしく―きはなつかしく(桂)

【現代語訳】少女の髪がゆれているような藤の花、(その花のような)衣を着ると、あの子がなつかしく思われる。

【語句】◎うなぬ 髪を襟足に垂らしたままにしている子供の髪型、また髪をそのようにしている子供のこと。髪をあげずに振り分け髪のままにしていることを「はなり」言い、合わせて「うなぬはなり」と言った。特徴である髪型を比喻した歌が多い。○うなひこ うなぬこ。髪を「うなぬ」型にした子ども。○神ふりつる 字足らずでこのままでは意味不通。所載欄の文献に拠り「かみふりしつる」として解す。髪ふりしつる。振り分け

髪にしている、の意か。○きるなつかしく 着る懐かしく、か。意が通りにくい、仮に解した。所載欄文献には「袖なつかしく」とある。

【所載】夫木抄・二二二二／和歌童蒙抄・二九八

一四一七 さねかづらいまするいもがうらわかみゑみゝいかりみきつゝひもとく
やかもち

【異同】きつゝひもとくーきつゝひもと(御)

【現代語訳】さねかづらを今(初めて) 付ける愛しい子はうら若いので、笑ったり、怒ったりして、着ている紐を解く。

【語句】○さねかづら びなんかづら。さなかづらとも言いツル性の植物。○ゑみゝいかりみ 笑みみ怒りみ。笑ったり怒ったりして。「み」は連用修飾語を作る接尾語。対照的な動作が並行して繰り返される状態を表す。

○きつゝ 着つつ、か。

【所載】万葉集・二六三四(旧二六二七) 波祢蘊 今為妹之 浦若見 咲見・見 著四紐解 ハネカヅライマ スルイモガウラワカミエミミイカリミキテシヒモトク はねかづらいまするいもがうらわかみゑみみいかりみ つけしひもとく／夫木抄・一三三八七／袖中抄・一〇〇四

【参考】作者名「やかもち」とあるが、所載欄文献には作者名はなく、その根拠は不明。

一四一八 たちばなのてれるながやにわがゐねしうなゐはなれはかみあげつらん

【異同】かみあげつらん―はかみあげつらん(大)

【現代語訳】橘の実の光っている長屋に誘って共寝をしたあの少女は、今はもう成人して髪を上げただろう。

【語句】○たちばなのてれるながや 照り光っている橘のそばにある長屋。長屋は細長い形の家。○わがゐねし 我が率寝し。私が誘い、共寝をした。○うなゐはなれは 意味不通。所載欄万葉集の「うなゐはなり」に拠って解した。一四一六番歌参照。○かみあげつらん 髪を上げたことだろう。「かみあげ」は女の子が成人に達した時、それまで垂らしていた髪を結い上げることという。裳着と同時に行為される。「くらべこし振分髪も肩すぢぬ君ならずして誰かあぐべき」(伊勢物語・二三段・四八)。

【所載】古今六帖・第二帖「てら」一四三三ノ万葉集・三八四四（旧三八二二）橘 寺之長屋尔 吾率宿之
童女波奈理波 髪上都良武可 タチバナノテラノナガヤニワガキネシウナキハナリハカミアゲツラムカ たちば
なのてらのながやにわがぬねしうなるはなりはかみあげつらむか、三八四五（旧三八二三）橘之 光有長屋尔
吾率宿之 宇奈為放尔 髪挙都良武香 タチバナノテレルナガヤニワガキネシウナキハナリハカミアゲツラ
ムカ たちばなのてれるながやにわがぬねしうなるはなりにかみあげつらむかノ夫木抄・一六四二六ノ和歌童
蒙抄・二九七

わかいこ

一四一九 こころもでにとりとゞこほりなくらめとまされるわれをきていかにせむ

【異同】ナシ

【現代語訳】（児は）袖にまとわりすがって泣くのだろうが、それにまさって嘆く私をあとに残してどうなさるのか。

【語句】◎わかいこ 「わかいこ」では他に用例を見出せないが、「若い子」または「稚い子」の意と思われる。みどり子、幼子の意。○こころもで 袖。○とりとゞこほり 動作の邪魔になる、からみつく。○なくらめも意味不通。所載欄の万葉集にはこの部分「なくこにも」とある。古今六帖でこの歌が「わかいこ」の題の下にあるところを見れば、本来この第三句は「なくこにも」であったのだと思われる。但し、ここではミセケチ傍記に拠らない本文「なくらめど」で訳した。泣くのだろうが。○われをきて このままでは意味不通。所載欄万葉集に拠り「われをおきて」と解する。私を残して。

【所載】万葉集・四九五（旧四九二）衣手尔 取等騰己保里 哭兒尔毛 益有吾乎 置而如何将為 コロモデニトリトドコホリナクコニモマサレルワレヲオキテイカニセム こころもでにとりとゞこほりなくこにもまされるわれをおきていかにせむ

【参考】この歌が「わかいこ」の題の下にあるのは、語句欄でも述べたとおり、第三句が本来「なくこにも」であったからであろう。

一四二〇 かつ見つゝあな井におちるみづとりのまどへるこひもわれはするかな

【異同】ナシ

【現代語訳】姿を見ている一方で、穴井に落ちる水鳥が戸惑っているように、どうしていいか分からない恋を私はしているのだ。

【語句】○かつ見つゝ 一方では姿を見ていながら。「かつ」は、ある行動や心情が並行して存在する状態を表す。○あな井におちる 穴井に落ちこんだ。「あな井」は穴のような井戸。そこに落ちるとなかなか外に出られずもがかなければならない。「おちる」は「おちいる」が縮まった語。○みづとりの 所載欄の和歌童蒙抄にはこの部分「みどりこ」とある。古今六帖でこの歌が「わかいこ」の題の下にあるところを見れば、本来この第三句は「みどりこの」であったのであろう。但し、ここでは本文通り「みづとりの」で訳した。○まどへるこひ 心かき乱される恋。二句、三句は「まどふ」を導く序詞。

【所載】和歌童蒙抄・二九六

【参考】この歌が「わかいこ」の題の下にあるのは、語句欄でも述べたとおり、第三句が本来「みどりこの」であったからであらう。

〔以上五首担当 平野・吉田〕

くるま

ひろかはの女わう

一四二一 こひくさをちからくるまになゝくるまつみてもあまるわがこゝろかな

【異同】ナシ

【現代語訳】草の生い茂るように激しくつのる思いを、荷車に何台積んでも余ってしまった、そんな計り知れないほど激しい私の恋の恋どころであることよ。

【語句】◎くるま 心棒を中心にして、その周りを回るようになっていた輪状のもの。また車輪を回して、動かしたり進めたりするようになつての乗り物や運搬具。平安期では牛車を指す例が多い。○こひくさ 恋の募ることを草の茂るのに喩えた語。「七車積むとも尽きじ思ふにもあまるわが恋草は」(狭衣物語・一八九)。○ちからくるま 物を積んで人の力で引く車。荷車、大八車の類。「なげきつむちから車のわをよわみたちめぐるべき心地こそせね」(散木奇歌集・一四八九)。○なゝくるま 七車。「七」は数の多いことを表す序数。「ななくるま積むこひぐさの重ければうしとみれどもやるかたもなし」(江帥集・二三四)。○つみてもあまるわ

がこゝろかな 積んでもなお余る、私の恋のこころであるよ。恋の思いの激しさを表す。

【所載】新勅撰集・恋二・七二七／万葉集・六九七（旧六九四）恋草呼 力車二 七車 積而恋良苦 吾心柄
コヒクサヲチカラクルマニナナクルマツミテコフラクワガココロカラ こひくさをちからくるまになくなるまつ
みてこふらくわがこころから／古来風体抄・五七

【参考】作者名「ひろかはの女わう」は、所載欄の文献に一致する。

一四二二 をぐるまのまひてにほひのたふますはにしきのひもとをかむとぞ思

【異同】たふますは―たふさすは（御・桂・大）

【現代語訳】牛車が巡って来て、（乗っている人の香の）匂いが絶えないとしたら、下紐を解いて睦び合いたいと思うことだ。「第三句「たふますは」は所載欄の袖中抄「たえせずは」で解した。」

【語句】○をぐるま 小車。車、特に牛車のこと。「をんなにかはりて／よひよひに錦のひもはとくれどもなどをぐるまの音だにもせぬ」（江帥集・二八一）。○まひてにほひの 「舞ひて匂ひの」か。明確に意がとりにくい。「舞ふ」には巡る、あちこち走り回るの意がある。「良正独り因縁を追慕して、車の如くに常陸の地に舞ひ廻る。」（将門記）。○たふますは 意味不詳。所載欄の袖中抄により「たえせずは」で解した。絶えないとしたら。「せきとむる涙いづみに絶えせずは流るるみをぞとどめざりける」（伊勢集・二九三）。○にしきのひもとかとんとぞ思 錦の紐を解いて共寝をしようと思う。「錦の紐を解く」は、錦の下紐を解いて男女が共寝をすること。「小車錦の 紐解かむ 宵入（よひり）を忍ばせ夫（せ）よやな 我忍ばせ子 我忍ばせ そよ まさに寝てけらしも」（風俗歌・小車）。「にしきの」と冠されたのは、初句の「をぐるま」とともに「小車錦（小車の形を織り出した錦で、伊勢神宮の神宝が包まれる）」という語からの発想。

【所載】袖中抄・六〇六

一四二三 わがのもしことうしとやおもひけんくさばかりけるつゆのいのちを

【異同】わかのもし―わかのみし（御・桂・大）

【現代語訳】私が乗ったことを、つらく嫌だと牛は思ったのだろうか（それで死んだのだろうか）。草葉に置いて

た、このようにはかない露のような命であったことよ。「初句「わがのもし」は、「わがのりし」で解した。」

【語句】◎うし 偶蹄目ウシ科の家畜。大形で、雌雄ともに二本の頭角をもち、四肢は短い。草食性。和歌では牛車を引く動物として詠まれるのが一般的で、「憂し」との掛詞で詠む例、あるいは法華経譬喩品の故事に拠り、火宅から救済する大乘仏法を「牛の車」に喩える例もある。○わがのもしことをうしとやおもひけん 「わがのもし」は不審。他本の「わがのりし」に拠って解した。私が乗ったことを牛は嫌だと思ったのだらうか。「うし」は「牛」と「憂し」の掛詞。所載欄の文献によれば、牛を人から借りた後、その牛が死んだことを聞いて詠んだ歌。○くさばにかゝるつゆのいのちを 草葉にかかる露のようにはかない命であることだ。「かゝる」は露が置く意と「かくある」の意の掛詞。「たのむ世か月のねずみのさわぐまのくさばにかかるつゆのいのちは」（高光集・三四）。「を」は、牛の死に心動かされたことを表す間投助詞。

【所載】後撰集・雑二・一一三〇／大和物語・一〇九段・一七二

【参考】古今集の元永本卷十九・一〇六八の次にもこの歌を載せる。

【異同】ナシ

【現代語訳】（あしひきの）大和琴なので、感興が湧いて心楽しく弾いたことだ。——大和国の強健な牡牛なので、感興が湧いて今日は心楽しく牽いたことだ。

【語句】○山とことひのうし 「大和の国のことひの牛」の意に「大和琴」を掛けた。「ことひのうし」は、強健で大きな牡牛。○おもしろくこそ 「おもしろし」は、目の前が明るくなる感じを原義とし、音楽や花や月などの景、絵や詩歌、催しなどに接して引き起こされる、明るく晴れやかな気持ちを表す言葉（松尾聰「中古の作品における「おもしろし」——源氏物語を中心にして」『山岸徳平先生頌寿中古文学論考』有精堂、一九七二年）。牛を牽くような場合に用いられた例はなく、当該歌では琴の文脈に導かれた表現となっている。○けふはひきけれ 今日はいいたことだ。「ひく」は牛を「牽く」と琴を「弾く」の掛詞。

【所載】夫木抄・一二九六〇／和歌童蒙抄・八〇八

むま

かさのかなむら

一四二五 しはつ山いはさかばかりわれのれるむまぞつまづくいへこひぬらし

【異同】かさのかなむら—ナシ(御・大)

【現代語訳】四極山(を越えていく道)は岩の坂ばかりで、私の乗っている馬がつまずく。家の者が私を恋しく思っているにちがいない。

【語句】◎むま ウマ科の家畜。体高一・二から一・七メートルくらい。首は長く、まえがみとたてがみがあり、尾は長毛で覆われる。草食性。古典文学では乗るための動物として登場する。平安期には歌語「駒」が主として用いられ、古今六帖でも八首中六首は「こま」と詠む。○しはつ山 四極山。撰津、三河の両説があるが、現在地未詳。「四極山うち越え見れば笠縫の嶋こぎかくる棚無し小船」(万葉集・二七四(旧二七二))。○いはさかばかり 岩の坂ばかり。○むまぞつまづく 馬の足がつまずく。「妹が門出入の河の瀬をはやみあが馬つまづく家思ふらしも」(万葉集・一九五(旧一九一))とあるように、旅行中馬がつまずくのは、留守宅の者が思っているしという俗信があった。

【所載】万葉集・三六八(旧三六五) 塩津山 打越去者 我乗有 馬曾爪突 家恋良霜 シホツヤマウチコエケバワガノレルウマゾツマヅクイヘコフラシモ しほつやまうちこえゆけばわがのれるうまぞつまづくいへこふらしも/夫木抄・八九〇八/和歌童蒙抄・八〇二/和歌色葉・二二六

【参考】作者名「かさのかなむら」は、所載欄の文献に一致する。

〔以上五首担当 斎藤・諸井〕

一四二六 君こふといねぬあさけにたがのれるこまのあしをとわれにきかずな

【異同】ナシ

【現代語訳】あなたを思って眠らなかつた夜明けに、誰が乗った駒の足音だというのか、私に聞かせないで。

【語句】○いねぬあさけ 眠らなかつた夜明け。「あさけ」は「朝明(あさあけ)」の変化した形で、夜明け方。

「物思ふといねぬ朝明に霍公鳥鳴きてさ渡るすべなきまでに」(万葉集・一九六四(旧一九六〇))。○たがのれるこまのあしをと たがのれるこまのあしをと。誰が乗っている馬の足音なのか。「こま」は、一四二五番歌の語句欄の「むま」参照。所載欄の万葉集には「ぞ」が添えられるが、当該歌には「たが」に呼応する助詞がない。ここの蹄の音は、よその男が他の女のもとから帰るのを羨んだとも、相手の男がよその女に通って帰るの

を恨んだともとれるが、一応前者とみる。

【所載】万葉集・二六六二(旧二六五四) 君恋 寝不宿朝明 誰乗流 馬足音 吾聞為 キミコフトイネヌアサケニ(ヌレドネラレズ)タガノレルウマノアシオトゾワレニキカスル きみにこひいねぬあさけにたがのれるうまのあしおとぞわれにきかする

一四二七 ませごしにむぎはむこまのはるぐとおよばぬこひもわれはするかな

【異同】はる／＼と―はる／＼に(御・桂・大)

【現代語訳】柵越しに麦を食べる駒のように、はるかに及ばない恋を私はすることだなあ。

【語句】○ませごしにむぎはむこまの 柵越しに麦を食べる馬の。「こま」は、子馬、馬の総称。一四二五番歌の語句欄の「むま」参照。「ませ」は、「馬柵(ませ)」。馬が逃げださないように作った柵。「馬柵越しに麦食む駒の罵らゆれどなほし恋しく思ひかねつも」(万葉集・三二一〇(旧三〇九六))。「これ、ませ越しにさぶらふ」(枕草子・二二九段、三條の宮におはしますころ)。初・二句は「はる／＼と」を導く序詞。○はる／＼とはるばると。はるかに遠いさま。「天雲のはるばるみゆるみねよりも高くぞ君を思ひそめてし」(元良親王集・八七)。柵越しに馬が首を伸ばして麦を食べようとすることがはるかに及ばないことを、遠く及ばぬ恋に転ずる。○およばぬ 手の届かない。

【所載】ナシ

【参考】万葉集には「くへ越しに麦はむ子馬はつはつにあひ見し子らしあやにかなしも」(三五五八(旧三五三七))、「うませ越し麦はむ駒のはつはつににひ肌ふれしころしかなしも」(三五五九(旧三五三七、或本歌))の類似した歌がある。

一四二八 わがこまのあしがきはやくもぬにもかくれ行ともまたむわぎもい

【異同】ナシ

【現代語訳】私の駒の足が早い、雲の彼方に隠れてしまおうとしても、待っているだろう、いとしい妻は。

【語句】○こま 一四二七番歌、一四二五番歌参照。○あしがき 「脚掻き」は、馬が勇んで前足で地面を蹴るようにすること。「青駒が足掻きを早み雲居にぞ妹があたりを過ぎて来にける」(万葉集・一三六(旧一三六))。

○くもぬにもかくれ行とも 雲居にもかくれてゆくとも。「くもぬ（雲居）」は、雲、雲のあるところ、大空。馬の速度が速いので雲のある所まで行つて隠れてしまふとしても。所載欄の万葉集歌は、女性を訪れる前の男のはやる心を歌っているが、当該歌のこの措辞は、第五句「またむわぎもこ」との繋がりが今一つ明確でない。

【所載】万葉集・二五一五（旧二五一〇）赤駒之 足我根速者 雲居尔毛 隠住序 袖卷吾妹 アカゴマノアガキハヤクバクモ申ニモカクレユカムゾソデマク（マカム）ワギモ あかごまがあがきはやけばくもぬにもかくりゆかむぞそでまけわぎも／人麿集Ⅲ・五三三

一四二九 とをくありて雲ぬにみゆるいもがいへにはやくいたらむあゆめくろこま
ひとまろ

【異同】いもかいへに―いもかうへに（御・大）

【現代語訳】はるか遠方にあつて雲のかなたにみえる愛しい妻の家に、早くたどり着きたい、歩め、黒駒よ。

【語句】○とをくありて とほくありて。はるか遠いところにあつて。○雲ぬ 一四二八番歌参照。○くろこま 黒駒。黒毛の馬。「こま」は一四二五番歌の語句欄の「むま」参照。

【所載】拾遺抄・恋上・三〇一／拾遺集・恋四・九一〇／万葉集・一二七五（旧一二七一）遠有而 雲居尔所見 妹家尔 早将至 歩黒駒 トホクアリテクモ申ニミユルイモガイヘニハヤクイタラムアユメクロコマ とほくありてくもぬにみゆるいもがいへにはやくいたらむあゆめくろこま、三四六〇（旧三四四一）麻等保久能 久毛為尔見由流 伊毛我敝尔 伊都可伊多良武 安由売安我古麻、マトホクノクモ申ニミユルイモガイヘニツカイタラムアユメアゴコマ まとほくのくもぬにみゆるいもがいへにいつかいたらむあゆめあがこま／人麿集Ⅰ・二二三／人麿集Ⅱ・五二七／人麿集Ⅲ・六二四

【参考】作者名「ひとまろ」は、拾遺集に一致する。拾遺抄では「おとまろ」、万葉集では「柿本朝臣人麿之歌集」の歌、人麿集Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに載る。

一四三〇 久かたの月げのこまをうちはやめきぬらんとのみ君をまつかな

【異同】ナシ

【現代語訳】月毛の駒を急がせてやってくるにちがいない、とばかり思つてあなたを待つことだ。

【語句】○久かたの 天、空、月、光などにかかる枕詞。○月げのこま 月毛の駒。「月毛」は、鶺鴒（とき）。古名は鶺鴒（つき）の羽のような赤みのある毛色。「秋の夜の月毛の駒よわが恋ふる雲をかけれ時の間も見ん」（源氏物語・明石）。○きぬらん 来るところにちがいない。「ぬらん」は、確述・強調の「ぬ」に現在推量の「らん」を続けた形。……てしまっているだろう。きつと……いるだろう。「夜ふけ侍りぬらむ。とく帰らせ給へ。」（蜻蛉日記・中巻）。

【所載】ナシ

〔以上五首担当 中野〕

一四三二 おがさはらへみのみまきにあるゝむまもとればぞなつくこのわがそでとれ コナカ

【異同】ナシ

【現代語訳】小笠原の速見の御牧の荒馬も捕えればなつく。あなたも私の袖を取ってなつてくたさい。

【語句】○おがさはら 甲斐国の御牧の名。今の山梨県北杜市明野町に小笠原の地名があることから、この辺りとする説がある。○へみのみまき 速見の御牧。和名抄には、甲斐国巨麻郡の項に「速見」（訓は「倍見」とある。所載欄の文献は「みづのみまき」または「へみのみまき」とする。○なつく 馬が馴れておとなしくなる様。また、人と人が慣れ親しみ親密になる様をいう。○このわがそでとれ この我が袖取れ。（荒馬がなつくように）あなたも私の袖をとつてなつてくたさいという意かの恋の歌か。平中物語には次のような男女の贈答がある。「春の野に荒れてとられぬ駒よりも君が心ぞなつけわびぬる」、「とる袖のなつくばかりに見えばこそつみのの駒も荒れまざるらん」（平中物語・三三段・一二五、一二六）。

【所載】和歌体十種・一／和歌十体・一／奥儀抄・一〇五／袖中抄・一五六

【参考】夫木抄一〇一一六は「へみのみまき」の項で古今六帖第二帖歌として当該歌を引くが、第五句を「なつてぞとる」とする。

一四三三 とへあまりよつよをこゆるたつのこま君すさめずはおいはてぬべし

【異同】ナシ

【現代語訳】十八丈（の谷）を飛び超える竜のような立派な馬も、あなたが心に留めないならば老い果ててしま

うでしよう。

【語句】○とへあまりよつよ 意味不明。所載欄の文献に拠り「とつゑあまりやつゑ」として解した。「とつゑ(十丈)あまりやつゑ(八丈)」は、十八丈の意。「丈」は長さの単位。令義解の雑令に「十尺為丈」とあることから、一丈は十尺にあたる。○たつのこま 漢語「竜馬」の訓読。優れて立派な馬。○君すさめずは あなたが心に留めてくれないならば。「すさむ」はそのものの良さをもてはやし、愛すること。

【所載】夫木抄・一二九九七／日本紀竟宴和歌・二六

【参考】古今六帖では詠歌事情が不明であるが、所載欄の日本紀竟宴和歌に拠れば、当該歌は、延喜六(九〇六)年に、日本紀講の講了後に催された竟宴で詠まれた歌である。日本書紀の卷十九、欽明天皇七(五四六)年七月の条にある、十八丈の谷を越えたという優れた馬の話をもとに詠んだ歌。

一四三三三 たちばなのてらのながやにひとめみしうなるはいまはかみあげつらん
てら

【異同】ナシ

【現代語訳】橋の寺の長屋で一目見たうない髪の少女は、もう今は成人して髪を上げてしまっただろうか。

【語句】◎てら 仏教の礼拝や修行のために仏像を安置し、僧や尼が住まう建物。○たちばなのてら 奈良県高市郡明日香村にある橋寺。日本書紀の卷二九、天武天皇九(六八一)年四月の条に「橋寺尼房失火以焚十房。」とあることから、尼寺であったと考えられる。○ひとめみし 恋歌に用いられる表現。「ひとめみし人はたれともしら雲のうはのそらなる恋もするかな」(千載集・六四七)。○うなる 髪を垂らした子供の髪型。また、その髪型をした子供を指す。○かみあげつらん 既出一四一八番歌参照。

【所載】古今六帖・第二帖「うなる」一四一八番既出

一四三四 はつせめとおもひたつたの山とほみこまにとづめてをるすべもなし
ヒキトメテ

【異同】ナシ
【現代語訳】初瀬へと思ひ立つ、というその竜田山が遠いので、駒に(わが身を)留めてその場に居ることもできないことだ。

【語句】○はつせめ 「初瀬」は大和国城上郡長谷郷。今の奈良県桜井市初瀬を中心とした地域、またはこの地にある長谷寺を指す。第一句は所載欄の文献に拠り「はつせへ」として解した。○おもひたつたの山 「たつ」に「思ひ」立」と「竜田山」を掛ける。「はつせめとおもひ」は「たつたの山」を導き出すための措辞。○こまにとめて 「駒に（我が身を）留めて」か。解しにくい。所載欄の文献は「こまひきとめて」。○をるすべもなし 居るすべもなし。その場に留まる手段がない、留まることができないう意味か。歌意が通りにくい。

【所載】 夫木抄・一六四四三

【参考】 類似歌に「いつしかとおもひたつたの山とほみこまひきとめてくるすべもなし」（夫木抄・一六八七三）がある。

一四三五 さゝなみやしがの山ぢのつづらおりくるひとたえかれやしぬらん

【異同】 くるひとたえーくるひとたえて（大）

【現代語訳】 志賀の幾重にも曲がりくねる山道。来る人が途絶え、人の足が遠のいてしまふのだろうか。

【語句】○さゝなみや 「志賀」に掛かる枕詞。○しがの山ぢ 京都の北白河から志賀の里へ出る山道。志賀寺参詣にも利用された。○つづらおり 幾重にも折れ曲がる山道のさま。「近うて遠きもの……鞍馬のつづらをり」といふ道（枕草子）「近うて遠きもの」。○くるひとたえ 来る人絶え。大久保本、所載欄の文献は「くるひとたえて」。字足らずなので、これらに拠って「くるひとたえ」と見る。「くる」は「来る」とつるを「繰る」を掛ける。「たゆ」は人の行き来が途絶える意とつるが切れる意を掛ける。○かれ 「離れ」と「枯れ」を掛ける。当該歌の上三句は「くる」を導く序。また、「繰る」「絶ゆ」「枯る」は「つづら」の縁語。

【所載】 夫木抄・八八九八

〔以上五首担当 犬養悦・市東〕

一四三六 しらかはゝたましけりともみえなくくものはやしをあらしつるかな

【異同】 あらしつるかなーあかしつるかな（御・桂・大）

【現代語訳】 白川は玉を敷いているとも見えないのに、雲林院を明るくしていることだなあ。

【語句】○しらかは 白川。山城国の川。比叡山四明岳と如意岳の間の山中に源を發し、末は賀茂川に注ぐ。上

流域から白川石と呼ばれる白く美しい花崗岩を産出、そのため川砂が白く見えるので白川の名がある。○たましけり 玉敷けり。玉を敷いている。○くものはやし 雲林院のこと。平安京外船岡山の東にあった。はじめは淳和天皇の離宮、仁明天皇皇子常康親王へ伝領され、親王の出家により寺とされた。のち遍照に付嘱されて元慶寺の別院となり、菩提講の催される寺として知られるようになる。十四世紀、大徳寺の創建に際しその子院として施入された。「木のもとに織らぬ錦のつもれるは雲の林のもみぢなりけり」（後撰集・四〇九）。○あらしつるかな 底本は「ら」の右側に小さく「か」の傍書がある。異同欄で見るとおり他本はみな「あかし」なので、ここでは「あかし」として現代語訳した。「あかし」は他動詞「明かす」の連用形と見ておく。明るくしているなあ。

【所載】夫木抄・一六四五

【参考】歌意から見れば「しらかは」を詠んだ歌であるが、雲林院が詠まれているので、古今六帖はこれを「てら」の項に収めたのである。夫木抄でもこの歌は「雲林・山城」の「寺」の題の下に置かれている。

一四三七 ながたにはしりがほにせよ山こびともむかしこのこゑはきゝしれるらむ 伊勢

【異同】ナシ

【現代語訳】長谷は、どうかわたくしを知りびととして遇してほしい。山びこも、むかしここに来たわたくしの親の声は、きつと聞き知っていることでしょうか。

【語句】○ながたには 「ながたに」は「長谷」。ここは初瀬の長谷寺のことと見ておく。参考欄参照。所載欄の伊勢集Ⅰでは、初句「なくをだに」。○しりがほにせよ わたくしを知りびととして遇してほしい。「ながたに」に対して命じ、要求している。「しりがほ」は、それを知っているというようすをはつきりと外に表すさま。○むかしのこゑ むかしここに来た人の声。ここでは今は亡きわが親の声。参考欄参照。

【所載】伊勢集Ⅰ・二五二／伊勢集Ⅱ・一三二

【参考】作者名「伊勢」は、所載欄の文献に一致する。伊勢集Ⅰの詞書には、「初瀬にまうでて親ありしときをおもひいでて」とあり、伊勢集Ⅱにも同じ詠歌事情を伝える詞書がある。伊勢は父の大和守時代に、母に伴われて長谷寺に詣でたことがあり、この歌は、母の死後長谷寺に詣でて詠んだものである。歌に寺そのものが詠まれているにもかかわらず、古今六帖がこれを「てら」の項に収めたのは、伊勢集の所伝どおり、これを長谷寺での詠と認めたからであろう。

一四三八 よるのかね^みつかざるさきにゆあみよといひてしものをみゝつまなくに
かね

【異同】よるのかね—よひのかね(大)

【現代語訳】宵の鐘をつかないうち湯浴みしなさい、と言ったのだったのに、耳をつねらずに。

【語句】◎かね 鐘。時報や警報としてつく梵鐘、または仏事のときに鳴らす鉦などの総称。○よゐのかね 「夜の鐘」かとも考えられるが、ここは時を知らせる「よひのかね(宵の鐘)」と見ておく。「よひ」は、日が暮れてから夜中までの時間帯の前半あたりをいう。令制下宮中では、時刻を知らせるために太鼓と鐘を鳴らしたことが、延喜式陰陽寮の規定から知られる。また寺院でも時刻を知らせるために鐘をついた。○ゆあみよ 湯浴みよ。入浴しなさい。○いひてしものをみゝつまなくに 四句と五句は倒置されているものと見る。袋草紙では、「耳つまなくにいひてしものを」となっている。「みゝつむ」は耳をつねること。あるいはそれがまじりなであったか。参考欄参照。耳をつねらずに言ったのだったのに。

【所載】袋草紙・二八七

【参考】袋草紙でこの歌は、「誦文歌」の項に収められ「沐浴間槌鐘誦文歌」という題がある。「誦文歌」とはまじないのために唱える歌。当該歌は、入浴中鐘が鳴った場合に唱える誦文歌であつたらしい。

一四三九 みな人のねよとのかねはつくなれど君をまつとてた^えみてねぬかも
かさの女わう

【異同】ナシ

【現代語訳】もうみんな寝なさい、と知らせる鐘はついているけれども、あなたを待っていて、わたしはとても寝られはしない。

【語句】○かさの女わう この歌の万葉集における作者名は「笠女郎」。笠女郎は生没年不明だが、大伴家持への恋のあつたことが万葉集から知られる。この歌も「笠女郎贈大伴家持歌二十四首」の中の一首である。○ねよとのかね もう寝なさい、と知らせる鐘。時の鐘のことは前歌(一四三八番)参照。○つくなれど 鐘をついているのが聞こえるけれども。「なれ」は伝聞の助動詞「なり」の已然形。○たえてねぬかも まったく寝られな

いのだ。「たえて」は、まったく、とても、の意。下に打消の語を伴ってこれを強める。

【所載】万葉集・六一〇(旧六〇七) 皆人乎 宿与殿金者 打礼杼 君乎之念者 寐不勝鴨 ミナヒトヲネヨトノカネハウツナレドキミヲシオモヘバイネカテニカモ みなひとをねよとのかねはうつなれどきみをしおもへばいねかてぬかもノ夫木抄・一五二五二ノ綺語抄・五五五ノ古来風体抄・五四

【参考】作者名「かさの女わう」は、語句欄に述べたとおり、万葉集の所伝により「笠女郎」と考えられる。

法師

けうげいほうし

一四四〇 かたちこそみ山がくれのくちきなれこゝろははなになさばなりなむ

【異同】ナシ

【現代語訳】いかにもわたしは、姿かたちこそ深い山にかくれた朽ち木のようにみすばらしい者だ。しかしころは、みごとに花になそうとすればなるだろうよ。

【語句】◎法師 語義としては法の師、すなはち仏法に通じ師となって人を導く僧のこと。出家して具足戒を受けた男子の通称。○み山がくれのくちき 深い山の中にかくれて人目にとまることもない朽ち木。見るかげもないものの比喩。○はな 花。美しくて人目をひくものの比喩。「み山がくれのくちき」に対して言ったことば。

【所載】古今集・雑上・八七五

【参考】作者名「けうげいほうし」は、古今集では「けむげいほうし(兼芸法師)」となっている。詞書には「女どもの見てわらひければよめる」とある。

(以上五首担当 山下)

一四四一 神無月しぐればかりを身にそへてしらぬ山ぢにふるぞかなしき

【異同】ナシ

【現代語訳】この神無月に、しぐれだけを身に添えて、濡れながら知らぬ山路に暮らすのは、思えば悲しいことだなあ。

【語句】○神無月 旧暦十月。○しぐれ 晩秋から初冬にかけてのころ、降ったりやんだりする通り雨。「神無

月しぐれしぐれて冬の夜の……」（古今集・雑体・一〇〇二）〇しぐればかりを身にそへて ただしぐれだけを身に添えて。法師であるから、他のものは何も持たずにの意。〇ふる 年月を過ぎす。暮らす。「しぐれ」の縁で「降る」を掛ける。

【所載】後撰集・冬・四五三／新撰朗詠集・五七三／定家十体・二三一／古来風体抄・三一七

一四四二 ものごしにはなをうちみて人しれずにびたるころろいろめきぬべし
つらゆき

【異同】にひたるころろーわひたる心（桂）

【現代語訳】垣根ごしに花をちらりと見て、物に動じないはずの僧も、ひそかに華やかな心になるにちがいない。
【語句】〇ものごし 几帳・簾・垣根などが間を隔てていること。参考欄の貫之集三二五番歌によれば、この歌は承平五（九三五）年に詠まれた内裏屏風歌十首の中の一首で、「をむな簀子にさし入りたる桜の花折りたる、馬に乗りて道行く法師垣越しにうち寄りて見る」という詞書がある。〇人しれず 人に知られず。密かに。〇にびたるころろ ねずみ色のような心。情に動かされない心。出家した僧のころろ、ということ。〇いろめきぬべし 華やかになるにちがいない。「ぬべし」はきつと……だ、必ず……だ、の意。「にびたる」と「いろめき」の対比。

【所載】私家集大成にはナシ。

【参考】『新編国歌大観』第三卷・私家集編・貫之集・三二五。『新編国歌大観』の底本、陽明文庫本は当該歌を脱しているが西本願寺本、御所本で補っている。作者名「つらゆき」は参考欄の文献に一致する。

一四四三 いづれをかありともわかむ山ぶしのおつるなみだもふちにこそなれ

【異同】ナシ

【現代語訳】どこを君がいる所だと見わけようか。山伏の私が流す涙も、降る雨もすべて淵になっていますよ。
【語句】〇いづれをか どこを……か。〇ありともわかむ いるとはつきり分かるうか。〇山ぶし 山野に伏して仏道修行する人、僧。ここでは作者。〇ふちにこそなれ 淵になっているから。「ふち」は水の淀んで深くなっている所。所載欄後撰集の詞書によれば「戒仙がふかき山寺にこもり侍りけるに、こと法師まうできて雨に降

りこめられて侍りけるに」とあり、第五句は「降りにくそ降れ」である。

【所載】後撰集・雑二・一一三三

一四四四 このみゆき千とせをかへであらせばやかゝる山ぶしときにあふべく

【異同】ナシ

【現代語訳】この行幸を、千年にもわたって変えることなく続けたいものよ。このような山伏が、光榮な機会にあうことができるように。

【語句】○このみゆき 所載欄後撰集によれば、宇多天皇が昌泰元（八九八）年十月に吉野の宮滝や竜田山などを廻られたことをさす。○千とせをかへで 千年にわたって変えることなく。○あらせばや 続けたいものだ。○かゝる山ぶし このような山伏。後撰集によれば素性法師。○ときにあふべく 良い機会にあつて栄えることができるように。

【所載】後撰集・雑一・一〇九二／素性集Ⅰ・四五／素性集Ⅱ・四五／和歌童蒙抄・五一九

【参考】作者については一四四七番歌参照。

一四四五 こけのそで雪げのみづにすゝぎつゝおこなふみにもこひはたえせず

【異同】ナシ

【現代語訳】墨染めの衣を雪解けの水で洗い清めては、厳しい仏道修行に励んでいるこの身にも、恋の心は絶えることがないなあ。

【語句】○こけのそで 僧・隠者などの衣服。「こけのころも」「こけのたもと」などとも言う。「年くれし涙のつららとけにけり苔の袖にも春や立つらん」（新古今集・一四三六）。○雪げのみづ 雪解けの水。○おこなふ 仏道修行をする。○たえせず 絶えることがない。サ変動詞「絶えず」の未然形「絶えせ」に打消の助動詞「ず」が付いたもの。

【所載】ナシ

【参考】作者については一四四七番歌参照。

〔以上五首担当 林〕

一四四六 よをいとふころろはころにとまらなむいほでもよをばともなきものを

【異同】ナシ

【現代語訳】世を厭う気持ちはここにとどまってほしい。言わないでも、この世をば、友がないので。

【語句】○いほでもよをば 以下、下句は解しがたい。「いほでも」は、何を言わないというのか。「よをいとふころろ」をか。また一首の中でどういう意味を持つのか。「よをば」も、それを受ける文節が見当たらない。本文に混乱があるか。

【所載】ナシ

【参考】作者については一四四七番歌参照。

一四四七 いまさらにむべことのねにひきかゝりこけの山ぢをわすれやはせん

已上四首 そせい

【異同】ナシ

【現代語訳】いまさら、確かに琴の音にひかれて、苔の生えているあの山路を忘れることがあるうか、忘れることはできません。

【語句】○いまさらに 「わすれやはせん」にかかる。○こけの山ぢ 「苔の袂」「苔の筵」などと同じ用法で、隠遁者の辿る山路を意味するのであろう。

【所載】ナシ

【参考】この歌は河海抄（明石）に、源氏が明石の君に詠みかけた歌、

むつごとを語りあはせむ人もがなうき世の夢もなかばさむやと

の注として引用されているが、二句を「むつことのねに」、五句を「忘れやらなん」とする。現存伝本の中には「むつことのねに」とする本文はないが、「むつことのねに」の場合は「睦言」に「琴の音」が掛けてあると考えるべきなのであろう。なお「已上四首そせい」は、一四四四番の「このみゆき」以外は確認できない。

一四四八 よをいとひこのもとごととにたちよりてうつぶしぞめのこけのころもぞ

【異同】ナシ

【現代語訳】俗世を厭い、あちこちの木の下に立ち寄っては頭を垂れる、そのふし染めの昔の衣なのですよ、これは。

【語句】○このもと 木の下。仏教でいう「樹下(じゅげ)」の和訳であろう。○うつぶしぞめ 動詞の「うつぶし」に「ふし染め」を掛ける。「ふし染め」の「ふし」は「五倍子」と書き、ぬるでという木に寄生する虫によつて生じたこぶ状のもので、粉末にして衣類やお歯黒の染料とする。ここは黒く染めた僧衣。なお「うつぶす」は、下を向いて寝る意ではなく、単に、下を向く、うつむく意であると、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』、ならびに片桐洋一『古今和歌集全評釈』は言い、その上で片桐は「修行する姿勢」と言っている。○こけのころも 苔で作ったような粗末な衣。隠遁者などの着る着物をいう。

【所載】古今集・雑体・一〇六八／遍昭集Ⅱ・四六／和歌童蒙抄・四七八／古来風体抄・二九八

あま

一四四九 そむくとてくもにはあらぬものなれどよのうきことぞよそになるてふ

【異同】くもにはあらぬ―くもにはのらぬ(桂・大)

【現代語訳】世をそむくからといって、雲に乗るわけではないけれど、俗世のいやなことは遠くになるとかいうことですよ。

【語句】◎あま ここは、「寺」「かね」「法師」と題がつづき、歌の内容から考えても、「海人」ではなく、「尼」であろう。女性で、出家し、仏門に入った人。○そむく 出家する。○くもにはあらぬ 傍記ならびに他本や所載欄の文献により「雲にはのらぬ」で解した。勢語臆断は、莊子逍遙遊第一に見える、藐姑射の山の神人についての記述「乗雲氣御飛龍而遊乎四海之外」を引く。仙人のように雲に乗るわけではない、の意。

【所載】新後拾遺集・雑上・一三〇二／業平集Ⅰ・七一／業平集Ⅱ・一四／業平集Ⅲ・四六／業平集Ⅳ・三三／伊勢物語・一〇二段・一七八

さい院

一四五〇 濤みながらそでぞぬれぬるあまをぶねのりをくれたるわが身と思へば

【異同】ナシ

【現代語訳】波の立つまま、涙で袖が濡れたことだ。尼になるための、仏法の舟に乗り遅れたわが身と思うと。

【語句】○溝みながら 「なみながら」の意で解した。桂宮本は「溝みながら」の「溝」をミセケチにして右傍に「な」と書く。○あまをぶね 海人が乗る小舟。「尼」を掛ける。○のりをくれたる 「乗り遅れたる」に「法」を掛ける。「わたつ海はあまの舟こそありときけのりたがへてもこぎいでたるかな」（拾遺集・五三〇）。

【所載】ナシ

【参考】作者の「さい院」が具体的に誰であるかは特定できないが、齋院は賀茂神社に奉仕する、いわば神に仕える身であり、たとえば大齋院と呼ばれた村上天皇皇女選子内親王なども、強く仏教を信じながら齋院を退下するまで出家できなかった。この「さい院」も、古今六帖の成立年次との関係で時代的には微妙だが、選子内親王の可能性があるか。

〔以上五首担当 久保木〕

一四五 一 ゆくふねのたちもとまらぬこのしたにいかなるあまかながめかるらむ

【異同】ナシ

【現代語訳】漕ぎ行く舟が停泊することも木の下で、どんな海人が長海布を刈っていることだろうか。

【語句】○たちもとまらぬ 立ち止まりもしない。「招くとて立ちもとまらぬ秋ゆゑにあはれかたよる花すすきかな」（拾遺集・二二三・好忠）。当該歌では、漕ぎ行く船が停泊することもないという意に、人（男）が立ち止まることもない、すなわち、来訪したり泊まったりすることもないという意を込めるか。「かりにぞといはぬさきより頼まれずたちとまるべき心ならねば」（赤染衛門集・三四八）。○このしたに 木の下に、か。参考欄の拾遺集三七八番歌に見える「このしまに」が正しい本文だったかと思われる。○あま 海人。海藻を刈ったり、魚貝を捕ったりなどして、海で漁業に従事する人。当該歌は「仏事」の中の「あま」という題の歌として収載されていることから、「尼」を掛けて詠み込んだ歌とみなされる。○ながめ 長海布。丈の長い海藻。物思いにふける意の「眺め」を掛けた。「人（男）が立ち止まって訪れるはずもない所で、思い悩んだとて何のかわもないのに、尼が物思いにふけていることだろうか。」という寓意が一首全体にあるか。「海人」と「尼」、「長海布」と「眺め」の掛詞が併用された例として、「舟流すほどは久しといふなるをあまとなりてもながめかるて

ふ」(多武峰少将物語・四三・京の殿)等がある。

【所載】ナシ

【参考】『校證古今歌六帖』は、拾遺集三七八番に「このしまにあまのまうでたりけるを見て」という詞書とともに見える「水もなく舟もかよはぬこのしまにいかでかあまのなまめかるらん」の転じたものかとする。拾遺集の「このしま」は、京都市太秦の木島神社のこと。

(以上一首担当 長戸)

一校了

【異同】一校了―一校記(桂)、禁裡以御本書写校合畢(大)

あとがき

第二帖の注釈をお届けする。二〇一二年三月にお茶の水女子大学付属図書館の E-book サービスにより、WEB に掲載した第一帖に続くものである。底本・凡例など変更はないが、注釈する上で常に問題になったのは以下のことである。原則として、同一歌が別の歌集などにある場合、所載欄に記す一方、類似する歌の場合は参考欄に記すのだが、認定には困難が伴う場合があった。非常に類似しているにもかかわらず、各句の言葉には小異があつて、索引を引いてもヒットしないもの、また、わずか一部のみ相違するが、ほかは全く同じものなど、毎回議論があつた。原則として担当者の判断によるが、その背景には判断の基準に揺れの存在することを断つておきたい。

公刊の方法として WEB に掲載することは、はじめての試みであつたが、どこでも無償で読めること、また、オンデマンドにより、製本も入手できること(これは有償)、などが評価され、E-book サービスは二〇一三年、国立大学図書館協会の表彰を受けた。その一部を担った私どもとしても非常に喜ばしいことであつた。

メンバーは担当の順に

*犬養悦子・山下道代・林マリヤ・長戸千恵子・青木太朗・*犬養廉・久保木哲夫・

*三浦狭依・杉本まゆ子・平野由紀子・斎藤熙子・中野方子・加藤静子・*市東奈々・

*橋本智美・諸井彩子・尾高直子・吉田優子

である(*は退会者)。

今年一月、当初からの会員であった三浦狭依さんが三月の完成を待たず永眠された。闘病の中での原稿作成は私たちに強い感銘を与えた。最後の第六帖まで気を引き締めて完成させる所存である。

二〇一四年一月二七日

平野由紀子

古今和歌六帖全注釈 第二帖

2014年6月27日 初版発行

著 者 古今和歌六帖輪読会

発 行 お茶の水女子大学附属図書館(E-book サービス)

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

<http://www.lib.ocha.ac.jp/>

電話 03-5978-5835 FAX 03-5978-5849

ISBN 978-4-904793-06-9 C3092

本著作の著作権は著者が保持しています。著作権法上の著作権の制限を超える利用については、お茶の水女子大学附属図書館にお問い合わせください。